

常呂川河口遺跡

—常呂川河口右岸掘削護岸工事に係る発掘調査報告書—

2008

北海道北見市教育委員会



(1)常呂川河口遺跡遠景



(2)常呂川河口遺跡近景

口 絵 2



(1) 常呂川河口遺跡低湿部土層堆積状況



(2) 常呂川河口遺跡低湿部発掘作業風景



(1)常呂川河口遺跡低湿部発掘作業風景



(2)第10層 矢・矢柄出土状況



(1) 第10層 受部材出土状況



(2) 平成14年集中豪雨後の「ソー」(滝)周辺



(1)第10層木製品出土状況



(2)第7層木製品出土状況



(1) 第13b 層曲物容器出土状況



(2) 第13b 層木製品出土状況

序 文

常呂川は北海道で第5位、オホーツク海流域では第1位の1級河川です。大雪山麓の三国山を源流にもつ常呂川は500～1,000m級の山地から北見盆地を抜け、低地域の常呂平野においてオホーツク海に注いでいます。

市内にある遺跡の多くは常呂川を望む台地・丘陵地帯に多く残されていますが、このことは古代人にとって常呂川が生活する上で必要不可欠な河川であったことを物語っています。中でも常呂地域には数千年前の縄文文化から数百年前のアイヌ文化まで数多くの遺跡が残されています。常呂川河口近くにあるアイヌ文化のチャシ（砦・柵）跡遺跡からは常呂川の大きな蛇行や青々としたオホーツク海を臨み、砦として最高の場所であったことが実感できます。

常呂川河口遺跡はチャシ跡遺跡の真下にある遺跡です。この遺跡は常呂川河口右岸掘削護岸工事に伴い昭和63年から継続して発掘してきました。その結果、縄文文化、統縄文文化、擦文・オホーツク文化、アイヌ文化まで複数の時代にまたがっていることが明らかになりました。出土遺物の総数は300万点にもおよぶ膨大な数です。数千年の間、人々はこの地域に定住し、狩猟・漁労、植物採取の生活を行っていたことが改めて証明されました。発掘した住居跡やお墓など成果の一部はこれまで7巻の「常呂川河口遺跡発掘調査報告書」としてまとめており、今回が最終の8巻目となります。

今回の報告書ではおよそ300年前と思われるアイヌの人々が使用した木製品が目まぐるしく見られます。木製品は常呂川の水に浸った状態で発見されたため、通常では腐れてしまう品々が当時の状況のまま発見されました。溯上してくるサク・マスを補獲するために使用されたと考えられる数百本の木杭と魚を叩く棒、ヤス、舟の部品などからアイヌの人々が常呂川に依存していた様子が窺い知れます。また、弓・矢などの狩猟道具など貴重な品々もみられます。これらはアイヌの人々の生活・文化を研究する上で大変重要な発見でした。

また、昨年9月に史跡常呂遺跡と根室管内の標津遺跡群を世界文化遺産に登録するための提案書を文化庁に提出しました。両遺跡あわせて5,000軒におよぶ竪穴住居跡が完全に埋もりきらず豊かな自然環境の中に残されていますが、遺跡を通じてこの地域の自然・歴史・文化が世界の人々に情報発信できることを念願するものです。

最後に調査当初から北海道教育委員会、北海道埋蔵文化財センター、東京大学名誉教授藤本強氏、宇田川洋氏をはじめ網走開発建設部、北見河川事務所など関係各位から多大なご協力とご理解を頂きました。衷心より感謝申し上げるしだいです。

平成20年3月

北海道北見市教育委員会

教育長 白馬 幸治

例 言

1. 本書は、主に平成13年・14年に実施した常呂川河口右岸掘削護岸工事に係る常呂川河口遺跡（TK73遺跡）の緊急発掘調査の報告書である。各年度の調査面積は平成13年度5,100㎡、平成14年度4,500㎡である。
2. 本遺跡は北海道北見市常呂町字常呂100-1番地先にある。遺跡の登録番号はI-16-128である。
3. 発掘調査は網走開発建設部から委託を受けて、旧常呂町教育委員会が主体となって実施した。
4. 本書の執筆、編集は武田修が行った。
5. 附編の分析については下記の方に依頼した。

附編Ⅰ	北海道大学文学部	渡邊陽子・守屋豊人
附編Ⅱ	札幌医科大学	松村博文
附編Ⅲ	新潟生物研究所	
附編Ⅳ	新潟生物研究所	
附編Ⅴ	国立歴史民俗博物館	小瀬戸恵美
附編Ⅵ	岩手県立博物館	赤沼英男
附編Ⅶ	北海道教育大学旭川校	和田恵治
6. 写真撮影は木製品出土状況を渡部高上、各種遺物を武田修が行った。
7. 各種遺物の実測図、トレースは恒常的な整理員である吉田義子、加藤雪江、大西信子、矢萩友子が行った。
8. 平成13年度の調査体制

調査期間	平成13年5月9日～10月31日
調査担当者	武田 修
調査員	佐々木寛
調査補助員	渡部高上
事務	林 尚美
作業員	高橋道直、宇野彰一、工藤孝之、橋本信義、氷室福二、佐々木清了、大谷俊子、阿部真代子、清水順子、佐藤成子、杉田弘子、岩松裕子、坂口君子、後藤チエ子、武田美津子、栗原アサ子、近江谷光栄、高木貴美子、大沼真子、堀井咲子、日脇京子、室田恵美、山根利智
整理員	吉田義子、加藤雪江、大西信子、矢萩友子、林 真子

9. 平成14年度の調査体制

調査期間 平成14年5月9日～10月31日

調査担当者 武田 修

調査員 佐々木覚

調査補助員 渡部高士

事務 堀口早苗

作業員 橋本信義、水室福二、宇野彰一、近藤利雄、猪野間則之、阿部喜代子、大谷俊子、近江谷光栄、大沼篤子、小沢みつ子、清水順子、栗原アサ子、後藤チエ子、佐々木栄子、佐藤成子、杉田弘子、田中清子、武田美津子、日脇京子、堀井咲子、山根利智、吉野真弓、室田恵美

整理員 吉田義子、加藤雪江、大西信子、矢萩友子、林真子、大平由紀恵、仙石京子、高木貴美子、本橋和子、中台美和子、中島由紀子

10. 発掘調査及び報告書作成の整理作業には、下記の方々の指導・助言を得た。記して感謝の意を表するしだいです。

東京大学名誉教授 藤本 強、同宇田川洋、東京大学大学院人文社会系研究科教授 佐藤宏之、同准教授 熊木俊朗、同助手 高橋 健、早稲田大学文学部教授 菊池徹夫、文化財サポート(有) 豊原照司、北海道教育委員会 大沼忠春、同種市幸生、北海道埋蔵文化財センター 熊谷仁志、同田口尚、余市水産博物館 乾 芳弘、東京都立大学人文学部教授 山田昌久、斜里町知床博物館 合地信生、同松田功、紋別市立博物館 佐藤和利、東北芸術工科大学講師 福田正宏、札幌市埋蔵文化財センター 藤井誠二、いしかり砂丘の風資料館 石橋孝夫、洞吉田生物研究所 吉田浩一

目 次

序 文	北見市教育委員会 教育長 白馬 幸治	i
例 言		ii
第 I 章 調査に至る経過		1
第 II 章 遺跡の地形と基本土層		3
第 III 章 周辺の遺跡		7
第 IV 章 低湿部（沼）の地形と土層		11
第 V 章 低湿部出土の木製品		17
第 VI 章 第 I・II 層出土遺物		105
第 VII 章 第 III 層出土の土器		201
第 VIII 章 第 IVc 層出土の土器		205
第 IX 章 第 IV 層の遺構と遺物		209
第 X 章 第 V 層出土の土器		217
第 XI 章 第 VIc 層出土の遺物		223
第 XII 章 第 VII 層出土の遺物		227
第 XIII 章 まとめと若干の考察		233
附 編		
附編 I 常呂川河口遺跡住居出土炭化材の樹種同定	北海道大学 渡邊 陽子・守屋 豊人	263
附編 II 常呂川河口遺跡159号竪穴埋土から検出された獣骨と人骨について	札幌医科大学 松村 博文	281
附編 III 常呂川河口遺跡782号墓出土赤色漆塗結歯式堅櫛の塗膜構造調査	狹吉田生物研究所	283
附編 IV 常呂川河口遺跡出土アイヌ文化木製品の樹種調査結果	狹吉田生物研究所	285
附編 V 常呂川河口遺跡墓壇出土ガラスの自然科学的分析	国立歴史民俗博物館 小瀬戸恵美	297
附編 VI 常呂川河口遺跡出土金属資料の自然科学的調査結果	岩手県立博物館 赤沼 英男	305
附編 VII 常呂川河口遺跡第 VII 層出土黒曜石石器の化学組成	北海道教育大学旭川校 和田 恵治	323

挿 図 目 次

第1図	基本層序模式図	4	第40図	第12a層出土木製品(5)	73
第2図	地形模式図	5	第41図	第12a層出土木製品(6)	74
第3図	常呂川河口遺跡の位置と周辺の遺跡	8	第42図	第12a層出土木製品(7)	75
第4図	木製品出土分布全体図	15	第43図	第12a層、13層、13a層出土木製品	77
第5図	第7層木製品出土分布図(1)	18	第44図	第13a層・13b層木製品出土分布図(4)	80
第6図	第7層出土木製品(1)	19	第45図	第13a層・13b層木製品出土分布図(5)	81
第7図	第7層出土木製品(2)	20	第46図	第10層・12a層木製品出土分布図(6)	82
第8図	第7層出土木製品(3)	22	第47図	第13a層出土木製品(1)	83
第9図	第10層木製品出土分布図(2)	25	第48図	第13a層出土木製品(2)	85
第10図	第10層木製品出土分布図(3)	26	第49図	第13a層、13b層出土木製品	86
第11図	第10層出土木製品(1)	27	第50図	第13b層出土木製品(1)	88
第12図	第10層、13a層出土木製品	29	第51図	第13b層出土木製品(2)	90
第13図	第10層出土木製品(2)	31	第52図	第13b層出土木製品(3)	91
第14図	第10層出土木製品(3)	32	第53図	第13b層出土木製品(4)	92
第15図	第10層出土木製品(4)	34	第54図	第13b層出土木製品(5)	93
第16図	第10層出土木製品(5)	35	第55図	第13b層出土木製品(6)	94
第17図	第10層出土木製品(6)	37	第56図	第13b層、13c層、14b層、14d層出土木製品	95
第18図	第10層出土木製品(7)	38	第57図	第13c層、14b層出土木製品	98
第19図	第10層出土木製品(8)	39	第58図	第13c層出土木製品	99
第20図	第10層出土木製品(9)	40	第59図	グリッド・層位不明の木製品	101
第21図	第10層出土木製品(10)	42	第60図	低湿部出土土器	103
第22図	第10層出土木製品(11)	43	第61図	第1・I層出土土器(1)	106
第23図	第10層出土木製品(12)	45	第62図	第1・I層出土土器(2)	107
第24図	第10層出土木製品(13)	47	第63図	第1・I層出土土器(3)	108
第25図	第10層出土木製品(14)	50	第64図	第1・I層出土土器(4)	109
第26図	第10層出土木製品(15)	51	第65図	第1・I層出土土器(5)	111
第27図	第10層出土木製品(16)	53	第66図	第1・I層出土土器(6)	112
第28図	第10層出土木製品(17)	55	第67図	第1・I層出土土器(7)	113
第29図	第10層出土木製品(18)	58	第68図	第1・I層出土土器(8)	115
第30図	第10層出土木製品(19)	59	第69図	第1・I層出土土器(9)	116
第31図	第10層出土木製品(20)	60	第70図	第1・I層出土土器(10)	117
第32図	第10層出土木製品(21)	61	第71図	第1・I層出土土器(11)	118
第33図	第10層、12a層出土木製品	62	第72図	第1・I層出土土器(12)	120
第34図	第12層出土木製品	64	第73図	第1・I層出土土器(13)	121
第35図	第12a層出土木製品(1)	66	第74図	第1・I層出土土器(14)	122
第36図	第12a層出土木製品(2)	68			
第37図	第12a層出土木製品(3)	69			
第38図	第10層、12a層出土木製品	70			
第39図	第12a層出土木製品(4)	71			

第75図	第1・I層出土土器(15)……………124
第76図	第1・I層出土土器(16)……………125
第77図	第1・I層出土土器(17)……………126
第78図	第1・I層出土土器(18)……………128
第79図	第1・I層出土土器(19)……………129
第80図	第1・I層出土土器(20)……………131
第81図	第1・I層出土土器(21)……………132
第82図	第1・I層出土土器(22)……………133
第83図	第1・I層出土土器(23)……………135
第84図	第1・I層出土土器(24)……………136
第85図	第1・I層出土土器(25)……………137
第86図	第1・I層出土土器(26)……………138
第87図	第1・I層出土土器(27)……………139
第88図	第1・I層出土土器(28)……………140
第89図	第1・I層出土土器(29)……………141
第90図	第1・I層出土土器(30)……………142
第91図	第1・I層出土土器(31)……………143
第92図	第1・I層出土土器(32)……………145
第93図	第1・I層出土土器(33)……………146
第94図	第1・I層出土土器(34)……………147
第95図	第1・I層出土土器(35)……………148
第96図	第1・I層出土土器(36)……………149
第97図	第1・I層出土土器(37)……………150
第98図	第1・I層出土土器(38)……………151
第99図	第1・I層出土土器(39)……………153
第100図	第1・I層出土土器(40)……………154
第101図	第1・I層出土土器(41)……………155
第102図	第1・I層出土土器(42)……………156
第103図	第1・I層出土土器(43)……………157
第104図	第1・I層出土土器(44)……………158
第105図	第1・I層出土土器(45)……………159
第106図	第1・I層出土土器(46)……………160
第107図	第1・I層出土土器(47)……………161
第108図	第1・I層出土土器(48)……………162
第109図	第1・I層出土土器(49)……………163
第110図	第1・I層出土土器(50)……………164
第111図	第1・I層出土土器(51)……………166
第112図	第1・I層出土土器(52)……………168
第113図	第1・I層出土土器(53)……………169
第114図	第1・I層出土土器(54)……………170
第115図	第1・I層出土土器(55)……………172
第116図	第1・I層出土土器(56)……………173
第117図	第1・I層出土土器(57)……………174

第118図	第1・I層出土土器(58)……………175
第119図	第1・I層出土土器(59)……………176
第120図	第1・I層出土土器(60)……………177
第121図	第1・I層出土土器(61)……………178
第122図	第1・I層出土土器(62)……………180
第123図	第1・I層出土土器(63)……………181
第124図	第1・I層出土土器(64)……………182
第125図	第1・I層出土土器(65)……………183
第126図	第1・I層出土土器製品……………184
第127図	第1・I層出土土器(66)……………186
第128図	第1・I層出土土器(67)……………187
第129図	第1・I層出土土器(68)……………188
第130図	第1・I層出土土器(69)……………189
第131図	第1・I層出土土器(70)……………191
第132図	第1・I層出土土器(71)……………192
第133図	第1・I層出土土器(72)……………193
第134図	第1・I層出土土器(73)……………194
第135図	第1・I層出土土器(74)……………195
第136図	第1・I層出土土器(75)……………196
第137図	第1・I層出土土器(76)……………197
第138図	第1・I層出土土器(77)……………198
第139図	第1・I層出土土器(78)……………199
第140図	第Ⅱ層遺物出土分布図……………202
第141図	第Ⅱ層出土土器……………203
第142図	第Ⅱc層遺物出土分布図……………206
第143図	第Ⅱc層出土土器(1)……………207
第144図	第Ⅱc層出土土器(2)……………208
第145図	第Ⅱ層ピット7・8・9・10・ 11・12・13・14・15・16・17・ 18・19・20平面図……………211
第146図	第Ⅱ層ピット8埋土、9埋土、 13埋土、14埋土、19埋土出土 土器……………212
第147図	第Ⅱ層ピット8埋土出土土器……………213
第148図	第Ⅱ層ピット9埋土、12埋土 出土土器……………214
第149図	第Ⅱ層出土土器(1)……………218
第150図	第Ⅱ層出土土器(2)……………219
第151図	第Ⅱ層出土土器(3)……………220
第152図	第Ⅱ層出土土器……………221
第153図	第Ⅱ層遺物出土分布図……………224
第154図	第Ⅱ層、Ⅱc層出土土器……………225
第155図	第Ⅱ層出土土器……………226

第156図	第Ⅱ層遺物出土分布図	228
第157図	第Ⅱ層出土土器(1)	229
第158図	第Ⅱ層出土土器(2)	230
第159図	第Ⅱ層出土土器	231
第160図	常呂川河口遺跡の擦文土器(1)	236
第161図	常呂川河口遺跡の擦文土器(2)	237
第162図	堅穴住居跡出土の擦文土器(1)	240
第163図	氾濫原の堅穴群・低位段丘の 堅穴群・低位段丘からせり出 した地域の堅穴群	241

第164図	堅穴住居跡出土の擦文土器(2)	244
第165図	堅穴住居跡出土の擦文土器(3)	246
第166図	フシココタン下層式相当の土 器群	256
第167図	興津式相当の上器群	257
第168図	沈線文系突瘤文・帯縄文系突 瘤文の土器群	258
第169図	興津式相当、宇津内Ⅱa式の 土器群	259

図版目次

図版1	第7層出土篋・吊り手
図版2	第7層出土篋・楔状製品・有孔加工材
図版3	第7層出土有孔加工材
図版4	第7層出土有孔加工材 低湿地発掘状況
図版5	第10層木枕等出土状況 矢・矢柄出土 状況
図版6	第10層矢柄出土状況 第10層出土矢柄 ・矢・円錐形刺突具
図版7	第10層出土円錐形刺突具・ヤス出土状況
図版8	第10層出土円錐形刺突具・ヤス・魚叩 き棒・早榿・弓
図版9	第10層出土捧酒箸・篋・箸・刺突具・ 食用具・丸杭状加工材・ピン状製品・ 木釘
図版10	第10層出土盥火用挟み木・かんじき・ 加工材・刺突具・かんじき横軸・ホゾ 付軸状製品
図版11	第10層出土加工材・挟入丸木材、丸木 材出土状況
図版12	第12層出土尖頭棒・篋
図版13	第12a層出土盥火用挟み木・木榿
図版14	第12a層出土木榿・加工材・魚叩き棒
図版15	第12a層出土魚叩き棒・捧酒箸・篋・ 串・かんじき軸
図版16	第13a層かんじき出土状況 第13a層 出土かんじき・かんじき横軸・木釘
図版17	第13a層出土蓋 板綴舟舷側板出土状況
図版18	第13a層出土板綴舟舷側板・小匙・短

	弓出土状況
図版19	第13a層出土有孔木製品出土状況
図版20	第13b層出土曲物容器・魚叩き棒
図版21	第13b層出土刀子の柄部・挟入部材、 第13c層出土挟入部材・紡織編具・中 空材
図版22	第14b層出土土掘り具土掘具出土状況
図版23	層位不明出土曲げ物容器把手・矢・篋
図版24	低湿地発掘状況第6層土器出土状況
図版25	Ⅰ・Ⅱ層出土土器(1)
図版26	Ⅰ・Ⅱ層出土土器(2)
図版27	Ⅰ・Ⅱ層出土土器(3)
図版28	Ⅰ・Ⅱ層出土土器(4)
図版29	Ⅰ・Ⅱ層出土土器(5)
図版30	Ⅰ・Ⅱ層出土土器(6)
図版31	Ⅰ・Ⅱ層出土土器(7)
図版32	Ⅰ・Ⅱ層出土土器(8)
図版33	Ⅰ・Ⅱ層出土土器(9)
図版34	Ⅰ・Ⅱ層出土土器(10)
図版35	Ⅰ・Ⅱ層出土土器(11)
図版36	Ⅰ・Ⅱ層出土土器(12)
図版37	Ⅰ・Ⅱ層出土土器(13)
図版38	Ⅰ・Ⅱ層出土土器(14)
図版39	Ⅰ・Ⅱ層出土土器(15)
図版40	Ⅰ・Ⅱ層出土土器(16)
図版41	Ⅰ・Ⅱ層出土土器(17)
図版42	Ⅰ・Ⅱ層出土土器(18)
図版43	Ⅰ・Ⅱ層出土土器(19)

図版44	I・II層出土土器(20)
図版45	I・II層出土土器(21)
図版46	I・II層出土土器(22)
図版47	I・II層出土土器(23)
図版48	I・II層出土土器(24)
図版49	I・II層出土土器(25)

図版50	第IV層、第VIc層、第VII層出土土器
図版51	第IX層、第X層、第XIc層、第XII層出土土器
図版52	明治初期のアイヌ集落風景、テシ設置風景

付編表図版目次

付編 I

表 1	炭化材同定結果一覧	268
表 2	各遺構から出土した炭化材樹種のまとめ	269
図 1	炭化材(1)	270
図 2	炭化材(2)	271
図 3	炭化材(3)	272
図 4	炭化材(4)	273
図 5	炭化材(5)	274
図 6	炭化材(6)	275
図 7	炭化材(7)	276
図 8	炭化材(8)	277
図 9	炭化材(9)	278
図 10	炭化材(10)	279

附編 II

図版 1	骸骨	281
図版 2	ヒト下顎骨	282

附編 III

表 1	調査資料	283
表 2	断面観察結果表	283

附編 IV

表 1	常呂川河口遺跡低湿度出土木製品同定表	293
-----	--------------------	-----

附編 V

表 1	分析資料	297
表 2	EPMAの測定条件(WDS)	297
表 3	常呂川河口遺跡墓壇出土ガラスの分析値(WT%)	299
表 4a	弥生時代のカリガラスの分析平均値(WT%)(22遺跡の約300点)	299
表 4b	古墳時代のカリガラスの分析平均値(WT%)(26点)	299
表 4c	大川遺跡統縄文ガラス分析値(WT%)	299

表 5	常呂川河口遺跡墓出土ガラスの鉛同位体比	300
表 6	カリガラスの鉛同位体比	300
図 1-1	常呂川河口遺跡墓出土カリガラスの鉛同位体比 (A 式図)	301
図 1-2	常呂川河口遺跡墓出土カリガラスの鉛同位体比 (A 式図: 部分)	301
図 2-1	常呂川河口遺跡墓出土カリガラスの鉛同位体比 (B 式図)	302
図 2-2	常呂川河口遺跡墓出土カリガラスの鉛同位体比 (B 式図: 部分)	302

附編Ⅳ

表 1	調査鉄器の概要	312
表 2	調査鉄器の金属考古学的解析結果	313
表 3	抽出した試料に残存する非金属介在物中に見出された鉱物相の EPMA による分析結果	313
表 4	参考資料の金属考古学的解析結果	314
図 1	No. 3 から抽出した試料の組織観察結果と No. 2 の外観	315
図 2	No. 4 から抽出した試料の組織観察結果	316
図 3	No. 5・No. 7 から抽出した試料の組織観察結果	317
図 4	No. 1・No. 6 の蛍光 X 線分析法による定性分析結果	318
図 5	参考資料とした常呂川河口遺跡および目梨江遺跡出土鉄器の外観	319
図 6	No. 5・No. 7 曲手刀子から抽出した試料片に含有される Cu・Ni・Co 三成分比	320
図 7	No. 2・No. 5 および No. 7 から抽出した試料片に含有される Cu・Ni・Co 三成分比	321

附編Ⅴ

表 1	常呂川河口遺跡第 10 層出土石器原産地分析結果表	323
表 2	常呂川河口遺跡第 7 層出土石器原産地分析結果表	324
表 3	常呂川河口遺跡第 10 層出土石器原産地分析試料	325

口 絵 写 真

- (1)常呂川河口遺跡遠景
(2)常呂川河口遺跡近景
- (1)常呂川河口遺跡低湿度部土層堆積状況
(2)常呂川河口遺跡低湿度部発掘作業風景
- (1)常呂川河口遺跡低湿度部発掘作業風景
(2)第 10 層矢・矢柄出土状況
- (1)第 10 層受部材出土状況
(2)平成 14 年集中豪雨後の「ソー」(滝)周辺
- (1)第 10 層木製品出土状況
(2)第 7 層木製品出土状況
- (1)第 13b 層曲物容器出土状況
(2)第 13b 層木製品出土状況

第 I 章 調査に至る経過

1

常呂川は十勝、石狩、北見の分水嶺である三国山（標高1,541m）に源を発し、流路延長120km、流域面積1,930km²に及ぶ一級河川である。

常呂川流域の気候は、オホーツク海高気圧の影響を受け雨の少ない地域であるが、明治30年頃からの開拓による森林伐採の結果、河川の水量調節機能は低下し洪水が起りやすくなったと考えられている。明治31年、大正4、8、11年、昭和7、9、10、14、22、23、28、30、32、33、37、39、44、46、47、50年と相次いで記録的な洪水が発生している。発掘調査を行っている間の平成4年にも集中豪雨があり、強力な水流によるため遺跡の一部が削られることもあった。毎年のように起こる洪水の治水対策は大正10年から始められ現在も営々と続けられている。常呂川治水の完成は地域住民の悲願でもある。

今回、緊急発掘調査の対象となった地域は昭和50年の台風6号による出水の影響で堤防が決壊し、床上浸水等の被害を蒙った区域である。常呂川は河口幅が狭いうえ、本遺跡の付近で最も大きく蛇行しているため水の疎通が悪く、豪雨時は上流で溢水するなどの問題が指摘されていた。このため蛇行部をショートカットして新捷水路を設けるための工事計画が策定された。昭和52年から用地買収が進められ、昭和56年から工事着手の予定であった。しかし、工事着手の直前になって遺跡の存在することが明らかとなった。昭和56年11月4日に埋蔵文化財保護のための事前協議書が網走開発建設部から提出されたのをうけ、同年11月11日～12日に北海道教育委員会、北海道埋蔵文化財センター、旧常呂町教育委員会の三者で包蔵地範囲確認調査を実施した。調査の結果、本遺跡の主体は標高4～5mの砂丘上と低地域にも堅穴の存在することが判明した。遺跡の総面積は約140,000m²に及び39,000m²が発掘必要区域である。考古学的には縄文中期・後期・晩期、統縄文、擦文・オホーツク、アイヌ文化にわたる複合遺跡であり、砂丘上にある縄文中期の包含層まで深度約1.50mに達することも確認された。これらの調査結果を踏まえて発掘調査を行うことも協議されたが、調査には莫大な経費と期間を要しなければならず早速の実施には至らなかった。

その後、網走開発建設部では常呂川下流域の堤防整備を構じていたが、本遺跡を回避した新捷水路の計画もありえるため、本来の計画地以外についても埋蔵文化財の有無が必要となった。昭和57年9月2日に事前協議書の提出を受け北海道教育委員会と旧常呂町教育委員会は昭和60、61、62年の3年間で周辺地域の包蔵地範囲確認調査を実施した。昭和60、61年調査地域は標高2～3mの常呂川の氾濫原と考えられる地域であり、全域に包含層が認められた。昭和62年の調査地域は常呂大橋下の中洲であるが、包含層は認められなかった。この様な背景とともに常

呂川下流域の堤防整備もほぼ完了したため、本来の計画とおり新捷水路工事を進めるために発掘調査の依頼があった。

しかし、調査にはかなりの歳月を要し、調査体制の問題もあるため本町教育委員会が独自に対応することは困難であるため北海道教育委員会に調査機関の照会を願ったものの、適した機関が無いとの回答があったので旧常呂町教育委員会が調査体制の充実に図り受諾することとなった。

新捷水路は護岸工事部分を含めると全幅300m、延長320mあるため調査には約10年間が予想された。協議者としてもそれまで事業の実施を延ばすのは困難であり、調査と並行して工事を着手したいので新捷水路幅80mのうちセンターから東側の幅40mについて調査を終了してほしいとの要望があった。その場合、幅20mの護岸部が後回しとなり、検出した遺構も半握りのまま残されてしまう恐れもあるため護岸部を含めて調査することとなった。

調査を進めている過程で縄文中期の包含層よりも下層に縄文前期末葉の包含層があり、さらに下層には縄文前期中葉の包含層が検出された。また、標高0mの低湿地にはアイヌ文化期の木製品が新たに発見され当初の予定を大きく変更せざるを得なかった。

2

調査グリッドは新捷水路センター杭のI P、No 1～600を基準に4×4mで設定し、東西をアルファベット、南北を数字で示した。

参考文献

- 網走開発建設部 『常呂川治水史』 1987
常 呂 町 『常呂町史』 1969

第Ⅱ章 遺跡の地形と基本土層

常呂地域の地形・地質は標高70～75m以上の丘陵・高位段丘、標高20～30mの中位段丘、標高5～15mの低位段丘に分けられる。本遺跡は東側の中位段丘側から派生しており、地形的には標高4～5mの低位段丘とさらに下面にある標高2～3mほどの常呂川の氾濫原に存在している。昭和63年と平成1年はこの氾濫原と思われる区域を調査した。この区域の地盤は層厚30～40cmの黄褐色粘土であり、その下層は粒子の粗い砂と礫混じりの層が堆積している。黄褐色粘土層は常呂川岸の付近では層厚約3～4mに及んでいる。川岸に移行するにしたがい黄褐色粘土層の堆積は厚みを増すようである。昭和63年度に行った包蔵地盤開確認調査では深度約3mのところから木枕が出土している。この区域では現在のところ弥文文化期の整穴しか発見されていないが、木枕の出土から裏付けられるように下層には他の時期の包含層も残されている可能性がある。氾濫原と考えられるこの区域には大正年間に作られた築堤がある。盛土による築堤の上部を道路として利用されていたため原地形は捉えにくい、おそらく中位段丘側から常呂川に向かって緩く傾斜していたと思われる。

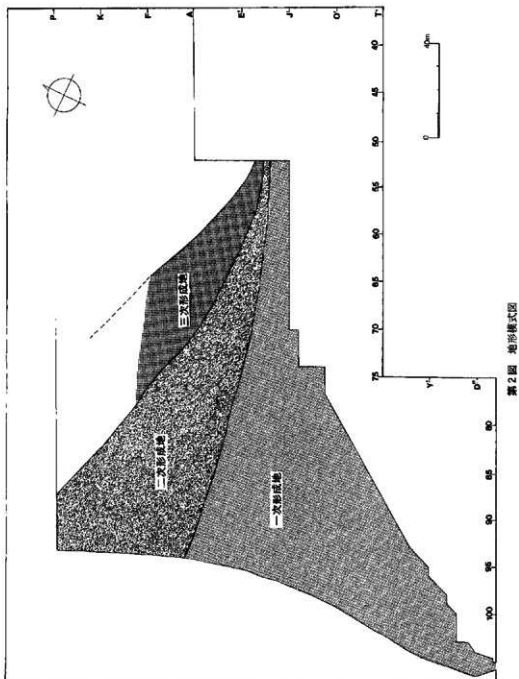
一方、平成2年から調査している標高4～5mの区域もトコロチャン跡付近から常呂川に向かって延びた砂丘である。調査当初は築前第二・第一遺跡、常呂整穴群のある新砂丘Ⅰ、古砂丘と同一の海成砂丘台地と考えていたが、調査を進めるにつれて様々なことが明らかになった。一つはこの低位段丘面が常呂川の氾濫の繰り返しによる土砂の堆積で形成されてきてことである。第1図の基本層序模式図に示すとおり基本的な土層は砂質土層であるが、この砂層の粒子は海成層のものよりも極めて粗く、海成層には含まれない大型の角礫を多量に含むことである。角礫混じりの砂層は特に第Ⅲ層において顕著である。この砂礫層・砂層は数枚の薄い文化層と交互に堆積を繰り返す。平成8年・9年度の調査では縄文中期のトコロ六類・五類の下層に第Xa層の(古)トコロ六類とⅡ層の平底押型文Ⅱ群、平成10年の調査では第Xa層の下層にある第Xc層からも北筒式系の包含層、平成11年度の調査ではさらに第XⅡ層から縄文前期縄文式の包含層を確認した。

第Ⅳ層の砂礫層からは層厚約30cmの中から縄文前期中野式、シュブノツナイ式、押型文と中期のトコロ六類・五類の北筒式が満遍なく出土している。安定した遺物の出土状態をもつ第Ⅳ層とは明らかに異なった出方である。第Ⅳ層は河川の氾濫等による土砂流失の影響で本来は下層にある土器が上部に押し上げられ、時期が逆転したものと考えられる。平成2年から調査を行った低位面はこの様な洪水等による土砂の堆積が繰り返され、現在の地形に形成されたものであるが、そこには第2図の地形模式図に示すとおり少なくとも三次の変化が認められる。

第一次形成地は第Ⅳ層の縄文前期末の押型文から第Ⅳ層の縄文中期トコロ六類・五類のある礫・角礫を含む極めて硬質な黒色土である。層厚は薄い箇所10～15cm、厚い箇所20～30cm

参考文献

- 1) 遠藤邦彦・上杉陽 『常呂』所収 東京大学文学部 1972



第Ⅲ章 周辺の遺跡

本遺跡の後背地にある標高20～30mの中位段丘には学史的にも有名な遺跡が多数存在する(第3図)。トコロチャシ跡遺跡は本遺跡から約100～150mの距離である。昭和35年に縄文文化期とアイヌ文化期の研究を目的とした調査が東京大学文学部により行われ、オホーツク文化期1号堅穴内側(藤本e群)、同外側の2軒が調査された。また、堅穴埋上中には近世アイヌ文化の遺構も検出されている。昭和38年にはアイヌ文化期の濠とオホーツク文化期堅穴との時間関係を解明するためオホーツク文化期2号堅穴(藤本e群)と新旧2本の濠が調査されている。平成3年から再度、トコロチャシ跡の濠の調査を実施しており、平成7年度の調査において刀子、中柄、青銅製円盤、矢筒、短刀、長刀を副葬するアイヌ墓のほかオホーツク文化期の屋外の骨塚も発見されている。平成8年度の調査ではチャシの出入り口と思われる構造物(ルイカ)に類する箇所も検出され、先に認められていた欄柱穴とあわせチャシ跡の構造解明に大きな成果が得られた。

さらに東京大学は平成10年からオホーツク文化期の堅穴調査を開始した。トコロチャシ跡遺跡0地点としたチャシの濠の南側に位置する7号堅穴である。この堅穴の調査は平成11年も引き続き行われた。長軸13.5m、短軸9.7mの7a号堅穴と長軸8.5m、短軸7.5mの7c号堅穴の2軒重複住居である。いずれも火災を受けているが、特に7a号では白樺樹皮を巻かれた炭化材列などが確認され、住居内部の構造を解明する上で貴重な情報をもたらした。各種の出土遺物も豊富である。骨塚の前面から出土した十字形の青銅製品をはじめ、炭化木製品では大小の盆・椀・樹皮容器・櫛・杓子・スプーンなどがある。骨塚にはクマ・エゾシカ・タヌキ・キツネの動物骨が見られる。時期はソーメン状貼付文(藤本e群)に比定される。平成12・13年に調査された8号堅穴は7号堅穴同様の火災住居である。壁面に樹皮をあてた後に板材を設置しており内部構造の一端が明らかにされた。骨塚はクマを主体としてキツネ、タヌキがある。平成13・14年に調査された9号堅穴も同様の構造をもった堅穴である。また、本遺跡の15号堅穴でも屋根材と思われる樹皮とそれを留めたと推測できる木釘、炭化木製品が発見されている。この様にトコロチャシ跡遺跡から両側に続く台地の縁辺部にはオホーツク文化期をはじめとした大型堅穴の窪地が遺されている。常呂川河口遺跡を含むこの区域は栄浦第二遺跡に匹敵するオホーツク文化の集落遺跡である。

トコロチャシ跡遺跡と連続したトコロチャシ南尾根遺跡は標高60～80mの台地縁辺部にある。地表面から32軒の堅穴が観察され、昭和39年に東京大学文学部により縄文中期北筒式の1号堅穴が調査されている。昭和50年には「トコロバイパス建設(国道238号線)工事に伴う緊急発掘調査が行われ、18軒の堅穴が発掘されている。この調査では特に縄文後期中葉の船泊上層式・鯉濶式・エリモB式が出土して注目された。昭和61年には最西端部で住宅建設工事に伴う緊



第3図 常呂川河口遺跡の位置と周辺の遺跡

急発掘調査が行われ、8軒の堅穴が調査された。弥文文化期の17号堅穴埋土から頸部に「井」のヘラ記号と回転糸切りの底部をもつ五所川原産の須恵器である長頸壺が出土している。縄文晩期の5号ピットからは中業と思われる刺突文の施された鉢型土器とボート形の浅鉢が出土している。

トコロチャシ南尾根遺跡の対岸にはTK67遺跡がある。昭和47年に発見されたこの遺跡は昭和61・62年に北海道営畑総事業の農道改良工事に伴い緊急発掘されている。比較的急斜な北側斜面に弥文期の堅穴5軒、時期不明のピット群がありさらに奥まったところには続縄文期を主体とした堅穴4軒がある。弥文期の堅穴は宇田川編年後期に比定されるもので、包含層から五所川原産の大甕の須恵器が出土している。他に須恵器は砂利採取工事に伴う包蔵地範囲確認調査によって字岐阜127-6番地、表面採集による岐阜地区国有林、常呂川河口遺跡で発見されている。TK67遺跡と連続しているのがトコロ貝塚である。昭和33~36年に東京大学文学部による学術調査が実施されている。長さ約200m、幅約70mのカキ貝を主体とした縄文中期北筒式の貝塚である。トコロ六類と五類土器が層位的に確認されるとともに縄文早期の石刃鎌が類竹管文を3段めぐらしたトコロ14類土器と共存することが明確になった。

平成11~13年に東京大学大学院人文社会系研究科教授宇田川洋氏を研究代表として東京大学常呂研究室と旧常呂町による地域連携推進研究に伴う詳細分布調査がトコロチャシ跡遺跡とトコロチャシ南尾根遺跡で実施され、ほぼ全域から遺物が出土している。確認された遺構は縄文早期東網路系の堅穴、石刃鎌の石器集積域、縄文中期の集石、オホーツク文化期の土壌墓2基である。特にオホーツク文化期の土壌墓は予想されていたことであるが、堅穴群と土壌墓は分離されており墓域を形成していたことが推測された。オホーツク文化期の社会組織・集落研究に果たす役割は大きいものがある。この二遺跡は平成14年9月に史跡常呂遺跡として追加指定を受けた。平成15年から東京大学常呂研究室の協力を得てオホーツク文化期の堅穴復元のための基礎資料を得るため10号堅穴を調査した。時期は藤本編年d群期に比定されるが、重複する内部の藤本編年e群期の堅穴は3期にわたる縮小化が認められた。平成18・19年にはオホーツク文化期の墓域の特定を目指すための調査を実施したが、新たな土壌墓は検出できず、縄文前期から中期の堅穴、ピット、集石、焼土群等を発見している。

この様に本遺跡の後背地の段丘上には大遺跡が多く、時期も縄文早期からアイヌ期まで連続しており、常呂川河口遺跡の性格を解明する上でも重要な地域である。例えば弥文期の堅穴埋土内にみられる送り場や今回報告するアイヌ文化期の木製品とトコロチャシとの関係。オホーツク文化期の堅穴をみてもトコロチャシ跡の4軒と常呂川河口遺跡の15号堅穴はソーメン文状貼付文（藤本e群）の時期であり、両者に新旧関係があるのか同時併存するかなどの問題がある。弥文期の堅穴も常呂川河口遺跡と同じで後期のものが多い。続縄文期の堅穴は宇津内系が多いようであり、後北C・D式の土壌墓もある。縄文後期では本遺跡からは堅穴の発見はないがピット2基、集石4基あり、周辺に集落跡が予想される。段丘上の遺跡はごく一部分を調

査されたに過ぎず各時期の全容を明らかにすることはできないものの、本遺跡とは比較的類似した時代構成である。しかし、個々の時代を見ると縄文晩期後葉の弊舞式から統縄文期初頭の興津式、宇津内Ⅱa式。中葉の宇津内Ⅱb式、後北C₁式。後葉の後北C₂・D式まではほぼ全期間にわたっている。擦文期は宇田川編年後期に比定できる堅穴が多くある。本遺跡は各時代で濃淡はあるものの生業活動の場として利用されたことは明らかである。特に統縄文期は一時的な場として利用されたのではなく長期間定住していたであろうことが数多くの墓の存在から考えられる。統縄文期の墓では興津系、宇津内系のものが特徴的である。統縄文期の副葬品の消長についてすでに論じられているところであるが、宇津内系以前の興津式では原石に近い大型・異形の琥珀玉、宇津内Ⅱa式は平玉を多量に副葬している。前回までに報告したビット95・254・263a・301・470・545・872号墓がその例である。宇津内Ⅱb期になると琥珀を副葬するものもあるが極端に減少し1012号土壌墓にみられる管玉が加わるなど変化が現れてくる。後北C₁式では鉄製刀子を副葬するものもあるが石器が一般的である。後北C₂・D式は鉄製品の他にガラス玉がある。副葬品の豊富さは生業活動の賜物であり、安定した食料源の獲得が定住をもたらしたのであろう。低地にも大規模遺跡は存在し、隣接する段丘上の遺跡群との相関関係を考える必要がある。

(武田 修)

文 献

- 1) 東京大学文学部考古学研究室・常呂研究室「トコロチャシ跡遺跡」1995年度調査略報 1995. 9
- 2) 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室・常呂実習施設「トコロチャシ跡遺跡0地点」1999年度調査略報 1999. 9
- 3) 東京大学大学院人文社会系研究科・常呂町教育委員会「トコロチャシ跡遺跡群の調査」トコロチャシ跡遺跡・同オホーヅク地点及び「常呂遺跡」の史跡整備に関する調査概要報告 2002. 2

第IV章 低湿部(沼)の地形と土層

1. 河川状の流路と沼

常呂川河口遺跡は第II章で記述したとおり砂・礫など河川堆積物の形成により河岸段丘から西側に大きく張り出した標高約4～5mの低位段丘と黄褐色粘土が堆積する標高約2～3mの常呂川の氾濫原にある。この氾濫原は北-西方向の常呂川岸に移行するに従い緩斜面となり、通称「蛸の頭」とされる大きな蛇行を描いている。蛇行の根本部分は「モイ」(入江)状の地形を呈しており(口絵1・2)、後背地の史跡常呂遺跡(トコロチャシ跡遺跡)からも明確に視認することができる。

この付近には二つのアイヌ語地名が残されている。一つは「モイ」から僅かに河口側に寄るとみられる川床部が岩盤となった箇所である。山田秀三氏が永田方正の地名解釈と松浦武四郎の戊辰日誌から、北海道でも珍しい「ソー」(滝)とされたところである(口絵4-2)。二つは「モイ」の西側にあたる「ベツ・モシリ」(川の・島)である。両地域の距離は100mほどであり、「モイ」は「ソー」に最も近い位置にある。

今回調査した地域はこの「モイ」に接するもので、標高は2m前後である。かつて大型の水産加工場があったものすでに移転されており、発掘調査時の現況はイタドリが広範囲に自生していた。

低湿部の一帯は水産加工場建設の際に盛られた約20～70cmの二次堆積土で覆われていた。この二次堆積土を割土すると層厚約10～20cmの褐色粘土、層厚10cm前後の茶褐色粘土がみられ、東側で地山と思われる小角礫を含む粒子の粗い褐色砂層の面を検出した。この褐色砂層は発掘区の中央部付近から落ち込み西側は上部が洪水等の影響によって削り取られた後に土砂が堆積したため、立ち上がりは低いものの河川跡と判断できた。特に常呂川岸に近い部分では第44図セクションラインa-a'、b-b'、c-c'に示すとおりX24・Y24・Z24グリッドと第45図セクションラインe-e'に示すとおりX31・Y31・Z31グリッドにかけて緩い立ち上がりをもち、傾斜角度のある褶曲化した複雑な堆積がみられた。

しかし、X31・Y31・Z31グリッド以降については比較的安定した土砂が堆積する。検出した地山をみるとA A34・B B34・C C34グリッド周辺では第46図のとおり西側から張り出しており、この箇所では急激な狭まりを確認した。川岸からみられた複雑な堆積層はこの狭まりまで達しており、X31・Y31・Z31グリッド以降を閉塞すると理解された。閉塞された箇所を基軸にみると北側の河川に近い堆積層と南側に連続すると想定していた箇所では第44図から第45図に示すとおり土砂の堆積が大きく異なる。しかも北側の複雑な堆積層には樽前a火山灰は欠如

するが南側の河川跡と想定する内部には層厚約2～3cmの樽前a火山灰が堆積している（口絵2-1）。

常呂川岸から狭まりまでの地山は第44図セクションラインb-b'に示すとおり東側でWグリッド列と平行して皿状に落ち込み、西側では地山は確認できなかったがグリッドで立ち上がる。これは河川状の流路と考えられるもので第44図セクションラインa-a'・c-c'の堆積土である暗黄褐色砂は盛り上がり、比較的短時間に埋没する様子がみられ、その上部に木製品を包含する黒灰色砂層が堆積する。流路跡の幅約10m、狭まりまでの長さは現在の川岸から約60mである。

一方、狭まりの南側の地山をみると北側で検出されたWグリッド列に並行する河川状の流路が東側に連続して伸び、狭まりはA A35・B B36グリッド付近から大きな広がりを見せる（図版4-3）。この広がり西側が発掘区域外に伸びる可能性があるものの、確認箇所から判断すると東西約13m、南北約30mの楕円状を呈し、東西南北とも皿状に浅く立ち上がる。特に南側は第5図セクションラインO-O'にみられるとおり極めて緩く、浅い断面を呈している。深さは最深部で約80cm～1mである。極端な狭まりと遠浅状の断面は一般河川に見られる形態ではなく、旧河川から入り込む小沼と考えられる。洪水等の影響によって河川状の流路に土砂が堆積して埋め立てられ、閉塞された小沼が形成されたと考えられる。

木製品は小沼の埋土層である第10層、第12a層から出土した。10層は層厚約40～50cmの植物遺存体を多量に含む褐色粘土層であり最も多く木製品が出土した。12a層は欠落する箇所もあるが、10層の直下に堆積する層厚約15～40cmの粒子が細かく粘性を持つ黒灰色土である。10層は12a層の上部にかなり広い範囲で被さりある程度の時間差をもつと思われる。

また、第7層は沼の東南側に堆積する層厚約10cm前後の褐色砂であり、一部で第10層に被さり時間差があるように思われる。

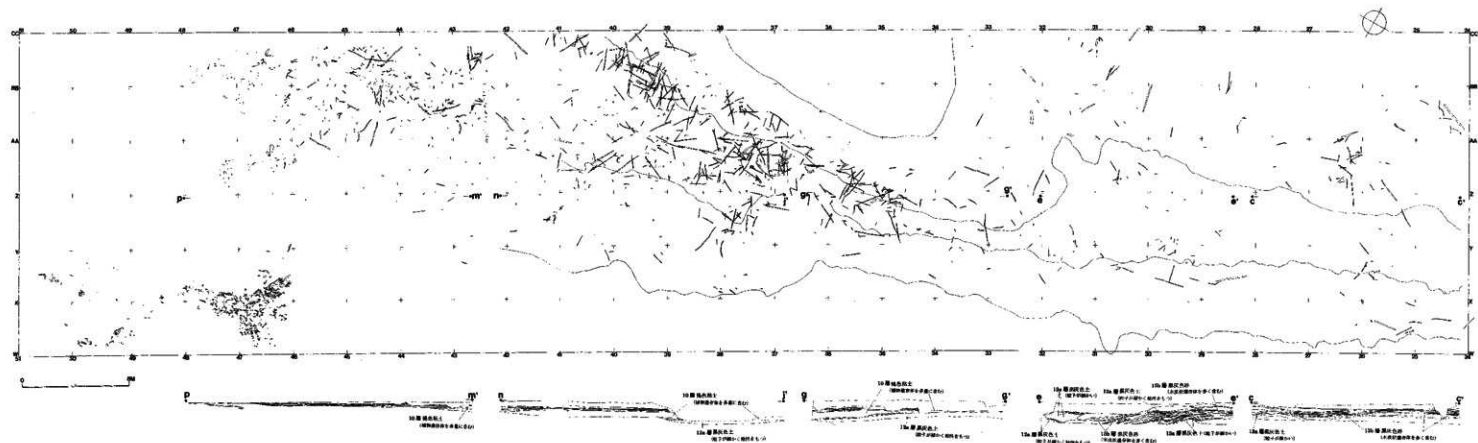
河川状の流路と小沼の時期、前後関係をセクションラインから判断することはできなかったが、ある期間機能していた小沼に続く流路が急激な土砂の堆積が繰り返されたことにより閉塞されたと考える方が妥当である。河川状の流路と小沼から出土した木製品はある程度の時間差はあると思われるが、急激な埋没過程や木製品から判断してそれほど長期間ではないであろう。小沼の上層には1739年噴出の樽前a火山灰が堆積しているためこの出土木製品は少なくとも18世紀中葉以前と考えられる。

2. 低湿部の調査方法

低湿部の調査は事前の試掘調査でも確認していたが、地質調査によっても地下水位は表面から1mで確認できること、3mで凝灰質砂岩がみられるものの地質構成は一様でないことが報告された。低湿部の調査方法には様々な方法があるが、今回は地下水位の遮断が目的であり、地下水位

も1m程度であることから全体的に止水性があり、掘削深が変化しても土留め構造に影響の無い鋼矢板自立式土留め複断面（ $h=1.2\text{m}$ ）掘削により実施した。鋼矢板は北見河川事務所所有する長さ5mの鋼矢板Ⅱ型を使用した。

なお、川岸から約36mの範囲については試掘調査の結果、木製品等の出土も薄く、発掘時に洪水等の影響を直接受ける可能性が高いため全面発掘は行わなかった。



第4図 木製品出土分布全体図

第V章 低湿部出土の木製品

木製品は主に河川状の流路と小沼から出土している。河川状の流路では柱・梁など建材は少なく、各種の製品が第13b層にみられる。これらの木製品は東西の河川壁側から出土する傾向をもつ。沼内部では7層、10層、11層、11a層、12層、12a層、13a層、13b層、13c層、14b層、14c層の各層から出土している。この中で安定した層厚をもち木製品が多量に出土したのは10層、12a層である。

1. 第7層出土の木製品

木製品は第5図に示すとおりW46・47、X46・47グリッドに集中する。この区域は第5図セクションラインO-O'にみられるとおり主体的木製品を含む第10層の一部が削り取られ、その窪みに博前a火山灰が堆積するもので主体的な木製品を出土した第10層・第12a層とは時間差がある。

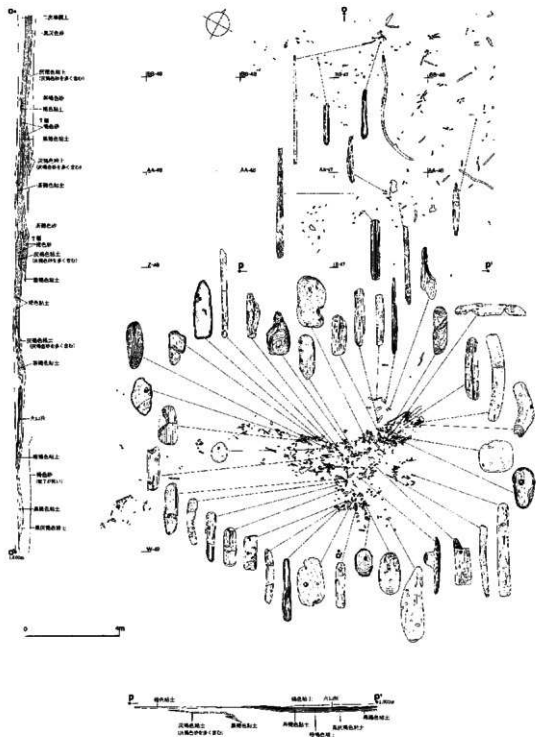
木製品はこの火山灰直下の層厚約10cmの褐色粘土から出土した。小枝や小木に凝じって筥、有孔加工材など小型の木製品が狭い範囲から出土した。長い柱材、柱穴、焼土はみられない。製品・未製品を含め遺物が集中することから屋外の作業場、もしくは木製品を中心とした送り場などが考えられる。

(第6図、図版1・図版2-1~3)

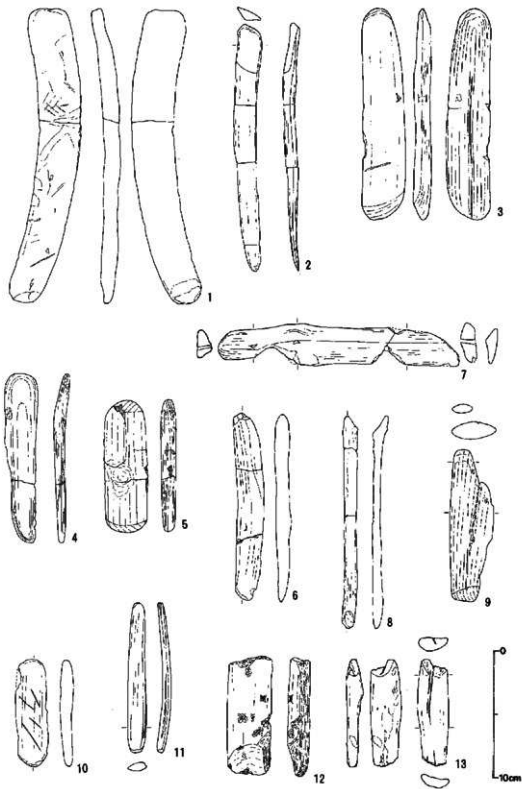
1はX46グリッド出土。弧状の形態を呈した長さ約27cmの棒酒甕もしくは筥(図版1-1)。断面は柄部の表裏面が平坦であるものの、背面も緩い弧状を呈する。幅約3cmである。先端部は薄く作出され、8cmまでの間は浅い凹状となる。柄部から4列の鋭い切り傷様の使用痕がみられる。2は長さ約19.5cmの筥(図版1-2)。小枝を半割したもので断面は蒲葺状を呈する。鋭く尖った筥先は表裏面、柄部は片面から削り出される。3は長さ約16.5cmの筥(図版1-3)。断面は側縁部を薄く仕上げた楕円形であり、両端部が筥先となる。4は長さ約13.4cmの筥(図版1-4)。やや曲がった柄部から先端部にかけて幅狭く、切り出し状に作出される。5は長さ約10.5cmの筥(図版1-5)。3と類似した形態であり幅約3.5cm。両端部の筥先は上面を薄く削り凸状を呈する。6は長さ約15cm、径約2cmの筥(図版1-6)。縦方向に粗く削り出す。断面は楕円状であるが、先端部は平坦で薄く作出される。

7は把手(図版1-7)。長さ約19cm。断面は角形を呈し、幅広側に「V」字状の凹面が作出されており、実測図左側には直径約3~5mmの小孔をもつ。

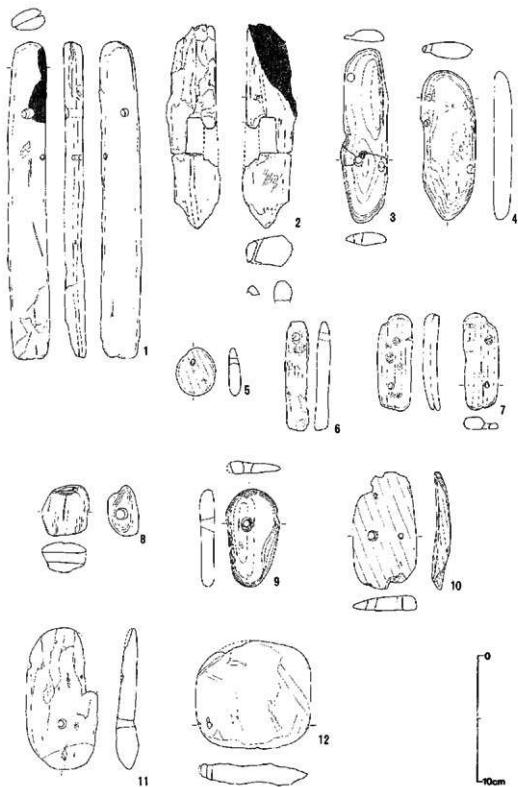
8は長さ約17cm、径約1cmの細長い筥もしくは軸状製品と思われる。先端部は斜めに削り出



第5圖 第7層木製品出土分布圖(1)



第6圖 第7層出土木製品(1)



第7圖 第7層出土木製品(2)

される。9は長さ約12cm。両端部が筧状となるが、下部は厚みがあり、斜めに作出される。10は長さが約8.2cm、幅約2.7cmの筧(図版2-1)。両先端は凸状を呈し、下部の先端は炭化する。体部に切り傷痕が斜め方向に認められる。11は緩い弧状を呈した長さ約12cm、幅約1.7cmの丸みをもった細長い形状であり、右側縁部に鋭い切り傷痕をもつ(図版2-2)。

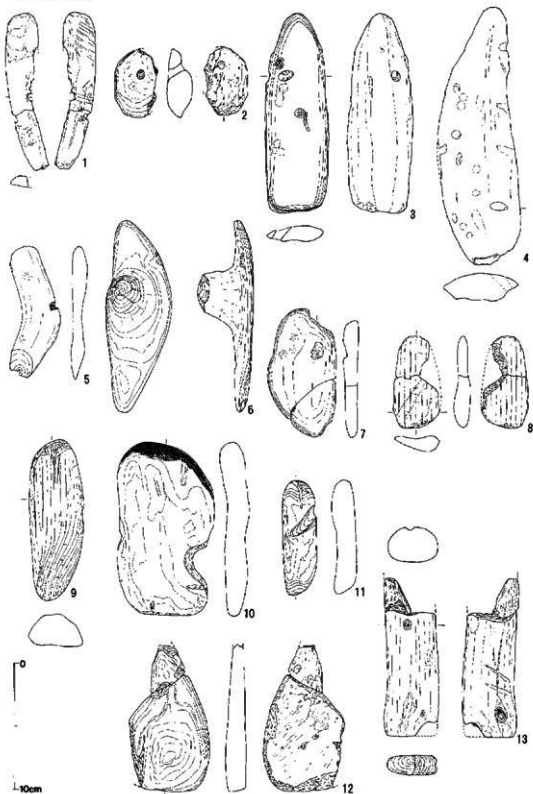
12は楔状製品(図版2-3)。丸木材を半割したもので、先端を斜めに削り出す。上部はやや傾斜するが平坦な箇所が確認できる。

13は残存部の長さ約8.2cm、幅約2.7cmの加工材。枝木を素材に半割面を凹状に削り出す。上端部も薄く削り出し、深い抉りと裏面にかけて鋭い切込みをもつ。

(第7図、図版2-4~6・図版3・図版4-1)

1~12は有孔加工材。1はW46グリッド出土。長さ約25cm、幅約3cmで断面は薄餅状である。上部には一方から穿孔された径約1cmの大孔とやや下方の右側縁に径約5mmの小孔をもち、それぞれには緊縛されたと思われる紐擦れ痕が横位に残されている。大孔の上部では右側縁から裏側の左側縁にかけて鋭い切込みが加えられ、大孔の周辺にかけて著しく焦げている(図版2-4)。切込みや大孔は紐を通すためのものと考えられ、柵からの吊下げ用の紐、提灯などを固定する製品であろう。2は大部分が欠失するが幅約4.2cmほどの角材の中央部に長方形の孔がある。有孔から表裏面にかけて縦位の刻線がみられ、上端部は炭化する(図版2-5)。3は長さ約14cm、幅約4cm。表裏面とも荒く削り出されているため起伏がある。下部に径約4~7mmの孔が並列し、左上側縁に木貫通の孔がある(図版2-6)。4は下部が尖る形状をもつもので長さ約12cm、幅約4.2cm。左側縁に2個、右下部側縁に1個の孔をもつ。各孔は径約5mm前後であり、外側に向かって斜めに穿孔される(図版3-1)。5は長さ約3.3cm、幅約2.7cmの丸みをもった形態である。裏面はほぼ平らであるが、表面の下部は上部に比して厚みを帯びる。断面が薄い上部を穿孔する。両面穿孔であり、表面から穿孔後、裏面では下方からのみ行われる(図版3-2)。6は長さ約8.5cm、幅約1.5cmの長方形を呈する。上部に径約7mmの孔が斜めに穿孔され、擦痕と思われる浅い刻線が中央部にかけて伸びている(図版3-3)。7は長さ約8cm、幅約3cmの長方形をもつ緩い弧状を呈する。径約4mmの貫通孔と6個の木貫通の門部が見られる。裏面は縦半分が削り出され、直行するように切り傷痕がみられる(図版3-4)。8は小さな流木を利用したもので全体的に丸みをもった形状である。実測四上面に粗い切り傷痕がみられ、樹芯部を径約7~9mmの孔が貫通する。9は下部が窄まる形状をもつ、長さ約7.8cm。上部に片面から穿孔された径約7mmの孔をもつ(図版3-5)。

10は長さ約9.1cm、幅約5cmの板材に径約7mmと2mmの大小の孔が並列する(図版3-6)。11は長さ約11cm、幅約5.5cmの楕円形である。厚みをもった下部に径約3mmの孔をもつ(図版3-7)。孔から先端部にかけて表面が削られる。12は幅約8.5cm。断面は表裏面とも凹凸がある。裏面は板目が顕著にみられるが表面は研磨されており、左側縁下部に径約4mmの小孔をも



第8圖 第7層出土木製品(3)

ち、右側縁部と左側縁上部に使用痕と思われる、幅広い有溝となる(図版4-1)。

(第8図、図版4-2)

1は篋。長さ約13cm。上部から下部にかけて薄くなる。中央より右側に約7mmの小孔をもち、裏面には直行する浅い溝と縦位の鋭い刻線がみられる。

2～5は有孔加工材。2は長さ約5.5cm、幅約3cm。裏面は平坦であるが表面は大きく膨らみ、上部の薄い箇所から径約6mmの小孔が斜めに穿孔される。左側縁には斜め方向の鋭い切り込みがある。3は長さ約16cm、幅約5cmの石斧状の形態である。左側部に径約6mmの小孔が斜めに穿たれ、裏面は上部から下部にかけて幅約1.5cm前後の浅い溝がみられる。4の断面は表面は丸みをもち、裏面は凹凸があるものの先端部は篋状に薄い。斜め方向から貫通した小孔が多くあり、未貫通の小孔が残されている(図版4-2)。5は長さ約10cm、幅約2.5cm。体部は「く」字状に曲がり、斜めに削り出した先端部には径約2mmの小孔をもつ。

6～13は加工材。6は文鏡形の形状をもち、つまみの上部が細かに面取りされる。底面は僅かに起伏をもつ。7は長さ約10cm、径約5cmの丸みをもった木材で、裏表面とも擦痕がみられる。8は長さ約8cm、径約4cm。下部は浅い溝が斜めにみられる。9は長さ約13cm、径約4cm。裏面は平坦で表面が丸みをもった蒲鉾型の断面をもち、先端部が削り出される。10は長さ約14cm、径約7cm。右側縁部が大きく抉られ、先端部は炭化する。11は長さ約9cm、径約2.5cmの有孔加工材。上部及び裏面の中央部に切り傷痕がみられる。12は左側縁部が欠失する。厚さ1cm前後の板材を素材とし、一部炭化した裏面に細い擦痕が斜め方向にみられる。13は残存部の長さ約13cm、幅約4cm。表面に鋭い刻線が節部を避けて縦方向に施され、裏面には径約7mmの未貫通の小孔がある。

2. 第10層出土の木製品

木製品は主に兩岸の狭まりから広がったZ37グリッド以南の小沼に堆積する植物遺存体を多く含む層厚約40～50cmの褐色粘土層から出土した。本層からは第26図・第27図・第28図に示すとおり先端部が鋭く加工された丸木材が圧倒的に多くあり、柱材と思われる「Y」字状の受部をもつ股木材など太い材木もみられる(図版5-1)。先端部を尖らした丸木材は207本、股木材は30本みられる。これらの材木は第9図に示すとおり小沼の西側寄りに集中する傾向をもち、特にA A39・B B39グリッドと狭まりが開放されたZ37グリッドで群を構成する様である。

A A39・B B39グリッドでは第26図-5に示した大型の「Y」字状の股木材など数本の大型材が西側から倒れこみ、一部ではその上に並行して載る状況の箇所もある。これらの周辺では抉入部材、ホゾ付き木製品がみられ、何らかの構造物が想定される。

Z37グリッドにおいても同様の出土状況を見せる箇所があるものの詳細は不明である。

(第11図、図版5・図版6・図版7・図版8-1~4)

1はZ38グリッドから出土した矢と矢柄である。矢は矢柄と僅かに離れて出土したが(図版5・2、口絵3-2)、本来は装着されていた可能性がある。矢は長さ15.7cm、径約8mm。断面円形で、中央が太く両端は細くなり、表面は丁寧に調整されている。先端部は6面に鋭く削り出し、径約5mmの下端部はやや扁平となる(図版6-3)。矢柄は長さ約38cm。上部の鎌身装着部から「U」字状に作出された下部の欠管に向かって幾分細くなる。表面は丁寧に整形・調整され、断面の最大幅は径約1.2cm。上下端部と下端部の3箇所では極めて薄く幅の細いサクラ樹皮を螺旋状に巻きつけている(図版6-2)。2はZ40グリッドから出土した両端が欠失した矢柄。残存部の長さは約33cm。幅の細い樹皮を螺旋状に6条巻きつけている(図版6-4)。3はZ39グリッド出土。両端部が欠失した矢柄。残存部の長さは約29.3cm。表面は丁寧に削り出されており、断面は径約7mmの円形である。

4・5は円錐形刺突具もしくは矢。4はA A43グリッド出土。長さ約12.3cm、断面円形の最大径は1.4cm。全面とも丁寧に調整されており、胴部には2本単位の刻線を3箇所施すものの全周しない。刻線間には微妙な凹部が部分的にあり、横位の使用痕が認められる。緊縛されていた可能性がある(図版6-5)。5はA A45グリッド出土。4と形態が類似する。長さ約10.2cm、断面円形の最大幅は1.2cm。中央部から両端部にかけて細く削り出し、左右上下に浅い切り込みを入れ有段化する。尾部も全面を薄く削り出している(図版6-6・図版7-1)。6はA A37グリッド出土。先端部の作出が1と類似する。中柄と思われる。胴部はややスリムであり、長さ約15cm。先端部は多面的にカットされ、尾部は半分ほど扁平に削り出している(図版8-1)。

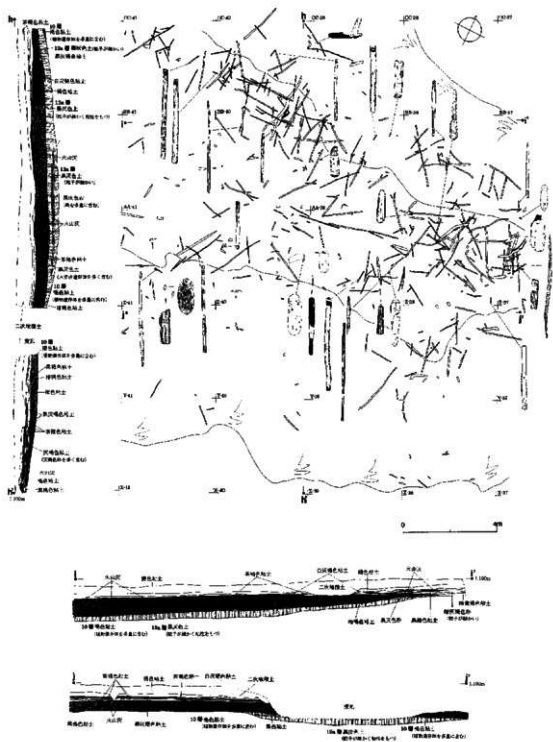
7はB B44グリッド出土のヤス(図版7-2・図版8-2)。先端は幾分、丸みを呈する。左右交互にアグを作出し、尾部は細身となる。作りは粗雑であり、未製品の可能性がある。

8はB B44グリッド出土の魚叩き棒(図版8-3)。長さ約48cm。断面は径約3cmの円形である。体部はやや太く、内反りした柄部は細身となり、下端部には斜めにシロシ(アイヌの所好印)が施される。

9はZ41グリッド出土。早權と思われるもので残存部の長さ約28cm、楕円形の断面は厚さ約2cm。幅は最大でも7cmと小振りであり、先端部は細く「U」字状を呈する(図版8-4)。

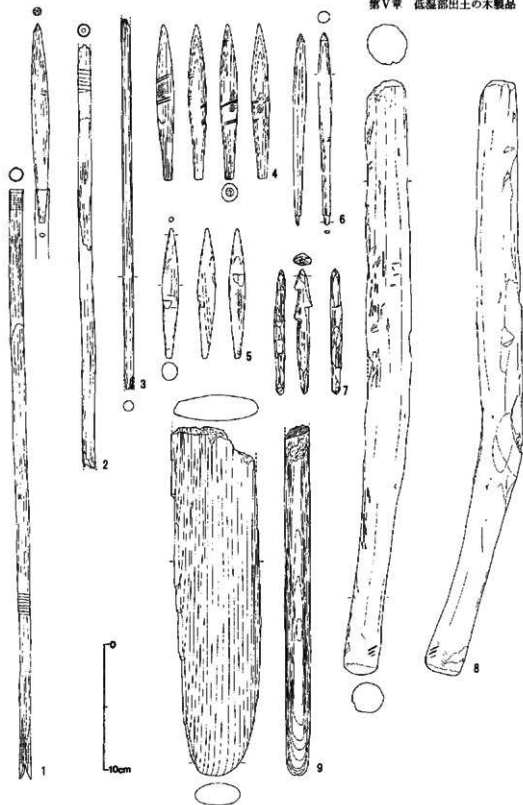
(第12図1-3、図版8-5~7)

第12図-1~3は弓。1はZ36グリッド出土。長さ約115cm。実測図の右側がやや左側と比較して外屈する。中央部から屈曲部までの約35cmは厚さもほぼ均等で比較的幅広く削り出され、軸に対して斜め方向に切傷痕が顕著にみられる。中央部断面は太く多面的であり、しだいに先端部にかけて細くなる。削り出しも丁寧である。弓頭は2方向、若しくは3方向からの削り出しによる段差をもつ。2・3はA A42グリッド出土。3本に折れた状態で横に並んで出土した





第10圖 第10層木製品出土分布図(3)



第11図 第10層出土木製品(1)

(図版8-7)。1本は途中で欠失するため僅かに接合はできないが同一と思われる。推定長さは約110cm。樹皮を剥ぎ、枝を落として全体を細かく丁寧に削り仕上げている。中心部の径は約2.3cm、弓弭の手前では1.3cmと細くなる。弓弭は浅い削りの段が入り、実測図左側の先端部は樹芯を越えて丸みをもたせ、右側の先端部は横から斜めに削り落として作出する(図版8-5・6)。

(第13図、図版9)

第13図-1～3は棒酒箸。1は上部が欠失し、大小の亀裂が入り込む。残存部の長さは約23.6cm、腹部は凹状を呈し、筧先の幅は2.5cmである(図版9-1)。2は上部が欠失する。残存部の長さは約18.7cm、背部に比して使用面と思われる腹部は平坦であり、先端部は細長くなる(図版9-2)。3は長さ約13.8cmで弧状を呈し、厚さ2mmの薄手である。腹部は使用面と思われるもので微妙な凹状を呈し、磨かれている。背部はざらつき感がある(図版9-3)。

4・5は小型の筧。4は長さ8.8cm、幅2.2cmの茶匙状である。上部は平坦となり、胴部から先端部にかけて緩い弧状を呈する(図版9-4)。5は長さ約9.7cm。柄部は凸状を呈し、断面は丸みを帯びる。筧先は薄く仕上げ、腹部は浅い凹状である。

6は長さ約11.5cm。片面がナイフの刃部様に薄く、断面は三角形となるもので食具であろう。

7は長さ約5.8cm筧であろう。8はZ40グリッド出土のヒキリ板(図版9-5)。長さが短く木端を再利用したものと思われる。長さ約9.3cm、幅約2.5cmヒキリウスはカギ状を呈し、内面は煤けている。

9は一部が欠失するものの筧と思われる(図版9-6)。残存部から判断して30cm前後の長さをもつと思われる。断面は三角形を呈し、上端部は切り出し状に鋭く作出されている。

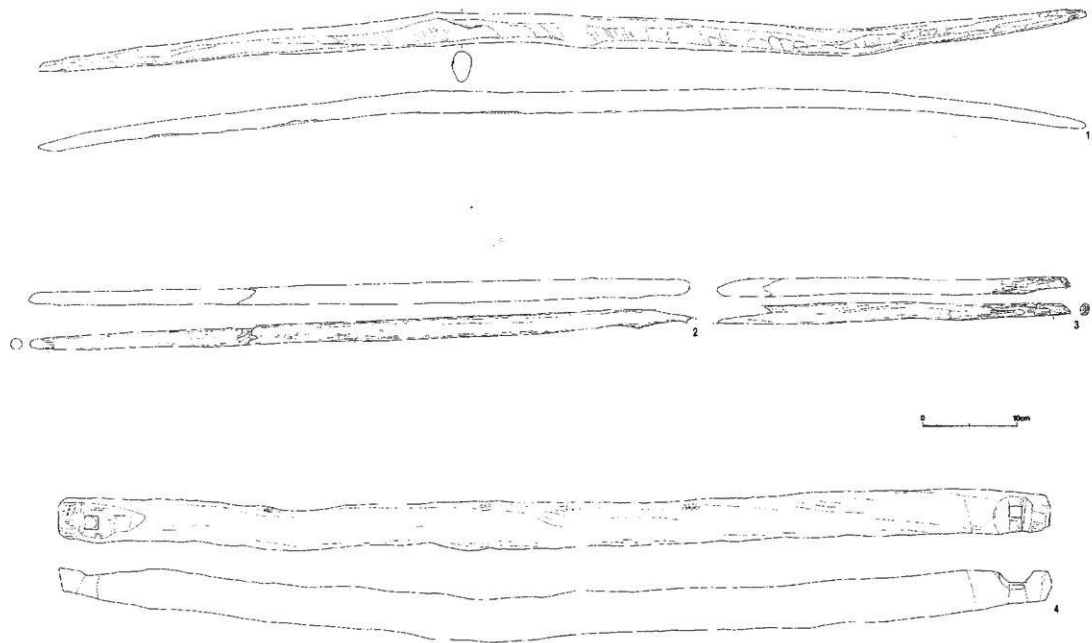
10は刺突具と思われる(図版9-7)。両端が欠失しており、残存部の長さは約21.6cm。尾部から先端にかけて細くなる形態である。断面は楕円形を呈し、中ほどに緊縛痕と思われる変質箇所がある。あるいは銛など軸の可能性もある。

11は食具と思われる。小枝状の樹木を利用したもので長さは約23.5cm。先端部は尖り、刃部をペーパーナイフ状に細く作出されている(図版9-8)。

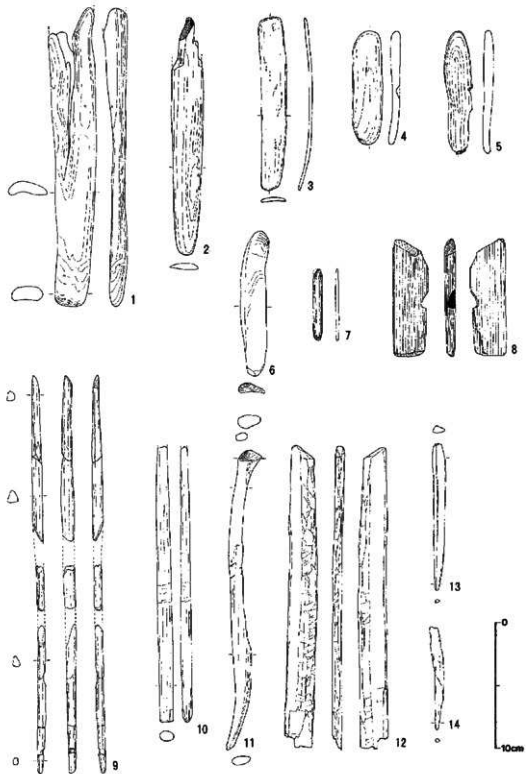
12はA A 42グリッド出土の刃状加工材(図版9-9)。残存部の長さは約24cm、幅約2cm、厚さ約7mm。切先をもち、表裏面とも刃文様に削り出している。

13はピン状製品(図版9-10)。長さ約11.6cm、断面は三角形を呈し、先端部は鋭い。

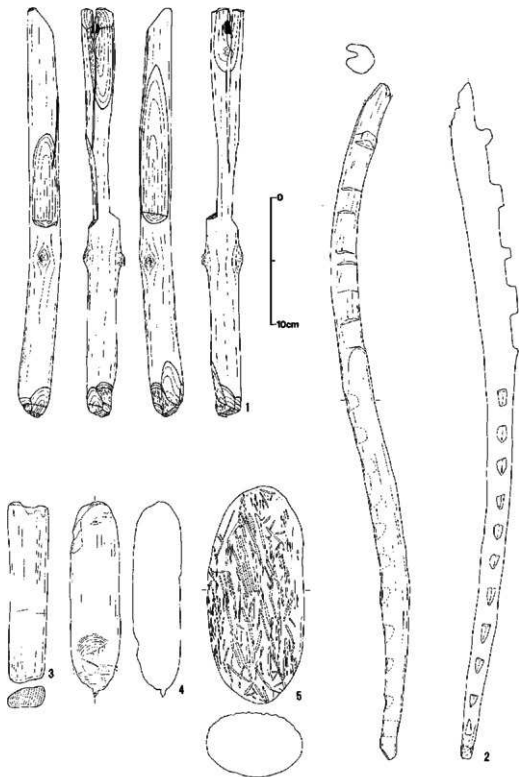
14は木釘(図版9-11)。長さ約8.3cm。表面に切り傷痕が斜めに2箇所みられ、断面円形の先端部は炭化する。



第12圖 第10層、13層出土木製品



第13図 第10層出土木製品(2)



第14圖 第10層出土木製品(3)

(第14図、図版10-1~5)

1はZ39グリッド出土の燈火用挟み木(図版10-1)。両側を削った長さ約32.5cmの丸杖状製品の二次転用と思われる。切り出し状に作出した上部から鋭い切れ込みがあり、内部は直行するような径7~8mm細長い炭化面が残る。燈火用に樹皮・小枝を固定していたと思われる。

2はY41グリッド出土の雪上歩行具である「かんじき」の左面である(図版10-2)。残存部の長さは約53.3cm、形態は短輪型瓢箪形であり、先端部から胴部にかけて厚みをます。前に11本の滑り止めの横棒(サキリ)用の孔をもち、胴部には鼻緒を固定するための大小の突起が交互にみられる。

3は用途不明の加工材。長さ約14.3cm、幅約3cm、厚さ約1.5cmの板材を素材としたものであり、上部は凹状を呈し、表裏面も僅かに凹状となる。側縁は磨耗して丸みを帯びる(図版10-3)。

4・5は断面が楕円形を呈した自然流木に加工痕をもつ。4は下端部に浅い削り痕がみられる(図版10-4)。5は表面にのみ無数の切り傷痕が縦位、下端部では斜位に残される(図版10-5)。

(第15図、図版10-6~9)

1はZ35グリッド出土の刺突具。長さ約39.2cm。先端部は多面的に鋭く作出されている。断面が楕円形のを素材とするが、尾部から胴中央部にかけて削り出しが行われ平坦となる。全体的に煤けている(図版10-6)。2もZ40グリッド出土の刺突具。長さ約36.3cm。扁平な尾部から先端にかけての断面は円形となり、明瞭な繫縛痕が1箇所認められる。先端部と繫縛痕の周辺は煤けている。尾部の平坦部を中心に軸とやや斜行する様に斜位・直行に施されたシロシ(アイヌの所有印)がみられる(図版10-7)。

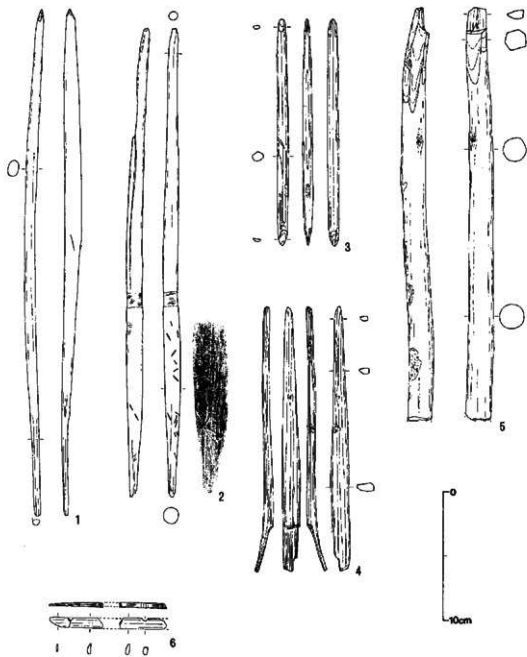
3はかんじきの横軸(図版10-8)。長さ17.3cm、径約8mmのもので両端部は扁平となる。

4・5はホゾ付軸状製品。4は下部、5は上部に数回の切込みによるホゾがみられる。4は残存部の長さは約20.5cm、底部が平坦な漏斗状の断面を呈する。5の残存部の長さは約32cm、断面は円形である(図版10-9)。

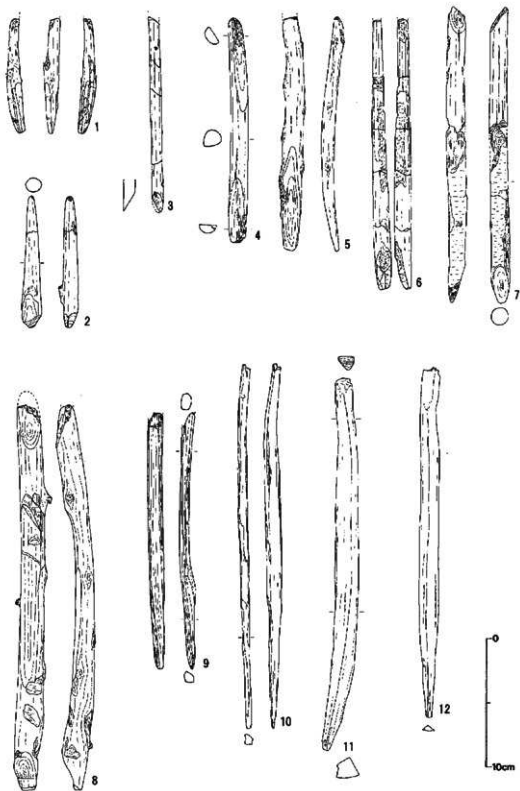
6は挟付加工材。長さ約9cmの板材を割り裂いたもので、上部に小さな抉りをもつ。先端部は鋭く作出される。

(第16図)

本図は軸状製品である。1は残存部の長さ約9cm、先端部を多面的に削り出し、一面を幅広く仕上げた筈的な機能をもつ。2は長さ約10.2cm。先端部は丸みを呈する。3は残存部の長さ約16cm、径約8mm。先端部は単面である。4は長さ約17.3cm、径約1.2cm。両先端部を薄く削り出している。5は残存部の長さ約18cm。下部を薄く削り出す。6~8は先端部を反転させて、単面的に削り出したもので、6は長さ約21cm、径約1.6cm。7は長さ約23cm、径約2cm。8は



第15圖 第10層出土木製品(4)



第16図 第10層出土木製品(5)

常呂川河口遺跡

残存部の長さ約30cm、径約2cm。9は4と同様に先端部を薄く削り出したもので、残存部の長さ約18cm、径約1cm。10～12は先端部が細く尖り、四角形状もしくは三角形の断面をもつもので、10は残存部の長さ約28cm、11は29cm、12は27cm。

(第17図)

1～3は軸状製品。3点とも表面を丁寧に削り出している。1は長さ約34.3cm、径約1.6cm。両端部は丸みをもつ。2は残存部の長さ約41.6cmあり、比較的長い製品と思われる。上部は薄く削り出される。3は残存部の長さ約36cm、径約2.5cm。削り出しの幅があるため断面は多角的となる。

4は丸木材。残存部の長さ約23cm、径約2.2cm。中央部では樹皮面を薄く残す。2・3もこの様な方法により樹皮の削り出しがなされたと思われる。

5は竹製品。6は丸枕状製品。2点とも先端部が2方向から切断されたもので、5は残存部の長さ約59cm、径約1.8cm。6は残存部の長さ約38cm、径約2cm。

7・8は加工材。7は左上部の大半がすでに欠失していた。残存部の長さ約14cm、腹面は凹状を呈する。8は残存部の長さ約17cm、径約1～1.5cm。樹芯部が削り取られ、断面は「U」字状となる。

(第18図、図版11-1)

1～3はホゾ付軸状製品。1・2ともホゾ先側が薄く削り出されており、1は残存部の長さ約24cm、径約1.5cm。2は残存部の長さ約30cm、径約1.2cm。3は断面が丸みをもった三角形状を呈する。表面は丁寧に削り出され、下方は薄くなる。

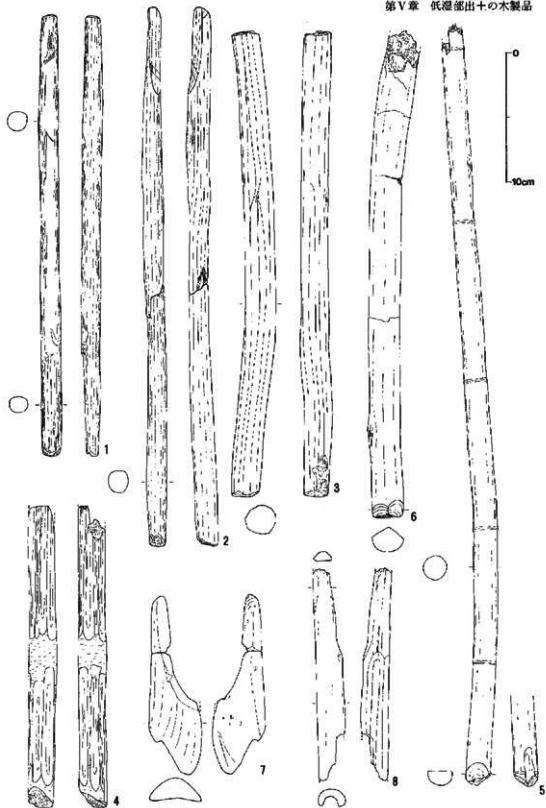
4は加工材（図版11-1）。長さ約12.6cm、最大幅が約2.2cm。切り出し状に加工され、縦断面は弧状を呈する。

(第19図)

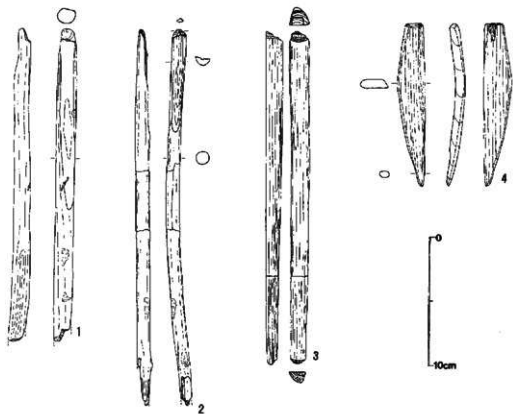
1は板状製品。2～8は各種サイズの板材である。2は残存部の長さ約12cm、幅約3cm、厚さ約1.2cm。3は残存部の長さ約14cm、幅約6cm、厚さ約2cm。4は残存部の長さ約23cm、幅は最大でも約1.2cm。厚さは薄く約2～3mm。5は残存部の長さ約23.5cm、幅約3.3cm、厚さ約1cm。角は丸味を呈する。6は本層出土最大の板材で残存部の長さ約37cm、幅約7cm、厚さ約2cm。7は残存部の長さ約25cm、幅約10cm、厚さ約1.5cm。上部の一部は炭化する。8は長さ約29cm、幅約5cm、厚さ約1.5cm。右側壁に3箇所炭化面がみられる。

(第20図)

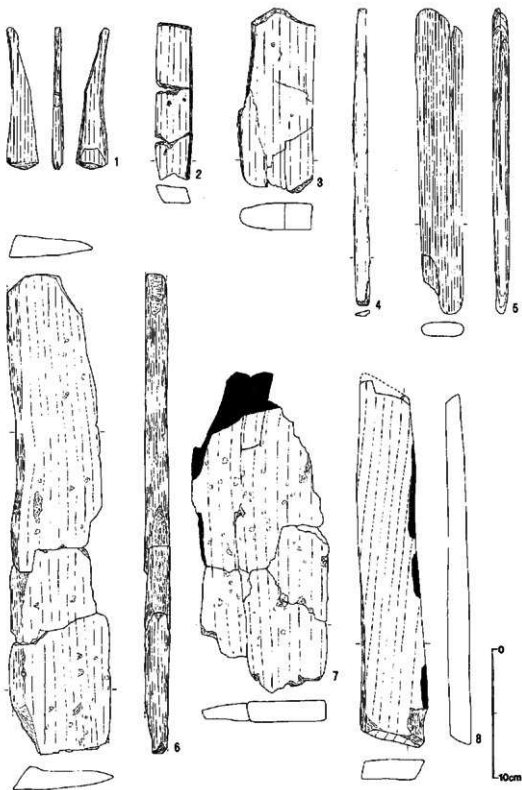
1は残存部の長さ約21cm、幅約3cmで断面が「V」字状となり、下部を薄く削り出している。



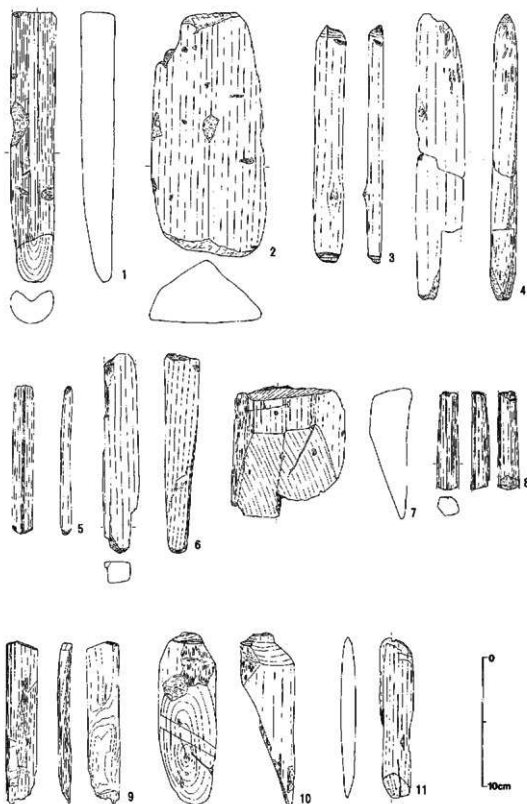
第17図 第10層出土木製品(6)



第18圖 第10層出土木製品(7)



第19図 第10層出土木製品(8)



第20圖 第10層出土木製品(9)

2は長さ約19cm、幅約9cmの断面三角形の大きな割材。

3～5は半割材。4は残存部の長さ約20cm、径約1.5cm。上部を薄く削り出し、切断箇所には炭化面が残る軸状製品。

6は残存部の長さ約16cm、最大径約3cmの角材。7～10は木端。7は楔状、8は表面が角形状に削り出された軸状製品の木端。10は丸木材の木端。11は切片。下部が薄く削られており、筧の可能性もある。

(第21図)

1～3は「Y」字状の受部をもつ。1は残存部の長さ約39cm、径約4cm。2は残存部の長さ約42cm、径約4cm。3は基部が短いもので、股木部の切断は向きを変えて行われている。長さ約30cm、径約3cm。同種タイプは第12a層（第38図-3・4）にもあり、木塚の可能性もある。4は「L」字状の形態をもつもので、長さ約37cm、径約3cm。5は鉤状製品。長さ約43cm、径約3cm。

(第22図)

1～5は「Y」字状の受部をもつ。1は基部が短く、受部が大きく開く。先端部までの長さ約86cm、径約5cm。先端部は少なくとも3面削り出される。2は残存部の長さ約78cm、径約6cm。3は長さ約59cm、径約5cm。4は長さ約92cm、径約4cm。先端部は同一方向から複数回削り出され、単面的に仕上げている。5も片方欠失するが、本来は受部が大きいものと推測される。長さ約139cm、径約5.6cm。

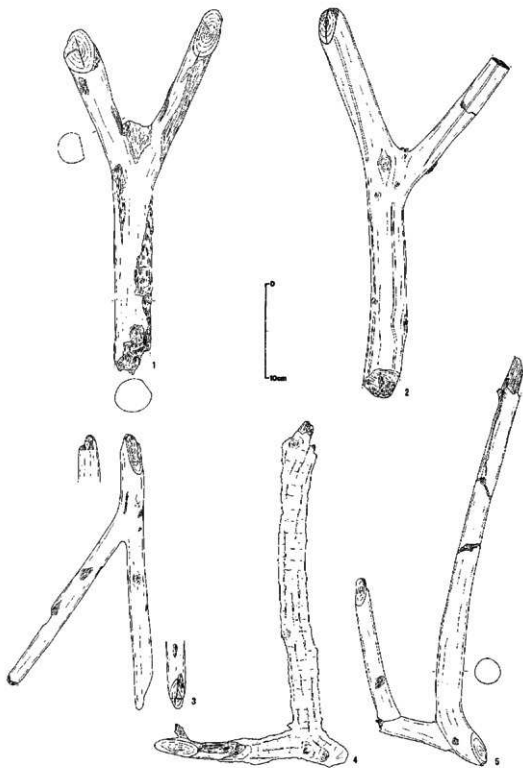
(第23図)

第23図-1は梁材と思われる。残存部の長さ約127cm、径約7.4cm。断面は三角形を呈し、ほぼ中央部に浅い抉入部をもつ。2は柱材もしくは梁材であろう。長さ約199cmあり、先端部は細く径約4cm。上部は太く径約10cm。3は柱材。長さ約213cm、径約7cm。樹皮は剥がされ、先端部は多面的に削り出される。

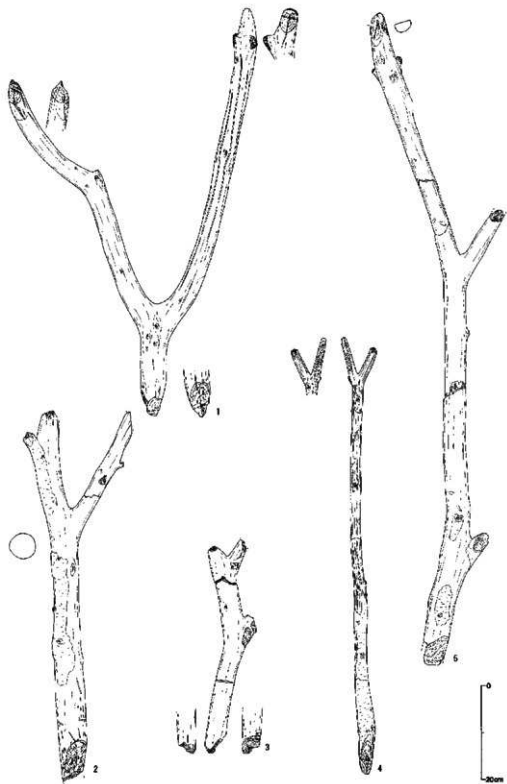
4は割材であるが、実測図の左側がさらに大きく削り込まれている。長さ約94cm、径約6cm。
5は樹皮付きの丸木材。残存部の長さ約101cm、径約12cm。

(第24図、図版11-2～4)

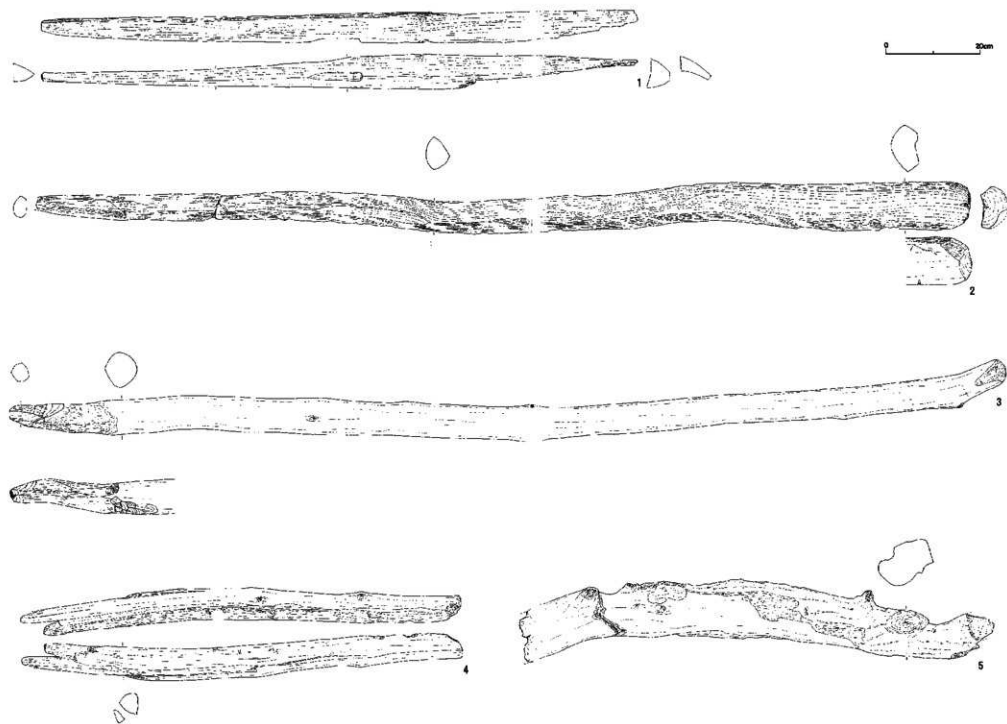
第24図-1～5は抉入丸木材。1は先端部が尖り、頭部からやや中央に下がった箇所に抉入部をもつのに対し、2～5は丸木材が垂直に切断され、抉入部は端部に設けられる。また、比較的長い丸木材を使用する。1は長さ約63cm、径約2.9cm。先端は多面的に作出される。2は残存部の長さ約55cm、径約2.6cm。抉入部は上下を薄く削り出され、下方にも浅い「V」字状の



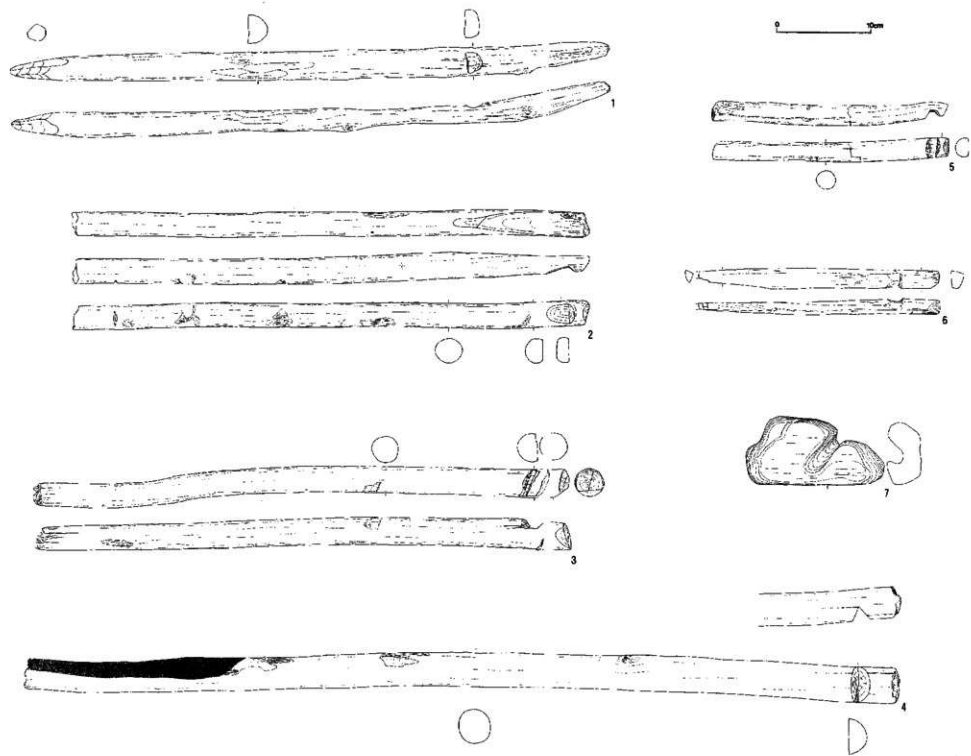
第21圖 第10層出土木製品(10)



第22圖 第10層出土木製品(11)



第23圖 第10層出土木製品(12)



第24圖 第10層出土木製品(13)

挿入が加えられる。3は残存部の長さ約57cm、径約3cm。挿入は軸に対して斜めに作出される。4は残存部の長さ約93cm、径約4cm。「V」字状の深い挿入をもつ。5は残存部の長さ約25cm、径約2.2cm。挿入部の下面が薄く削り出される(図版11-2)。6は残存部の長さ約25cm、径約2.2cm。細長い角材を素材とするが、先端部は僅かに欠失する。左右から切り込まれた挿入部をもつ(図版11-3・4)。7は磨耗して丸みを帯びた不定形な材木に斜め方向からの挿入をもつ。挿入部に人為的な痕跡は認められず、自然木の可能性もある。

(第25図)

1はホゾ付き丸木材。長さ約152cm、径約3.4cm。先端部は2方向から削り出される。2～5は上部部に挿入部をもつ。2は細長い挿入をもつもので、長さ約171cm、径約3cm。3～5は幅の広い挿入部をもち、下方部を尖らす。3の長さは約131cm、径約4cm。4は長さ約87cm、径約4cm。5は残存部の長さが約78cm、径約3cm。3点とも先端部は多面的に削り出される。6は残存部の長さが約81cm、径約5cm。中央部に挿入をもち、先端は多面的に削り出される。7は両先端部が2方向から削り出されたもので、長さ約77cm、径約3cm。

(第26図)

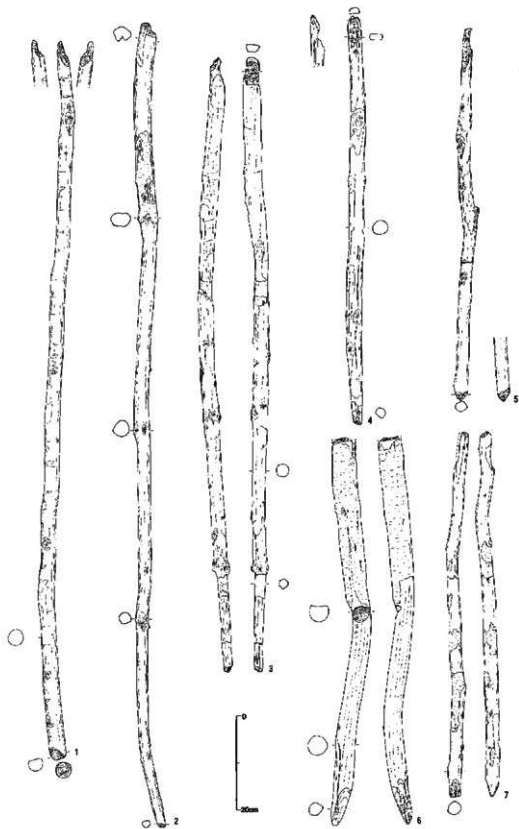
1・2は両先端部が加工される。幅があり梁材もしくは垂木材と思われる。1は先端部が細長く削り出されたもので、長さ約198cm、径約6cm。2は下部が2方向から削り出され、上部は細長く丸みをもつ。

3は柱材。残存部の長さ約135cm、径約10cmであり、先端部は多面的に削り出される。

4は下部に受部をもつ。長さ約198cm、幅約6cm。先端は3面の削り出しがなされる。5は「Y」字状の受部をもつ。長さ約310cm、径約9cm。柱材と思われるが受部が不自然に大きいため、それ以外の用途も考えられる。先端は2方向から複数回の削り出しがなされる。

(第27図)

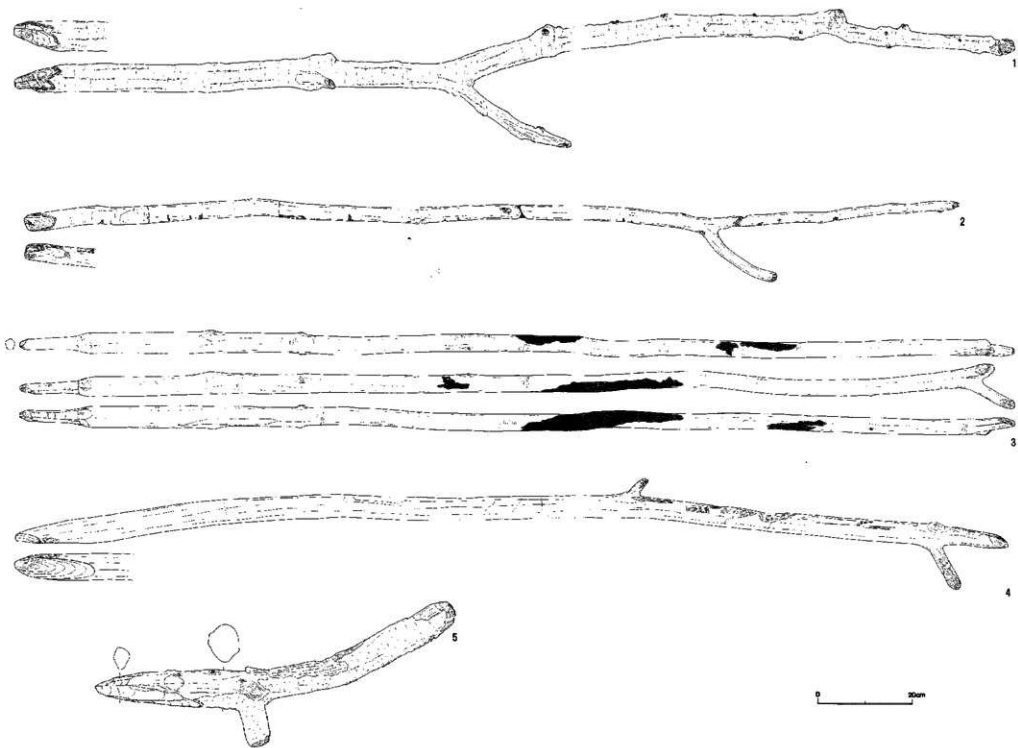
1・2は「レ」字状の受部をもつもので、建材と思われる。1は長さ約212cm、径約6.5cm。樹皮面が顕著に残されており、端部は数十回の加撃により切断されたため複数の切断痕がみられる。2は長さ約198cm、径約3.5cm。先端部は2面の切断痕がみられる。3・4は「Y」字状の受部をもつ。3は長さ約210cm、径約4.5cm。樹皮は剥がされ、先端部を細くホゾ先状に削り出し丁寧に仕上げている。中央部に切り傷痕が観察され、一部は炭化する。先端部の形態など他の部材と異なっており、別の用途が考えられる。4は長さ約210cm、径約5.5cm。中央近くに「レ」字状部が一本伸び、先端部は2方向から切断される。5は長さ約78cm、径約8cm。先端近くに「レ」字状の受部をもつ。樹皮は残り、枝払いされる。



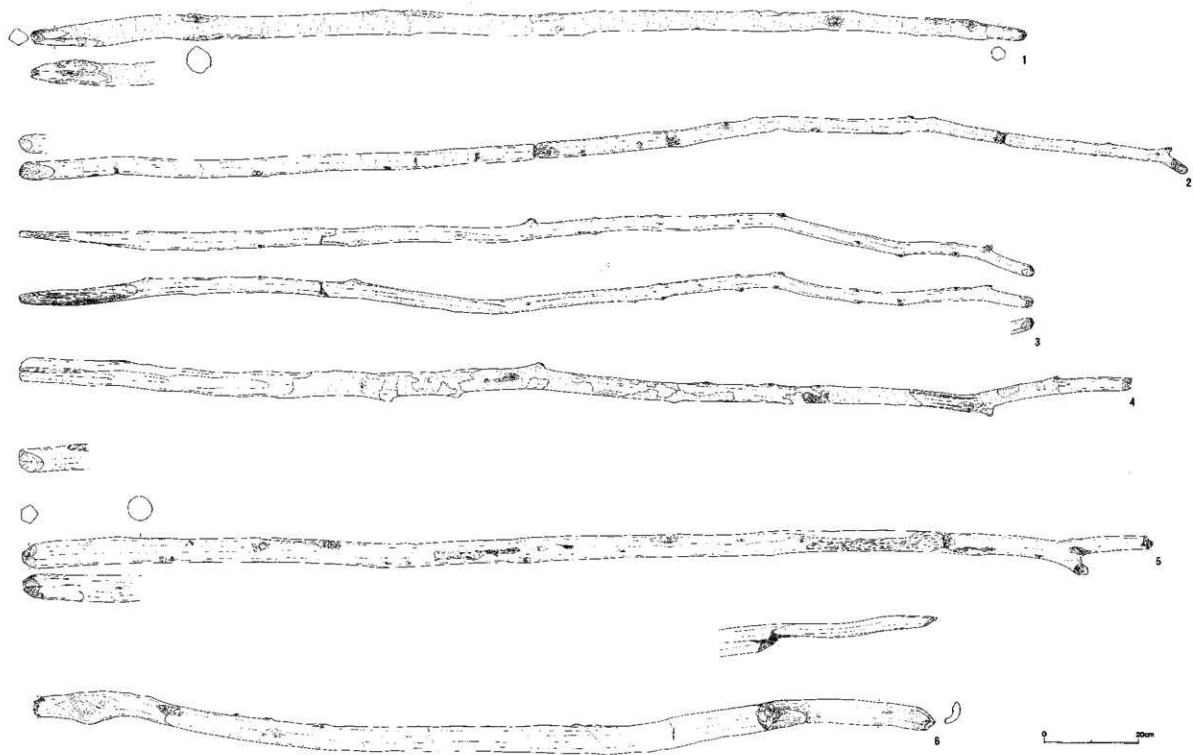
第25圖 第10層出土木製品(14)



第26圖 第10層出土木製品(15)



第27圖 第10層出土木製品(16)



第28圖 第10層出土木製品(17)

(第28図)

1～5は両端部とも切断面が残る丸杭状製品。1は長さ約210cm、径約5cmの樹皮付きであるが、先端部は剥がされ尖る。2は長さ約247cm、径約5cm。3は長さ約215cm、径約3cm。基部は鋭く単面的に切断される。4は長さ約236cm、径約5cm。樹皮付きであり、基部は2と同様に2方向から削り出される。5は長さ約239cm、径約5cm。基部は多面的に削り出される。6は体部が左右に曲っている。残存部の長さ約191cm、径約6cm。先端部を約30cm半割し、樹芯を取り去っているため凹状を呈する。尖った先端部に切り傷痕がみられる。

(第29図)

1～5は丸木材であるが両端部が切断され、桁などに利用されたと考えられる。1は長さ約105cm、径約3.7cm。両端部は先鋭化せず、魚叩き棒の柄部に見られる鈍角的な削り出しである。2は長さ約126cm、径約4.4cm。細い上部は複数の切断痕、下部は単面的に鋭く切断される。3は長さ約102cm、径約3cm。両端の切断は向きを換え、反転させて単面的に切断される。4は長さ約135cm、径約2～3cm。両端は反転させて単面的に切断し、枝払いされる。5は長さ約162cm、径約2～3cm。両端は反転させて単面的に切断される。

6は丸杭状製品。長さ約68cm、径約4cm。樹皮は剥がされ、先端は多面的に鋭く尖らされる。

(第30図)

1は魚付鉤鉋棒と思われる。残存部の長さは約84cm、径約2cm。断面は円形を呈するが、先端部を約18cm細長く削り出し、さらに凹状の抉入部を設ける。

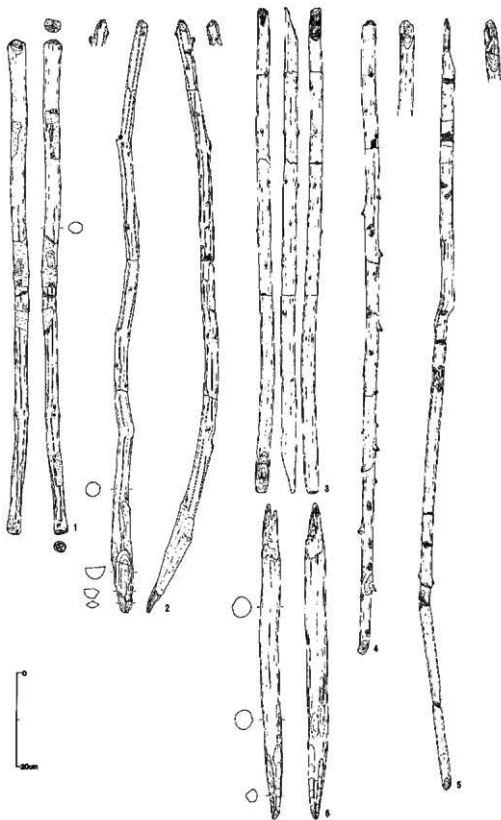
2・3は枝払いされた痕跡が明瞭に残されているもので、2は残存部の長さ約77cm、径約3cm。3は残存部の長さ約84cm、径約3cm。4は両先端部が切断された丸木材。長さ約52cm、径約2cm。樹皮付きである。5は残存部の長さ約35cm、径約3cm。先端部は少なくとも3回にわたって削り出される。

(第31図)

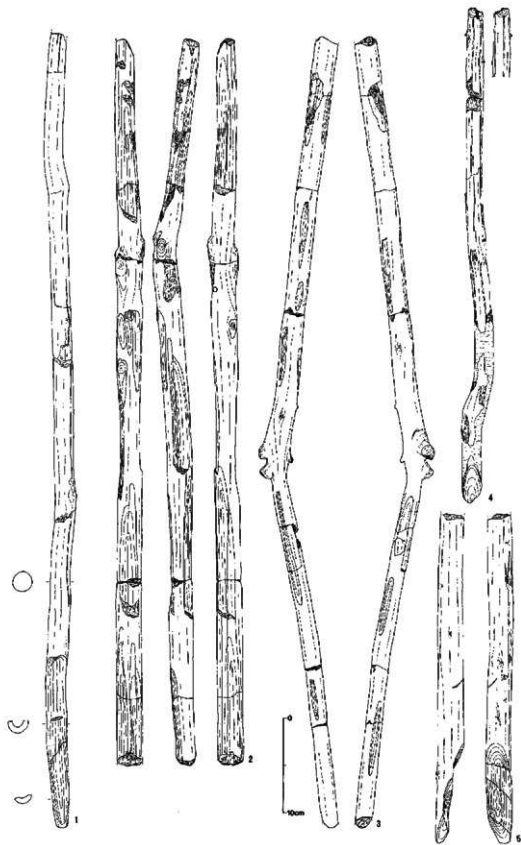
1～5は断面三角形の大きな割材。梁材、垂木材と思われる。1は長さ約55cm、幅約2～2.5cm。2は長さ約68cm、幅約3cm。3は長さ約59cm、幅約3cm。4は長さ約55cm、幅約2.5cm。5は長さ約26cm、幅約3cmで一部が炭化する。6は長さ約26cm、幅約5.6cm。左側縁から裏面にかけて広く炭化する。柱材であろう。

(第32図)

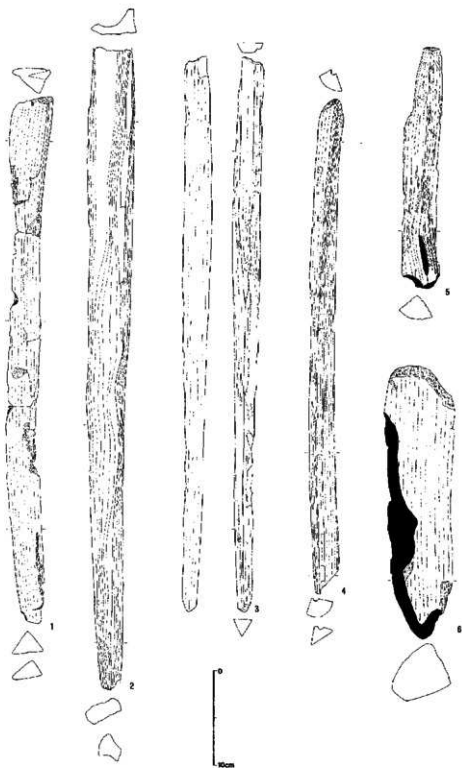
1は刀状加工材。長さ約114cm、幅約2.8cm。枝払いを行い、基部近くから上部にかけて半割し、先端を刀状に尖らせている。



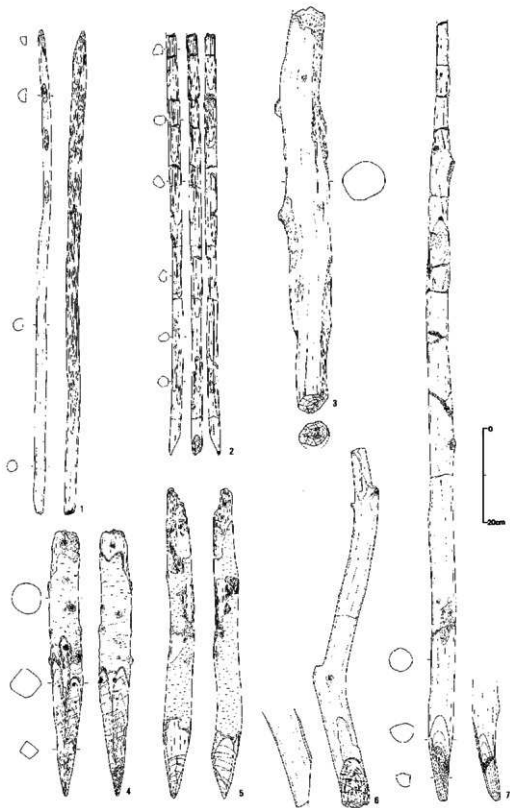
第29图 第10层出土木制品(18)



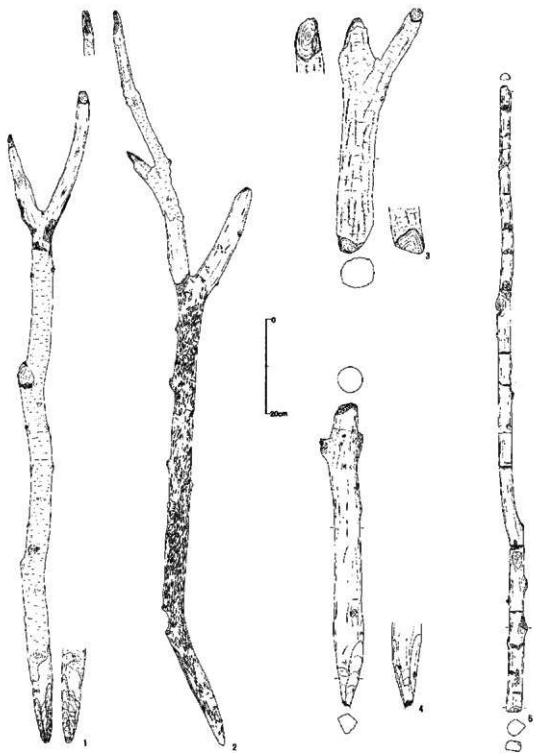
第30圖 第10層出土木製品(19)



第31圖 第10層出土木製品(20)



第32圖 第10層出土木製品(21)



第33圖 第10層、12a層出土木製品

2は丸杭状製品。残存部の長さ約90cm、径約2.5cm。枝払いを含め細長く滑り取って、全面を調整している。

3は丸木材。残存部の長さ約85cm、径約9cm。鈍角的な先端部をもつ。

4～6は丸杭状製品。4は長さ約56cm、径約7cm。5は長さ約66cm、径約6cm。2点とも樹皮付きで多面的な鋭い先端部をもつ。6は長さ約76cm、径約6cm。先端部は単面的で、樹皮が一部残る。

7は柱材。上部が細く、先端部が太くなる。長さ約165cm、径約5cm。

(第33図-1・2)

1・2は「Y」字状の受部をもつ。1は長さ138cm、径約5cmで先端部は多面的に削り出される。2は受部の片方が極端に長く枝払いもされていない。長さは約155cm、径約5cm。先端部は細長く尖るものの曲がっている。

3. 第12層出土の木製品

本層は第10層の下部にある層厚約10～40cmの黒灰色砂層であり、小沼の南岸から約9m、東岸から約1.3mにかけて堆積する。南岸と東岸の肩部から限られた範囲に堆積するもので、木製品は主体の第12a層に関連すると思われる。

(第34図、図版12)

1は尖頭棒(図版12-1)。残存部の長さは約42cm。径は欠失部で約1.2cmの円形を呈するものの、先端部は扁平となる。部分的に炭化面が残る。

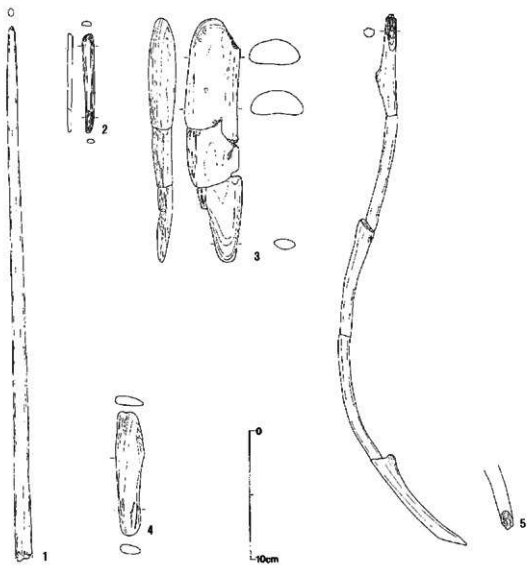
2～4は筥状製品。2・4は柄部から先端部にかけて細くなる形状である。2は長さ約7.8cm、柄部の幅約1cm。腹面は擦られたため平坦である。3は長さ約19cm、柄部の幅約4cm。背面は丸みを帯び、腹面の柄部から先端近くにかけて削り出され、凹状を呈する(図版12-2)。4は長さ約9.5cm、最大幅約2.2cm。腹面は平坦であるが振じれている。左上端部に削り出しの痕跡、下部には2列の縦線がみられる(図版12-3)。筥とは異なる製品かもしれない。

5は軸状製品。屈曲した小枝状の両先端部を反転させて、単面的に切断する。長さは約42cm、径約1cm前後である。

(第38図-1・2)

1は断面三角形の角材。先端部は表裏面から削り取られ、細く仕上げている。長さ約38cm、幅約4cm。

2は丸杭状製品。長さ約20cm、径約3cmで先端部は3面に削り出される。



第34圖 第12層出土木製品

4. 第12a層出土の木製品

本層の大部分は第10層直下に堆積する層厚約15~40cmの粒子が細かく粘性を持つ黒灰色土層である。第12層はAA46~BB46グリッドにおいて確認されるが堆積範囲が限られている。第10層と本層には木皮状遺存体を多く含む黒灰色土が一部で間層としてみられるものの基本的に本層が広い範囲において第10層と重なっている。

本層からは先端部を尖らした丸木材は64本、股木材は11本みられる。

(第35図、図版13・図版14-1~3)

1はY34グリッド出土。上部が「Y」字状を呈した燈火用挟み木(図版13-1)。長さ約21cm、幅約5mmの細い板材の上部を割裂いている。

2はAA38グリッド出土の木鏝(図版13-2・5)。長さ約12.5cm、幅約3cm。上下とも丸みをもち、頭部は削り出しにより作出するが、全周しない。裏面は平坦化し、中央部の微妙なへこみをみると掘粉木などに再利用されたことも考えられる。

3・4は用途不明の製品。3は長さ約13cm。上部断面は径約2.5cmの円形であり、下部に移行するにしたがい細くなる。頭頂部に大きな凹部をもち、ほぼ中央部に約2.7cmの切込みが加えられる(図版13-3)。4は長さ約9.5cm、幅約1cm前後の板材を素材としたもので、中央部と上部の両側縁が弧状に削り出される。裏面は上部から4cmほど縦方向に深い溝を穿ち、下端部は薄く削り出される(図版13-4)。

5・6は木鏝もしくは浮きと思われる。5は長さ約9cm、径約3.5cmで上下端部と断面は丸みを呈する。6は長さ約17cm、断面は楕円状を呈し、幅約5.3cm。上部の左右側縁は緊縛用の挟りをもち、裏面のはば中央部に幅約2~5mmの溝が縦位に設けられ、右側縁部には径約2mmの小孔が斜めに貫通する(図版14-1)。

7~9は加工材。7は長さ約9.3cm、幅約3cm(図版14-2)。8は長さ約18cm、幅約5~6cm。先端部は僅かに薄く削り出されており、筧の可能性もある。9は長さ約19cm。断面は胴部で幅約6.5cmの円形であり、両先端部は丸みをもち横方向に削り出される(図版14-3)。

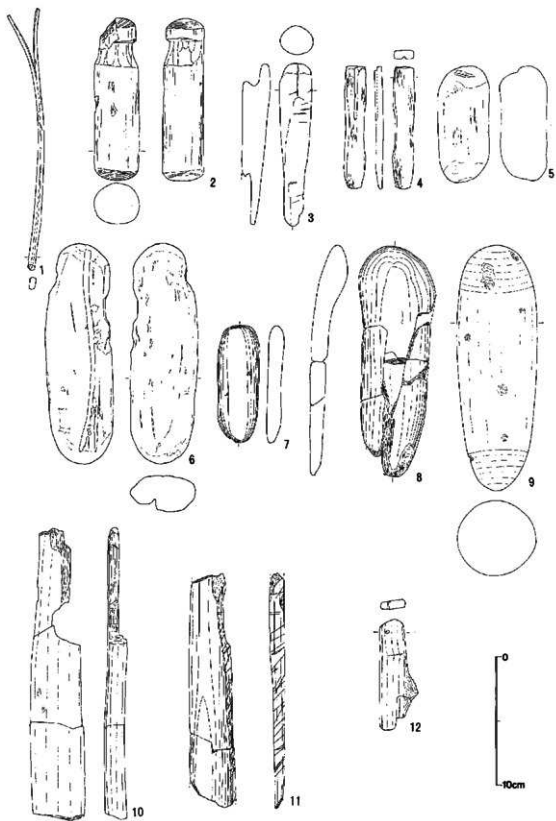
10は挟付板材。残存部の長さ約22.5cm、幅約3~4cmで右側縁部に約3.5cmの挟入部をもつ。

11は板材。残存部の長さ約18cm、幅約3~4cmで側縁部に複数の切り傷痕が斜めにみられる。

12は有孔板状製品。長さ約8.5cm、幅約2cmの板材に径約3mmの小孔が貫通する。

(第36図、図版14-4・図版15-1・2)

1~3は魚叩き棒。1はBB44グリッド出土。長さ約47cm。反り返った頭部は径4cmと大きいもののグリップエンドを作出した握部は極端に細い(図版15-1)。2はY35グリッド出土。



第35圖 第12a層出土木製品(1)

3点が接合したもので長さ約47cm、径約3.8cm。握部は屈曲し、7面ほど丁寧に削り出す。頭部から4cm下部に横位の使用痕が顕著にみられる(図版15-2)。

3はZ38グリッド出土。握部が僅かに欠失するものの、残存部の長さは約38.5cm。握部を10面ほど削り取って細く作出している。ほぼ全面が炭化し、頭頂部には鋭い切り傷が残る。

(第37図-1~9、図版15-3~8)

1はZ37グリッド出土の棒酒箸(図版15-3)。長さ約26cm、幅2cm前後で丁寧に仕上げられている。

2・3は筥。2は茶匙の形態をもち、腹部は凹状を呈する。長さ約13cm、柄部の幅は約2cm(図版15-4)。3は長さ約13cm、径約1cmの細長いもので、先端から4cmまでは凹状を呈し、柄部の付近で大きく反り返る(図版15-5)。

4~6は串もしくは箸。4は残存部の長さ約18cm、幅約8mmであり、両面ともほぼ平坦な面をもつ。5は残存部の長さ約22cm、幅約7mm。先端部は片面のみ削り出される。6は長さ約27.8cm、径約7mmで側面は極めて緩い弧状を呈する。表面を丁寧に削り出し、両端部を2方向から薄く削り取る(図版15-6)。

7はかんじきの横棒(図版15-7)。長さは約22.3cmで断面は楕円状を呈する。体部中央から両端にかけて幅狭く、薄く仕上げ、先端部は尖る。

8は軸状製品。中央部から下方にかけて折れており、残存部の長さは約28cm。上端部は多面的に削り出され、先端は丸い。

9は長さ約24cm。曲がった素材を利用し、調整も粗雑である。上部は凹状に薄く削り出しており筥として利用され、下部は先鋭化しており、刺突具として利用されたと思われる(図版15-8)。

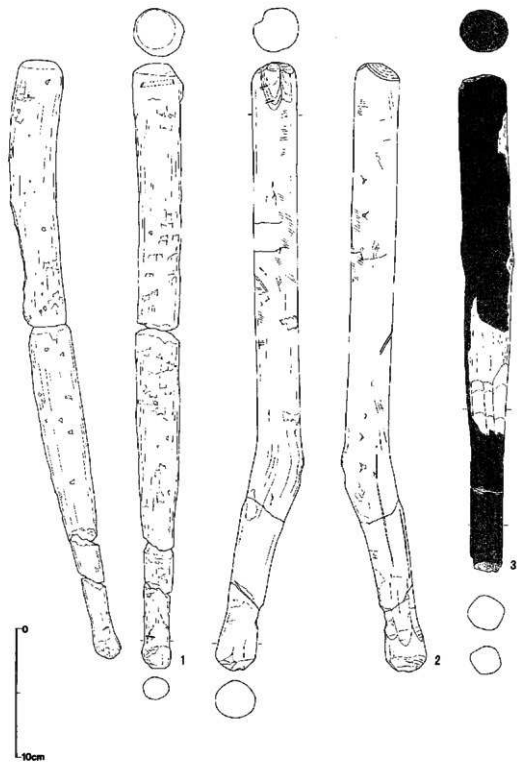
(第38図-3~6)

3・4・6は木鋸。穀木材を利用するが根元で切断され短い。先端部は左右向きを変えて切断される。3は樹皮が剥がされ、4は樹皮付きである。6は穀木材の片方を切り落としている。

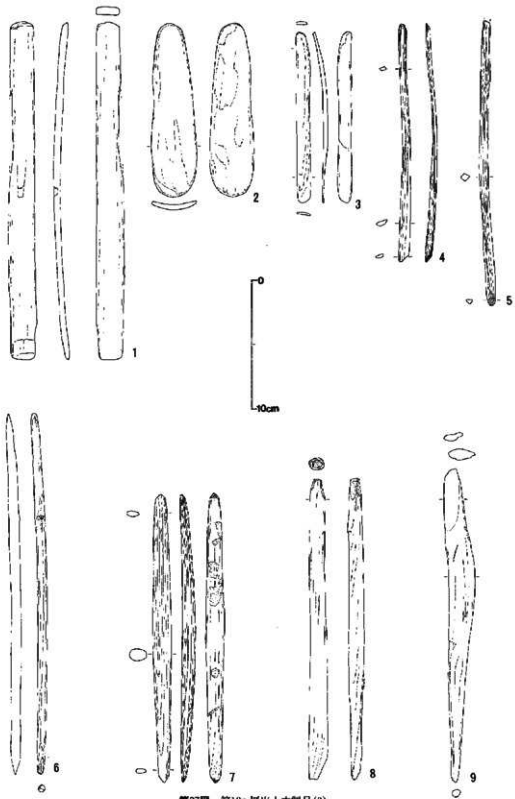
5は伊鉤。軸の長さは約60cm、径約3cm。

(第39図)

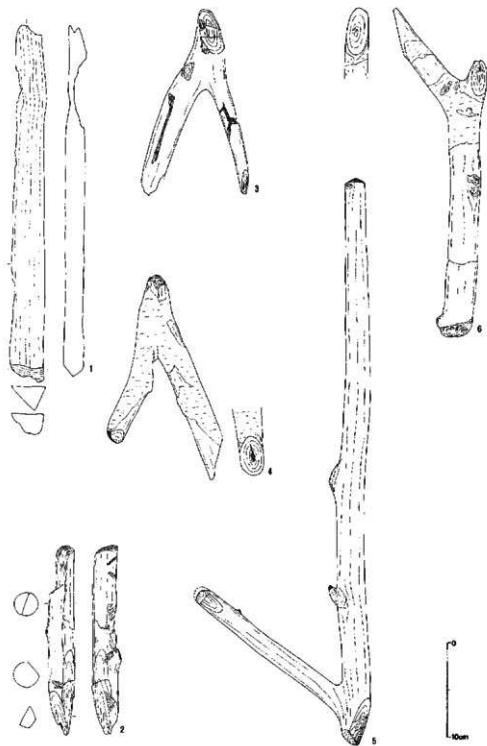
1・2は柱材。1は残存部の長さ約142cm、径約9cm。2は長さ約183cm、径約8cm。2点とも先端部は単面的に削り出される。



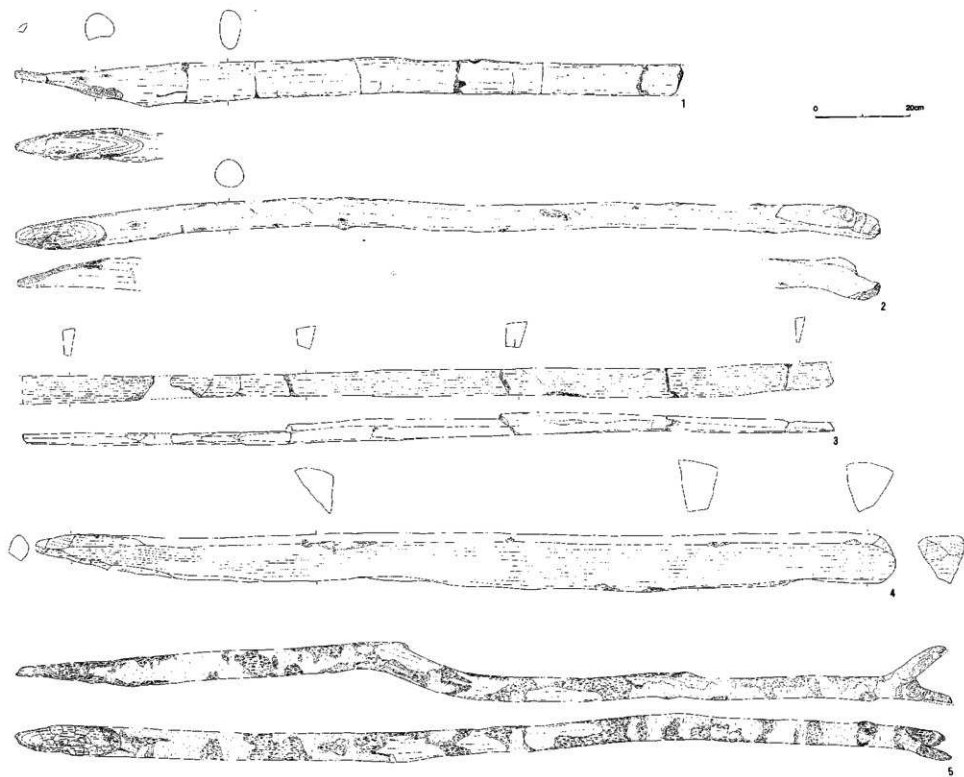
第36圖 第12a層出土木製品(2)



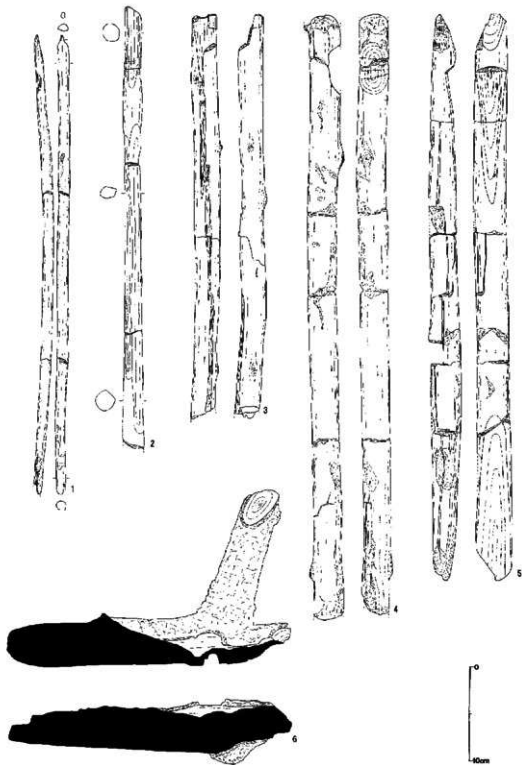
第37圖 第12a層出土木製品(3)



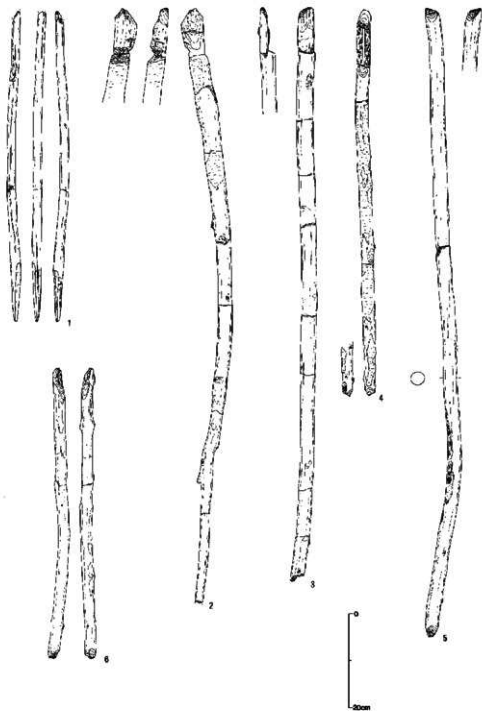
第38圖 第10層、12a層出土木製品



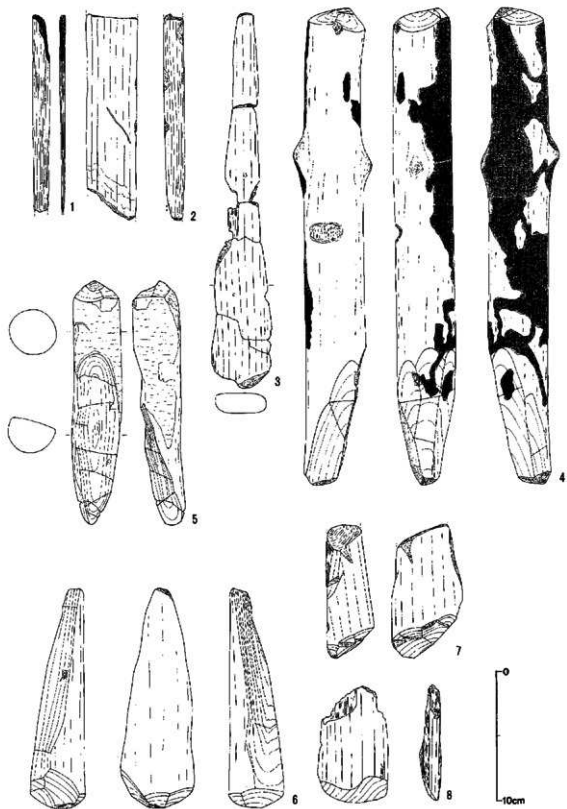
第39圖 第12a層出土木製品(4)



第40図 第12a層出土木製品(5)



第41圖 第12a層出土木製品(6)



第42圖 第12a層出土木製品(7)

3は梁材。角材を半分に割り取ったもので、上面は平坦化する。中央部に比較して左右は薄くなる。残存部の長さ約172cm、幅約5.4cm。

4は角柱材。長さ約183cm、幅約12cmの大型である。先端部は複数回の削り出しによって尖らせている。

(第40図)

1はホゾ付き軸状製品。先端部付近は薄く削り出され、ホゾが作出される。残存部の長さ約49cm、径約1cm。

2は加工材。削り出しは丁寧であるが、部分的に削り残しがあるので未製品と思われる。残存部の長さ約47cm、径約2cm。

3はホゾ付き丸木材。先端部を割り裂いてホゾを作出する。残存部の長さ約43cm、径約2.5cm。

4・5は挟入丸木材。4は残存部の長さ約64cm、径約3cm。5は挟りが細長く取られ、上部と下部が浅く削り出される。残存部の長さ約60cm、径約4cm。

6は「L」字状の股木材。長さ約30cmの下部の全面が炭化する。

(第41図)

1は丸枕状製品。先端部が鋭く多面的に削り出されており刺突具としての機能も有すると思われる。残存部の長さ約66cm、径約2cm。

2は挟入部付き丸木材。上部の太い先端部を複数回粗く削り取って仕上げている。残存部の長さ約127cm、上部径約4cm。

3はホゾ先付き丸木材。先端部を約5cm半割して、ホゾ先とする。残存部の長さ約122cm、径約4cm。4は長さ約82cm、径約3cm。

5は両先端部を2方向から削り出した桁材もしくは垂木材と思われるもので、長さ約134cm、径約3cm。

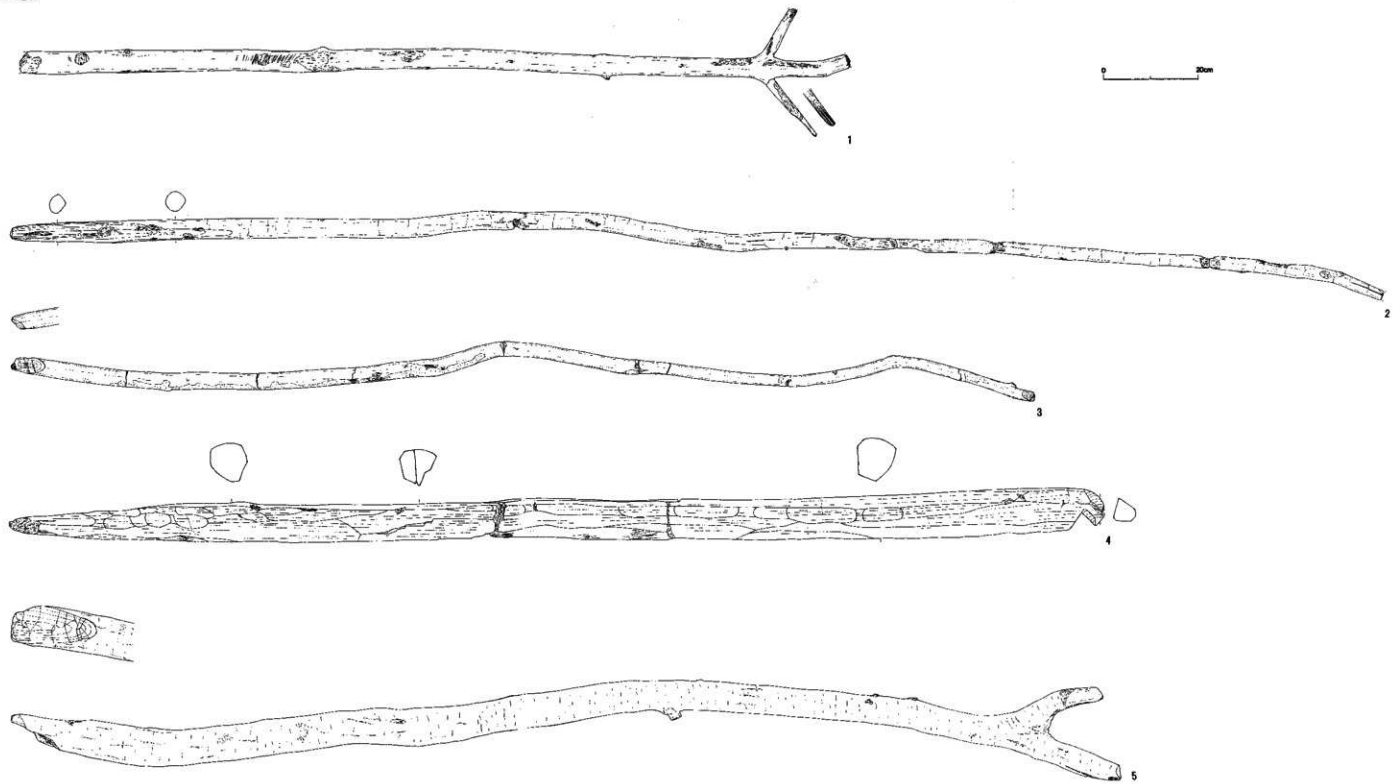
6は両端部が加工された軸状製品。長さ約62cm、径約3cm。

(第42図)

1～3は板材。1は下部が欠損する。残存部の長さ約15.3cm、幅約1.2cm、厚さ3mmの薄い板材である。切り出し状を呈した上端部から側縁部にかけて炭化する。2は残存部の長さ約16cm、幅約4cm、厚さ約1.8cm。3は上部が狭く、下部は広い筈状の形態である。長さ約29cm、最大幅4cm、厚さ約1.5cm。

4は丸枕状製品。長さ約37cm、径約4.5cm。先端部を多面的に削り出し、広い範囲に炭化面がみられる。

5～8は木端。5は樹皮をもつ丸木杭の先端近くを切断。6・7は角材、8は楔状を呈した



第43圖 第12a層、13層、13a層出土木製品

板材の木端。

(第33図-3~5)

3は「Y」字状の受部をもつが長さは約54cmと短く、幅は広く約7.6cm。先端は2方向から切断される。

4・5は丸杭状製品。5は長さ約65cm、径約5cm。先端は多面的に鋭く削り出される。6は枝払いされ、下端部は垂直に切断される。長さ約133cm、径約3cm。

(第43図-1~3)

1は頭部が三股となる。残存部の長さ約175cm、径約5cm。

2は丸杭状製品。2は長さ約291cm、径約4cm。先端部は片面削り出す。

3は桁材と思われる。長さ約216cm、径約4cm。先端部は単面となる。

5. 第13層出土の木製品

(第43図-4)

4は柱材。長さ約234cm、径約10cm。表面を削り出して角状に仕上げている。特に先端部において痕跡が顕著に残り、頭部に深い抉入部をもつ。

6. 第13a層出土の木製品

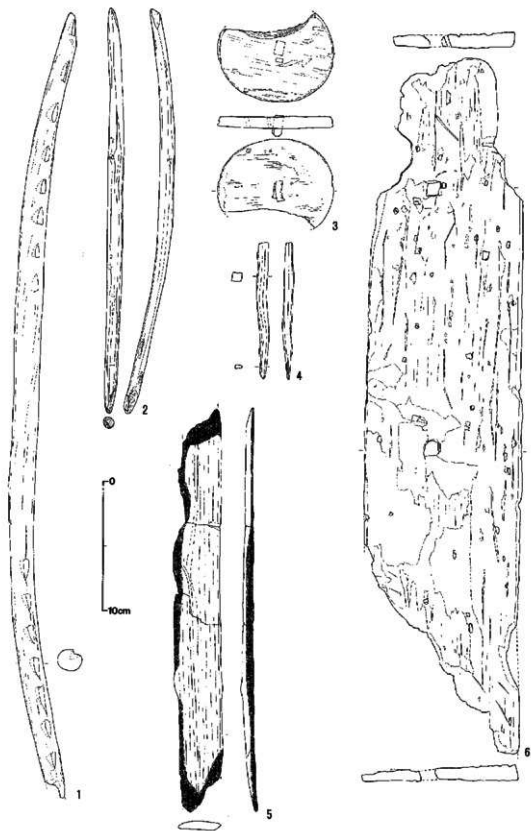
主に川岸の「モイ」状部からX34・Y34・Z34グリッドの狭まりに堆積する第13a層・第13b層・第13c層は第44図・第45図のセクションラインに示すとおり層厚も薄く他の層と同様に起伏のある層序をもっている。安定した第10層・第12a層とは異なっている。これは氾濫、増水等の影響を受け堆積したものと考えられ、木製品は流れ込みの様相が強い。

しかし、時期的には第10層、第12a層同様にみられた樽前a火山灰の堆積を欠き、古手の時期の可能性がある。

(第47図、図版16・図版17・図版18-1)

1はZ26グリッド出土の雪上歩行具である「かんじき」の左面である(図版16-1・2)。先端部は僅かに欠失するものの長さは約62cm、断面は円形で径約2~2.5cmの円形。形態は短輪型橢圓形を呈し、前後にそれぞれ7~8本の滑り止めである横軸用の孔をもつ。

2はかんじきの横軸と思われる(図版16-3)。長さ約31cm、径約1.2cm。両先端部は2方向から作出され扁平となる。



第47圖 第13a層出土木製品(1)

3はY29グリッド出土の幅約9cm、厚さ1cmの蓋(図版17-1)。外周部に1mmほどの曲物が密着して出土した。蓋の形状から楕円形の曲げ物と思われる。中央部に桜樹皮を縫い込んだつまみをもち、断面に示すとおり蓋上部が1~2mmほど張り出し、容器の受け口となっている。曲げ物は幅約8mmが2枚、幅約2cmが2枚ある。それぞれの上には上下の曲げ物を固定する幅約6~7mm前後の細長い孔がほぼ4cm間隔に穿たれ、留め部が剣状に作出される。

4は木釘(図版16-4)。長さ約10.6cm、断面は長方形で、頭頂部は平坦となる。

5は残存部の長さ約31cm、幅約3.5cmの篋。側縁部と上下の破損面は炭化しており、二次転用されたと思われる。

6はA A31グリッド出土の板綴舟舷側板(図版17-2・18-1)。残存部の長さは約53.8cm、幅約12cm。実測図の下部の厚さ約5mm、上部約1.2cmと厚味をまし、下部は内削ぎ状となる。上部には4箇所の刻みが内側に向かって斜めに施されたもので、舷側板の上棚に位置すると思われる。ほぼ中央部には外側から穿孔された1cmほどの角孔が19cmほどの間隔でみられる。上部と下部の同位置に大きな凹部が作出されている。

(第48図、図版18-2~4)

1はY31グリッド出土。長さ約82cm、径約2cmの短弓と思われる(図版18-4)。表面は丁寧に調整され、両端の弓筈部は細長く多面的に削り出される。

2は径約2~2.7cmの丸木材を半割したもので、弓のように弧状化した形態をもつ。芯部を直線的に掘り抜いているため内側は凹状となる。

3も弧状化した形態をもつ(図版18-2)。両端部が細く作出されるが、下部は強く曲げられている。

4は内部を凹状に削り出した小匙(図版18-3)。上部が欠失しており残存部の長さは約21cm、径約1cm。

(第12図-4、図版19)

4は有孔木製品(図版19)。長さ約105cm、径約4cmの丸木材を素材とする。樹皮は剥がされているが、部分的に残る箇所もある。加工は両先端部の上下を薄く削り出し面に径約2cmの方形孔をもつもので、実測図右側は挿入部を加えてから作出する。全体的に炭化する。

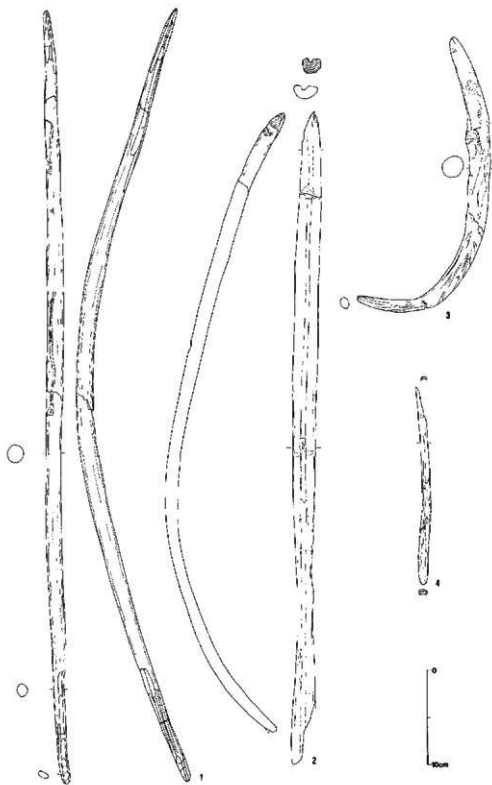
(第49図-1・2)

1は多面的に削り出し、先端部を鋭く作出した長さ約52.8cmの割杭。

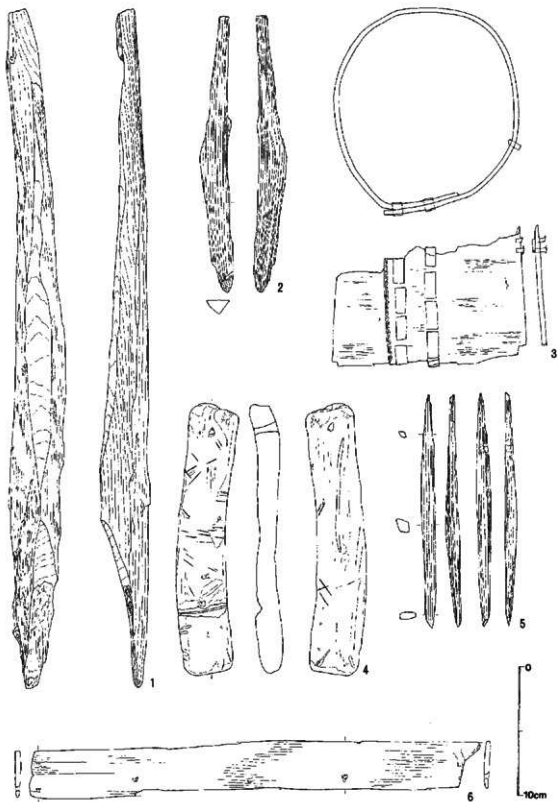
2は長さ約21.5cm、断面が三角形の割材。

(第43図-5)

1 Y字状の受部をもつ樹皮付き柱材。長さ約234cm、径約7cm。先端は2方向から削り出される。



第48図 第13a層出土木製品(2)



第49圖 第13a層、13b層出土木製品

7. 第13b層出土の木製品

(第49図-3~6、図版20-1~3)

3はX24グリッド出土の曲物容器(図版20-1・口絵6-1)。上・下部はかろうじて残存する。径は15cm前後、高さ約11cm、厚さ約3mmの小型曲げ容器である。結びはサクラ樹皮を用い、交互に縫込む様に2列で留めている。

4はZ26グリッド出土。長さ約21cm、幅約3.8cmの板材を素材としたものであるが、側縁部は角取りされるため断面は楕円形である(図版20-2)。下部に本体と直行する「V」字状の深い溝をもち、上部は斜めに貫通した小孔を施す。裏面には小孔から中央にかけてやや浅い溝が縦位にみられる。また、表面では縦位、裏面のはほぼ全面には一部炭化した樹皮が残存する。小孔と表裏面の溝は紐等を固定するものであろう。

5は長さ約18cm、中央断面は径約9mmの角状を呈する。欠失した両端部はしだいに平坦になる。串など食用具やカンジヤ軸の可能性もあるが、角形の断面は部位によって形が異なり、厚さも一律でないため用途不明の軸状製品とする。

6は箱物容器の側板と思われるもので残存部の長さは約35cmと大型である(図版20-3)。幅約3.5cm、厚さ約2~3mmであり、側縁部に釘孔がほぼ等間隔に配列する。

(第50図、図版20-4~6)

1~3は比較的隣接して出土した魚叩き棒。1はA A31グリッド出土。長さ約40cm。体部は太く径5cmあり、握部を明瞭に作出する(図版20-4)。2はA A30グリッド出土。長さ約40.2cm。径約約3.6cm(図版20-5)。握部は面取って細く仕上げたもので、体部に無数の敲打痕と刀傷痕がある。3はA A28グリッド出土。長さ約46.5cm。径約3.1cm(図版20-6)。1・2ほど明瞭に有段化した握部を作出しないが体部に比してやや細身となり、グリップエンドが明瞭に作出される。

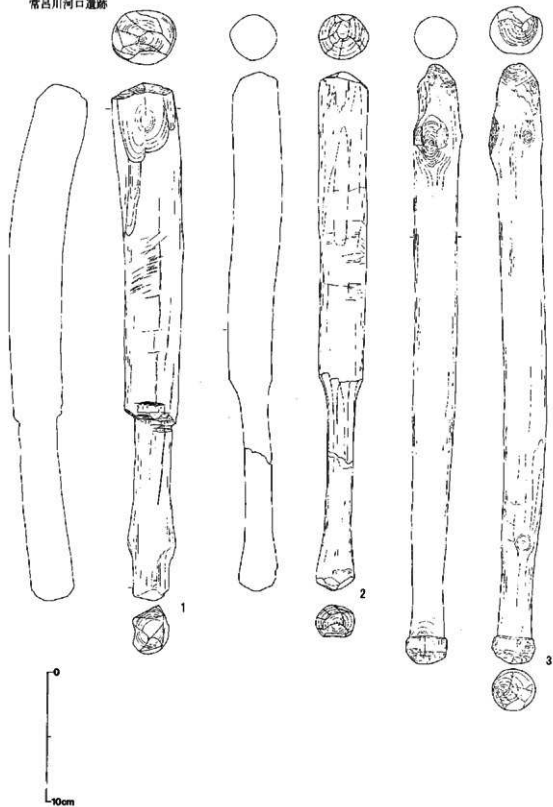
(第51図、図版21-1・2)

1はX24グリッド出土。刀子の柄部(図版21-1)。第49図-3の曲げ容器のやや北側から出土した。サクラもしくはカバ樹皮を素材としたもので、方角状の刻線を連続させて鱗形に仕上げている。

2は挟入部材。長さ約28cm、幅約3cm前後の角材の上部を幅広く持ち取る(図版21-2)。

3~5は軸状製品。3は長さ約25cm、幅約3cmの長方形の断面をもち、下部は斜めに切断する。4は残存部の長さ約31cm、断面は三角形を呈し、先端は尖る。5は長さ約50cmの細長いもので、3と同様の長方形の断面を呈し、下部を斜めに切断する。先端部の断面は三角形となる。

常呂川河口遺跡



第50圖 第13b層出土木製品(1)

6は先端部を篋状に薄く削り出した加工材。長さ約17cm、幅約3cm。

7は長さ約28cm、幅約4cmの割材。

(第52図)

1は丸杭状製品。底面の長さは約56cm、径約5.2cm。断面は円形であり、左右に大きく開いた先端部は三角形に削り出される。

2は長さ約68cm、幅約4cmの割杭状製品。3は長さ約48cm、幅約3cmの半割杭状製品。4は長さ約35cm、断面長方形の幅約1cm前後の割材もしくは軸状製品。5は長さ約27cm、幅約4cmの割材。6・7は丸杭状製品。6は長さ約36cm、径約4cmの樹皮付きである。先端部は単面的に切断され、上部は鋭く切り込まれている。7は長さ約21cm、径約3cmで一部に樹皮が残る。上部から豊かに下がった箇所が細くなり、先端部は多面的に鋭く削り出される。

8は厥状製品。基部は欠失するが股木材の先端部は向きを変えて切断する。長さ約12cm、径約3cm。

(第53図)

1・2は「Y」字状の股木材であるが、2は基部が短く、股木は細く長いため切断後の残部と思われる。1は長さ約65cm、径約2.6cm。先端は単面的に切断される。

3～5は丸杭状製品。3は長さ約96cm、径約4cm。4は長さ約60cm、径約3.2cm。5は長さ約148cm、径約3cm。

(第54図)

1は角材。長さ約59cm、径約5.6cm。先端部は多面的に削り出され、上部の平ら面に深い切り傷痕がみられる。

2はホゾ付き丸木材。残存部の長さ約85cm、径約4.5cm。

3は丸杭状製品。長さ約70cm、径約6cmで先端部は2方向から削り出される。

4は樹皮付き股木材。長さ約67cm、径約6cmで先端部は多面的に削り出される。

5は柱材・梁材と思われるもので長さ約138cm、径約8cm。

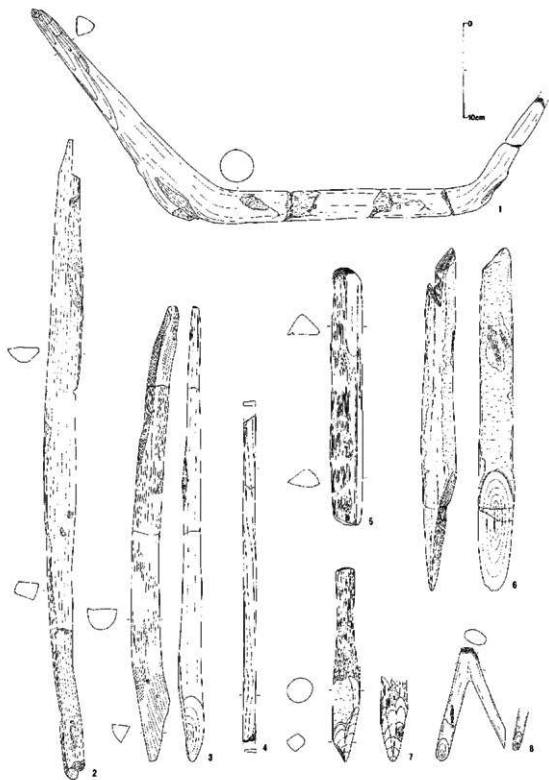
(第55図)

1は長さ約27cm、断面幅約2cm前後の方形を呈する割材。2は板材。3は角材。4は長さ約20cm、径約6cmの半割杭状製品で上部が炭化する。5は長さ約32cm、径約4cmの丸木材。樹皮は丁寧に剥がされ、上下端とも丸みをもつ。断面は全体的に円形であるが、上部付近は薄めに仕上げられている。6は長さ約25cm、径約7cm。樹皮付の丸木材であり、先端は単面的に切断される。7は丸杭状製品の木端。

常呂川河口遺跡



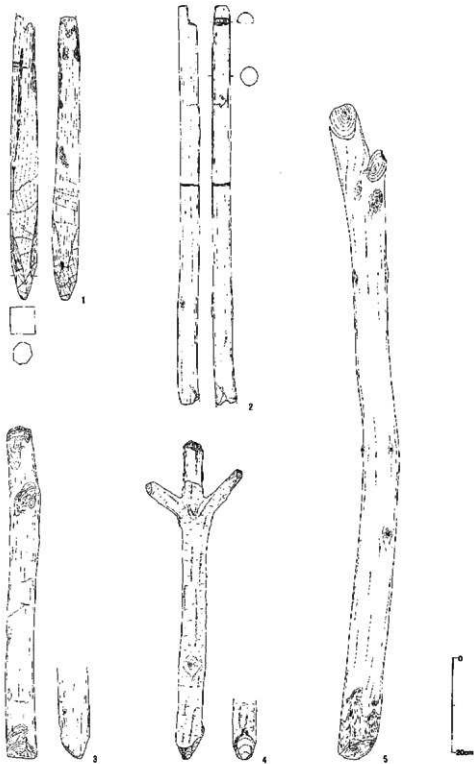
第51圖 第13b層出土木製品(2)



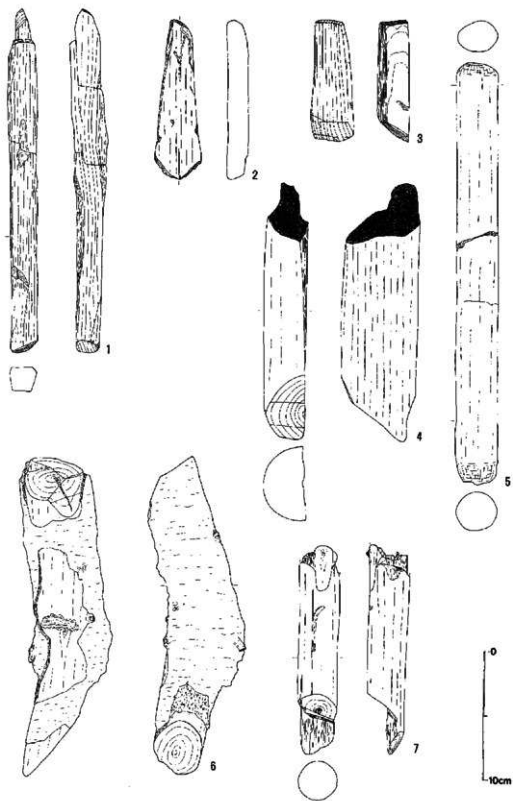
第52図 第13層出土木製品(3)



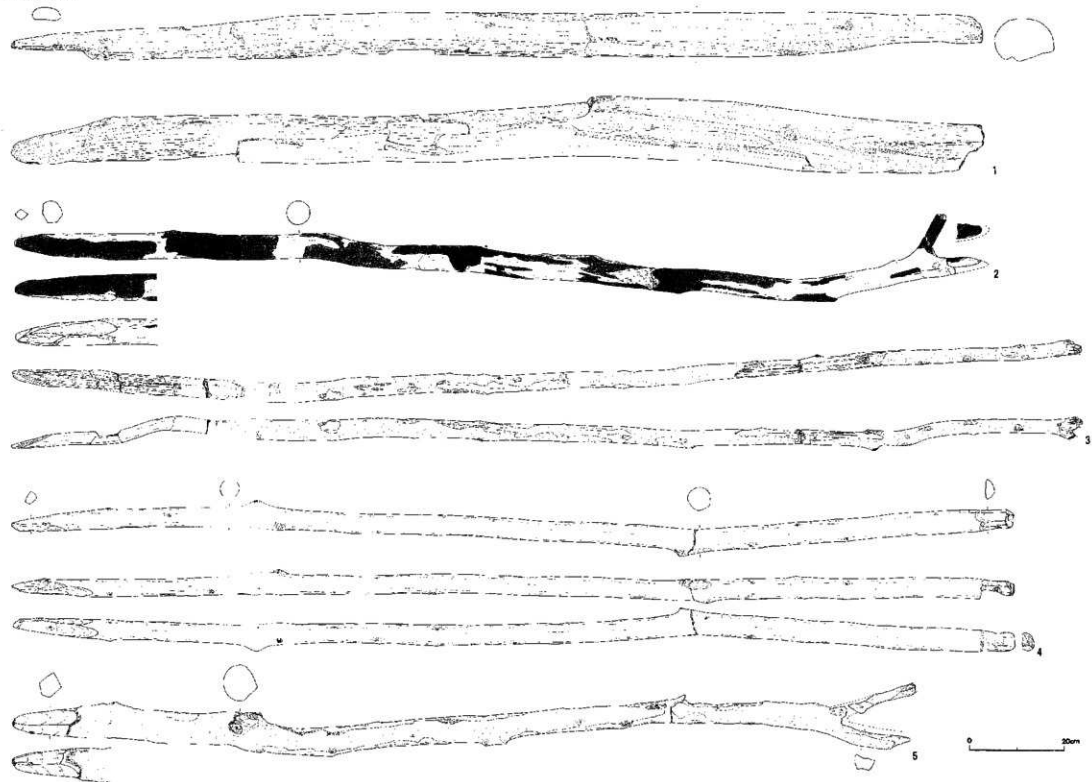
第53圖 第13b層出土木製品(4)



第54図 第13b層出土木製品(5)



第55圖 第13b層出土木製品(6)



第56圖 第13b層、13c層、14b層、14d層出土木製品

(第56図-1・2)

1は長さ約206cm、幅約12.8cmの角材。両先端部は比較的薄くなったもので、梁材、垂木材と思われる。

2は「Y」字状の受部をもつ柱材。長さ約205cm、幅約5.5cmであり表面は著しく炭化する。

8. 第13c層出土の木製品

(第57図-1～3、図版21-3～5)

1はX26グリッド出土。長さ約34cm、径約3.5cmの丸木材の両端に方角状の挿入部をもつ(図版21-3)。挿入部では外側から内部にかけて幅約2～4mmの角状の目釘孔がみられる。

2はZ30グリッド出土。欠失するもののホゾ先を作出した紡織編具(図版21-4)。残存部の長さは約18cm。断面は厚さ約6mmの「D」字状を呈し、両側縁部では約2mm間隔に刻目列がみられる。背面の平坦部には使用痕と思われる横位の細長い2本線、斜位の3本の短刻線が観察される。部分的に炭化する。

3は内部を抜いた中空材(図版21-5)。長さは約26.2cm。上部は細く、太い下部を斜めに切断している。上下端及び内部は炭化するもので、焼入れながら内部を抜いたと考えられる。

(第58図)

1は断面が長方形の柱材もしくは梁材と思われる。残存部の長さ約110cm、径約6.4cm。

2・3は「Y」字状の受部をもつが、太さが異なる。2は残存部の長さ約48cm、径約11cmあり柱材と思われる。大部分は炭化する。3は残存部の長さ約132cm、径は約2cmと細く、柱材以外の用途が考えられる。

4は残存部の長さ約65cm、径は約7cm。柱材と思われるもので、樹皮面は剥がされ、一部は炭化する。先端部はそれほど鋭くないものの多面的に削り出される。

5は両先端部を多面的に鋭く尖らす。長さ約111cm、径約4cmの樹皮付きの丸杭状製品。

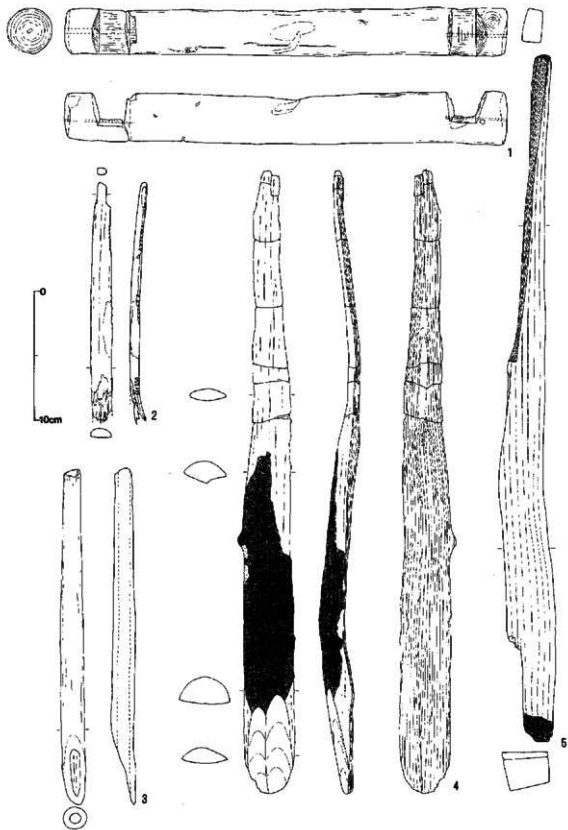
(第56図-3)

桁材もしくは垂木材と思われる。長さ約226cm、径約4cm。先端部はかなり長めに単面的に削りだされる。

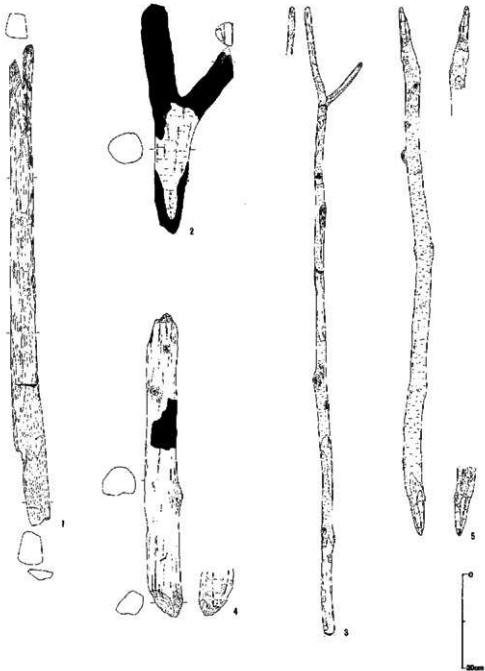
9. 第14b層出土の木製品

(第57図-4・5、図版22)

4はZ26グリッド出土。長さ約48cmの土掘具(図版22)。丸木材の4分の1を切り出したも



第57圖 第13c層、14b層出土木製品



第58図 第13c層出土木製品

ので、背面は調整されておらず、表面の一部に炭化した樹皮部が残されている。細い柄部から先端にかけて幅広くなる形態をもつもので、柄部に棒状のものを固定していたと思われる。先端は「U」字状を呈し、樹皮部を削り取って薄く作出する。

5は長さ約53cm、径約4cmの角材であるが、中央部から上部にかけて削り出され、下端部は炭化する。

(第56図-4)

樹皮を剥ぎ、頭部を薄く削り出し、幅広い袂入部を設ける。長さ約211cm、幅約4.5cmであり先端部は多面的に作出される。

10. 第14d層出土の木製品

(第56図-5)

「Y」字状の受部をもつ長さ約191cm、径約7cmの柱材。樹皮付きであり、先端部は5面削り出しされる。

11. グリッド・層位不明の木製品

(第59図、図版23)

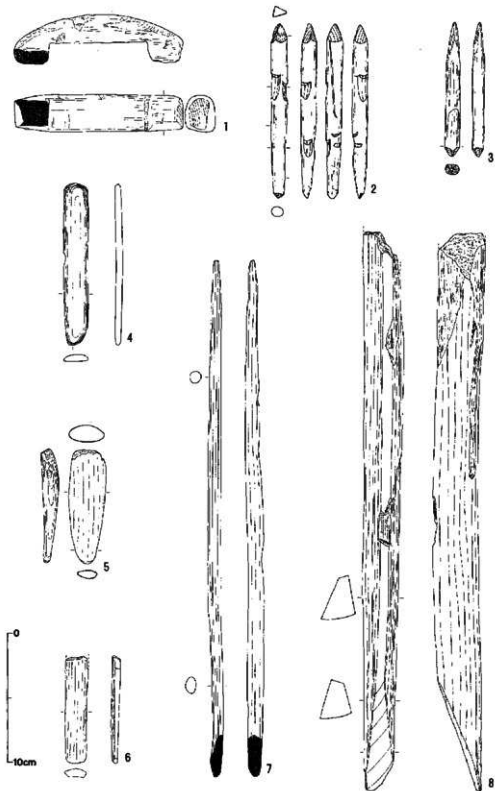
1はY37グリッド出土。曲げ物容器、樽などの把手と思われる。(図版23-1)。長さ約13.3cm、幅約2.5cm。握部は丸みをもたせ、粗く削りだす。一部は炭化する。

2・3は矢。2は長さ約14cm、中央の最大径は約1.3cm。先端は3方向から削り出して尖らせ、胴部に2箇所、2方向から浅いアグ状の抉りを入れる(図版23-2)。3はAA26グリッド出土の矢(図版23-3)。長さ約11cm、中央の最大径は約1.2cm。先端部は鋭く、基部は鈍角的に削り出す。柄の装着部も約3.5cm浅く削り込んでいる。先端部と基部は炭化する。

4～6は筈。4は長さ約12.5cm、幅約1.8cm。表裏面とも丁寧に調整する(図版23-4)。5は長さ約9cm。柄部から先端部にかけて細く窄まる形状をもち、厚い(図版23-5)。6は残存部の長さ約8.3cm、幅約1.5cm。腹部は凹状を呈する。

7は長さ約40cm、最大径は1cm前後である(図版23-6)。両先端とも尖り、下部の先端は炭化する。

8は角杖状製品。残存部の長さ約43cm、先端を斜めに切断する。



第58図 グリッド・層位不明の木製品

12. 低温部出土の土器

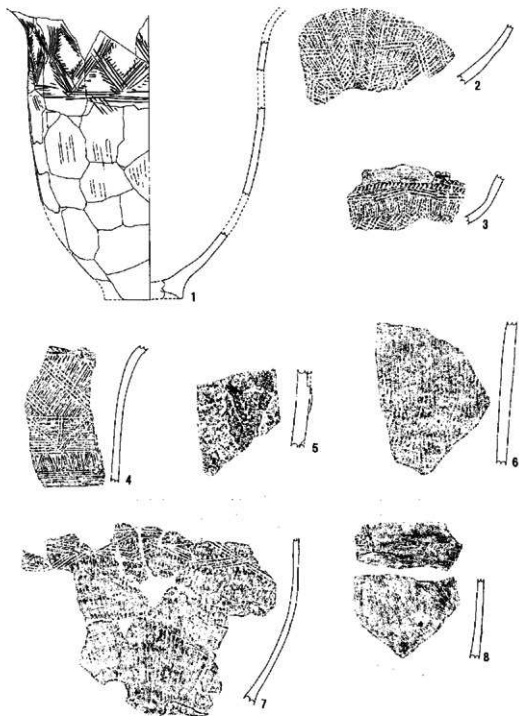
(第60図、図版24-2)

1は木製品が出土した小沼とはやや離れたX46グリッドの黄褐色粘土層から出土した中型鉢形土器(図版24-2)。残存部の器高は22cm。口縁部は欠失するものの底部まで復元することができた。器面は水に浸かっていたため摩滅している。口縁下部は細い蓋文具による菱形文が施される。擦文文化の藤本編年j期、宇田川編年晩期に比定される。2はB B37、3はB B38グリッドの第12a層から出土した擦文期の高杯。4はE28グリッドの第13層から出土した擦文後期の深鉢形土器。5はZ28グリッドの第13層出土の統縄文土器。擬縄降帯が垂下するもので、宇津内系であろう。6はA A24グリッドの第13層から出土した縦走縄文を地文とする統縄文土器。7はY28グリッドの第14b層から出土した擦文土器。宇田川編年晩期に比定される。8はB B33グリッドの第16層から出土した刷毛目調整された擦文土器。

小 括

木製品は基本的に第7層、第10層、第12a層、第13a・13b層から出土するが、木枕を主体とした木製品は大部分が小沼跡内から出土する。特に両側が狭まりをみせるY34・35グリッドから増加の傾向を示し、Z37～Z41グリッドに集中する。狭まりを基準にすると川岸に向かう北側と狭まりが開放された南側では大きな違いがあることは分布図からも明らかである。

狭まりの南側にある木製品の出土傾向は西側に片寄りをみせる。他の区域も同様であるが岸側から内側に倒れこむ状況がある。木枕のなかでも建築部材と思われる大型のものと股木の「Y」状樹木も西側から顕著に出土している。股木材は他の木枕と緊縛した状況は認められないが、西側に向ける共通性がある。



0 5cm

第60圖 低瀬部(沼)出土土器

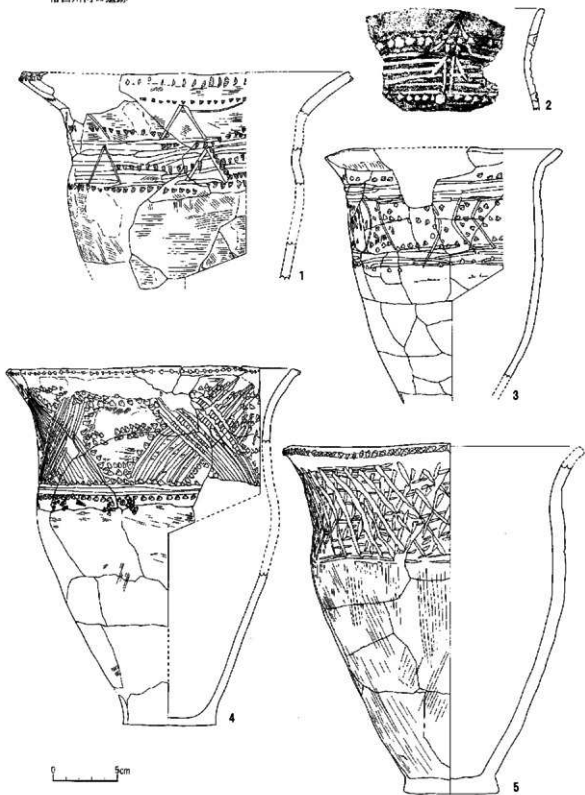
第Ⅵ章 第Ⅰ・Ⅱ層出土遺物

1. 鏝文土器 (第61図・第62図・第63図・第64図・第65図-1、図版25・図版26)

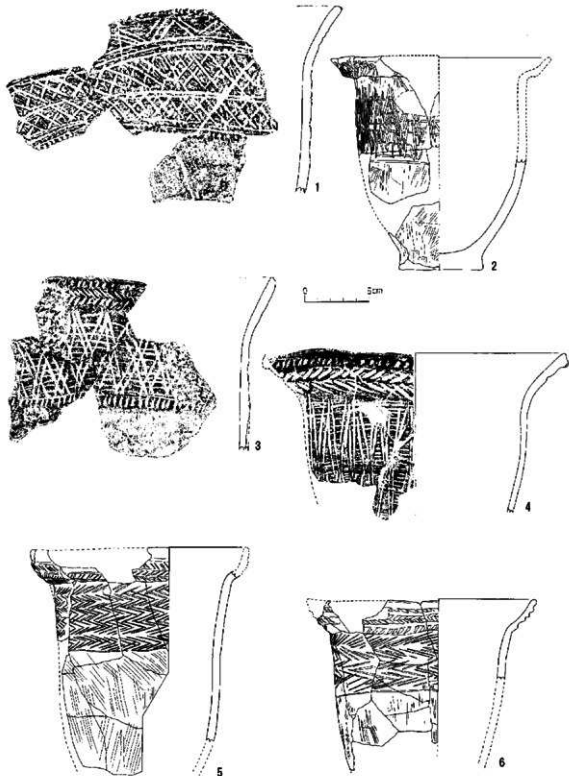
第61図-1 (図版25-1) はD'94グリッド出土。口径約25cmの大型鉢形土器。口縁部は「く」字状に大きく開き、角形の口唇部には刷毛具と思われる施文具によって押捺する。器面は内外面とも刷毛により調整される。頸部に横走沈線文と「A」字状刻線文を上下に施し、頸部は四段の刺突列がほぼ等間隔に加わる。口縁部の内側では煤が著しく付着する。2はM'97グリッド出土。頸部の刺突列間に横走沈線文を施し、針葉樹状文を加える。3はF80グリッド出土。口径約18cmの中型鉢形土器。調整は器面を窺により縦位、内面を横位方向に行われる。3~4条単位の横走沈線文間に「く」字状の刻線文を相対させ、三角形の刺突文を施す。4 (図版25-2) はF80グリッド出土。口径約23cm、器高約28cmの大型鉢形土器。頸部から口縁部にかけて緩く外反し、口唇部に刻目をもつ。胴下部とは横走沈線文で区画し、頸部に「X」字状の刻線文と刺突文が施される。5 (図版25-3) はD75グリッド出土。口径約28cm、器高約27cmの大型鉢形土器。口唇部に刻目をもち、口縁部は4と同様に緩く外反する。頸部は横走沈線文上に方向を変えて斜位沈線文を施し、格子状にする。器壁は肉厚である。煤は器面に顕著にみられ、内面には認められない。1~5は藤本編年b期、宇田川編年前期に比定される。

第62図-1は口縁部と頸部を横走沈線文で区画し鋸歯文、菱形文を施す。藤本編年b期、宇田川編年前期に比定される。2 (図版25-4) はW'99グリッド出土。口径、器高とも約17cmの小型鉢形土器。口縁部は外側に張り出し、緩く立ち上がる。頸部は横走沈線文を多用し、針葉樹状文を施す。3・4は口縁部の立ち上がりは明瞭でないが多用した横走沈線文上に斜位、縦位の刻線文を施す。2~4は藤本編年d・e期、宇田川編年中期に比定される。5 (図版25-5) はI'77グリッド出土。口径約17cm。6 (図版25-6) はN76グリッド出土。口径約18cm。2点とも中型鉢形土器。口縁部は刻みをもち、横位の矢羽根状刻線文が施される。藤本編年f・g期、宇田川編年中期に比定される。

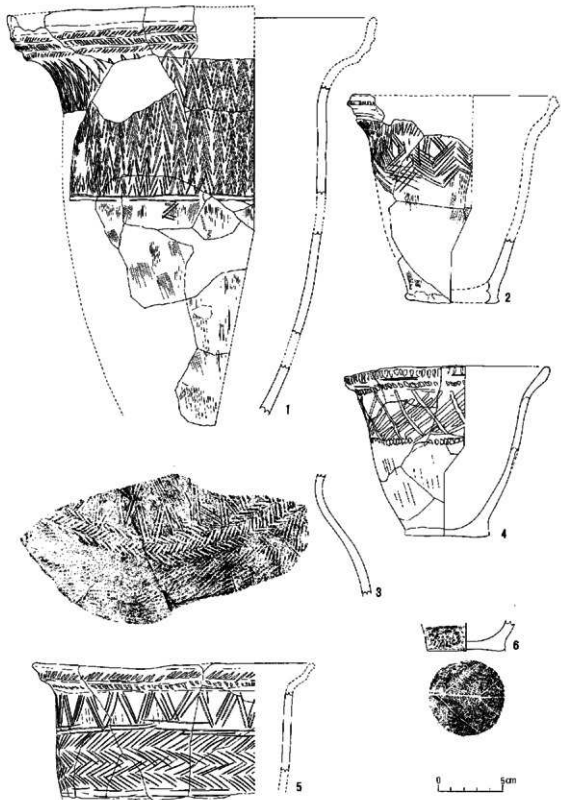
第63図-1 (図版26-1) はB'88グリッド出土。口径約28cmの大型鉢形土器。口縁部は立ち上がり、胴上部の文様は矢羽根文が縦位に施される。施文はJ寧である。藤本編年f・g期、宇田川編年中期に比定される。2 (図版26-2) はN96グリッド出土。口径、器高とも約16cmの小型鉢形土器。縦位、山形状に細い刻線文を施す。3はA69グリッド出土の大型変形土器。口縁下部は2本単位の「V」字状刻線文を上下に施し、胴下部とは矢羽根文で区画する。藤本編年g・h期、宇田川編年後期に比定される。4 (図版26-3) はQ72グリッド出土。口径約16cm、器高13cmの小型鉢形土器。斜位刻線文を方向を変えて施す。藤本編年j・k期、宇田川編年晩期に比定される。5はK'94グリッド出土。口径22cmの中型鉢形土器。口縁下部の鋸歯文と矢羽根文は沈線文で区画し、複段文様となる。藤本編年g・h期、宇田川編年後期に比定さ



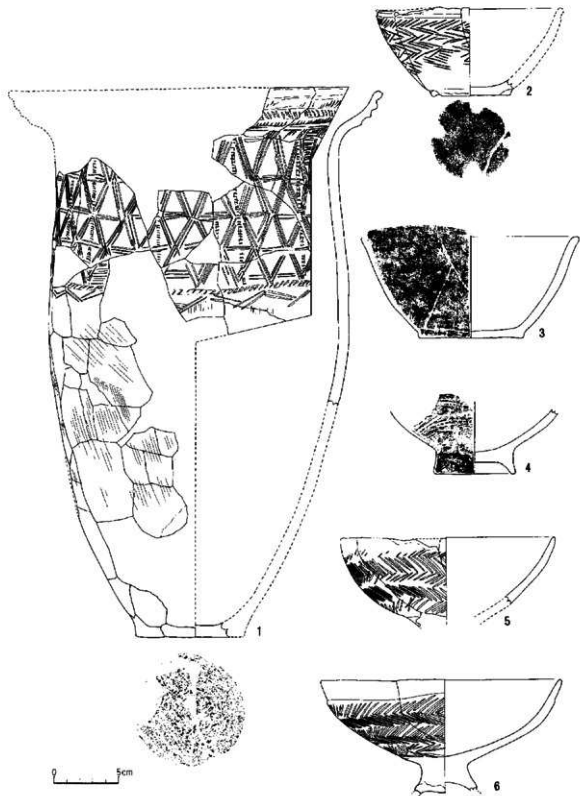
第61圖 第I・II層出土土器(1)



第62圖 第1・II層出土土器(2)



第63圖 第1・Ⅱ層出土土器(3)



第64圖 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(4)

れる。6は底部に木炭痕をもつ擦文土器。

第64図-1(図版26-4)はD76グリッド出土。口径約26cm、器高約43cmの大型鉢形土器。口縁部の立ち上がりは緩い。胴上部は半載施文具により刺突された縦位の区画帯を基準に割付け、菱形の刻線に横位の沈線文を施す。施文はJ字であり、胴下部とは刺突文と山形刻線文で区画される。底部に木炭痕をもつ。藤本編年h期、宇田川編年後期に比定される。2(図版26-5)はU'98グリッド出土。口径約15cm、器高約7cmの杯。口縁直下に1条の横走沈線文をもち、胴部は矢羽根文が施される。底部は4箇所大きく抉り取られる。3はJ91グリッド出土。口径約17cm、器高約8cmの杯。無文である。4は脚の短い杯。器面には間延びした矢羽根状の沈線文が施される。5はS'99グリッド出土。口径約17cmの高杯。矢羽根状の刻線文が施される。脚部は欠失する。6(図版26-6)はL'71グリッド出土。口径約19cm、高さ約10cmの高杯。矢羽根状の刻線文が施される。

第65図-1はA'88グリッド出土。口縁部は欠失するが、口径約32cm、器高約39cmの大型無文鉢形土器。器面は刷毛により調整される。

(図版26-7)はJ'95グリッド出土。口径約19cm、器高約21cmの中型無文鉢形土器。口縁部は立ち上がり、胴部は篋を用い縦方向に調整される。

2. トビニタイ土器(第65図-2・3)

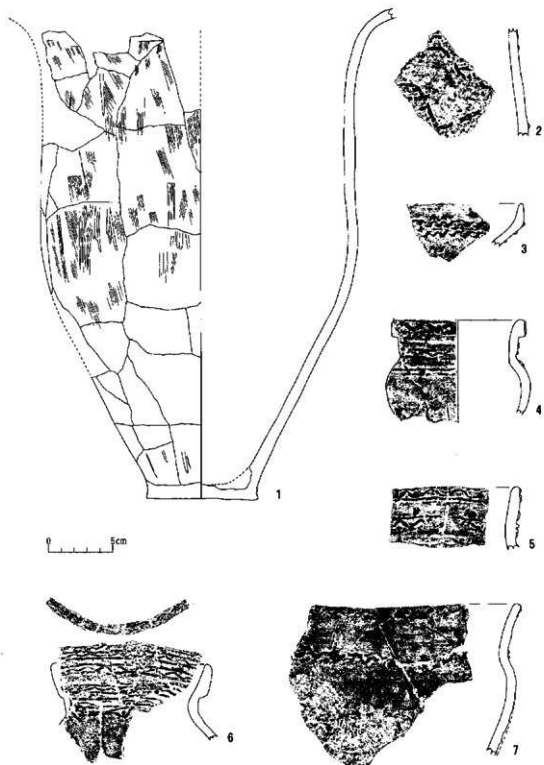
第65図-2は曲線的に施したソーメン状貼付文内に横位の擬縄貼付文を施す。トビニタイ土器群I・IIの中間タイプとされるものである。

3は立ち上がった口縁部に3条のソーメン状貼付文と下部に刻線文を施す。焼成は良く、内外面の調整も丁寧である。トビニタイI群に比定される。

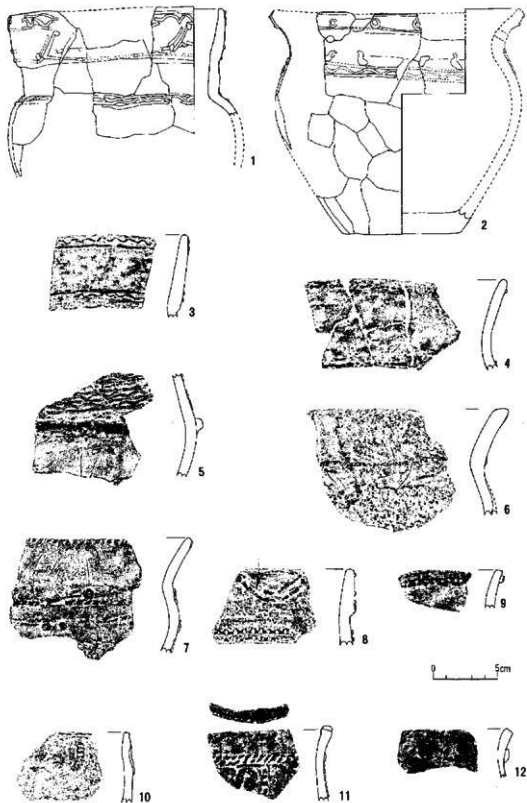
3. オホーツク土器(第65図-4~7・第66図・第67図、図版27-1~3)

第65図-4~7は直線と波状のソーメン状貼付文を組み合わせたものである。6は2個2対の小突起をもち、内外面に煤が付着する。これらはソーメン状貼付文(藤本編年e群)である。

第66図-1~4は直線と波状のソーメン状貼付文を施す(藤本編年e群)である。1(図版27-1)はA'68グリッドの砂礫層出土。口径約17cm。1・3は幅広の肥厚帯をもった中型広口土器。2(図版27-2)はZ'103グリッド出土。口径約19cm、器高約18cmの中型広口土器。強く外反した頸部に水鳥文が向き合って貼付されている。4は口縁部に波状、頸部に直線のソーメン状貼付文を施す。5は直線と波状のソーメン状貼付文を密に施し、胴下部とは断面方形の太い隆帯で区画する。6は頸部に直線的なソーメン状貼付文を施す。胎土は砂粒を多量に含む。7~11は擬縄貼付文を基本的にもつもので、7は口唇部に刻目、頸部に擬縄貼付文と円形文が施される。8は幅広の肥厚帯に曲線的なソーメン状貼付文と頸部に擬縄貼付文を施す。9は横位、10は縦位に擬縄貼付文を施す。11は横位の太い擬縄貼付文と細い擬縄貼付文、12は門



第65圖 第I・II層出土土器(5)



第66圖 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(6)



第67圖 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(7)

形文をもつ。7～11は藤本編年d群に比定される。

第67図-1～3は擬縄貼付文と横走沈線文が施される。3(図版27-3)はB70グリッドの砂礫層出土。口径約12cmの小型土器で口縁部に刺突列、胴部は横走沈線文間に擬縄貼付文が施される。4は横走沈線文と口唇部の外側に刻目をもつ。5～9は沈線文系の土器。7は沈線文の上下に短刻文を施す。8は肥厚帯の下部に「ハ」字状、9は開いた口縁部に縦位・斜位の刻線文を施す。10～12は刻文系の土器。11は横走沈線文の上下に短刻文をもち、上部は「ハ」字状となる。13・14は型押文をもつもので13は4本、14は6本単位の施文具を用いる。15は刺突文。

4. 縄文土器

(1) 北大式(第68図・第69図・第70図・第71図、図版27-4・5)

第68図-1～7は並行微隆起線と突瘤文をもつ北大I式。1(図版27-4)はN89グリッド出土。口径約29cm、器高約29cmの中型鉢形土器。胴下部は縦位方向に器面調整され、底部は張り出す。7は細沈線文を横位、斜位に施す。

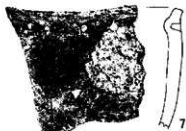
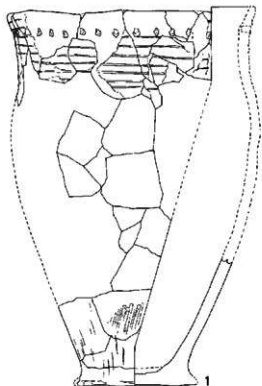
第69図-1～9は沈線文が施され、1・3・4は突瘤文をもつ北大I式。1は篋状の施文具により山形状に重ね挿く。2は口唇部が薄く、櫛歯状施文具を横位・斜位に施す。3～5、7・8は細沈線文を横位・斜位、6は方角状、9は菱形状に施す。

第70図-1～6は特殊縄文を施したものである。1は微隆起線と平行して幅広く帯縄文を施す。2は縦位、3は口縁部が外反し、横位の帯縄文をもつ。4は斜位、縦位、5は山形状、横位に施す。6は口縁部が僅かに外反する。施文具は細いが口唇部に1列、口縁部に2列の突瘤文をもち、带状文を横位、山形状に施し、三角列点文が加わる。7・8は縦位の微隆起線。9～12は無文地であり、それぞれ1～3列の突瘤文をもつ。13は突瘤文をもたないが、口唇部と口縁直下に三角列点文が施される。

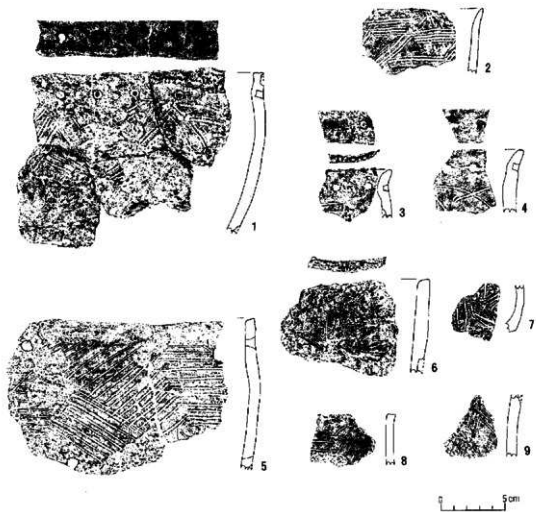
第71図-1・2は口縁部に外側からの突瘤文をもつ後北C₁・D最終末から北大I式。1は口縁直下に2本の微隆起線が横位、微隆起線と特殊な帯縄文が斜位に施される。2も同様であるが、小突起を貼付けている。注口土器であろう。3(図版27-5)はK86グリッド出土。口径約33cmの大型深鉢形土器。口縁直下の2条の擬縄隆帯間に円形刺突文が等間隔に配置するものの全て貫通する。口縁部は北大式にみられる角形ではなく薄い。文様は微隆起線、帯縄文を弧線、半弧線状に施し、胴下部とは帯縄文で区画するなど典型的な縄文後北C₁・D式であるが、外側からの刺突をかなり意識して施文している。

(2) 後北C₁・D式(第72図・第73図・第74図・第75図・第76図・第77図、図版28・図版29・図版30・図版31・図版32・図版33)

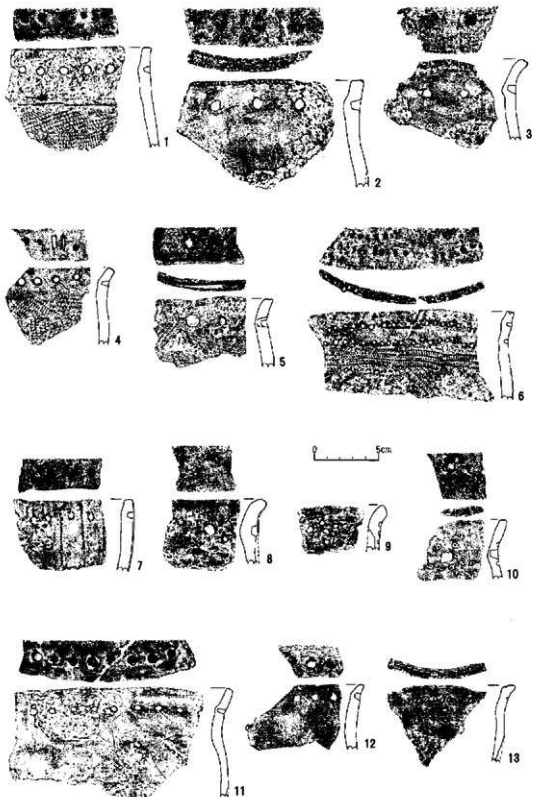
第72図-1・2は微隆起線、帯縄文により円弧文を施す。1(図版28-1)はC84グリッド



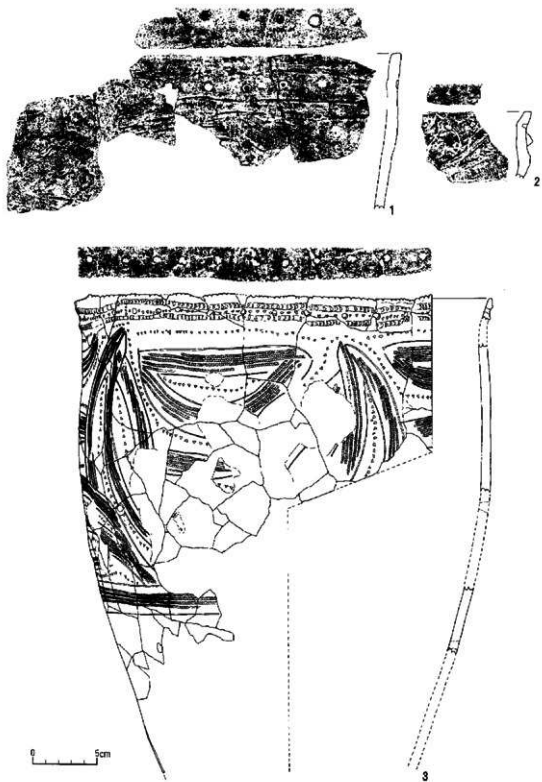
第68回 第I・II層出土土器(8)



第69圖 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(9)



第70圖 第I・II層出土土器(10)



第71圖 第I・II層出土土器(11)

出土。微隆起線が多用された口径約26cm、器高約38cmの大型鉢形土器。2（図版28-2）は張り出した大きな波状口縁部に注口をもつ。口径約10×12cm、器高約10cmの小型注口土器で、部分的に赤色顔料が塗布されている。3（図版28-3）はN80グリッド出土。口縁部の小突起から底部まで伸びる帯縄文で区画された、口径約18cm、器高約21cmの中型鉢形土器。微隆起線、帯縄文による半弧文を施す。4（図版28-4）はD'84グリッド出土。口縁部が4箇所張り出すため上面観は菱形となる。口径約14cm、器高約8cmの小型鉢形土器で縦方向の円弧文と横長の半弧文が施される。5（図版28-5）はD85グリッド出土。波状口縁の下部に小孔をもつ口径約11×13cm、器高約10cmの小型鉢形土器。波状口縁下部に相対した半弧文と円弧文が施される。6はF'87グリッド出土。微隆起線、帯縄文を山形状に施した口径約8cm、器高約7cmの小型鉢形土器。

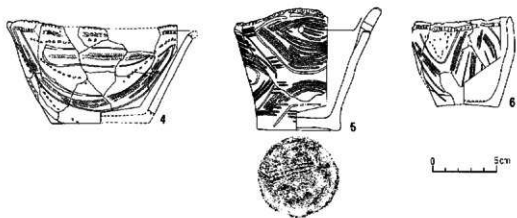
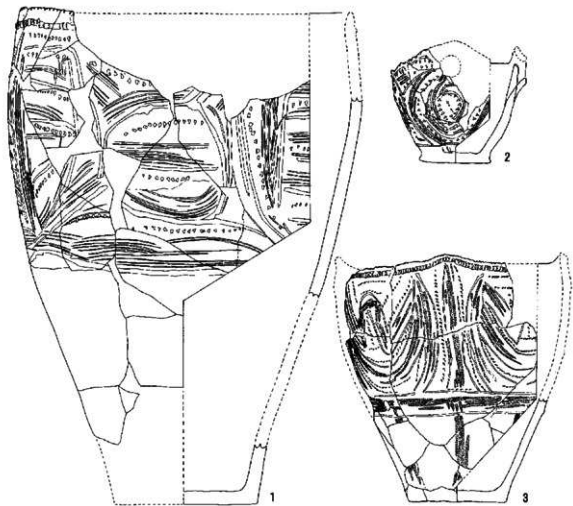
第73図-1（図版30-1）はG93グリッド出土。口径約32cm、器高約43cmの大型鉢形土器。口縁部に2条の縦帯と波状縦帯をもち、胴部は微隆起線、帯縄文を縦方向に施す。

第74図-1（図版30-2）は表面採集。口径約32cm、器高は底部との接点はないが推定44cmの大型鉢形土器。口縁部に2条の縦帯をもち、胴部は鋸歯状の微隆起線、帯縄文を重ね施す。

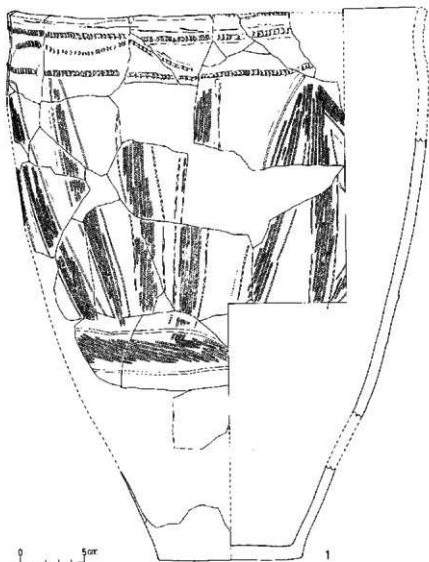
第75図-1～3は帯縄文が施された後北C₂・D式の注口土器。1（図版32-1）はD'84グリッド出土。口径約8cm、器高約6cm。2（図版32-2）はG89グリッド出土。口径約11cm、器高約9cm。3（図版32-3）はA76グリッド出土。口径約11cm、器高約14cm。4（図版32-4）はC84グリッド出土。三角列点文を山形状に施した注口土器。口径、器高とも約8cm。5～7は無文注口土器。5（図版32-5）は表面採集。口径約8cm、器高約7cm。6（図版32-6）はH85グリッド出土。口径約12cm、器高約8cm。7（図版32-7）はA78グリッド出土。口径、器高とも約7cm。8（図版32-8）はA'77グリッド出土。口径約21cm。図に示すとおり上面観は一面が片口状に突き出し、反対側は内側に張り出した特異な器形である。器面は帯縄文を鋸歯状に施す。

第76図-1～4は器面に微隆起線と帯状文を施した注口土器。1（図版33-1）はE'78グリッド出土。口径約16cm、器高約15cm。帯縄文を弧線状に施し、横位の帯縄文は底部まで及ぶ。2（図版33-2）はG83グリッド出土。上面観は径約24cmの大きな円形を呈し、器高は比較的低い約11cmの皿状であり、注口下部に2個の吊手をもつ。3（図版33-3）はK'90グリッド出土。口径約16cm、器高約12cm。4（図版33-4）はN'77グリッド出土。口径約15cm、器高約14cm。

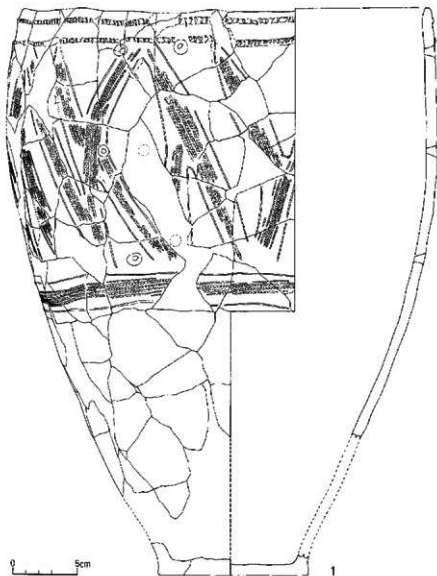
第77図-1（図版34-1）はH'82グリッド出土。帯縄文、三角列点文を縦横に施す。口径約13cm、器高約10cmの小型土器。2（図版34-2）はD'84グリッド出土。胴上部は帯縄文・微隆起線を縦横、下部は縦位に施す。口径約19cmの中型鉢形土器。3（図版34-3）はA91グリッド出土。口径約35cm、器高約43cmの特大鉢形土器。口縁部に4個の小突起をもつ。器面の



第72圖 第I・II層出土土器(12)



第73図 第Ⅰ・Ⅱ層出土上器(13)



第74圖 第1・Ⅱ層出土土器(14)

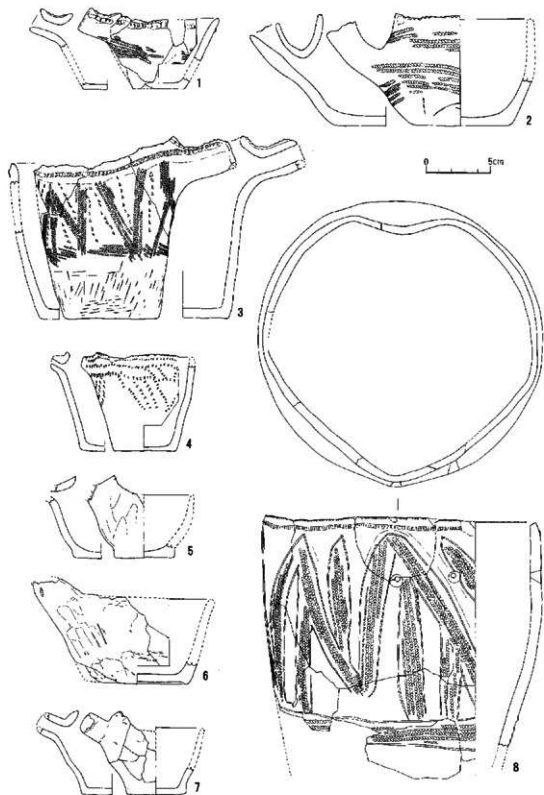
全体に帯縄文と縦走縄文を施したもので、後北C₁・D式の古手に位置づけられる。

(図版28-6)はB89グリッド出土。口径約9cm、器高約5cmの小型注口土器。(図版29-1)はA88グリッド出土。口径約8cm、器高約7cmの小型鉢形土器。(図版29-2)はF88グリッド出土。口径約9cm、器高約7cmの小型鉢形土器。(図版29-3)はB79グリッド出土。口径約9cm、器高約5cmの小型鉢形土器。(図版29-4)はK85グリッド出土。口径約9cm、器高約6cmの小型鉢形土器。(図版29-5)はA83グリッド出土。口径約19cmの中型鉢形土器であるが、口径・器高に対して底部がすぼまる。2個の小突起間を結ぶ弧線状の帯縄文と山形帯縄文から底部まで垂下した帯縄文で構成される。(図版29-6)はK85グリッド出土。口径約22cm、器高約37cmの大型鉢形土器。横走帯縄文と縦位帯縄文で区画し、上下の弧線状帯縄文・列点文を施す。(図版30-3)はL93グリッド出土。口径約30cmの大型鉢形土器。口縁部に2条の縦縄隆帯をもち、胴部は帯縄文・弧線状帯縄文と三角列点文を横位に施し、胴下部は縦位帯縄文がみられる。(図版30-4)はD'84グリッド出土。微隆起線と帯縄文を円弧状に施した口径約18cm、器高約23cmの大型注口土器。(図版30-5)はH'87グリッド出土。口径約26cm、器高約32cmの大型鉢形土器。鋸歯状の帯縄文、胴下部に3条の微隆起線を底部近くまで施す。(図版30-6)はA77グリッド出土。口径約5cm、器高約6cm。(図版31-1)はC80グリッド出土。口径約8cm、器高約6cm。(図版31-2)はF'84グリッド出土。口径約13cm、器高約7cm。(図版31-4)はH93グリッド出土。口径約9cm、器高約7cm。(図版31-5)はB89グリッド出土。口径、器高とも約15cm。(図版31-6)はC90グリッド出土。口径約12cm、器高約8cm。(図版31-7)はF'88グリッド出土。口径約11cm、器高約9cm。(図版31-8)はF'87グリッド出土。口径約10cm。(図版33-5)はB'88グリッド出土。口径約15cm、器高約11cm。(図版33-6)はK85グリッド出土。口径約18cm、器高約10cm。底部は帯状文を方形に施す。(図版34-4)はM'99グリッド出土。口径約7cm、器高約4cm。(図版34-5)はL90グリッド出土。口径約9cm、器高約6cmの小型鉢形土器。(図版34-6)はL91グリッド出土。口径約15cm、器高約14cm。口縁部直下に縦縄隆帯をもつ片口土器。

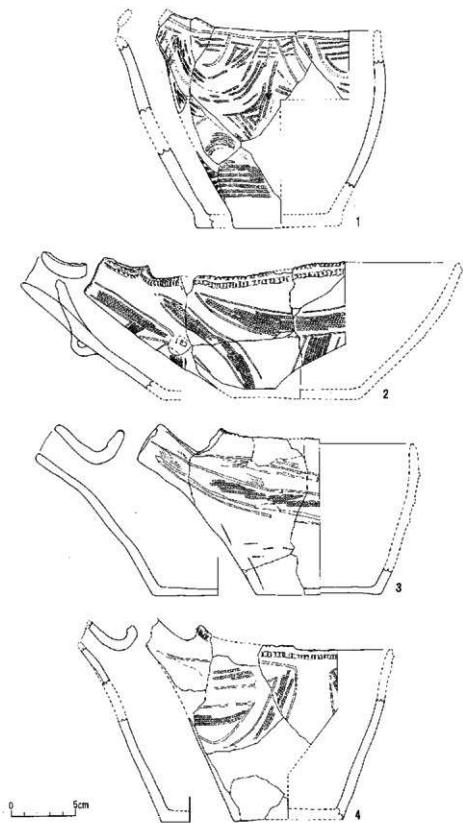
(3)後北C₁式(第78図・第79図、図版35-1・図版35-2)

第78図-1(図版35-2)はE80グリッド出土。口径約22cm、器高約24cmの大型鉢形土器で微隆起線を円形、方角状に施す。2は口縁部の小突起を基点に微隆起線を方角状に施す。3は口径約16cm、器高約18cmの中型鉢形土器。口縁直下にやや太めの微隆起線をもち、帯縄文を施す。4は横走縄文を地文に半弧文を沈線で施す。5は3本単位の微隆起線を等間隔に施す。6は微隆起線を方角状にもち、細い刺突文が施される。7は横走縄文を地文に刺突列が4段施される。後北AもしくはB式相当と思われる。

第79図-1は帯縄文を地文に同心円文を微隆起線で連結し菱形状に配置する。2・3は縦走縄文を地文として縦縄隆帯をもつもので2は円形貼付文を連結し菱形状に配置する。4・5は

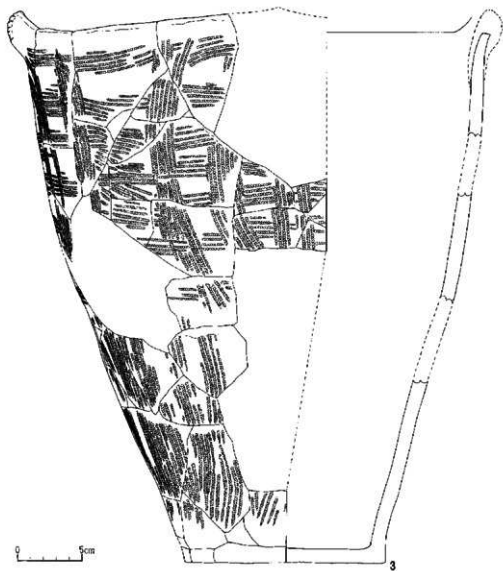
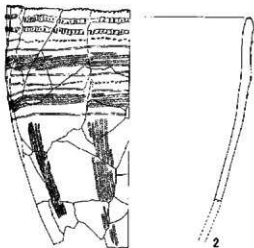
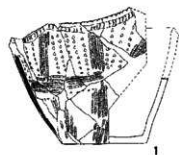


第75圖 第I・II層出土土器(15)



第76圖 第I・II層出土土器(16)

常呂川河口遺跡



第77圖 第I・II層出土土器(17)

横走沈線文と「V」字状、菱形状の沈線文をそれぞれ施す。2～5は後北C₁式相当。

(図版35-1)はF'64グリッド出土。口径約9cm、器高約10cmの小型鉢形土器。小突起下部の同心円文と形の崩れた菱形状を微隆起線により施される。菱形状の微隆起線には小さな貼付け文が連結して垂下する。底部は張り出す。

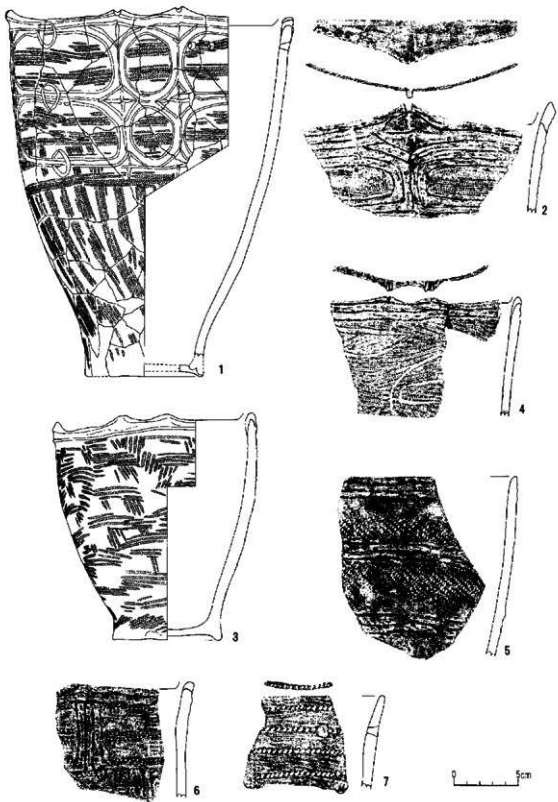
(4)字津内系Ⅱb式(第80図・第81図・第82図、図版35-3～6・図版36・図版37・図版38)

第80図-1(図版35-3)はC'87グリッド出土。口縁部に1対の大型突起と2個1対の小突起をもち、同心円文を施した口径約25cm、器高約37cmの大型深鉢形土器。

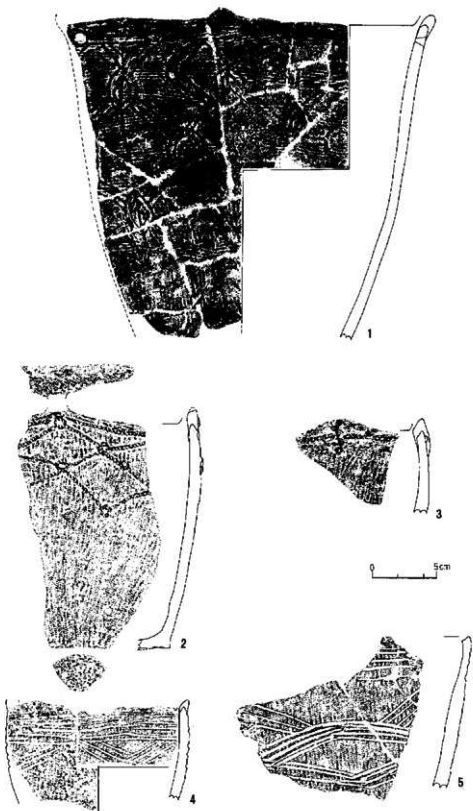
第81図-1～5は同心円文と複数の大型突起と小突起をもち。1(図版35-4)はG'94グリッド出土。口径約15cm、器高約21cmの中型鉢形土器。2(図版35-5)はM'91グリッド出土。口径約14cm、器高約19cmの中型鉢形土器。3(図版35-6)はE90グリッド出土。口径約16cmの中型鉢形土器。4(図版36-1)はE'84グリッド出土。口径約17cm、器高約21cmの中型鉢形土器。5(図版36-2)はH'80グリッド出土。口径約15cm、器高約19cmの中型鉢形土器。

第82図は小型鉢形土器である。1(図版37-2)はQ'99グリッド出土。口径約12cm、器高約14cmで吊り耳間に「∩」状の隆帯をもち、深い揚げ底である。2はI'82グリッド出土。口径約12cm、器高約14cmで吊り耳間に「V」状の隆帯をもち、3～5は吊り耳間に発達した縦繩隆帯を施す。3(図版37-3)はC79グリッド出土。口径約11cm、器高約12cm。4(図版37-4)はJ'78グリッド出土。口径約11cm、器高約11cm。5(図版37-5)はC'80グリッド出土。口径約10cm、器高約12cm。6(図版37-6)はB'78グリッド出土。口径約12cm、器高約15cm。「X」字状の縦繩隆帯が施される。7～10は細身の隆帯を施すもので7はI'87グリッド出土。口径約9cm、器高約8cm。8はI'84グリッド出土。口径約7cm、器高約6cm。9(図版38-1)はI'89グリッド出土。口径約10cm、器高約10cmで垂下した隆帯が連結する。10はM'81グリッド出土。口径約11cm、器高約13cm。11(図版38-2)はH'92グリッド出土。口径約9cm、器高約12cmであり、胴下部は細身である。太目の隆帯が口縁部と平行する。12(図版38-3)はD'96グリッド出土。口径約11cm、器高約10cm。大小の突起から垂下した縦繩隆帯が連結する。

(図版36-3)はH'85グリッド出土。口径、器高とも約8cmの小型鉢形土器。(図版36-4)はC81グリッド出土。口径、器高とも約13cmの小型鉢形土器。(図版36-5)はI'89グリッド出土。口径約11cm、器高約12cmの小型鉢形土器。(図版36-6)はB85グリッド出土。口径約17cm、器高約21cmの中型鉢形土器。(図版37-1)はB92グリッド出土。口径約20cm、器高約26cmの中型鉢形土器。1対の大突起、2個1対の小突起をもち、胴部に連続した山形状の縦繩隆帯を施す。(図版38-4)はJ'89グリッド出土。口径約10cm、器高約11cmであり、大きな山形突起から派生した隆帯が連結する。(図版38-5)はM'86グリッド出土。口径、器高



第78圖 第I・II層出土土器(18)



第79圖 第I・II層出土土器(19)

とも約10cmであり小突起から派生した隆帯が口縁下部で連結する。(図版38-6)はA'83グリッド出土。口径約11cmの底部が窄まる器形である。

(5)字津内系Ⅱa式(第83図・第84図・第85図・第86図・第87図・第88図・第89図・第90図・第91図・第92図・第93図・第94図、図版39・図版40・図版41-2)

第83図-1(図版39-1)はL82グリッド出土。内側から突瘤文を施した口径約33cm、器高約44cmの特大深鉢形土器。口縁部に煤が付着する。

第84図-1(図版39-2)はB94グリッド出土。口縁部に2個1対と1個1対の小突起をもち、口縁部に内側からの突瘤文をもつ口径約35cm、器高約45cmの特大深鉢形土器。

第85図-1(図版39-3)はB94グリッド出土。口縁部に内側からの突瘤文と3条の縄線文が施される。口径約30cm、器高約42cmの大型深鉢形土器。

第86図-1(図版39-4)はC'94グリッド出土。口縁部に内側からの突瘤文、2個のボタン状貼付文と擬縄隆帯が施された口径約30cm、器高約50cmの特大深鉢形土器。

第87図-1(図版39-5)はD'87グリッド出土。口縁部に内側からの突瘤文、1対の大小突起をもち、太い擬縄隆帯が横走する口径約36cm、器高約50cmの特大深鉢形土器。

第88図-1(図版39-6)はC87グリッド出土。口縁部の太い隆帯上に縄端圧痕文、6条の縄線文が施された口径約24cm、器高約48cm。キャリパー状に大きく内湾した大型深鉢形土器。突瘤文はみられないが字津内Ⅱa式。

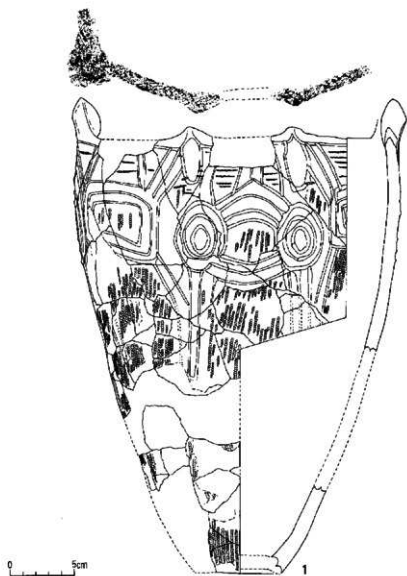
第89図-1(図版40-1)はC'94グリッド出土。4個のボタン状貼付文と擬縄隆帯が施された口径約32cm、器高約42cmの特大深鉢形土器。

第90図-1～4は突瘤文と大小の突起をもつ。1(図版40-2)はF'93グリッド出土。口径約11cm、器高約14cmの小型鉢形土器。縄線文と剥落するが縦位の隆帯が施される。2はB94グリッド出土。口径約20cm、器高約27cmの中型鉢形土器。大突起から小突起にかけて擬縄隆帯が「凵」状に施される。3(図版40-3)はP'90グリッド出土。燃糸文を地文とした口径約22cm、器高約26cmの中型鉢形土器。4(図版40-4)はQ'91グリッド出土。突瘤文の上下に刺突文が施される口径約16cm、器高約20cmの中型鉢形土器。

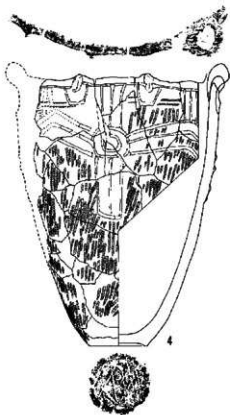
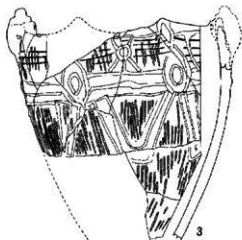
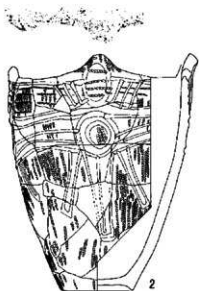
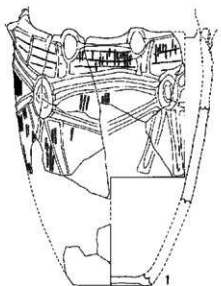
第91図-1・2は突瘤文をもつ。1(図版40-5)はB94グリッド出土。燃糸文を地文とした口径約31cm、器高約40cmの大型鉢形土器。2はN'94グリッド出土。口径、器高とも約9cmの小型鉢形土器。

第92図-1(図版41-1)は字津内Ⅱa式(古)に位置づけられる。C89グリッドから出土した口径約26cm、器高約38cmの大型深鉢形土器。口縁部に内側からの突瘤文と2個2対のボタン状貼付文をもち、器面は燃糸文を地文とする。

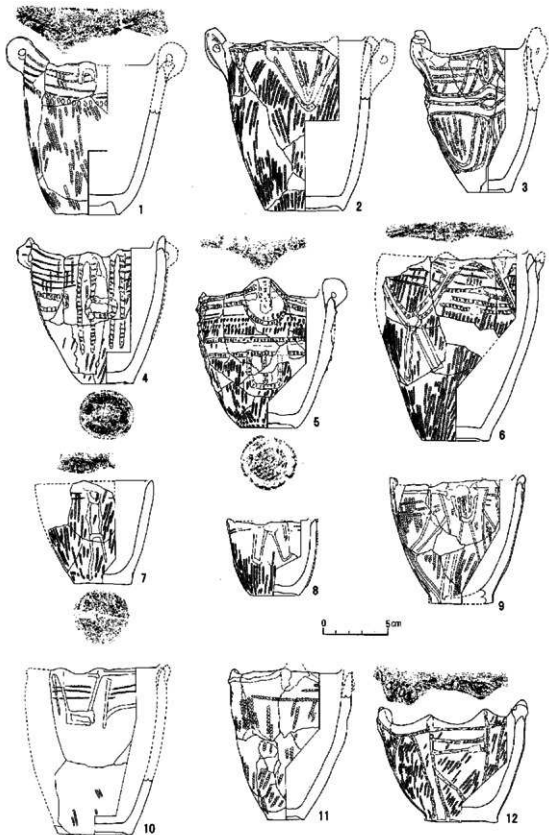
第93図-1～7は地文のない口縁部に内側からの突瘤文と比較的太めの縄線文を施す。1(図版41-2)はD79グリッドから出土した口径約30cmの大型深鉢形土器。口唇部に山形小突起を



第80圖 第I・II層出土土器(20)



第81圖 第1・Ⅱ層出土土器(21)



第82图 第1・II 册出土器(22)

4個もち、胴部は縦走縄文である。5は曲線的な縄線文。6・7は山形小突起をもち、縦横に縄線文が施される。

第94図-1は刻目をもった山形小突起下部に短隆帯、2は「冂」状の太い隆帯下部に細沈線文が雑に施される。3は2個の山形小突起から刺突されたボタン状貼付文が「V」字状にみられ、捺糸文が縦位方向に施されるが、帯状を意識した捺糸文は横位方向に押捺される。4は山形小突起をもち、器面は横位の縄文が施される。5は口縁部の無文地部に横位と縦位の隆帯、6は無文地部に横走する微隆起線と半載状施文具による刺突文がみられる。

(図版40-6)はH81グリッド出土。口径約36cmの特大土器。4個の山形突起をもつ。

(6)下田ノ沢Ⅱ式(第95図、図版41-3)

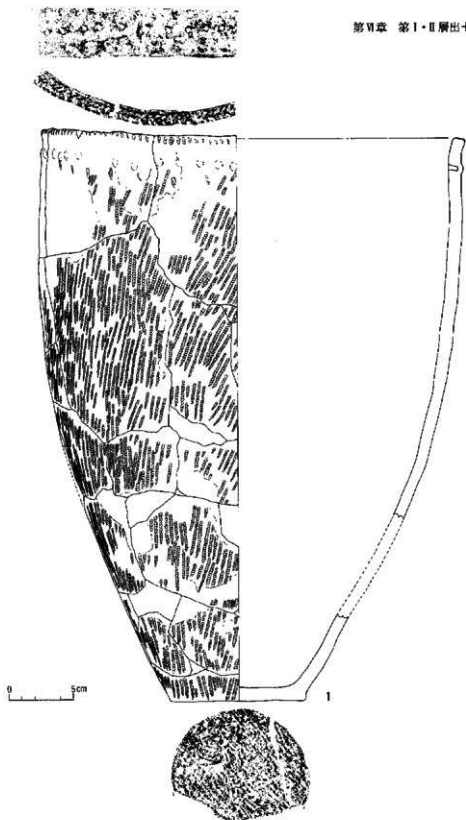
第95図-1(図版41-3)はF93グリッド出土。口径約17cmの中型鉢形土器。2個1対の大突起をもち円形刺突文を加えた4、5本の隆帯が垂下、2本の隆帯が横位に派生し連結する。口縁部と隆帯は組紐、胴部は縄文が施される。2も1と同様の文様をもち、3は組紐文を地文に、突起から隆帯に置き換わって短沈線が垂下する。4はC'81グリッド出土。口径約8.3cm。口縁部は内湾する。3個の大突起がみられ縦縄隆帯が施される。胴部は横走縄文を地文に組紐文が垂下する。

(7)元町2式相当土器(第96図・第97図・第98図、図版41-4~6)

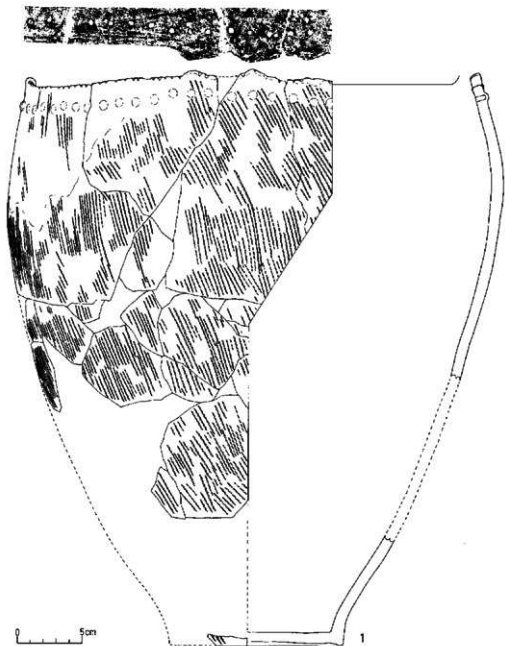
第96図-1~6は地文のない口縁部に内側からの突瘤文をもつ。1は小型壺。2~3の無文部は幅広く、3は2個の山形突起をもつようであり、下部に刺突文が施される。4は台形状突起の表裏面に短縄文が押捺される。6(図版41-4)はL'97グリッドから出土した口径約33cmの大型鉢形土器。口唇部に4個の山形小突起をもち、胴部の縦走縄文とは縄端庄痕文で区画される。

第97図は内側からの突瘤文と沈線文で構成される。特に地文のない無地に沈線文をもつものがある。1は口縁直下が微妙に外反し、突瘤文の下部は「乙」字状の沈線に鋭い剣状の沈線文が施される。2~6は沈線文は半載状施文具によるもので、6・8は縦位の沈線文が加わる。7・10は細沈線文、9は半載状沈線文の上下に円形刺突文と刺突文をもつ。11(図版41-5)はJ'81グリッド出土。口径・器高とも約9cmの小型鉢形土器。2個の小突起下部から短い隆帯が垂下し、細沈線文と半載状沈線文が施される。12は外反した口縁部に円形刺突文、13は縦位の細沈線文が施される。14は太目の沈線文を菱形に描き、内部に短刻線を施す。胴部とは縄端庄痕文で区画する。

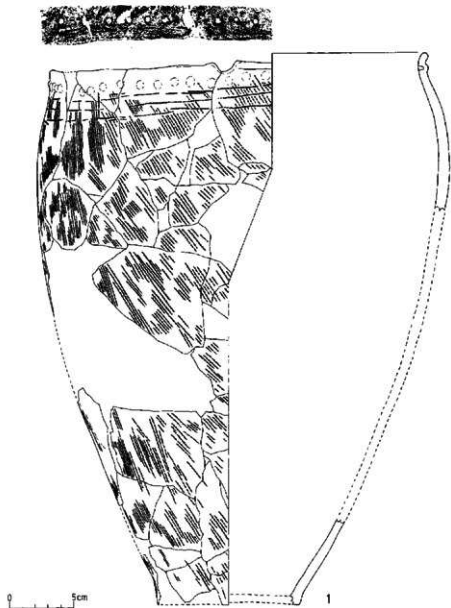
第98図-1(図版41-6)はC90グリッド出土。口径約33cm、器高約46cmの大型鉢形土器。口唇部の4個の山形突起には円形刺突文が施され、刻みに加えられた隆帯が垂下する。地文のない口縁部は僅かに内湾し、突瘤文と半載状施文具によると思われる2本単位の沈線文で区画



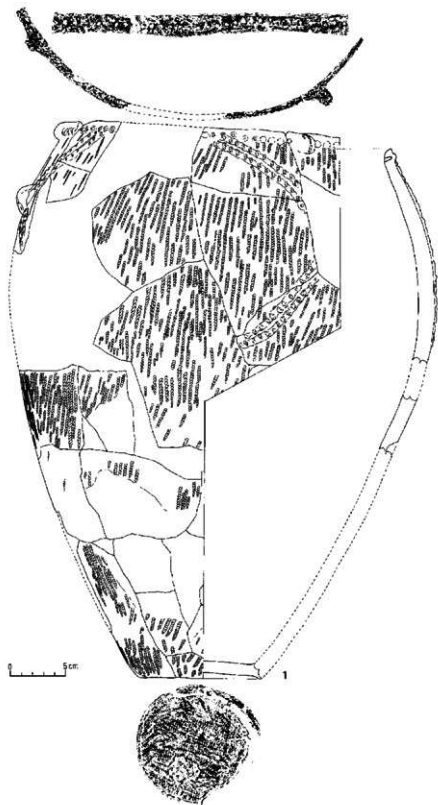
第83圖 第I・II層山土土器(23)



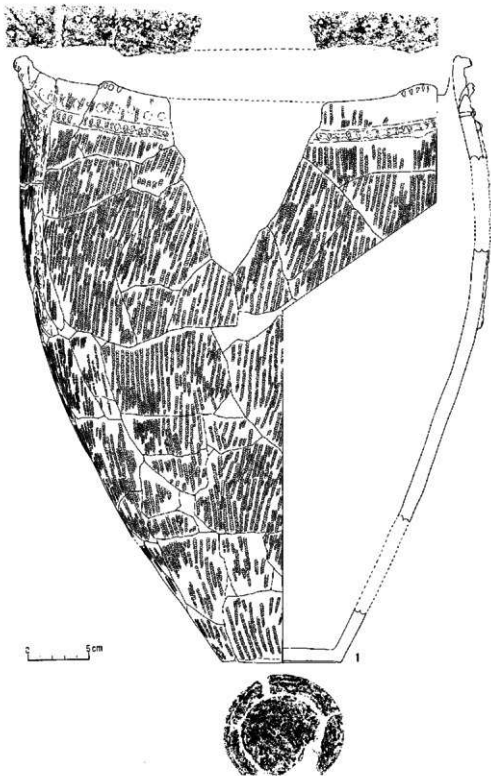
第84圖 第1・Ⅱ層出土土器(24)



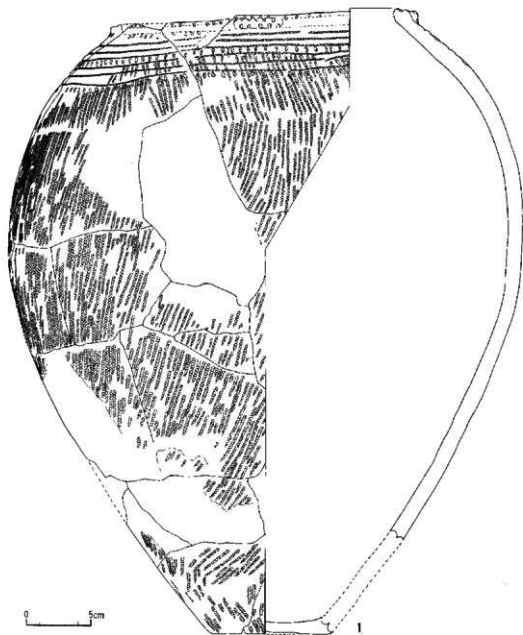
第85圖 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(25)



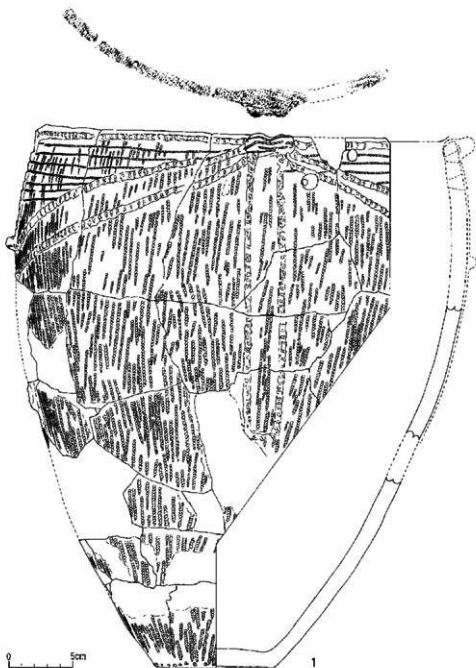
第26圖 第I・II層出土土器(26)



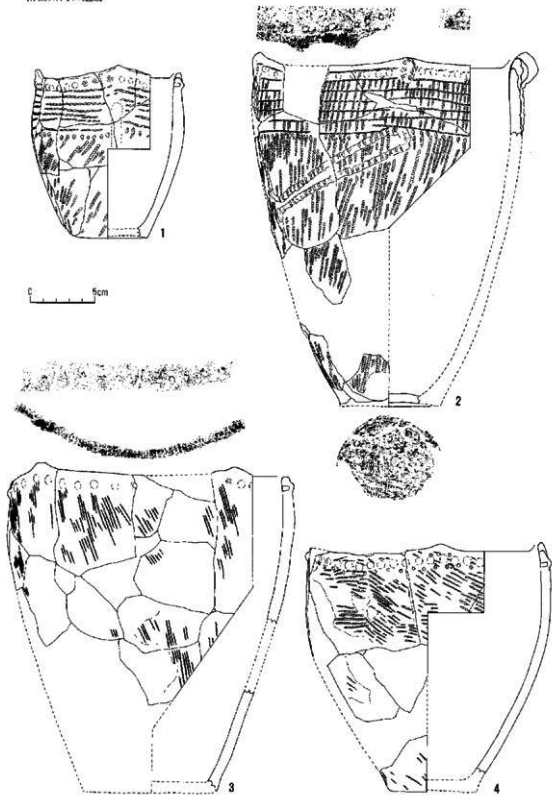
第87圖 第Ⅰ・Ⅱ層山土土器(27)



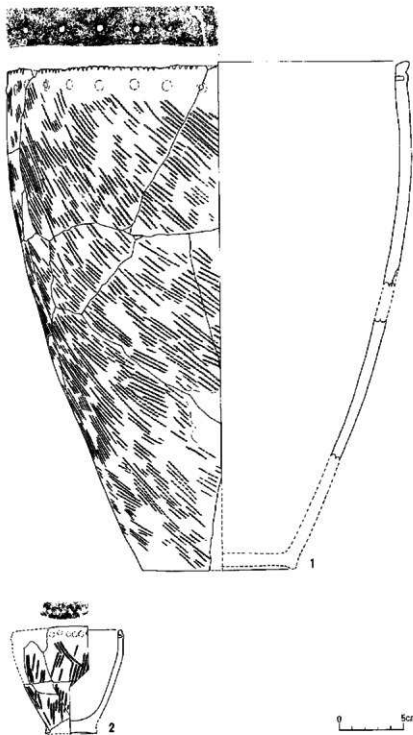
第88圖 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(28)



第89圖 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(29)



第90図 第1・Ⅱ層出土土器(30)



第91圖 第I・II層出土上器(31)

され、内部は「Z」字状に施される。胴部は縦走縄文である。

(8) 興津式・フシココタン下層相当の土器 (第99図・第100図・第101図・第102図・第103図・第104図・第105図・第106図・第107図・第108図・第109図・第110図・第111図-1~6、図版42・図版43)

第99図-1~3は縄線文が施される。1 (図版42-1)はM'86グリッド出土。口径約11cm、器高約9cmの小型碗。底部は丸みをもち、口縁下部に3条の縄線文と縄端庄痕文が施される。2・3は頸部が外反、4は内湾する。小型壺と思われる。5は口縁下部に3条の絡縄体庄痕文と刺突文、6は円形刺突文間に縦位の縄線文が施される。5・6は大型深鉢形土器。

第100図は基本的に縄線文が施される。1は縦位の隆帯と刺突文をもち、口縁下部と縄線文下部は縄端庄痕文が施される。2は縦位の縄線文、3は縦位の隆帯をもつ。4は頸部が幅広い無文帯となり太い縄線文が施される。8は第110図-2・3の沈線文にみられたような縦横の縄線文によって区画される。5・6・9・10は縄線文と縄端庄痕文、11は刺突文が施される。

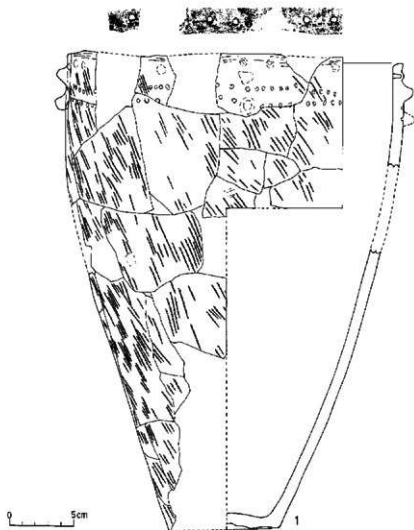
第101図 (図版42-2)はB'86グリッド出土。口径約30cmの大型深鉢形土器。口唇部と口縁下部に縄端庄痕文を施す。

第102図は縮約した頸部をもつ土器。1~3は無文。4~6は縄線文が施され、5はボタン状貼付文、6は円形刺突文と縄端庄痕文が加わる。8は剥落するが大きな円形の貼付文を有し、縄端庄痕文によって胴部と区画する。

第103図は縄文、無文の土器。底部は平底、丸底、揚げ底がある。1はD93グリッド出土。口径約7cm、器高約5cmの小型土器。2はK'92グリッド出土。口径約3.5cm、器高約3cmのミニチュア土器で内側に刺突文をもつ。3~7は口縁部が微妙に反り返る。3はF84グリッド出土。口径・器高とも約5cmのミニチュア土器で燃糸文を地文とする。4はN'91グリッド出土。口径約6cm、器高約6cm。無文のミニチュア土器。5 (図版42-3)はF92グリッド出土。口径約9cm、器高約14cmの小型土器で、切り込みのある山形小突起下部に剥落するがボタン状貼付文を有する。6はM'85グリッド出土。口径約10cm、器高約11cmの小型土器で、器面は燃糸文を縦横に施す。7はA69グリッド出土。口径約8cm、器高約9cmの小型土器。8 (図版42-4)はC94グリッド出土。口径約18cm、器高約25cmの中型土器。口縁部は僅かに内湾する。9はF50グリッド出土。口径約3cm、器高約3cm。無文のミニチュア土器。10はB'79グリッド出土。口径約4cm、器高約4.7cm。無文のミニチュア土器。

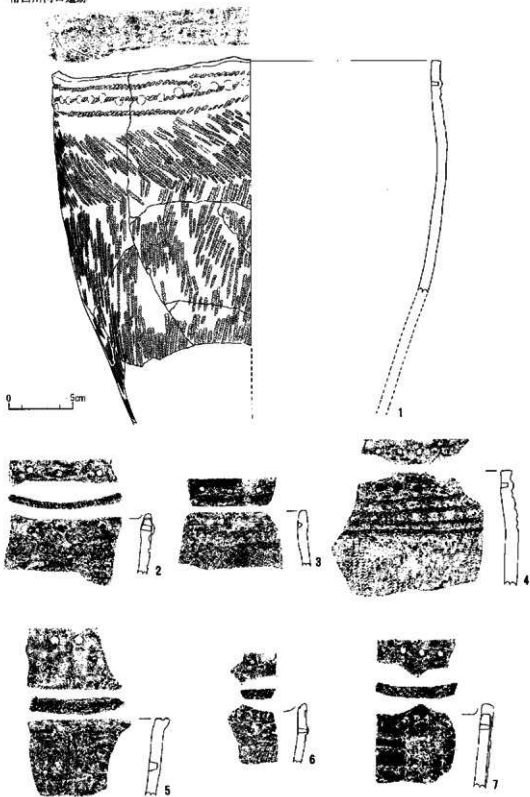
第104図-1 (図版42-5)はF91グリッド出土。口径約15cm、器高約16cmの小型深鉢形土器。丸底の底部である。2は胴中央部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。丸底気味の底部である。1・2は縄文晩期終末から続縄文初頭のものであろう。

第105図-1 (図版42-6)はD91グリッド出土。口径約21cm、胴部の最大幅約37cmの大型壺形土器。縮約した地文のない口縁部に3列の刺突文と2個1対、1個1対のボタン状貼付文

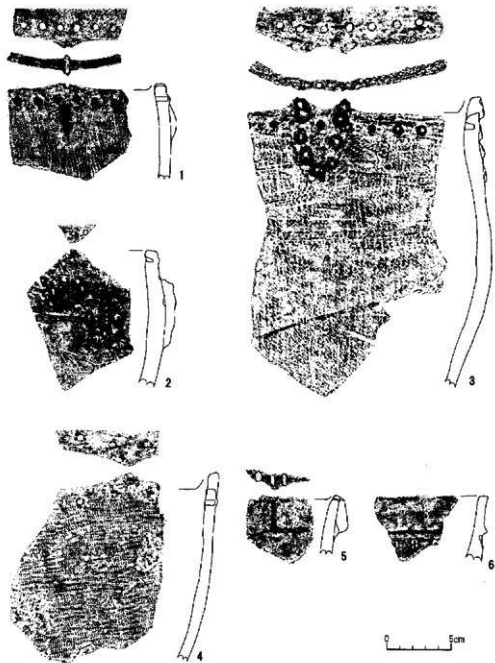


第92圖 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(32)

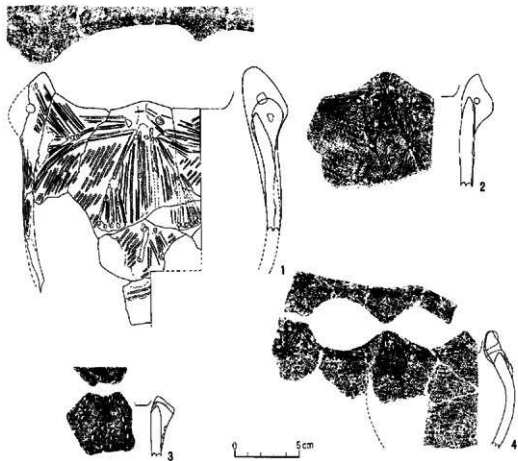
常呂川河口遺跡



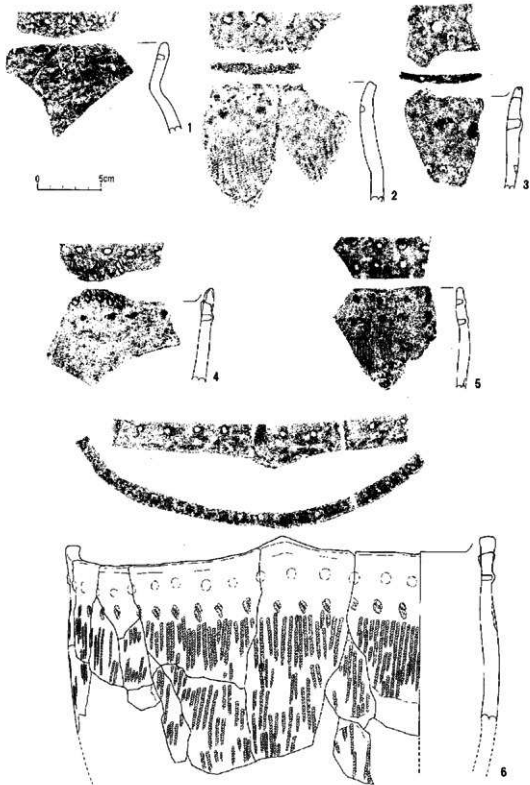
第93圖 第I・II層出土土器(33)



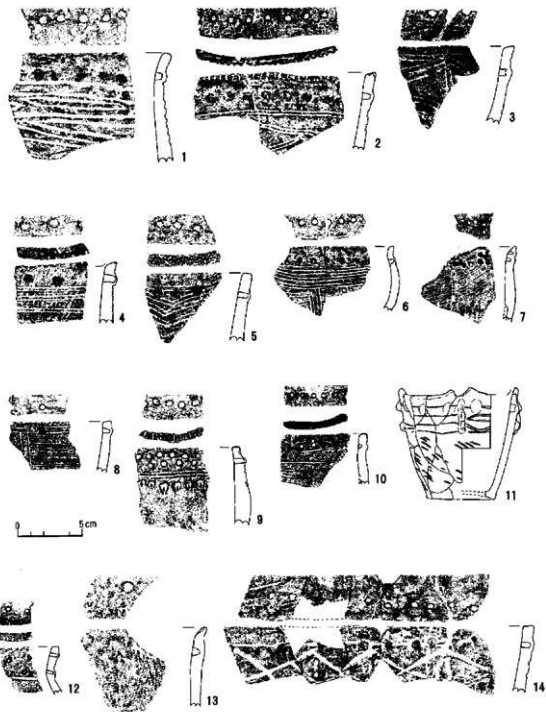
第94圖 第I・II層出土土器(34)



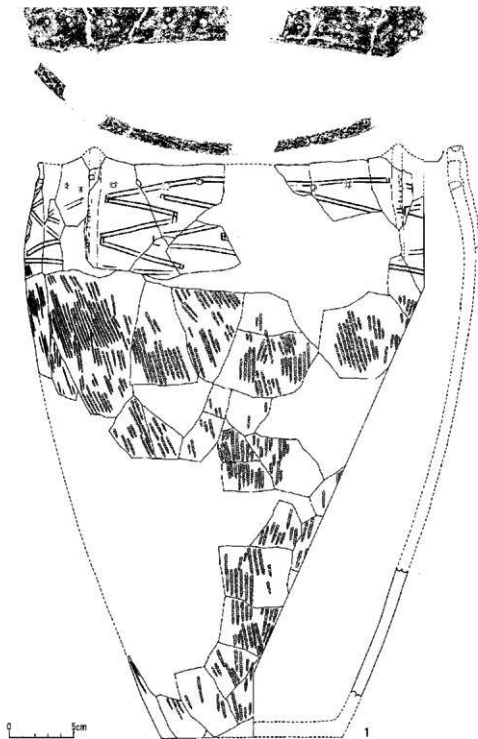
第95圖 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(35)



第96図 第I・II層出土土器(36)



第97図 第1・Ⅱ層出土土器(37)



第98圖 第I・II層出土土器(38)

をもつ。口縁部の内側は縄編文が押捺される。ボタン状貼付文は横位の沈線文で連結され、縦位の沈線文が垂下する。地文は肩部が横位、胴部は縦位の縄文が施される。

第106図-1（図版43-1）はL'97グリッド出土。口径約21cm、器高約27cmの中型鉢形土器。口縁部は内湾し、6個の小突起をもつ。2条の横走沈線文間に流水工字文、刺突文が充填される。

第107図-1（図版43-2）はG'86グリッド出土。口径約23cmの中型深鉢形土器。口縁部は内湾し、刻みのある山形小突起の下部にボタン状貼付文をもち、半載状施文具により直線・弧線状の沈線文を施す。

第108図-1～3は工字文状の沈線文が施される。1（図版43-3）はA93グリッド出土。口径約31cmの大型深鉢形土器。4個の山形小突起をもち、口縁部に工字文状の沈線文が施される。2（図版43-4）はB'94グリッド出土。胴部から「く」字状に内屈した口径約9cm、器高約7cmの小型鉢形土器。口唇部に刻目をもった1個の小突起をもつが、本来は複数有すると思われる。胴下部とは縄線文で区画される。3は壺形と思われる。頸部に複数の横走沈線文と変形工字文状の沈線文が施される。4は口縁直下に円形刺突文。横走沈線文上に刺突文を施し変形工字文としたものである。5は小型鉢と思われる。弧線・直線の沈線文を縦位に施され、底部にかけて刺突文が連続する。

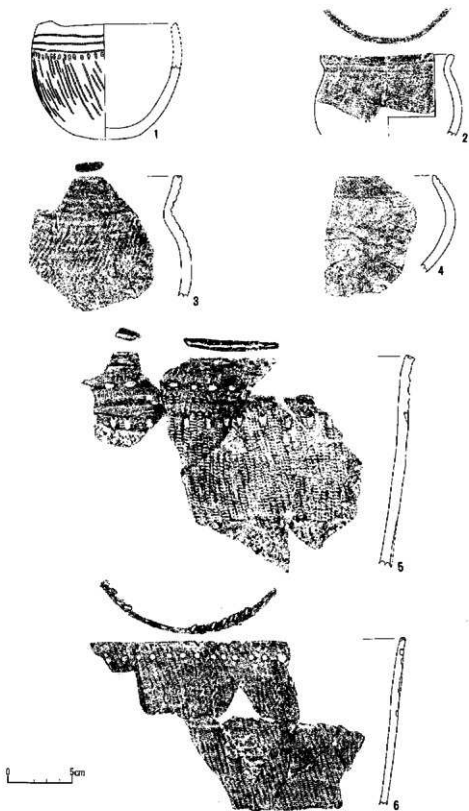
第109図-1・2は小突起下部にボタン状貼付文をもち、縄線文と円形刺突文が施される。1は縄線文の下部に縄端疋真文が加わる。3～5はボタン状貼付文と沈線文をもち、5は刺突文が加わる。3点とも菱形文をモチーフとする。6～14は沈線文主体であるが、6～9は半載状施文具により施されたもので6は弧線状沈線文を上下に施し、7は沈線文を仕切る短刻線をもつ。10は山形小突起に内外から円形刺突文、11は7にみられた様な仕切りが、縄端によって施される。13は上下の円形刺突文を結び、格子目文とする。14は口縁部に2条の太い横走沈線文をもつものである。沈線文の幅、色調など他の土器と異なる。

第110図-1～3は沈線文をもつ口縁部が外反した小型壺形土器。1は頸部。2・3は沈線文を仕切り、円形刺突文を加えるなど類似した文様構成をもつ。4・5は無文地部に羽状沈線文を相対させ、菱形文としたもので、4は小突起に縄による刻み加えられる。6は雑な施文であるが、菱形文がみられる。7は無文地部に鋭い「<<」状の沈線文をもち、円形刺突文を充填させる。胴部は燃糸文が施される。8～12は弧線状・曲線状の沈線文をもつ。

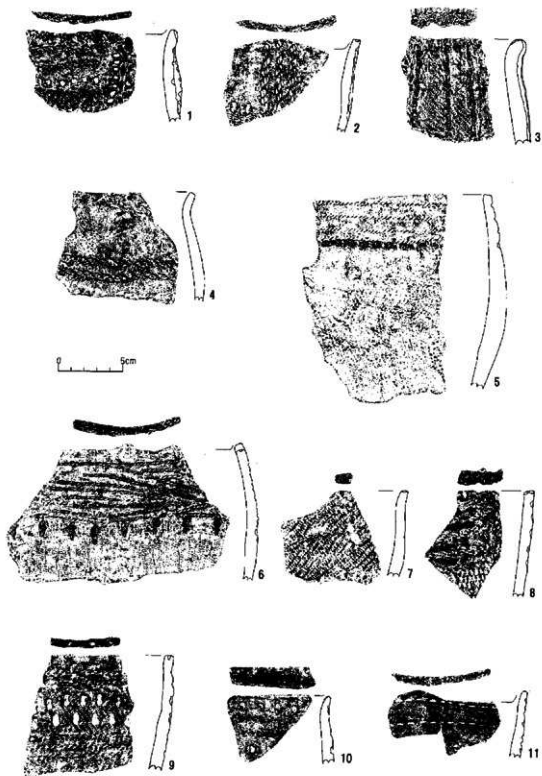
第111図-1は弧線状の沈線文をもち、口唇部に縄端疋真文が押捺される。2～6は直線的な沈線文をもち沈線文内部に刺突文が多用される。

(9) 緑々罫式相当の土器（第111図-7～10）

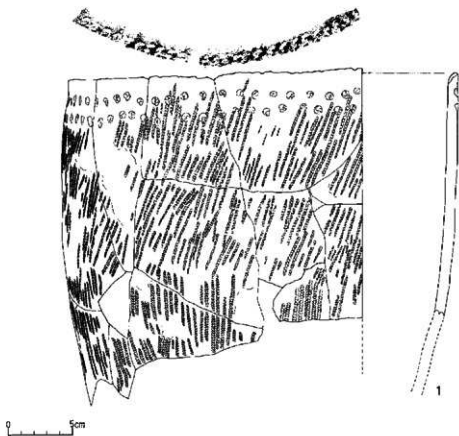
第111図-7～10は基本的に横走する比較的太い沈線文をもち、沈線文上や沈線文間に円形刺突文が施される。縄文晩期終末から縄文初頭の緑々罫式。



第99图 第I・II期出土の器(39)

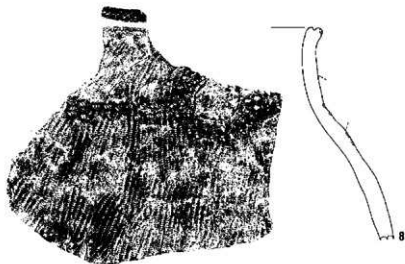
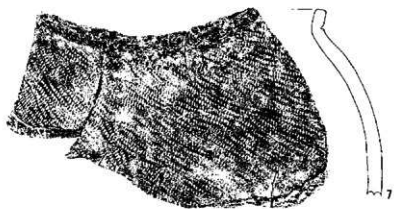
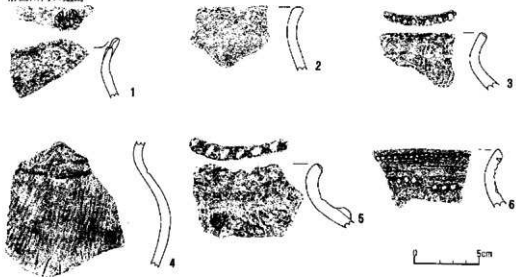


第100圖 第I・II層出土土器(40)

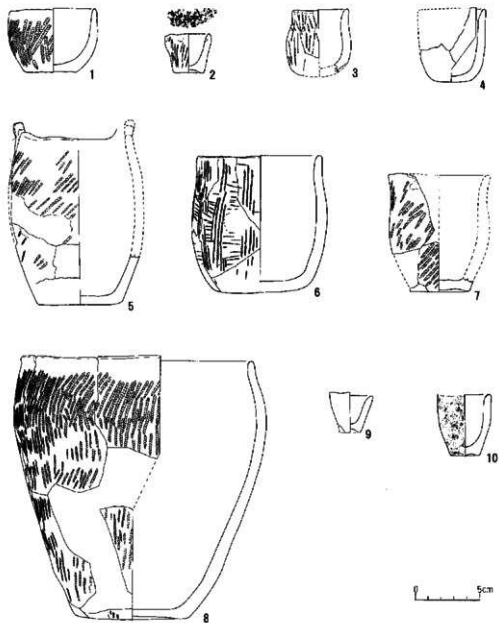


第101圖 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(41)

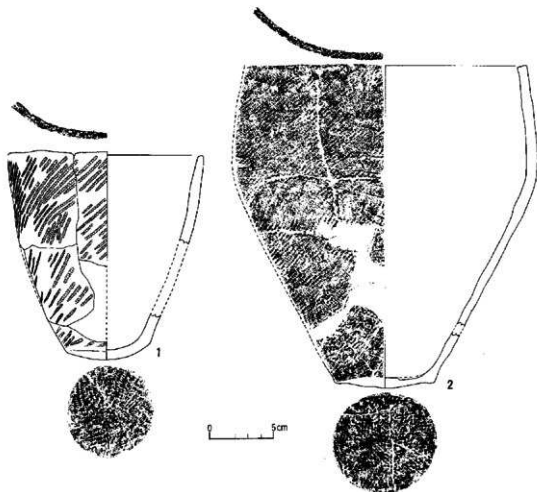
常呂川河口遺跡



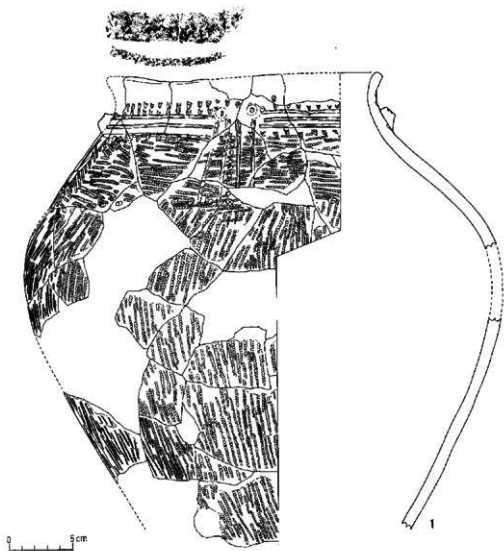
第102図 第I・II層出土土器(42)



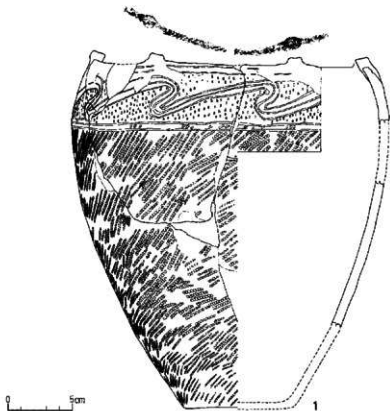
第103圖 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(43)



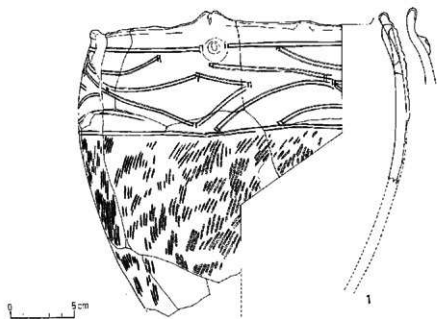
第104圖 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(44)



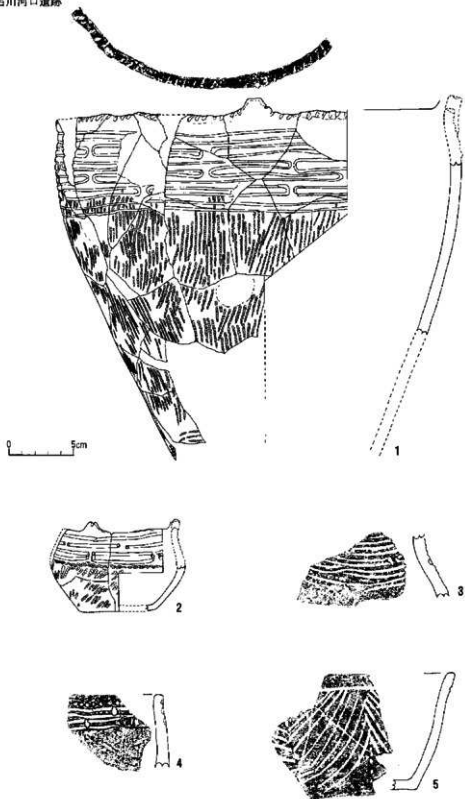
第105圖 第I・II層出土土器(45)



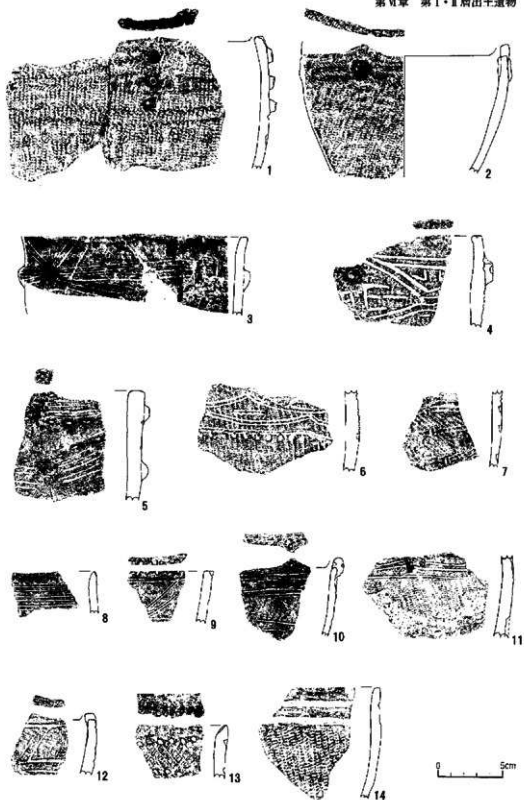
第106図 第1・Ⅱ層出土土器(46)



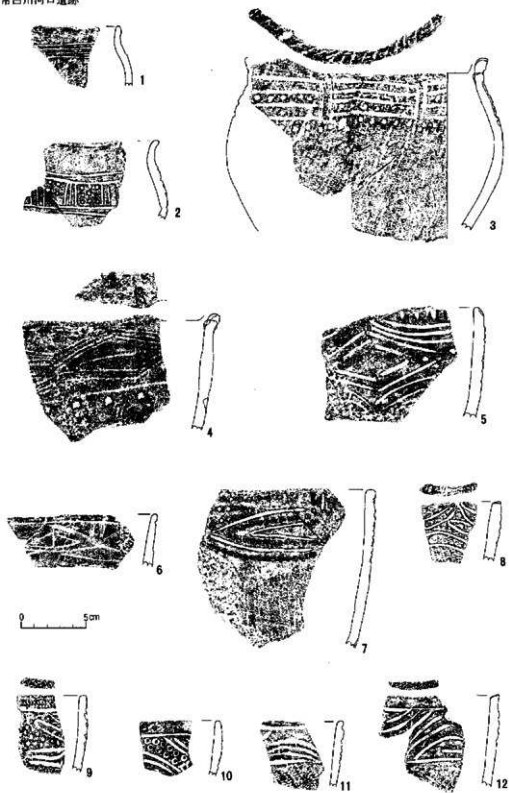
第107圖 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(47)



第108圖 第I・II層出土土器(48)



第109図 第I・II期出土土器(49)



第110圖 第1・Ⅱ層出土土器(50)

5. 縄文文化晩期

(1) 縄文晩期後葉の土器(第112図・第113図・第114図、第115図、図版44・図版45-1)

第112図は縄文晩期後葉の幣舞式。1(図版44-1)はH82グリッドから出土した口径約16cm、器高約7cmの皿。台状突起の下部に小孔をもつ。横走沈線文が多用され、胴部は斜縄文が施される。底部は丸底となる。2(図版44-2)はA'93グリッドから出土した口径約22cm、器高約5cmの無文の浅鉢。口唇部に刻みが等間隔に施される。3(図版44-3)はR'92グリッドから出土した口径約16cm、器高約14cm小型鉢形土器。口縁部に2個の台状突起をもち、片方に小孔をもつ。4(図版44-4)はC'93グリッド出土。口径約39cmの特大鉢形土器。横走する細い沈線文上に縦位の刻線文が施される。

第113図-1(図版44-5)は縄文晩期後葉の幣舞式。B'88グリッド出土。底部から口縁部にかけて大きく開いた口径約31cm、器高約29cmの大型鉢形土器。唇部に刻みをもち、4条の縄線文が施される。2(図版44-6)は集中豪雨による流失土砂から発見した小型壺。欠失した頸部下に沈線文がめぐる。無文の器面には部分的に赤色顔料が塗布される。3はG'88グリッド出土。口径約19cm、器高約8cmの浅鉢。無文であるが、口唇部に刻みをもつ。焼成は良い。

第114図-1はM'94グリッド出土。縄文晩期後葉と考えられるもので、器形は丸底の底部から口縁にかけて大きく開く。口径約40cm、器高約39cmの大型深鉢形土器。口縁直下に4条の縄線文と底部に4条の沈線文が施される。

第115図は底部から口縁部にかけて大きく開いた大型深鉢形土器。1(図版45-1)はD'77グリッド出土。口径約28cm。2はF'85グリッド出土。口径約25cm、器高約23cm。いずれもLRの斜縄文を施し、2の口唇部には縄端丘痕文が押捺される。

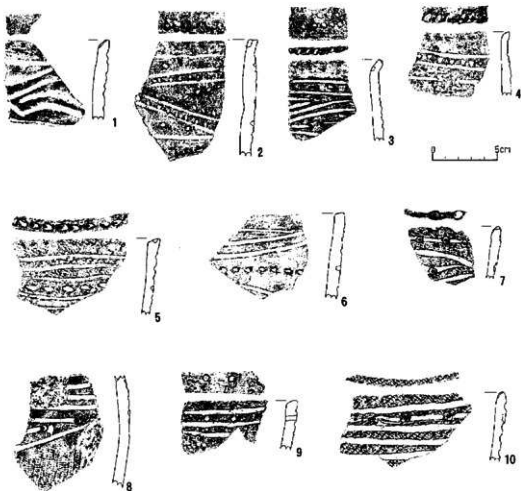
(2) 縄文晩期中葉の土器(第116図・第117図・第118図・第119図・第120図・第121図、図版45-2~7・図版46-1)

第116図は縄文晩期中葉と思われる縄線文を多用した土器である。1(図版45-2)はA'103グリッド出土。口径約22cm、器高約19cmの浅鉢土器であるが、上面観は菱形となる。縄線文を胴部から底部まで縦横、波状に施す。底部は縄線文で円形に縁取り、内部を施文する。

2・3は波状、4は「V」字状、5は渦巻き状、6は縦横に施される。7~10は横走する縄線文に縄端丘痕文、沈線文、刺突文が加わる。

第117図は縄文晩期中葉に比定される刺突文系の土器。全点とも円形刺突文を施したものである。1(図版45-3)はS'96グリッド出土。口径約34cmの特大鉢形土器。2(図版45-4)はX'101グリッド出土。口径約20cm、器高約10cmの浅鉢。4は横走縄文、5は燃赤文を地文とする。

第118図は縄文晩期中葉に比定される刺突文系の土器。1~5は半載状施文具による。1(図版45-5)はU'100グリッド出土。口径約30cmの特大深鉢形土器。6は先端が平らな棒状施文



第111圖 第I・II層出土土器(51)

具、7・8は三角形状施文具により施される。9は縄端匠真文が施される。

第119図-1（図版45-6）はN'101グリッド出土。口径約17cm、器高約18cmの中型深鉢形土器。器面は横位方向の縄文が施され、広めの突起に2個の小孔をもつ。2（図版45-7）はZ'103グリッド出土。口径約13cm、器高7.5cmの浅鉢。器面には刺突文が多用される。3はN'76グリッド出土。口径約27cm、器高約14cmの浅鉢であるが、口縁部の一端が大きく張り出し内湾化する。2個の小突起から隆帯が垂下し、波状の沈線文と刺突文が加わる。

第120図-1は口径約52cmの特大型土器。口縁部の一端が丸く挟られ、「ハ」字状の隆帯をもち、器面は刺突文が施される。2（図版46-1）はD'66グリッド出土。胴部が大きく凹み、口縁部が方形を呈し、四隅には長い隆帯、底部近くに「V」字状の隆帯をもつ。器面は細沈線文を口縁部で横位、底部で縦位に施される。3はD93グリッド出土。口径約3cm、器高約3.5cmのミニチュア土器。内壁は垂直に立ち上がる。張り出した胴部には細長い刻線で区画し3～4個の刺突文、口縁部に半載状施文具による細沈線文を施す。4はL92グリッド出土。口径約4.5cm、器高約5cmの小型土器。半載状施文具により縦位方向に区画され、「く」状に刺突される。5はF'66グリッド出土。口径約6.5cm、器高約3.5cmの小型土器。図示する通り上面観は五角形を呈し、円形刺突文を施す。6～8は無文。

第121図は幾何学的な文様を施す。1～3は「八」状、4・7は区画部に刻線文を施す。8～11は曲線的な沈線文をもち、10は曲線に沿って縄線文を施す。

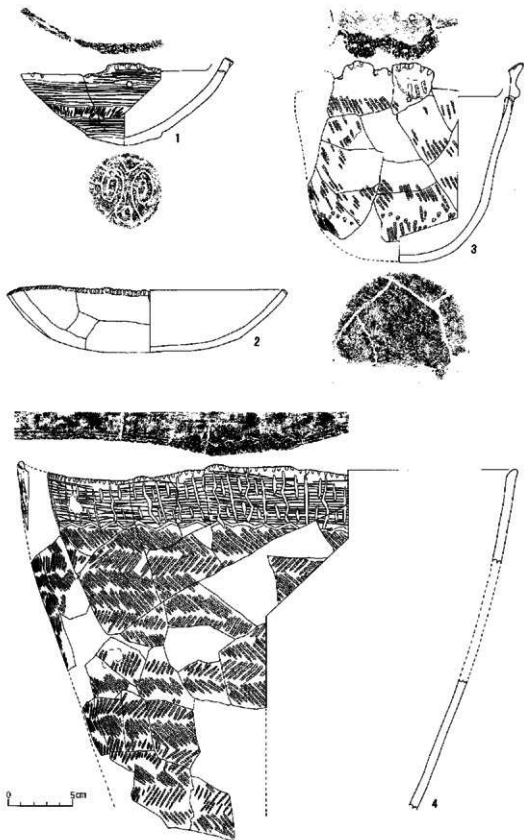
(3)縄文晩期前葉の土器（第122図・第123図・第124図・第125図、図版46-2～4）

第122図は縄文晩期前葉の突瘤文土器。1（図版46-2）はB'93グリッドから出土した口径約38cmの特大型鉢形土器。1は縦走縄文、2は縄線文をもち、3は横走縄文を地文に半載状施文具による刺突文が施される。1・2の突瘤文は横方向から行われる。

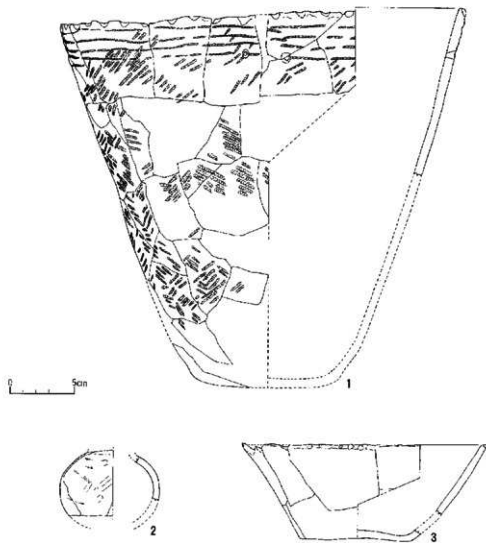
第123図は縄文晩期前葉に比定すると考えられる。1（図版46-3）はO'87グリッド出土。口径約38cmの特大型深鉢土器。口縁直下に横方向から突き刺した突瘤文をもち、上部で斜縄文、胴下部は帯縄文が施される。2～4も横方向から突き刺した突瘤文をもつもので、2は幅の異なる半載状施文具による刺突文が2列みられる。3は半載状施文具による刺突文をもった2本単位の横走沈線文間に波状沈線文、短沈線文を施す。4は半載状施文具による刺突文を施す。

第124図は縄文晩期前葉の爪形文土器。この爪形文は掴み上げた際の捲くれ、盛り上がりをもつものである。1はA95グリッドから出土した口径約45cmの特大型鉢形土器。6は間隔のある「ハ」字状の爪形文。

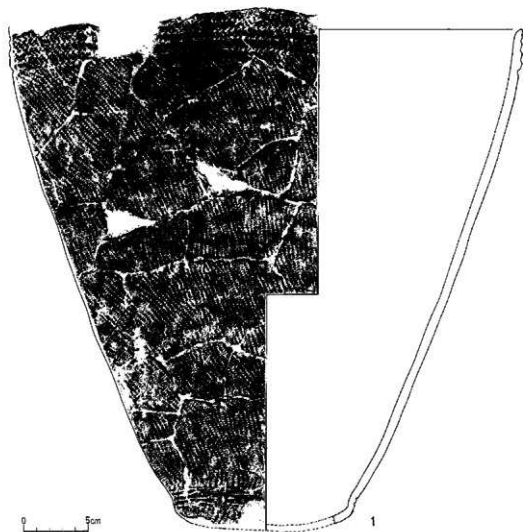
第125図は基本的に縄文を施す。1（図版46-4）はA'92グリッド出土。口径約39cmの特大型深鉢形土器。内面に縦位の縄線文と縄端匠真文、2は口縁部の内外面に縄端匠真文、3・4は口縁部の内面に刺突文を施す。



第112圖 第1・B解出土器(52)



第113圖 第I・II層出土土器(53)



第114圖 第I・II層出土土器(54)

(4)土製品(第126図、図版47)

これらについては縄文晩期、統縄文期と思われるが詳細な時期は不明である。1(図版47-1)はY'103グリッド出土。両側が細く、底部が広がり燃りの細い縄文が施された脚部。2はE86グリッド出土。上部に2個の小孔をもち、全面に刺突文が施され、フクロウを意匠したものとされる。胎上は統縄文後北C₂・D式に類似する。3(図版47-2)・4(図版47-3)は横長の形態をもち、幾何学的な文様が施される。3はH'81グリッド出土。表面のみ施され、複数の小孔が貫通する。4はP88グリッド出土。文様は両面に施される。5・6は円盤状の形態をもつと思われるもので、中央部は孔たれる。7(図版47-4)はY'101グリッド出土。中央部が大きな凹状を呈する。8(図版47-5)はD86グリッド出土。小円盤形の裏面に無数の細い刺突文が施される。

6. 縄文後期の土器

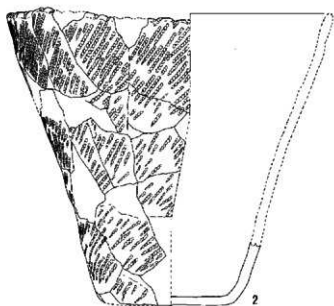
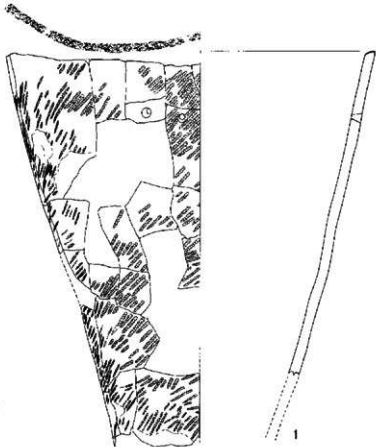
(1)御殿山式相当の土器(第127図、図版46-5~7)

第127図1~4は本遺跡の第Ⅱ層茶褐色砂から出土した縄文後期後葉の御殿山式相当の土器である。1はI'71グリッド。2・3はH'71グリッドから出土したもので、3点セットと考えられる。

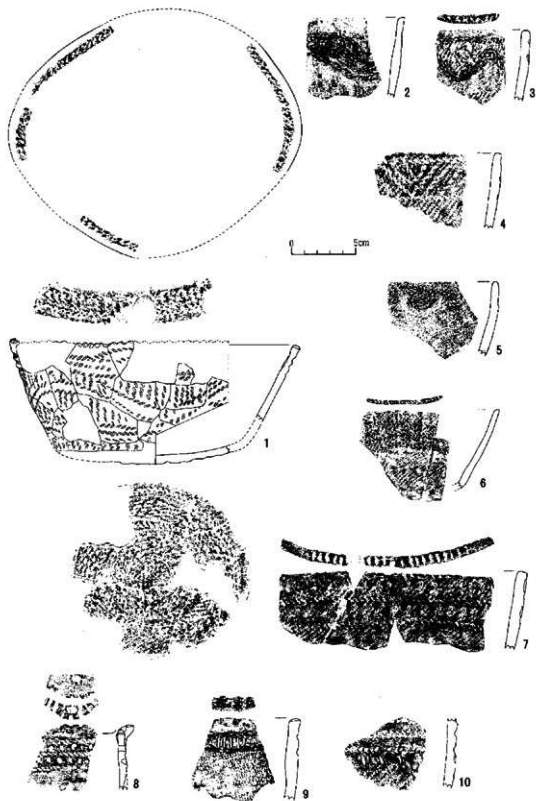
1(図版46-5)は口唇部に刻目をもつ無文の口縁部。口径約19cm。半載状施文具で区画された幅広い頸部に入組文、三叉文が施される。羽状縄文の上部に施された帯縄文で構成される。2(図版46-6)は器高の低い算盤玉形を呈した注口土器で、口縁部と底部、注口部を欠失するものほぼ全体を復元できた。口縁部は無文になると思われる。胴上部と下部は屈曲部の刻目と二条の横走沈線文と重鎮された刺突文で区画される。文様は上下に相対する弧線文による空間部にできた菱形に大小の円形渦巻き文を施したものであり、弧線文と円形渦巻き文の接点にできた三角部分を掘りきっている。3(図版46-7)は無文の口縁部が大きく開く。口径約12cmで口唇部の一部に刻みをもつ。文様帯は1・2条の横走沈線文間にみられるもので複数の山形状、弧線状の沈線文の接点にできた三角部分を掘りきり、細い刻みを施している。文様帯と下部の無文部、口縁部の内側に赤色顔料が塗布されている。4は幅広い無文の口縁下部に刻線文が施される。5は曲線もしくは弧線状の沈線文と接点にできた三角部分を掘りきっている。6は菱形文に渦巻き文を施している。角を削り丸みをもった二次加工の土器片である。7は2本単位の曲線文内部に燃りの細かな縄文を施文する。

(2)堂林式(第128図・第129図・第130図、図版48-1~3)

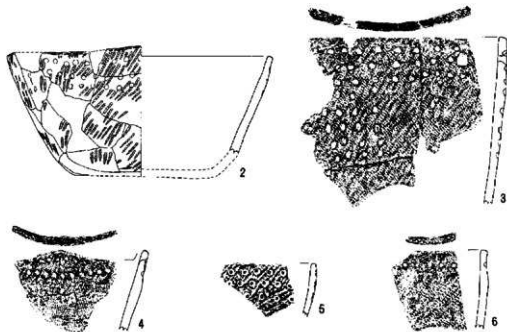
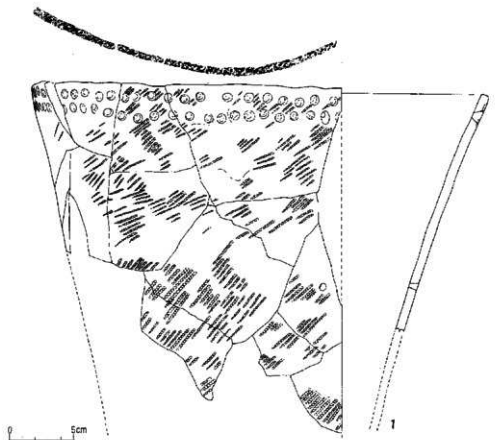
第128図-1(図版48-1)はF'78グリッド出土。口径約28cm、器高約29cmの大型鉢形土器。羽状縄文を地文とし、口縁部に山形小突起をもち、3条の横走沈線文と突瘤文を施す。2(図版48-2)はG'72グリッド出土。口径約15cm、器高約10cmの小型鉢形土器。口縁直下に2条



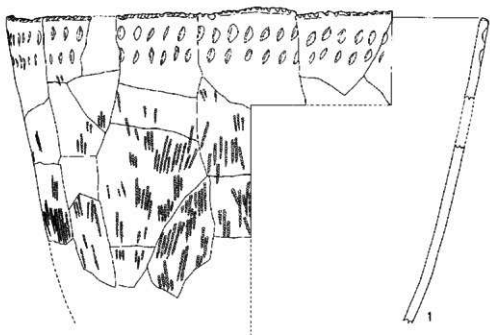
第115圖 第I・II層出土之器(55)



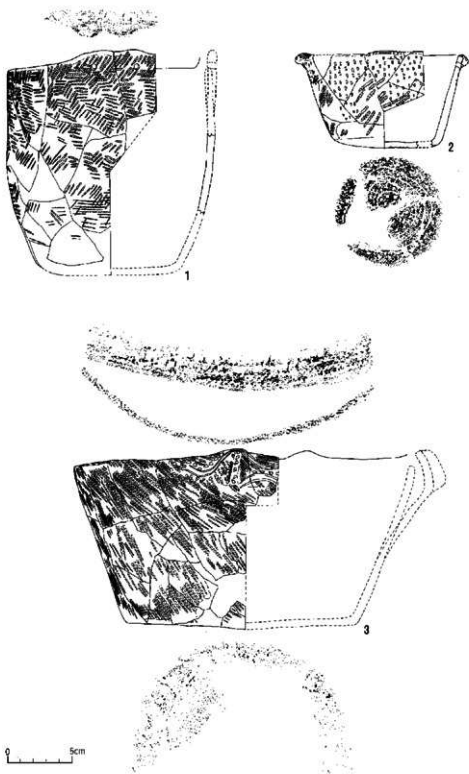
第116圖 第I・II層山土土器(56)



第117圖 第I・II層出土土器(57)



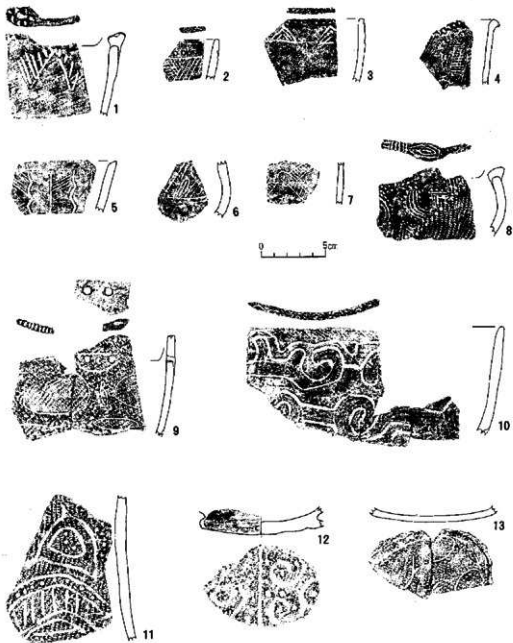
第118圖 第I・II層出土土器(58)



第119図 第I・II層出土土器(59)



第120圖 第I・II層出土土器(60)



第121圖 第I・II層出土土器(61)

の横走沈線文と突瘤文を施す。3(図版48-3)はT'91グリッド出土。口径約26cm、器高約21cmの中型鉢形土器。風化が著しく、部分的に縄文が残る程度である。口縁部に小突起と横走沈線文と突瘤文を施す。4はC'104グリッド出土。口径約20cm、器高約6cmの浅鉢形土器。風化が著しく、文様は確認できない。口縁部に小突起をもつ。

第129図-1は横走沈線文を基準に弧線文を上下に施す。2は複数の小突起をもち、4条の沈線文が垂下する。3はF'89グリッド出土。口径約16cm、器高約13cmの小型土器。器面は羽状縄文となり、口縁部に5個の山形小突起、突瘤文と3条の横走沈線文が施される。4はF'89グリッド出土。底部は欠失するが口縁部にかけて大きく開いた特大深鉢土器である。口径約43cm、口縁直下に突瘤文と3条の横走沈線文が施される。

第130図-1はP'86、Q'87グリッド出土土器が接合した。胴下部は欠失する大型の土器と思われる。口径約27cmの口縁部に小突起と突瘤文、横走沈線文をもち、屈曲した胴中央部にも横走沈線文が施される。2はO'92グリッド出土。横走沈線文をもつ口径約28cmの大型土器である。緩い弧状を描く胴部は無文帯となり、横走沈線文で区画される。

(3) エリモB式 (第131図・第132図、図版48-4~6)

第131図-1は括れた頸部に横走沈線文と刻みをもち、2は壺形と思われるもので、直線的な沈線文によって区画され、羽状縄文が施される。3はC'104グリッド出土。口径約38cmの特大土器。羽状縄文を地文とし、口縁直下に横走沈線文で区画された2列の刻み列と突瘤文が施される。

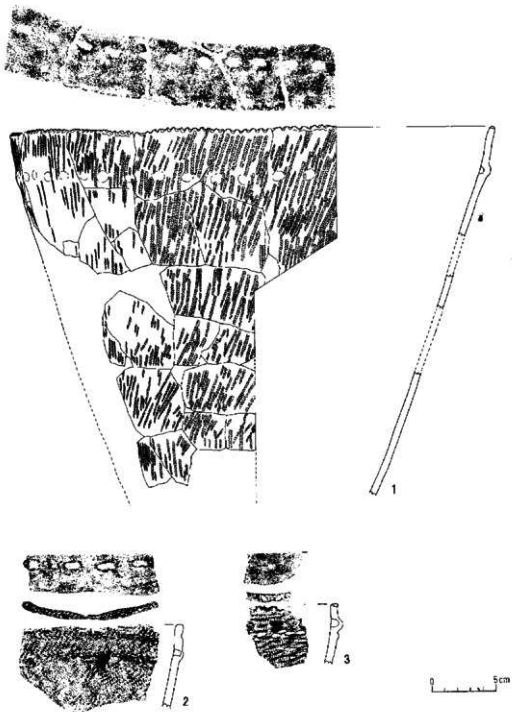
第132図は突瘤文と刻み列をもつ。1(図版48-4)はC'104グリッド出土。口径約25cm、器高約27cmの大型深鉢土器。波状口縁に沿って2段の刻み列をもち、括れた頸部は横走沈線文で区画され刻み列が施される。2(図版48-5)はR'90グリッド出土。口径約20cm、器高約13cmの中型鉢形土器。3(図版48-6)はY'102グリッド出土。口径約18cm、器高約15cmの中型鉢形土器。頸部は僅かに屈曲して無文帯となり、刻み列と沈線文で区画される。

(4) 蛭洞式・船泊上層式 (第133図、図版49-1)

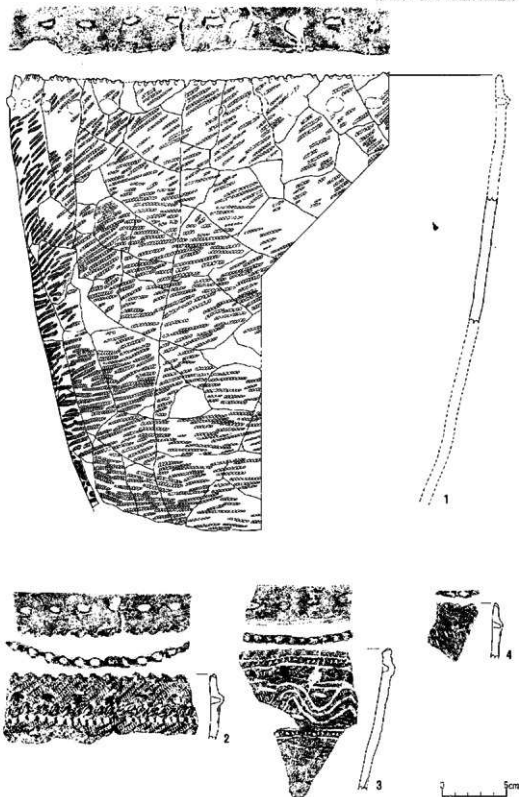
第133図-1・2は口縁部に刻み列が施されるもので、1は口径約37cmの特大深鉢形土器。羽状縄文を地文にやや内湾した口縁部に刻み列が施される。2(図版49-1)はA'102グリッド出土。口径約18cm、器高約15cm。3はW'100グリッド出土。口径約19cm、器高約13cmの小型土器。4はU'101グリッド出土。口径約27cmの中型土器。縄文を地文とするが3は方向を換えて縄文を施す。5は船泊上層式。

7. 縄文中期の土器 (第134図・第135図・第136図、第137図・第138図、図版49-2~5)

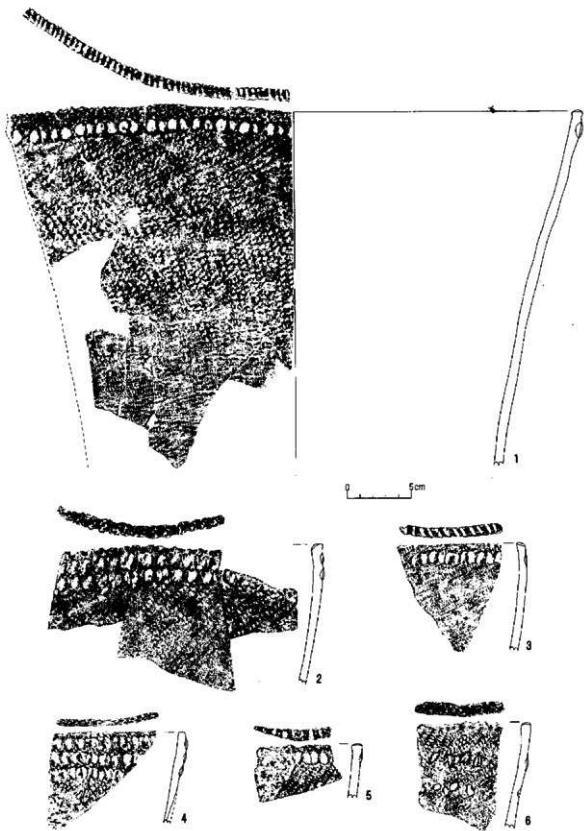
第134図-1~3は北筒Ⅲ式に比定される。1は平縁、2・3は山形小突起をもち、3は無節



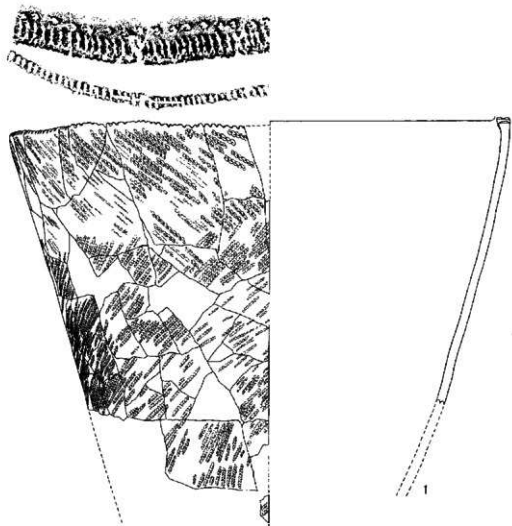
第122圖 第I・II層出土土器(62)



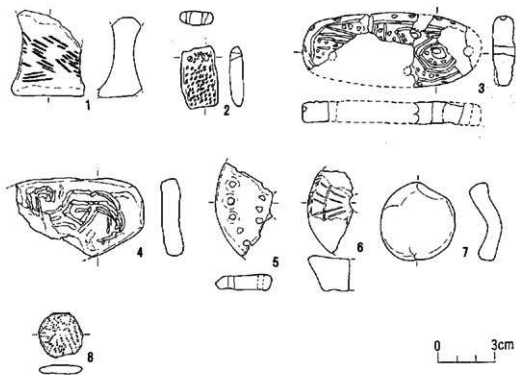
第129圖 第I・II層出土土器(63)



第124圖 第I・F層出土土器(64)



第125圖 第I・II層出土土器(65)



第126圖 第I・II層出土製品

の斜縄文が施される。4（図版49-2）はM'97グリッド及び127号竪穴埋土から出土したものである。幅広い肥厚帯に縦位の隆帯を4個もつ。羽状縄文が施され、胎土に繊維を僅かに含む。

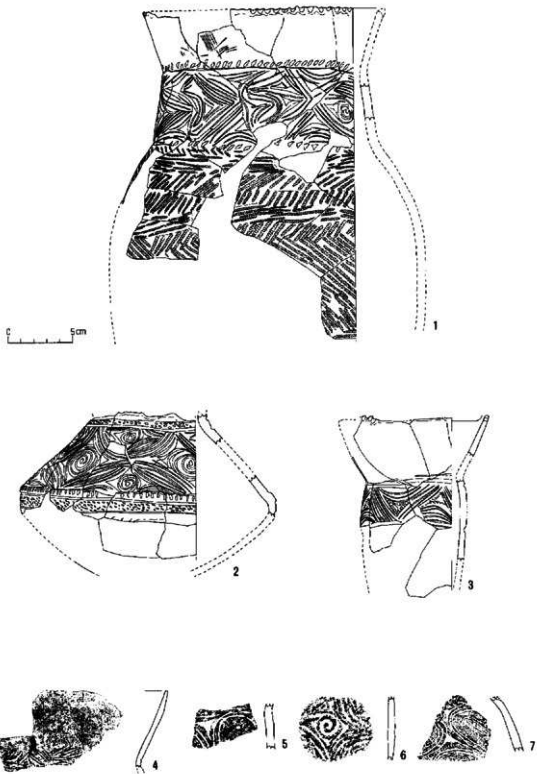
第135図-1～3は羅臼式。1は口縁部と並行する太い隆帯に縄文を押捺した縦位の隆帯をもつ。2も同様の隆帯をもち、円形刺突文が施される。3は無文部に円形刺突文と短縄文が押捺される。

4～6は詳細な時期は不明である。4は燃りの太い縄文を押捺し、5は幅約2mmと幅約5mmの異なる施文具を右側から左側にかけて交互に押し、下部に燃りの太い縄文を押捺する。6は横走沈線文と押し文を交互に施す。

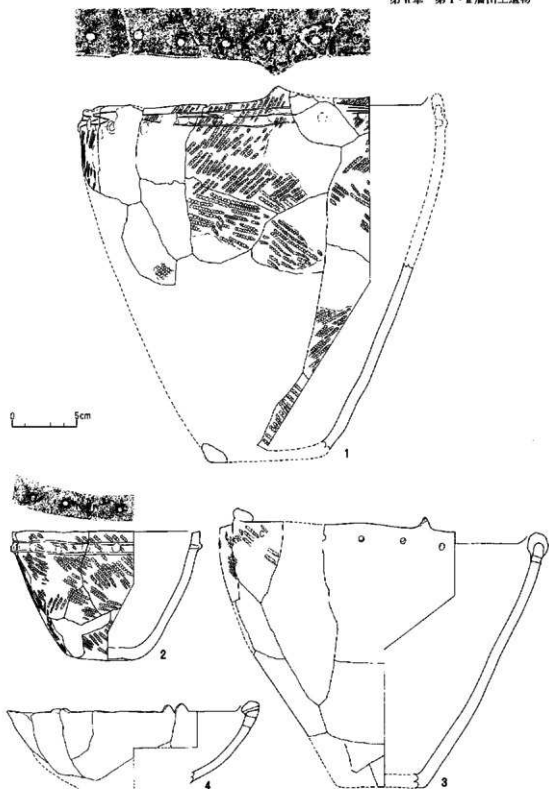
第136図-1～3も詳細な時期は不明である。1は無文帯を右側から左側にかけて施された押し文によって区画され、「□」状の刺突文が加えられる。器面は羽状縄文となる。2は切出状の口縁部から太い隆帯が垂下する。無節の羽状縄文を地文に半載状施文具による押し文が「八」状に施される。3は羽状縄文を地文に2本の横走沈線文が施される。4・5は切り出し状の口縁部に縦位の刻線文を施すトコロ六類。4（図版49-3）はJ'88グリッド出土。円形刺突文をもたない。口径約15cm。5（図版49-4）はV'98グリッド出土。円形刺突文をもち、器面は結節羽状縄文が施される。2点とも胎土に繊維を含む。6は口縁下部に円形刺突文をもち、縦横に押し文が施される。7は山形突起から縦位の隆帯が垂下し、低い肥厚帯とその下部に円形刺突文が施される。6・7は（古）トコロ六類。

第137図-1（図版49-5）はN'80グリッド出土のトコロ六類。口径約25cm、残存部の器高約45cmの特大筒形土器。口縁部に8個の山形突起をもち、肥厚帯の下部に円形刺突文が施される。胎土に植物繊維を含む。2～6は明瞭な肥厚帯をもち、円形刺突文と押し文が施される（古）トコロ六類。全点とも胎土に植物繊維を含む。

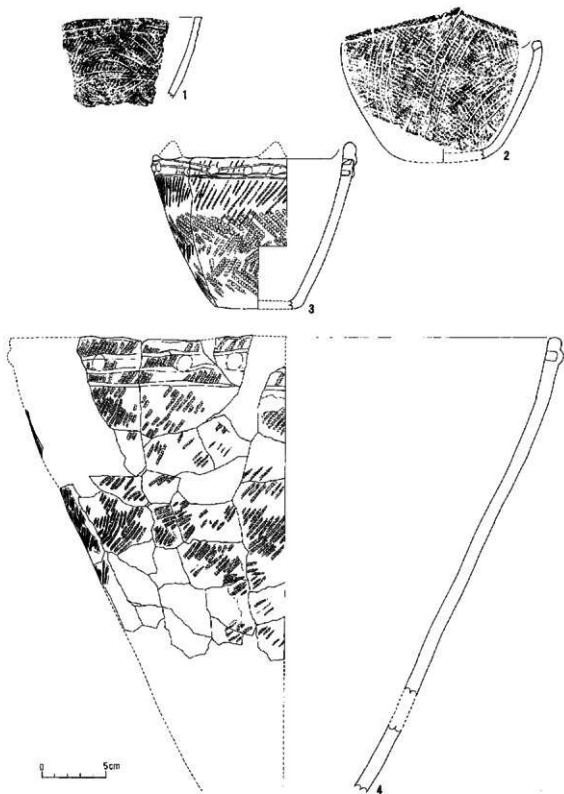
第138図-1～3は切り出し状の口縁部に円形刺突文、押し文を施す。3は縦線文がみられる。胎土に繊維を含む。4は外反した口縁部に円形刺突文を施し、口唇部は押しされる。いずれも胎土に繊維を含む（古）トコロ六類。



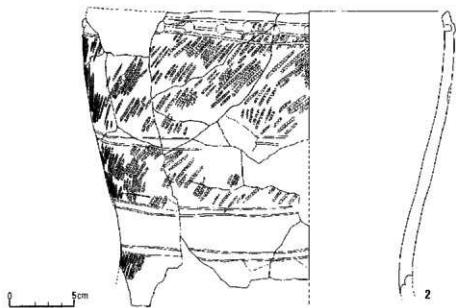
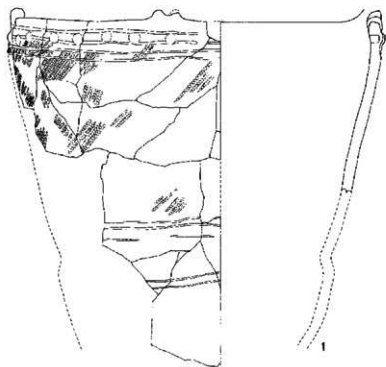
第127圖 第I・II層出土土器(66)



第128圖 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(67)



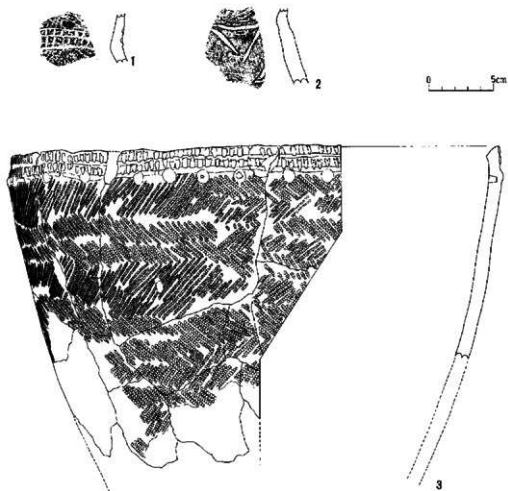
第129圖 第I・II層出土器(68)



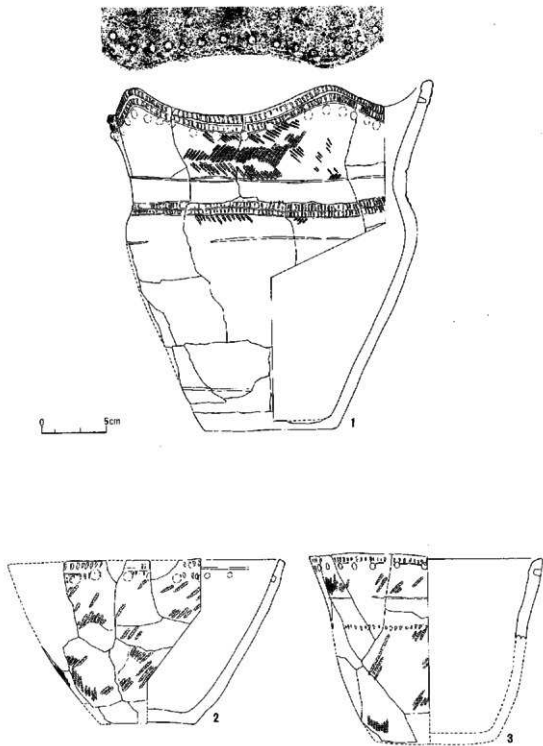
第130圖 第I・II層出土土器(69)

8. 縄文前期・早期の土器（第139図）

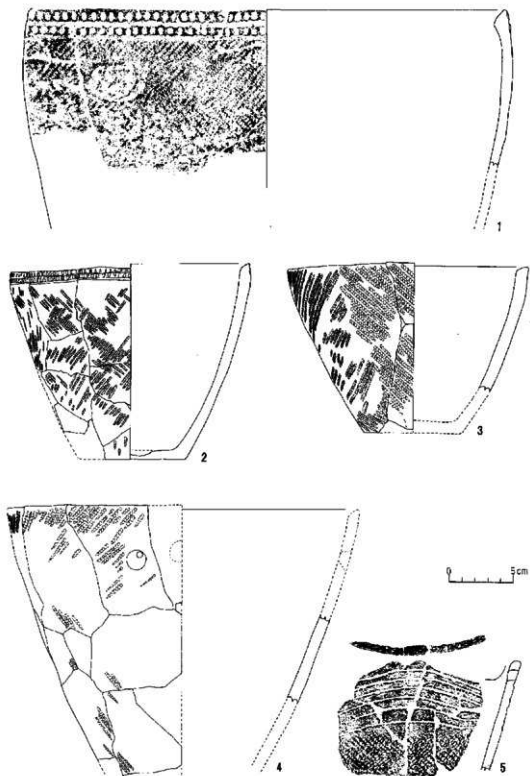
第139図-1～3は縄文前期の網走式。2・3は口縁下部に横位の太い隆帯をもち、指頭により押圧される。4は縄文前期の岐阜ⅡA群。口縁部に隆帯、沈線文と外側からの突瘤文をもち、燃糸文が施される。5～8は器壁が厚く、胎土に植物繊維を含む縄文前期の底部尖底土器群朱円式と考えられるものである。5は器壁は剥落するが壁かに燃糸文がみられ、山形口縁部の下部が浅い凹状を呈する。一見、第四層出土の平底押型土器の印象を受けるが繊維を含み、断面の角度からも底部尖底と思われる。7は口縁部に太い隆帯をもち、矢羽根状の押型文が施される。胎土は砂粒が多く混入する。8は無節、もしくは燃糸文を施す。9は本遺跡から出土した唯一の縄文早期東鋼路Ⅲ式。表裏面とも磨耗が著しいが燃りの細い縄文を羽状に施す。遺跡からはこの時期の包含層は認められないこと、他の時期でも水流の影響を受けたと思われる土器は磨耗がみられることから流れ込みによるものと思われる。



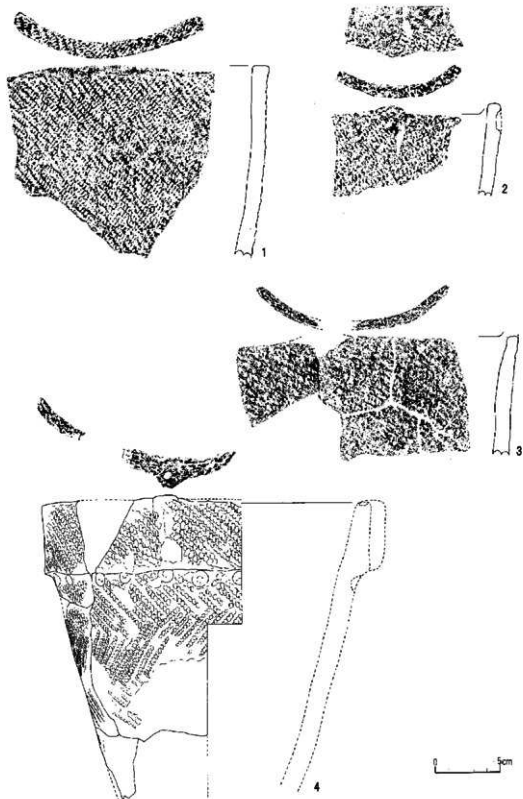
第131圖 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(70)



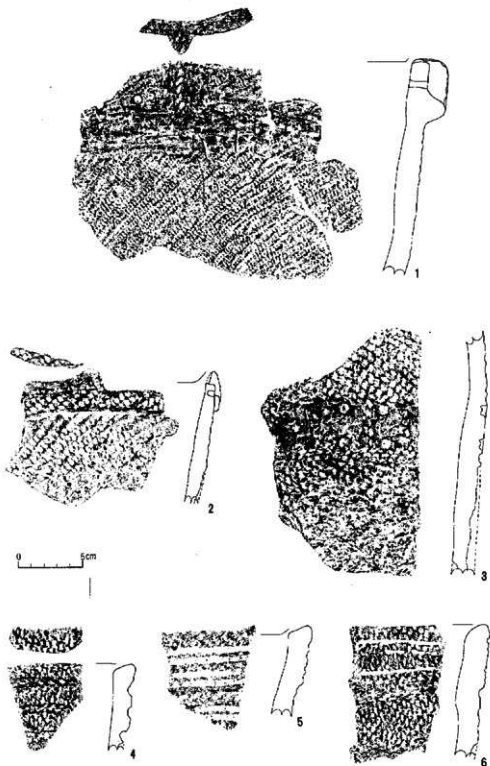
第132圖 第1・II層出土土器(71)



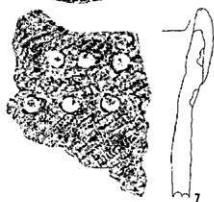
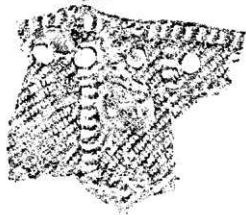
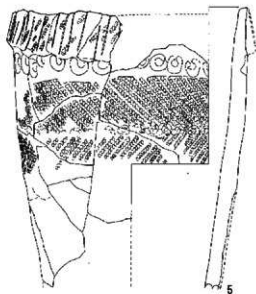
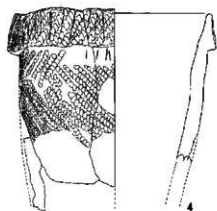
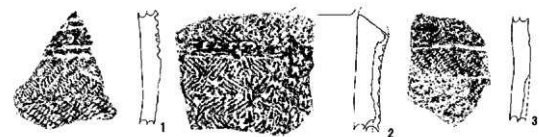
第133圖 第I・II層出土土器(72)



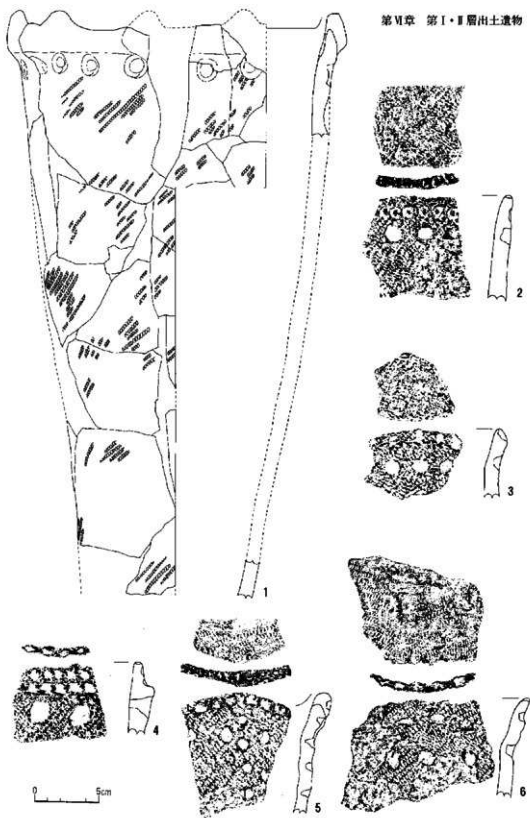
第134圖 第I・II層出土土器(73)



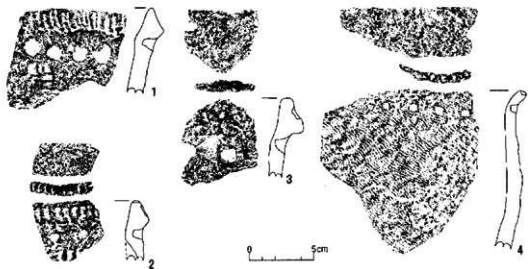
第135圖 第I・II層出土土器(74)



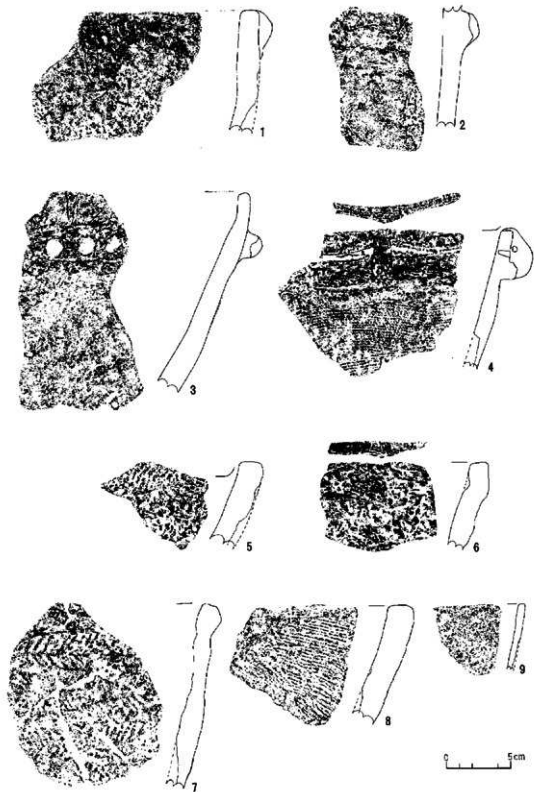
第136圖 第1・Ⅱ層出土土器(75)



第137圖 第I・II層出土土器(76)



第138圖 第1・II層出土土器(77)



第139圖 第Ⅰ・Ⅱ層出土土器(76)

第Ⅶ章 第Ⅳ層出土の土器

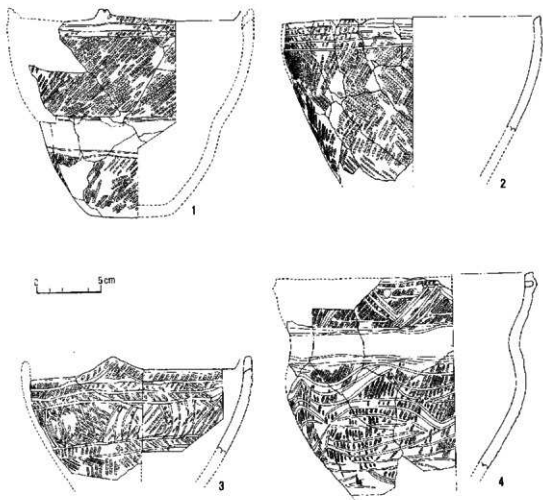
第Ⅳ層の概要

本層は縄文後期堂林式等の包含層である。これまで4.5mと比較的標高の高いH'・I'・J'の52～55グリッドで堆積を確認し、遺物や集積・焼土の遺構を検出してきたが、今回の区域は標高約4mのやや低い位置にある。第Ⅳ層は表土下約50cmのレベルにあるが、不安定な下層の影響もあり堆積は起伏がある。層厚は約4～12cmである。

第140図に示すとおり土器を主体とする遺物の出土状況から判断するとC'88・89、D'91、E'89・90、F'90・91グリッドで特に集中する傾向を示し、フレーク・チップ集積を伴う共通点がある。焼土はD'89、E'90、H'90グリッドで検出したものの遺物集中域からやや外れた位置にある。

遺物（第141図、図版50-1・2）

第141図は堂林式。1（図版50-1）はE'86グリッドのⅡ層・Ⅳ層、E'87、C'89グリッド及びピット921埋土など広い範囲に散在していたものであるが、基本は第Ⅳ層にある。口径約19cm、器高約16cmの中型鉢形土器である。口縁部に刻みをもった小突起をもち、横走沈線文をもつ。横走沈線文で区画された胴部は屈曲する。2（図版50-2）はF'90グリッド出土。口径約20cmの中型鉢形土器。器面は羽状縄文、口縁直下に横走沈線文が施される。3はE'90グリッド出土。口縁部に山形小突起をもち口径約19cmの中型鉢形土器。羽状縄文を地文として横走沈線文間に縦位の弧線文を施す。4の底部は欠失するもののE'84、F'84・86グリッド出土土器が接合した。口径約20cmの中型鉢形土器。口縁部と胴部は頸部の無文帯で仕切られ、口縁部は突瘤文と山形沈線文、胴部は上下相対する弧線状の沈線文が施される。



第141圖 第Ⅳ層出土土器

第Ⅷ章 第Ⅵc層出土の土器

第Ⅵc層の概要

本層は標高約4m前後のレベルに堆積する。縄文後期エリモB式等の包含層である第Ⅳ層と無遺物層である第Ⅴ層の下部にあるもので間層を挟み、明らかに時間差がある。第Ⅵ層は炭化粒子を多量に含む硬く締まった黒褐色土であり、擦文期、統縄文期の堅穴によって切断される箇所があるものの、起伏のない比較的安定した堆積を示す。層厚約8cm～16cm。

第Ⅵ層は既に報告しているとおりH'52～68、I'52～68グリッド周辺に限定してみられ羅臼式土器が出土している。しかし、遺構はなく、出土遺物も少量であるためこの時期と断定できなかったが、今回は炉跡を伴うことから羅臼式の包含層であることが確認できた。

遺 構 (第142図)

本層に伴う遺構にE'91グリッドで検出した炉跡がある。炉跡は南北方向に長く、規模は長軸約2.40m。短軸は北側が約1m、南側が約30cmである。比較的良く焼けている。

第143図に示す土器は炉の東側から出土したもので、炉跡に伴うものと判断できた。炉跡の西側にある黒曜石主体の4箇所フレーク・チップ集積も本層に伴う。

遺 物 (第143図、第144図、図版50-3)

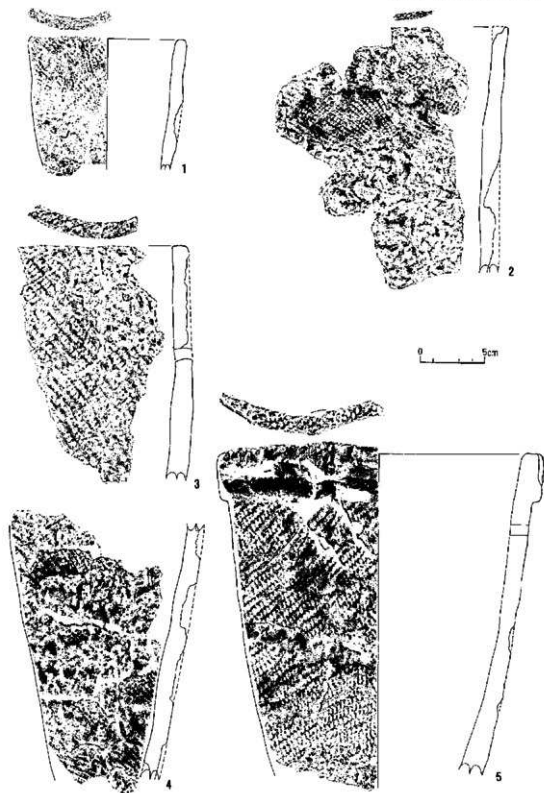
第143図の出土土器は炉跡の東側からまとまって出土した。一括土器と思われたが複数の個体が混在していた。5点とも角形の口唇部をもち、胎土に植物繊維を含まない。1～3は斜縄文を施す。口径約10cmの小型筒形土器。3は粒子の粗い砂粒を含む。4は胴部幅の狭い小型筒形土器。5は無文の口縁直下に降帯が横走り、小突起から垂下した降帯には縄文が捫捺される。

第144図-1 (図版50-3)はF'87グリッドから出土。胴下部は欠失するが口径約26cmの大型筒形土器。口縁部の幅広い肥厚帯に6個の縦位の太い隆帯をもち、下部に幅の広い寛状の施文具を用いた刺突文が下方から施される。器面は無文帯を設けて複節斜縄文が施される。胎土は粒子の粗い砂を含み、繊維は混入しない。

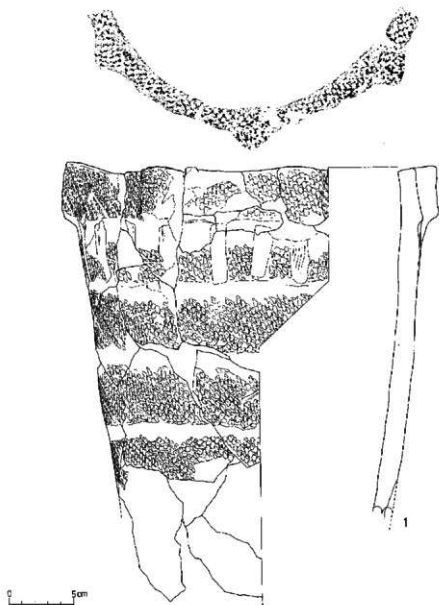
常呂川河口遺跡



第142圖 第M3層遺物出土分布図



第143圖 第Ⅱc層出土土器(1)



第144圖 第Ⅲc層出土: I: 33 (2)

第Ⅴ章 第Ⅷ層の遺構と遺物

今回掲載するのは既刊の常呂川河口遺跡発掘調査報告書(2)で報告されなかったもの及びその後の調査で新たに検出した遺構である。本層は縄文中期トコロ六類、常呂川河口押型文Ⅰ群の包含層であり、検出したピットはこれらの時期に伴うものである。

ピット 7

遺構 (第145図)

本ピットはH'53グリッドに位置する。規模は長軸約0.76m、短軸約0.60mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約22cmを測る。遺物は出土していない。

ピット 8・9

遺構 (第145図)

本ピットはH'55グリッドに位置する。両ピットは重複するようであるが攪乱を受けているため新旧関係は不明である。規模はピット8が径約1.2m前後、ピット9が径約1mの円形を呈する。両ピットも浅い皿状の掘り込みをもつもので、高さは確認面からピット8が約10cm、ピット9が20cmを測る。

遺物 (第146図-1~3、第147図、第148図-1・2)

第146図-1・2はピット8の埋土出土。1は胎上に植物繊維を含む。トコロ六類であろう。2は縄文前期末葉の平底押型文土器と共伴する櫛目土器。

3はピット9の埋土出土。口縁直下と下部の隆帯上下に円形刺突文をもち、羽根状の押型文が施される。常呂川河口押型文Ⅰ群。

第147図-1~5はピット8の埋土出土の石錘。2が3箇所打ち欠きであるが、他は4箇所打ち欠きである。3は泥岩製であり、他は砂岩製。6は凹石。石皿を転用したもので、縦位に複数の凹部をもつ。砂岩製。

第148図-1・2はピット9の埋土出土。2点とも4箇所打ち欠きの石錘。泥岩製。

ピット 10

遺構 (第145図)

本ピットはH'54・55グリッドにまたがって位置する。規模は直径約0.48mの円形を呈する。壁は「V」字状に立ち上がり、高さは確認面から約20cmを測る。埋土中に微細な骨粉、炭化物を混入する。

ピット 11・12

遺構 (第145図)

ピット11はG'62・63グリッドにまたがって位置する。規模は長軸約0.80m、短軸約0.44mの楕円状であるが、西端側が内側に膨む変形した形態である。高さは確認面から約10cmを測る。

ピット12はH'63グリッドに位置する。規模は長軸約1.2m、短軸約0.94mの楕円形を呈する。高さは確認面から約26cmを測る。

遺物 (第148図-3・4)

2点ともピット12の埋土出土。3は長い柄部をもつ有基石鏃。4は砥石。裏面のはぼ中央部に7～8mmほどの小さな凹部を複数もつ。3は黒曜石製、4は砂岩製。

ピット 13・14

遺構 (第145図)

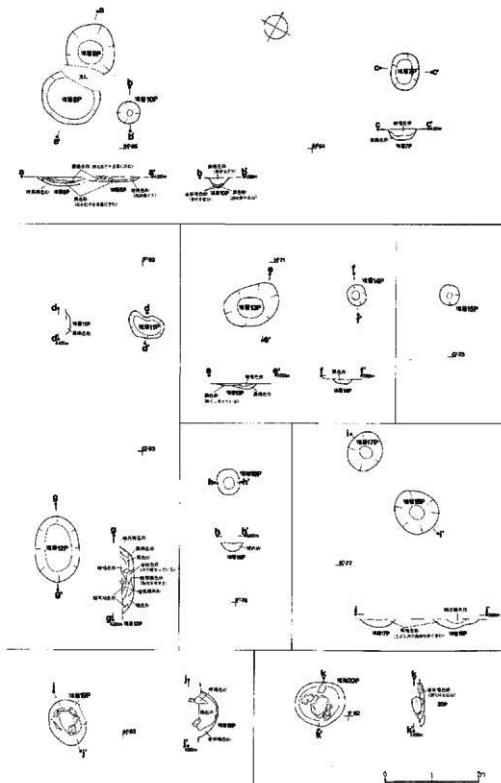
ピット13はI'71グリッドに位置する。規模は長軸約1.2m、短軸約0.84mの楕円形を呈する。壁高は確認面から約10cmを測る。

ピット14はI'70グリッドに位置する。規模は径約0.40mの円形を呈する。壁高は確認面から約10cmを測る。

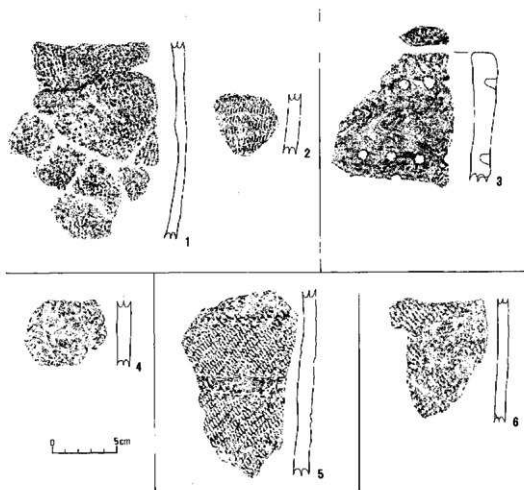
遺物 (第146図-4・5)

4はピット13の埋土出土。器面は無文であるが、胎土に植物繊維を含む。焼成等からトコロ六類と思われる。

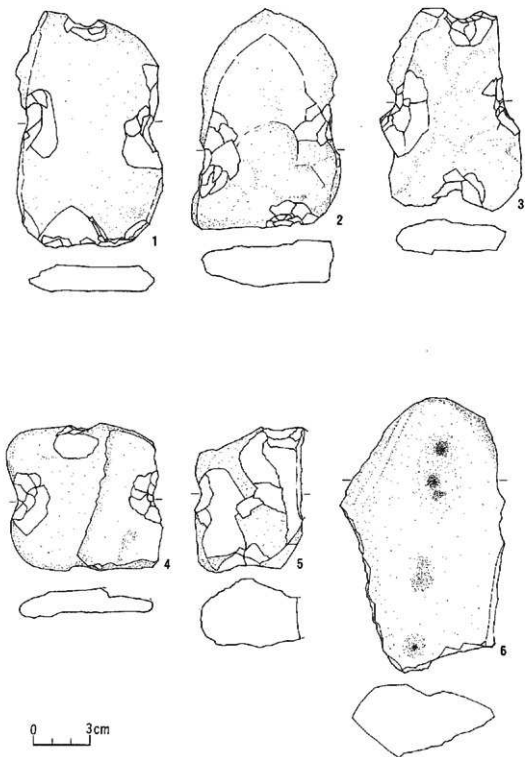
5はピット14の埋土出土。約1～2cmの無文帯をもち、LRの斜縄文を施したトコロ六類。胎土に植物繊維を含む。



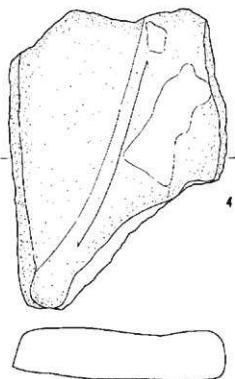
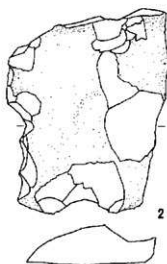
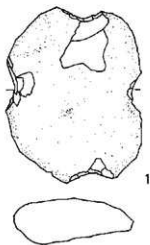
第145図 第Ⅷ層ピット7・8・9・10・11・12・13・14・15・16・17・18・19・20平面図



第146圖 第Ⅱ層ピット 8 堀土、9 堀土、13堀上、14堀土、19堀土出土土器



第147図 第Ⅱ層ピット8埋土出土石器



第148圖 第Ⅷ層ピット9埋土、12埋土出土石器

ピ ッ ト 15

遺 構 (第145図)

本ピットはG'73グリッドに位置する。規模は径約0.4mの円形を呈する。

ピ ッ ト 16

遺 構 (第145図)

本ピットはF'74グリッドに位置する。規模は径約0.50m前後の円形を呈する。壁は丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約26cmを測る。

ピ ッ ト 17・18

遺 構 (第145図)

両ピットともK'76グリッドに位置する。ピット17の規模は径約0.80m前後の円形を呈する。皿状に浅く掘られており、高さは確認面から約16cmを測る。

ピット18の規模は径約0.9cm前後の円形を呈する。皿状に浅く掘られており、高さは確認面から約20cmを測る。

ピ ッ ト 19

遺 構 (第145図)

本ピットはH'92グリッドに位置する。規模は長軸約1m、短軸約0.74mの楕円形を呈する。壁は床面から丸みをもって立ち上がり、高さは確認面から約40cmを測る。ピット上部では6点の角礫が壁際に取り囲む様に配置されている。

遺 物 (第146図-6)

LRの斜縄文を施す。胎土は砂粒を含みザラザラし、植物繊維を僅かに混入する。

ピ ッ ト 20

遺 構 (第145図)

本ピットはF82グリッドに位置する。規模は径約1m前後の円形を呈する。ピット中央部に幅約40cmの角礫と周囲に幅約20cmの小角礫を配置する。壁高は確認面から約10cmである。

第Ⅷ層出土の土器

遺物（第149図・第150図・第151図、図版50-4～6）

第149図-1（図版50-4）はJ'82グリッド出土。口径約24cmのトコロ六類土器。口縁部は切り出し状を呈し刻線文と下部に円形刺突文をもつ。器面は結束羽状縄文が施される。

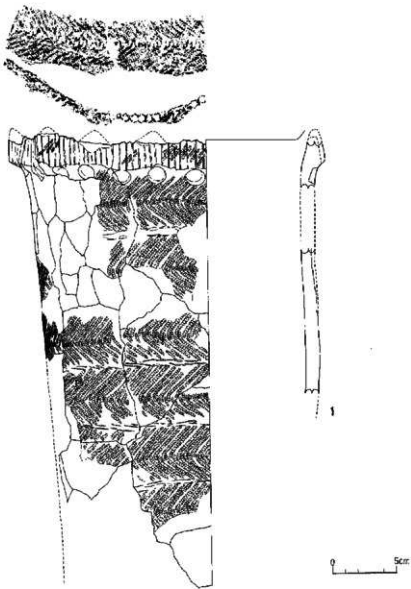
第150図-1（図版50-5）はH'84グリッド出土。口径約19cmのトコロ六類土器。口縁部は切り出し状を呈し、10個の小突起をもつ。下部に円形刺突文、器面は斜縄文が施される。2（図版50-6）はI'82グリッド出土。口径約23cmのトコロ六類土器。口縁部は切り出し状を呈し、下部に円形刺突文をもつ。器面は胴上部を斜縄文、胴部を羽状縄文が施される。

第151図-1はI'56グリッド出土した縄文中期の平底押型文土器。口径約35cm、器高約51cmの大型鉢形土器。口縁部は本層出土の中で一般的にみられた切り出し状でなく、第Ⅶ層出土の常呂川河口押型文Ⅰ群と同様の角形を呈するものの、縦位の隆帯をもつことと円形刺突文が消失し下方からの刺突文の多用など類似点がある。押型文は山形文と矢羽根文を施す。

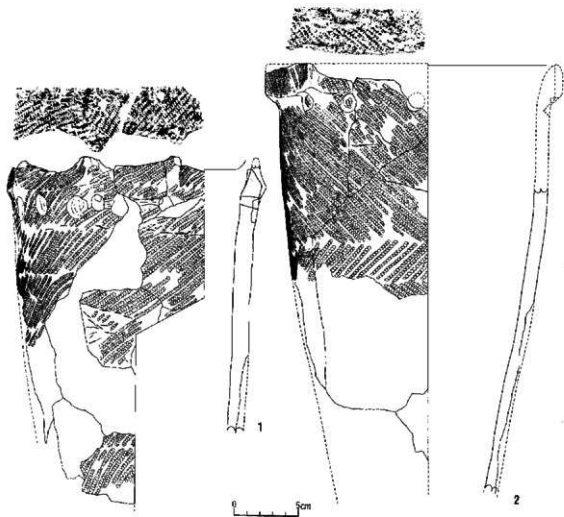
第X章 第XII層出土の土器

遺物 (第152図、図版51-1)

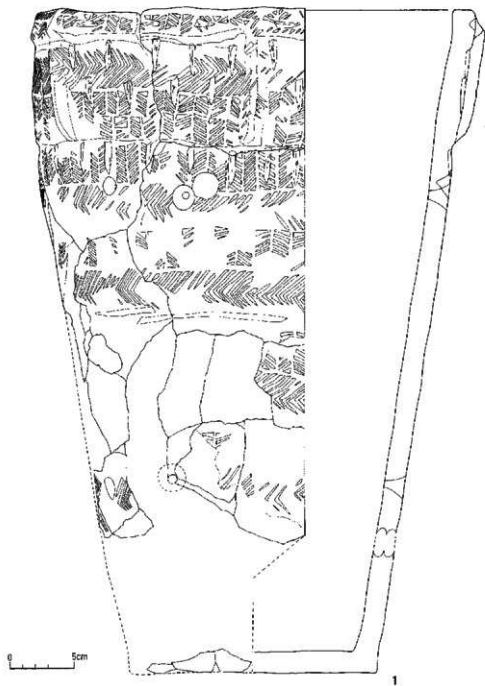
第152図は口縁直下に円形刺突文が施される縄文前期末葉の平底押型文土器。1 (図版51-1) はJ'71グリッド出土。統縄文期の36号竪穴の床面検出時に本層から出土していたものである。口径約35cm、大型筒形土器。器面は山形、短冊形の押型文を交互に施文する。2はK'80グリッド出土。口径約26cmの中型筒形土器。器面は山形の押型文を施す。



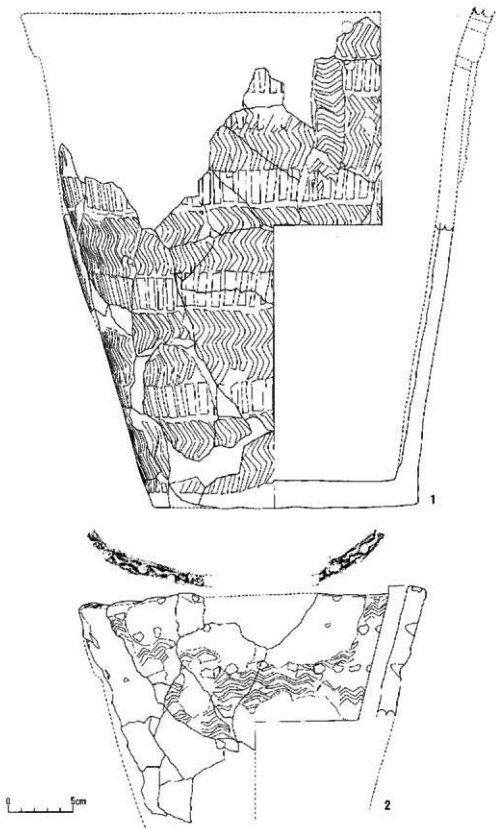
第149圖 第Ⅱ層出土土器(1)



第150圖 第XII層出土土器(2)



第151圖 第Ⅱ層出土土器(3)



第152圖 第五層出土土器

第XI章 第XIVc層出土の遺物

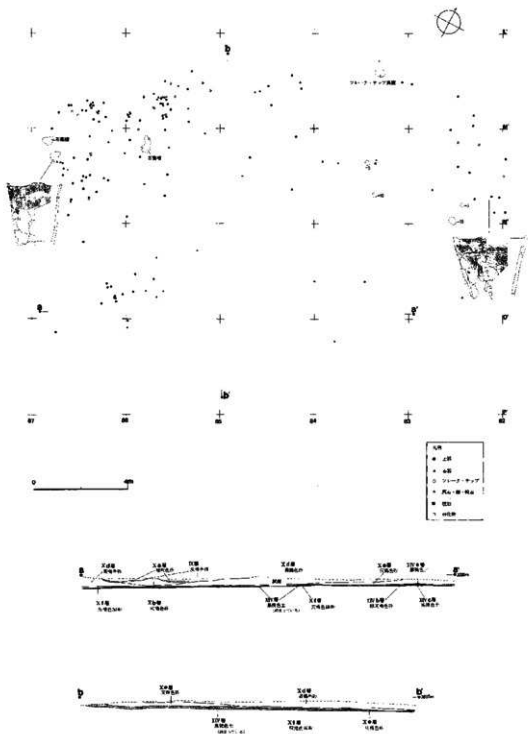
第XIVc層の概要

本層は縄文前期後葉に比定される平底押型文土器が出土する層厚約4～5cm前後の硬く締まった黒色土層である。部分的に数cmの層厚をもって分層する箇所があるものの、一連の同一層と思われる。N'96グリッド出土と同形態の土器は第Ⅷ層から主体的に出土している。本層と第Ⅷ層の上部には角礫を多量に含む灰褐色砂が堆積することから同一層の可能性はあるものの本層と第Ⅷ層は遺構の切り合いや、第Ⅷ層検出の石囲み炉群と本層との間に1～1.3mのレベル差があることなどから明確にすることはできなかった。また、第Ⅷ層と第Ⅵ層前期中葉の網文式の包含層とは約4～5cmの暗灰褐色細砂の間層があり、明らかに時間差がある。

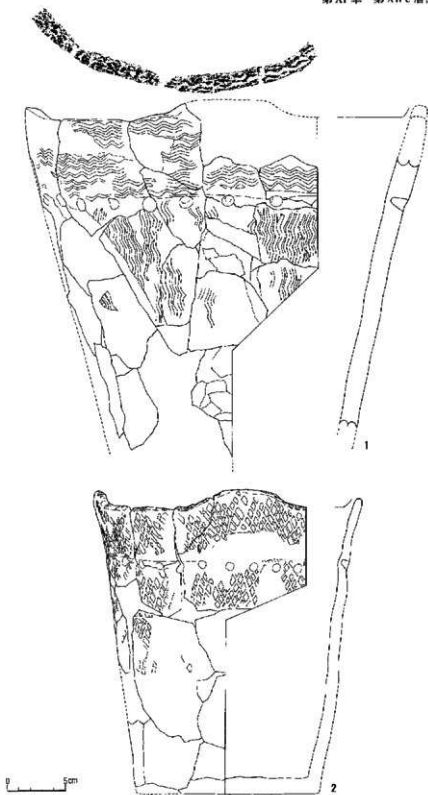
遺物 (第154図、第155図、図版51-2・3)

第154図-1 (図版51-2) はN'82グリッド出土の常呂川河口押型文Ⅱ群。口径約34cm。胴下部は欠失するものの特大型の筒型土器である。口縁部の幅広い肥厚帯下部に円形刺突文が施され、口唇部は角形を呈し台状突起をもつ。施文は波状文を肥厚帯で横位、胴部で縦位に施し、胴下部は無文になる。2 (図版51-3) はN'86グリッド出土の常呂川河口押型文Ⅱ群。口径約24cm、器高約26cmの中型筒形土器。口縁部に明瞭な肥厚帯をもたないものの円形刺突文が施される。口唇部は角形を呈し台状突起をもつ。施文は菱形文であり、胴下部は無文となる。

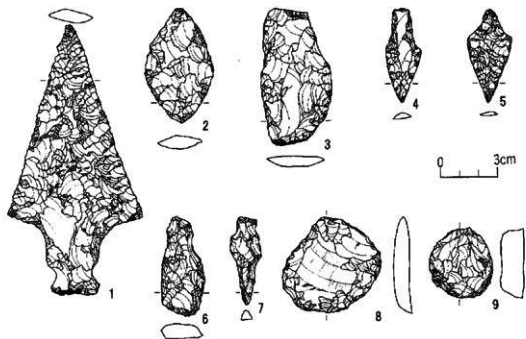
第155図-1 は表裏面とも入念に調整され、基部は左右から凹部が加えられた石槍。2・3は両面加工ナイフ。4・5は先端部が先鋭化された片面加工ナイフ。6・7は石匙。8・9は円形搔器。7は硬質頁岩製であり、他は黒曜石製。



第153図 第XIV層遺物出土分布図



第154圖 第XIV層、XIVc層出土土器



第155圖 第X層出土石器

第XII章 第XVI層出土の遺物

第XVI層の概要

本層は縄文前期中葉の縄文式土器の包含層である。シルト混じりで硬く締まった層厚約2～8cmの黒褐色土層が西側から東側にかけて堆積する。平底押型土器が出土した第XVa層とは層厚約2～3cmの暗灰褐色砂層に間に挟むため、前後関係は明らかである。

本層の上面には大小3箇所の軽石堆積域がみられる。最大はM'84～M'86グリッドにまたがり長さ約9.80m、次にL'82グリッドにある長さ約3.5mのものである。最小はN'83グリッドのものが長さ約2mである。層厚はいずれも約4cm。軽石は直径約1～4cm前後であるが、変質を受け粘土化している。ガラス組成分析の結果、K₂O量が摩周火山灰ほど低くないため、それ以外である可能性が高いと報告を受けるが、資料の状況が良くないため正確な起源火山は不明である。

遺物は主にL'82・83グリッド、P'83・84グリッドに集中し、周辺のグリッドからも偏在的に出土している。特にP'83・84グリッドでは第157図-6と第158図-1に示す土器が出土し、黒曜石主体のフレーク・チャップ集積が4箇所認められた。

遺物 (第157図、第158図、第159図、図版51-4・5)

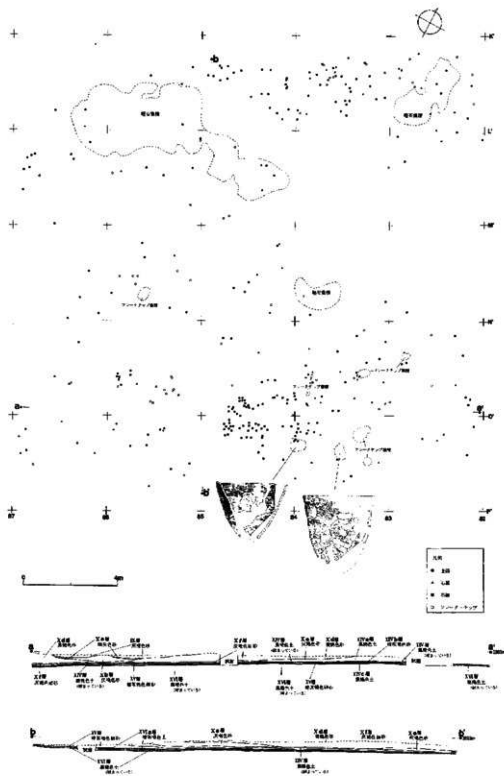
第157図-1～6は縄文前期中葉に比定される縄文式である。いずれも幅約6mm～1cmの太い縄状の縄文を押し捺す。胎土に多量の植物繊維を含み口唇部は平縁、底部は丸底となる。6(図版51-4)はP'84グリッド出土。底部は欠失するが口縁部にかけて大きく開いた器形をもつ。口径約34cm、器高推定23cmの大型土器。

第158図-1・2も縄文式である。1(図版51-5)はP'84グリッド出土。口径、器高とも推定37cmの大型土器。口縁部は壁かに外半し、底部は丸底となる。2はL'84グリッドから出土した縄文式の底部周辺のもの。

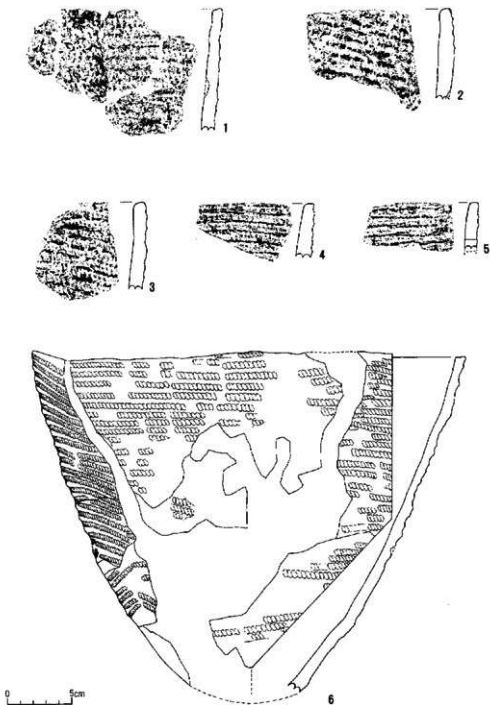
本層から出土した石器の量は少ないが第159図に示す各種のタイプがある。1～10は無茎石鏃。11は基部が欠失するものの無茎石鏃と思われる。12は有茎石鏃。3・5～8・12は主要剥離面側の縁辺部に加工を施す。13・14はつまみの付いたナイフである。13は両面加工、14は片面加工ナイフ。15～18は縦長、19は横長の石匙。20は両面加工、21・22は片面加工ナイフ。23は石錐。24～26は縦長搔器、27・28は円形搔器。21はメノク製であり、他は黒曜石製である。

附編Ⅶで報告されている通りこれらの石器は白滝産石沢系が主体である。

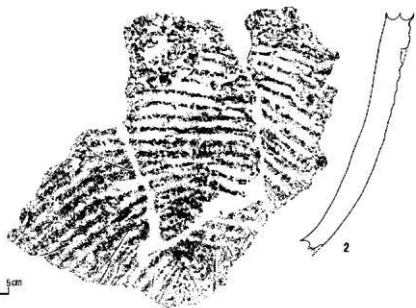
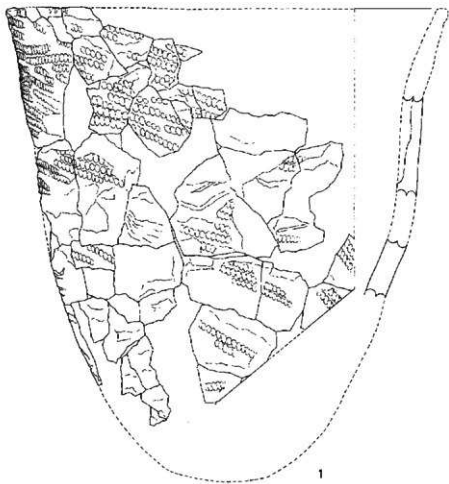
常呂川河口遺跡



第156図 第XV層遺物出土分布図

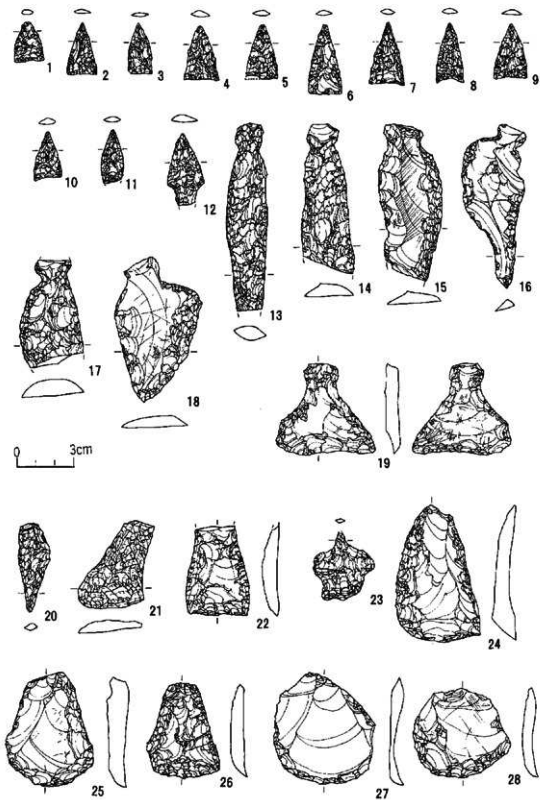


第157圖 第XVI層出土土器(1)



0 5cm

第158圖 第XVI層出土土器(2)



第159圖 第XV層出土石器

第XIII章 まとめと若干の考察

本遺跡の発掘調査は昭和63年に着手し、平成14年に終了した。調査中から整理作業をすすめ順次報告書を作成してきた。今回で最終の8巻目となる。既刊の報告書では調査の注目される点に絞ってまとめてきたが、本章はこれまでのまとめの総括と若干の考察を加えて本遺跡の特徴を明らかにすることとした。

第1節 アイヌ文化

1. 堅穴埋土内の送り場

本遺跡から検出したアイヌ文化期の遺構に送り場がある。宇田川祥氏は送り場形式に堅穴住居跡などの凹地利用、石積み遺構など5形式をあげ、中でも堅穴住居跡などの凹地利用の形式は道東部に多くみられる形式として指摘している。本遺跡においても據文文化期の堅穴である121号堅穴埋土・138号堅穴埋土・159号堅穴埋土内の3軒から凹地利用の送り場が認められた。

121号堅穴埋土の送り場はカワシンジュガイを主体とする貝送り場である。径約3～4mの範囲に層厚約4～5cmの貝層が堆積し、直下に層厚約4～6cmの粘土層がある。貝層中から中柄が1本出土している。貝層と粘土層が重なって堆積する例は15世紀頃のライトコロ川口遺跡11号堅穴上層の送り場にも認められる。粘土が魚骨の前にみられることから“送る”以前のセレモニの痕跡と報告されており、本例も同じ行為と考えられる。

138号堅穴埋土の送り場は樽前a火山灰の上層から検出した。60～80cmの範囲に硬質化した0.5～2cmの灰ブロックとともにサケ類椎骨、ニシン、カレイなど魚骨がみられた。灰送り場（ウナラエウシ）と想定される。

159号堅穴埋土の送り場も樽前a火山灰の上層から検出したものであるが、構成物の内容において他の送り場と異なる。範囲は径約1.3m前後と狭いものの灰を含む6箇所の焼土と角礫主体の集石、炭化材がみられる。灰・焼土からは各種の動物遺体と植物遺体を検出した。所謂、灰送り場と考えられるものである。動物遺体は新美倫子氏によつて貝類はウバガイ、タマキビ類など6種類、魚類はニシンを主体にイトウ、サケ類など10種類、哺乳類はエゾシカ、クジラなど3種類が確認された。植物遺体はヤマブドウを主体にキハダ果実など9種類が確認された。中でもオホーツク文化集団を介し據文文化集団によって受け継がれた裸性短粒オオムギの検出は注目される。分析した山田悟郎氏は短粒オオムギについて7～9世紀にオホーツク文化集団によって利用され、10世紀には據文集団に受け継がれ、18世紀中葉のオホーツク海沿岸のアイヌ民族によって利用されてきたと指摘している。金属器では鉄器の釘、極めて薄い作りの用途不明の銅製品が出土しているが、これらは灰・焼土に混入していたと考えられる。

また、火山灰直下の小ピットからヒトの下顎骨が逆さまの状態で見られた。松村博文氏によると熟年後半から老年の女性とされた。159号堅穴では樽前 a 火山灰の上層に灰送り場、下層にヒトの下顎骨を伴う小ピットをもつが、火山灰の堆積状況から判断して両者の時期差はそれほどないと思われる。

これらの送り場は121号堅穴を除き比較的高い位置にある。このため138号・159号堅穴には1739年噴出の樽前 a 火山灰がみられ、121号堅穴ではみられなかった。本来は堆積していた可能性があるが低位置にあるため水に浸り溶水化したと考えられる。したがってこれらの送り場は121号送り場を含め18世紀中葉の所産とみられる。

ちなみに18世紀中葉前後のトコロコタン（戸口）は文化4年（1807）が163戸667人。文政年間（1818-1830）は47戸となっている。安政2年（1855）から安政5年（1858）まで28戸130人前後まで減少の一途をたどっている。極端な戸口と人の減少は場所請負制による強制労働によるものであるが、これらの送り場にはその様な社会的背景が残されている。和人による支配がコタンのみならず送り儀礼にも少なからず影響を与えていると思われる。

また、石積み遺構も送り場の形式のひとつである。本遺跡では羅臼町トビニタイ遺跡2号堅穴上層の石積み遺構に代表されるものはないが、糠文期堅穴埋土内にみられる集石遺構もアイヌ期の送りに関連すると考えられる。43号堅穴では表上直下の黒褐色上層に角礫が径約4mの堅穴全面を覆うように配置されている。131号堅穴では西側から東側にかけて角礫が敷き詰められた状態であり、66点のくぼみ石が混入していた。

2. アイヌ墓

アイヌ墓と考えられるのが1314号墓である。形態は長軸約2,20m、短軸約0,90mの長方形を呈する北頭位の墓である。出土遺物はないが糠文期の177号堅穴の上部を切って構築されている点と形態の特長からアイヌ墓と判断できる。

また、墓ではないがC'93グリッドから一括して検出した頭蓋骨・上顎骨・下顎骨・肩甲骨・上腕骨・椎骨・肋骨は全て焼かれ、割れていた。洗骨され焼かれた可能性が高いものでアイヌ期の可能性が高い。トコロチャシ跡遺跡オホーツク文化堅穴1号の3層には獣骨、貝類とともに成人男性の骨が積み重ねられ、同じチャシ内部にあるアイヌ墓でも骨の移動と崩れがあり、副葬品の乱れから改葬が指摘されている。先に記した159号堅穴の樽前 a 火山灰直下の逆さまになった女性の下顎骨など18世紀以降のアイヌ民族の葬送儀礼を研究する上で興味深い事例である。この様な儀礼は本地域の独自性を現していると考えられるが、北方諸文化との比較などが求められる。

3. アイヌ文化期低湿地出土の木製品

低湿地出土の木製品は第7層、小沼跡内の第10層、第12 a 層とそれに続く流路基と考えられ

る第13a・13b層から出土している。小沼跡と河川跡は本来は繋がっていたと思われるが、度重なる土砂の堆積によって、元々狭い沼口が閉塞されたものと推測できる。第7層、第10層、第12a層の木製品はいずれも1739年噴出の樽前a火山灰の下層から出土したもので明らかにこれ以前のものである。

中でも第10層は「Y」字状設木材を含む建材が多く出土しており、W46・47グリッドでは何らかの構造物も想起させる。角材も意外と多く第10層では第23図-1・2・4、第31図の三角状の割材、第12a層では第39図-3の柱材と4の薄い割り材など長いものがある。両端部を切断、加工した丸木材や挟入材、ホゾ付き材なども建材と考えられる。本遺跡から約7km上流にあるアイヌ語地名のチャシサンケウシとは「若の木をだしたところ」の意味をもつ。松浦武四郎は「むかしトコロにて城を立てる」と記述しており、宇田川祥氏はこの城をトコロチャシと指摘しており、2mにおよぶ長尺の柱材はトコロチャシに近接することからチャシ建設用の木材に利用されたとも考えられる。

また、先端部を尖らした短い丸木杭はテシなどに利用された可能性がある。河川から入り込む狭まりのある沼口と常呂川本流にあるアイヌ語のソー「滝」をテシとして利用したことも考えられる。

可能性があるということだけでテシの確認を得ることはできなかったが、出土した8本の魚叩き棒の存在はそれを裏付けていると思われる。

今後、木製品の樹種選択のあり方、東北地方民具やすでに調査されている美々8遺跡、K39遺跡など遺跡出土の資料、民族誌資料などの比較研究を行う予定である。

いずれにしても送り場や各種生活道具を含む木製品の存在から周辺にコタンが存在することは間違いないであろう。明治年間の常呂川のテシ魚の様子(図版52-1・2)をみるとそれほど高くない箇所にはセをもち、川幅いっばいに木杭が打ちつけられている。この場所は特定されていないが常呂川河口周辺と考えられる。

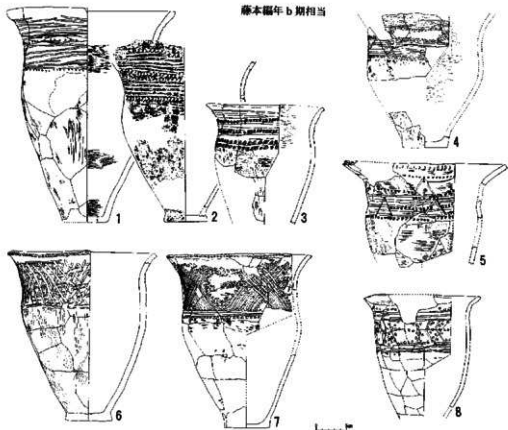
第2節 擦文文化

1. 常呂川河口遺跡の擦文土器

擦文土器の型式編年については東京大学による編年、佐藤達夫氏の編年、菊池徹大氏の編年、石附喜三男氏の編年、藤木強氏の編年、宇田川洋氏の編年などがある。各編年は細部で違いがあるものの大枠は一致するとされている。ここでは常呂川下流域を対象とした藤本編年と宇田川編年の代表的な土器を明示する。

藤本編年はa~lの12期に区分され、宇田川編年は藤本編年のa・b期を前期、c~e期を中期、f~h期を後期、i~l期を晩期にあてている。本遺跡の擦文土器では藤本編年a期は認められない。b~e期、宇田川編年前・中期は整穴型土や包含層からの出土である。藤本編年f

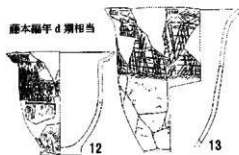
藤本編年 b 期相当



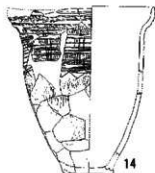
藤本編年 c 期相当



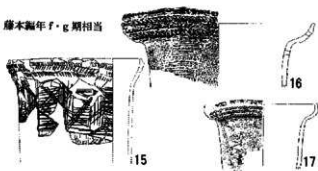
藤本編年 d 期相当



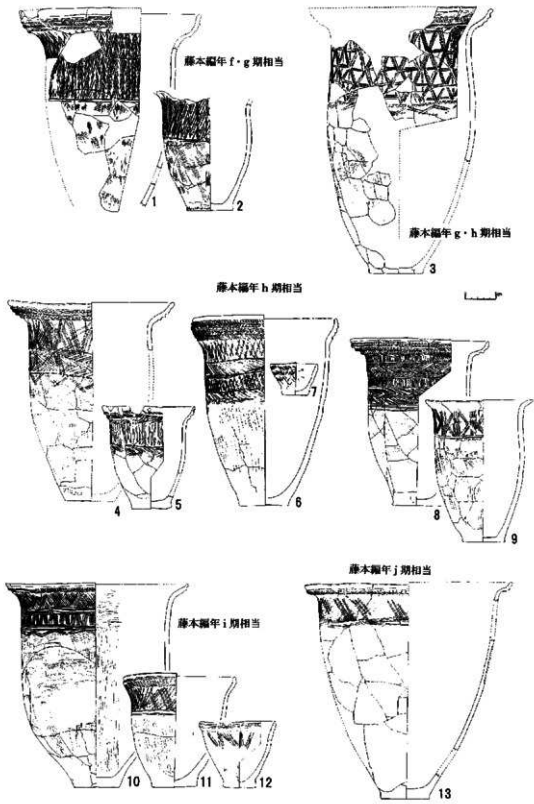
藤本編年 e 期相当



藤本編年 f・g 期相当



第160圖 常呂川河口遺跡の縄文土器(1)



第161図 常呂川河口遺跡の原土器(2)

～1期、宇田川編年の後・晩期は堅穴および包含層出土である。中でも最も多いのは藤本編年h～j期であり、堅穴の大部分はこの時期に属している。

藤本編年b期相当(第160図-1～8)。これらの土器は口縁部が角形であり頸部に沈線文と刺突文を施すが、横走沈線文(1～3)、横走沈線文上に山形沈線(4・5)、横走沈線文上に交差する菱形の沈線(6)、横走沈線文を欠き、「X」字状の沈線(7)、幅広い横走沈線文間に相対する「く」字状の沈線(8)をもつなど変化に富む。

藤本編年c期相当(第160図-9～11)。いずれも横走沈線文上に縦位、斜位の沈線を施し、口縁部に刻みが加えられる。10は口縁部が僅かに立ち上がりc期の特徴をもつが、3段の刻みをもつ口縁部はd期の様相を示す。11は口縁部に刻みを欠くが、横走沈線文上に「A」状の沈線を施す。

藤本編年d期相当(第160図-12・13)。12は横走沈線文上に針葉樹状(12)、「X」字状(13)沈線を施し、口縁部は斜めに立ち上がる。

藤本編年e期相当(第160図-14)。横走沈線文上に縦位の沈線を施し、口縁部は垂直に立ち上がる。

藤本編年f・g期相当(第160図-15・16・17、第161図-1・2)。縦位の沈線による区画帯をもつ。e期まで続いた横走沈線文は区画帯内部に斜位の沈線(14)、連続する鋸歯文(15)が施される。沈線に変わり連続する「>」状の刺線(16)がある。縦の区画帯はないが「A」状の刺線を縦位に施す。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、胴下部は矢羽根文がみられる(第161図-1・2)。

藤本編年g・h期相当(第161図-3)。半載状施文具により縦の区画は前代のなごりと思われるもので、刺線文を格子目・菱形文状に施す。口縁部は斜めに立ち上がる。

藤本編年h期相当(第161図-4～9)。いずれもこの時期の特徴である複段文様が施される。口縁部文様もはつきりとした刻みがみられ口縁部が斜めに立ち上がるもの(4・5・8・9)、垂直に立ち上がるものがある(6)。これらには杯形土器(7)と複段文様をもたないやや特殊な土器(9)がみられる。口縁部が開かず、一見、碗状とも思えるこの種の土器はh期からj期にかけてみられる。

藤本編年i期相当(第161図-10～12)。複段状の文様であるが、口縁部の立ち上がりは僅かにみられる程度であり、h期にみられた数段の刻みはみられない。

藤本編年j期相当(第161図-13)。底部から口縁部にかけてほぼストレートに開く。この時期は一般的に口縁部の立ち上がりは見られず、文様も単純化するがこの土器は緩く立ち上がる(13)。

藤本編年に相当する代表的な土器を図示したが、これらの土器は一様ではなくある一定の時期に偏りをみせている。藤本編年b期相当は完形もしくは半完形に復元できたのは8点のみであり、c～g期にいたっては図示した他に数点の破片がみられる程度である。唯一、北側にカ

マドをもつ17号竪穴の埴土出土土器が中期の可能性のあるもの断定できない。したがって床面出土の有無から判断すると藤本編年c~g期、宇田川編年前期・中期に比定されるこの時期は遺構も検出されていないことになる。竪穴に伴うのは藤本編年h期・宇田川編年後期、藤本編年i・j期・宇田川編晩期であり、擦文期の終末にあたる藤本編年k・1期も少ない。これらの竪穴については次のとおりである。

2. 常呂川河口遺跡の擦文集落

本遺跡の擦文期の竪穴はカマドを有する竪穴70軒、カマドを有さない竪穴17軒、不明2軒を含めると総計89軒に達する大規模集落である。南側の川岸部では擦文期を含む各時期の竪穴が浸食を受けている。河川の流路から想定するとそれほど多くの浸食破壊は無いと考えられるが、東側は若干であるが未調査地域が残されており数十軒の竪穴が存在する可能性がある。これを加味すると100軒に達する大規模集落遺跡である。

本遺跡が大規模集落であるといっても第III章に概述したとおり標高約2~3mの氾濫源。標高約4~5mの低位段丘。低位段丘からせり出す様に形成された地域など立地条件は異なっている。中でも標高約4~5mの低位段丘は面積が広くオホーツク文化期、統縄文期を含めた複合集落であること。擦文期のみ単一集落でないことなどが分布の在り方を異にする大きな一因となっている。

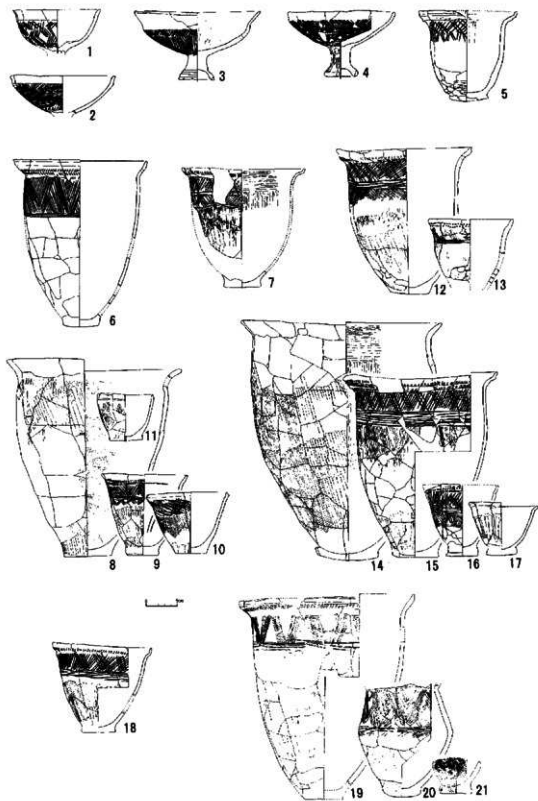
常呂川流域の擦文期の集落構造は藤本強氏により台地上の岐阜第二遺跡、同第三遺跡で分析が進められ、中・小規模集落の規制について①最も重要な前代に住居のあったくぼみをさける。②同時併存する住居の相互方向は、沢筋もしくは台地縁と一致する。③同時併存する住居の方向は、カマドの方向もふくめてはほぼ一致する。④同時併存する住居は1~2軒である。⑤同時併存する住居の距離は住居の一辺の1~2倍の距離。⑥前代の統縄文期の竪穴をさけて構築すると擦文期の竪穴を指摘しているが、本遺跡の竪穴分布でも前代に住居のあったくぼみをさけるという規制が強く反映されている。この考え方は北海道内の擦文集落においてもほぼ一致したもとなっている。

しかし、台地にある限定された岐阜第二遺跡・同第三遺跡と大規模集落なみの比較的広い面積をもつ低地にあるライトコロ川口遺跡、ライトコロ川口右岸遺跡では同じ分析手法が適用できないとされ、低地における中・大規模集落構造研究の難しさを指摘している。

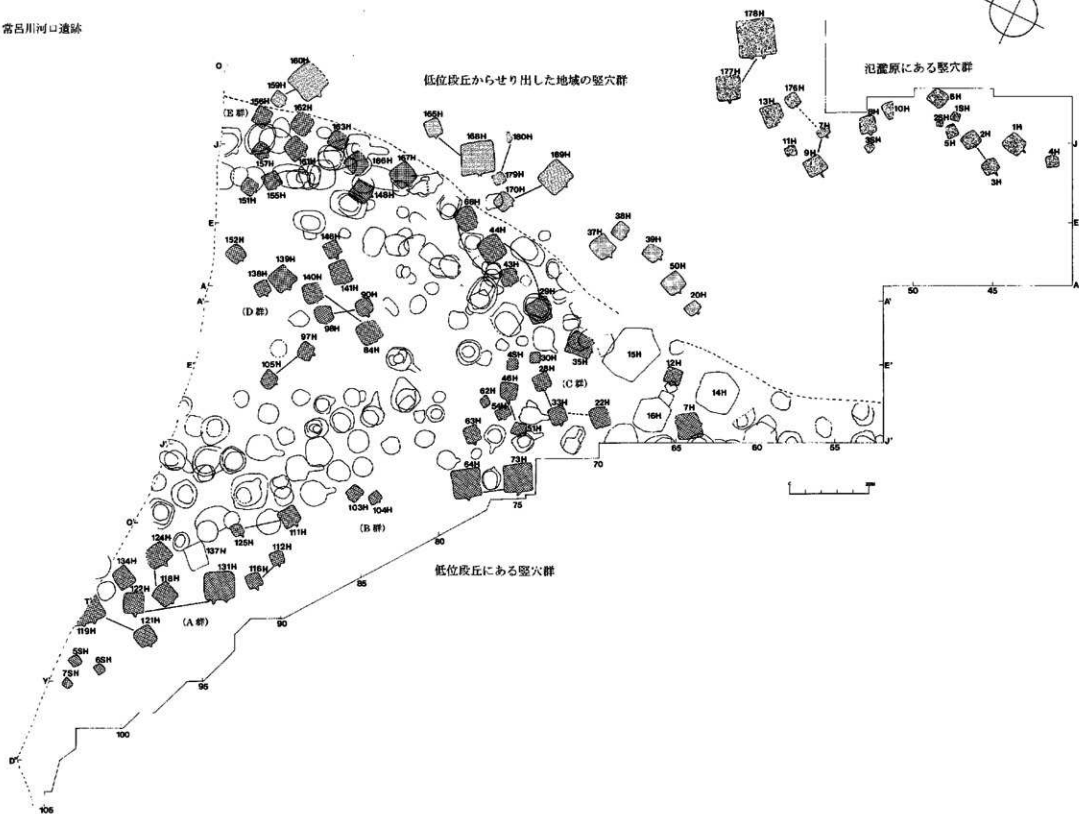
本遺跡は大規模集落遺跡であるが地形的に3つの立地下にあること。前代に住居のあったくぼみをさけた結果、同一の立地にあつて5つのグループに分けることができる。

[1]標高約2~3mの氾濫源にある竪穴(第163図)

これらの竪穴は東西方向の縦長に配列されたグループである。微高地に構築されており、カ



第162圖 野穴住居跡出土の模文土器(1)



第163図 氾濫原の竪穴群・低位段丘の竪穴群・低位段丘からせり出した地域の竪穴群

マドをもつ竪穴9軒、もたない竪穴7軒、不明1軒で構成される。

床面に遺物を伴う1号・3号・7号・8号・9号・177号の6軒を対象とする。第162図にこれらの竪穴から出土した土器を図示した。

1号竪穴床面からは高杯(第162図-1~4)の中には口縁部が外側に屈曲するものと杯部が半球形を呈した高杯がある。高杯は藤本編年c期に出現し、h期を境に見られなくなるとされる。カマド前面からやや浮いて出土した口唇部が斜めに低く立ち上がる小型鉢形土器(5)は藤本編年h期相当と思われる。

2号竪穴は床面出土土器がなく時期は不明であるものの、3号は鋸歯文の内部を上下方向から刻線文で重鎖させた藤本編年j期相当の大型鉢形土器(6)がある。埋土出土の口唇部が斜めに立ち上がり、複段文様をもつ中型鉢形土器(7)はi期相当である。

7号竪穴はかまどから無文大型鉢形土器(8)、小型鉢形土器(9・10)、杯(11)がセットで出土した。小型鉢形土器は口縁部が単純に開くもの(9)、口唇部が短く立ち上がり、刻線文を雑に施した(10)ものがある。藤本編年j期と考えられる。

8号竪穴の大型鉢形土器(12)は胴下部文様を欠いた雑な複段化であるが、口縁部降帯は丸みを呈し緩く立ち上がるなど古い様相をもつ。藤本編年i期からj期相当と思われる。

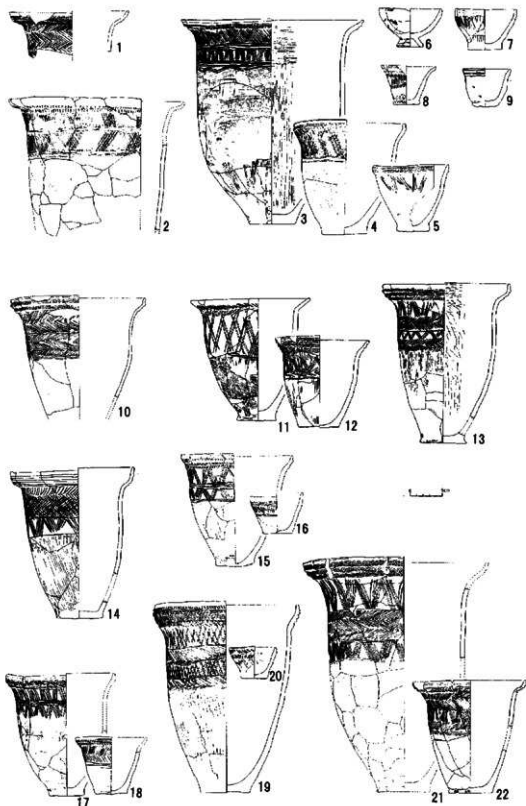
9号竪穴は無文大型鉢形土器(14)、大型鉢形土器(15)、小型鉢形土器(16・17)がセットとなる。大型鉢形土器は口縁部が緩く立ち上がり、小型鉢形土器(16)は複段的に施文される。藤本編年j期と思われる。

177号竪穴は大型鉢形土器(19)、壺形土器(20)、杯(21)がある。大型鉢形土器は藤本編年k期に相当する。

竪穴の同時併存は2号と3号が規模、西壁の胴張りなど同一形態をもち、竪穴相互の距離、カマドの方向性から同時併存と考えられる。7号竪穴と9号竪穴は火災住居であり、セットで出土した土器に大型無文土器が含まれるなど共通点がある。竪穴の規模が異なるものかまどの方向性と竪穴の間隔から176号を含め同時併存の可能性がある。177号竪穴と179号竪穴は規模とかまどの個数が異なるが岐阜第三遺跡などではかまどを二基所有する大型住居の南側に小型の住居が配置されると指摘されており、この2軒についても方向性を含め同時併存と考えられる。

この区域では1号竪穴(h期)、2号・3号竪穴(i期)、8号竪穴(i期~j期)、7号・9号・176号(j期)、177号・179号(k期)となり東側から西側にかけて移動変遷している。

かまどをもたない7軒の竪穴のうち如跡をもつのが5号竪穴・6号竪穴・11号竪穴・13号竪穴・3号小竪穴の5軒である。これらについてはそれぞれの時期に付随する可能性が高いと思われるもので3号小竪穴出土の土器(第162図-18)は藤本編年j期に相当するもので7号・9号・176号と同時併存と思われる。



第164図 彫穴住居跡出土の漆文土器(2)

②標高約4～5mの低位段丘にある堅穴（第163図）

第163図の各時期の堅穴分布図をみると堅穴の分布は粗密がある。この原因は藤本強氏の指摘する規制のひとつである前代の窪みをさけた結果生じたものと考えられる。重複したとしても既に埋設していた堅穴や掘り込みの浅い堅穴などであり多くの縄文、オホーツク文化期の堅穴のほとんどは重複していない。この様に窪みのない僅かな平坦面を利用して構築した結果、縄文期の堅穴分布は(A)(B)(C)(D)(E)の5群に分けることが可能である。

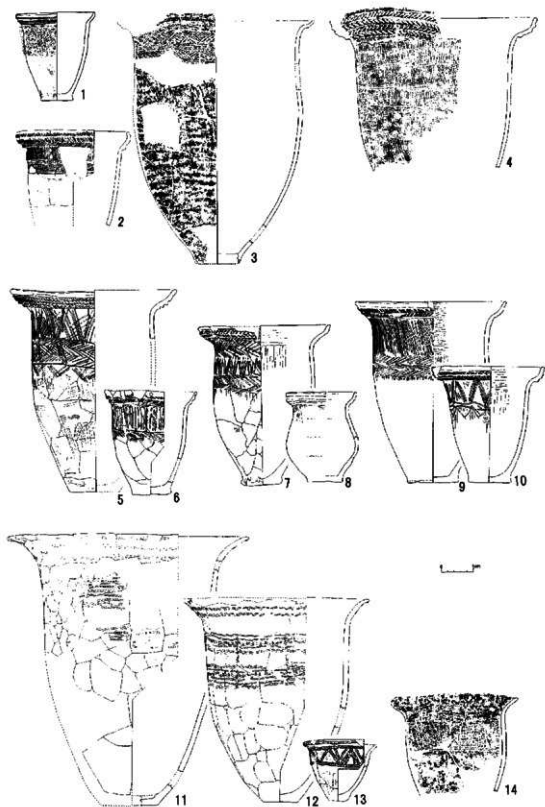
(A群)は標高約3m前後の比較的低位に位置する堅穴群である。これらの堅穴群は南北にベルト状に伸びた縄文期の堅穴によって一見、仕切られたあり方を示す。縄文期の東側にあるこれらの堅穴はカマドをもつのが111号・112号・116号・118号・119号・121号・122号・124号・125号の9軒、カマドをもたない134号・SH5号・6号・7号の4軒で構成される。この区域で時期が特定できるのは119号・122号・111号の3軒だけであり、これらは第164図-1～5に示した。この中で比較的古手に位置づけられるのは111号である。口縁部はやや斜めに立ち上がり、連続した矢羽根文が数段にわたって施される藤本編年g期相当の中型鉢形土器(1)である。119号は藤本編年i期相当(2)。122号のカマド内から出土した大型鉢形土器は複段文様(3)をもつもので中型鉢形土器(4)、小型鉢形土器(5)など藤本編年h期もしくはi期相当と思われる。遺物が出土していない堅穴が多いため土器編年をもとにした明確な同時併存を確認することはできないが、堅穴間の距離と軸の方向から同時併存の可能性をもつのが、藤本編年g期相当の111号と125号。藤本編年i期相当の119号と121号。121号は埋土層から藤本編年j～k期の完形土器が出土しており、層位的にみて可能性が高い。藤本編年h期もしくはi期相当の122号と131号。編年上の時期は不明であるが124号と118号。112号と116号も同時併存の可能性がある。

(B群)は(A群)と(C群)の中間地点に位置する。標高は同一であるが両群からやや離れており、地形的にも東側から入り込んだ浅い沢状の挟入部に面する。カマドをもつ104号とカマドをもたない103号堅穴で構成される。2軒とも床面出土遺物がなく詳細な時期は不明であるが、堅穴相互の距離が2m前後と近接しており同時併存の可能性は低い。

(C群)は(A群)からやや北側に寄った標高約3～4m前後にある。特にオホーツク文化15号と14号堅穴の中間位置にある12号、同じくオホーツク文化期の14号と16号の間にある17号、縄文期の74号堅穴を挟んだ64号・73号堅穴などは前代の窪みを微妙にさけて構築している。この群はカマドをもつ17号・22号・28号・33号・53号・54号・63号・64号・73号の9軒とカマドをもたないSH4号、30号・62号の3軒で構成される。

28号からは脚部の短い高杯(第164図-6)、小型鉢形土器(7～9)がみられる。いずれも刷毛、篋により調整されており正確な時期は不明であるが、高杯は半球形を呈しており藤本編年h期以前と思われる。

33号堅穴の中型鉢形土器(10)は口縁部が垂直に立ち上がり、矢羽根状刻線文と斜めの刻線



第165圖 堅穴住居跡出土の雑文土器(3)

文が複段的に施される。藤本編年 h 期相当であろう。46号堅穴は中央部に石皿み炉をもつ特異な堅穴であり、口縁部が「く」字状に外反し、2本単位の刻線文を左右交互に施す異質な土器(11)と藤本編年 h 期相当(12)を伴う。

51号堅穴出土の土器は46号堅穴にみられた矢羽根文と鋸歯文の刻線文による複段化(13)したものであり藤本編年 h 期相当である。63号堅穴は大型・中型・小型鉢形土器と高杯をもつもので藤本編年 h 期相当であろう。73号堅穴の土器は口縁部が立ち上がり、矢羽根文と鋸歯文の複段文様(14)であり藤本編年 h 期もしくは i 期に相当すると思われる。

高杯をもつ28号と33号、遺物が出土していないものの堅穴相互の距離と軸の方向性、同一の堅穴規模から22号堅穴も同時併存の可能性がある。46号堅穴と51号堅穴は軸がやや異なるものの、堅穴間の距離、矢羽根文と鋸歯文による複段文様は共通性があり同時併存であろう。73号堅穴は並列する64号堅穴と規模、方向が一致するもので同時併存と考えられる。

(D群)は(A群)の西側において統縄文期の堅穴とピット群に囲まれた区域にある。前代の統縄文期の堅穴が認められないため堅穴を構築したと考えられる。カマドをもつ84号・90号・97号・98号・101号・105号・138号・139号・140号・141号・146号の11軒で構成される。

98号堅穴は藤本編年 f・g 期(第161図-2)。105号堅穴では床面からやや浮いて出土した複段文様をもつ中型鉢形土器(17)と床面出土の小型鉢形土器(18)は藤本編年 h 期・i 期に相当する。138号堅穴の大型鉢形土器(19)の口縁部はストレートでありほとんど外反しないが、複段文様をもつ。小型鉢形土器(20)を含め、藤本編年 h 期である。139号堅穴の大型鉢形土器(21)、中型鉢形土器(22)も藤本編年 h 期である。

このグループでも土器形式から同時併存を求めることは困難であるが、藤本編年 h 期の84号堅穴の床面土器が140号堅穴の極道出土土器と接合した。同下部は欠失するが、上部は復元できたもので同時併存の可能性がある。堅穴相互の距離と軸方向から90号堅穴と98号堅穴、97号堅穴と105号堅穴も可能性がある。138号堅穴と139号堅穴は同じ藤本編年 h 期であるが距離が極めて近く同時併存の可能性は低い。ライトコロ川口遺跡では20m以上離れた堅穴間の同時併存も考えられ138号堅穴と152号堅穴、139号堅穴と146号が方向性からその可能性がある。

(E群)は標高約4~5mの低位段丘の北側縁部に沿って縦位方向にみられる堅穴群である。地形的にはこの縁部から南側にかけて徐々に緩斜面となるもので12号・29号・35号・43号・44号・66号・148号・151号・155号・156号・157号・161号・162号・166号・167号の14軒で構成される。これらの堅穴は本遺跡の中で最も高い位置に構築されている。第165図-1~6に土器を図示した。

43号堅穴の小型鉢形土器は約半分を格子目、横位の刻線文、縦位の山形文を施し、残る半分を複段文様としたものでこの時期には珍しく雑な施文である(1)。藤本編年 h 期相当。44号堅穴の大型鉢形土器は口縁部が緩く立ち上がり、文様は複段状である(3)。藤本編年 h 期相当。

29号堅穴は無文中型鉢形土器が出ているが、堅穴の規模、かまどの構造などから44号堅

穴と同時併存と考えられる。

66号堅穴の無文大型鉢形土器の口縁部は「く」字状に外反する。藤本編年h期前後と思われるもので堅穴間の距離と方向性から43号堅穴と同時併存の可能性がある。

しかし、他の住居では時期の決め手となる大型鉢形土器をもつのは163号(4)、167号(5)の2軒。いずれも複段文様をもち、167号では口縁直下に縦位の刻線文(6)をもつやや異色な土器が共存する。

周辺に藤本編年h期以前のもは少なく、高杯をもつ155号・156号・157号・162号の4軒を含めこれらは藤本編年h期に相当するが、堅穴の間隔は狭くすべて同時併存したと思われず、土器形式・堅穴の方向性からも同時併存を認めるのは難しい。

(3) 標高約4～5mの低位段丘からせり出した地域の堅穴群(第163図)

第三章で記述したとおりこの地域は統縄文後北C₁式以前の遺構が認められず、後北C₁・D式の複数の包含層と4基のピットを検出できただけであり、後北C₁・D式以降に形成された地域であることが確実である。20号・37号・38号・39号・50号・159号・160号・165号・168号・169号・170号・180号の12軒で構成される。これらの堅穴は「E群」と同様に縦位方向の配列である。

160号堅穴(第165図-5・6)、165号堅穴(7)の土器は口縁部が縁く立ち上がる複段文様であり、壺形土器(8)を伴うもので、藤本編年h期に相当する。168号堅穴(9・10)も藤本編年h期に相当しトピニタイI群(11～13)を伴う。これらの土器は藤本編年h期に相当するが、「E群」の藤本編年h期と比較すると口縁部の立ち上がりは縁く、複段文様も崩れるなど新しいようである。大型の住居の南側には近接して小型住居がみられるが159号と160号、165号と168号、169号と170号、179号と180号が同時併存の可能性がある。168号堅穴からはトピニタイI群が床面から出土している。20号・37号・38号・39号・50号は不明である。

この様に立地も微妙に異なり、統縄文期の堅穴のくぼみ避けて構築された(B)群を除く各群は10軒前後で構成されている。これらの堅穴は2軒を基本として同時併存する可能性が高く、各群は10軒前後の中・小規模集落の総合体として成り立っている。住居の移動について岐阜第三遺跡では台地をとりまく形で移動することが知られているが、各群の場合、2～3mの氾濫源にある堅穴群が東から西側にかけて変遷する可能性がみとめられるものの標高約4～5mの低位段丘にある(A群)から(E群)の堅穴群の相互関係、標高約2～3mの氾濫源にある堅穴群と標高約4～5mの低位段丘からせり出した地域の堅穴群との相互関係は不明である。

また、かまどをもつ堅穴とかまどをもたない堅穴がある。かまどをもたない堅穴の共通性は①掘り方が浅い。②方形を基調とするが不整形である。③堅穴と比較して方向が一定しない。④堅穴と比較し出土遺物が極端に少ない。⑤明確な主柱穴がみられないことがあげられる。ライトコロ川口遺跡で調査された14軒の内1軒も掘り方は深いものの軸が一定せず、遺物も少な

い点など共通性がある。本遺跡の場合、検出した全てが標高の低い位置に構築されており生業に関する施設、仮小屋など独自の機能をもつ施設などが考えられる。

3. 異質な竪穴と土器

擦文期の46号竪穴は藤本編年 i・j 期、宇田川編年晩期に比定され、カマドと石囲み炉をもつ。柱穴の配置は不規則であり、床面からやや上部に鯨骨がみられた。

101号竪穴は主柱穴の配列が不規則である。壁の一面が胴張り状を呈し、オホーツク文化の竪穴の様に出た反対側にカマドをもつ。オホーツク文化のソーメン状貼付文の小破片が床面から出土するものの、時期は新しく藤本編年 i・j 期、宇田川編年晩期である。報告書第4巻第116図-4の埋土から出土した大型鉢形土器は口縁部の山形刻線文、長方形の区画帯と交差する沈線文と列点文など特殊な文様構成をもつ。

また、156号埋土出土土器(第165図-14)、167号竪穴床面出土土器(第161図-8・9)は外反した口縁部の直下に比較的狭い幅で刻線文が施されるもので同じ167号竪穴床面から出土した擦文土器と比較すると文様構成など異質である。101号竪穴埋土、156号竪穴埋土、167号床面土器に共通するのは三角形のモチーフである。これらは藤本編年 h 期にみられない要素と考えられるものでトビニタイ土器の影響を受けたものと推測される。

4. 擦文墓

竪穴が窆みを意識しているに対し、墓は竪穴の窆みに作られている。明確に擦文墓とされるのはオホーツク文化15号竪穴の埋土に堆積する約1,000年前噴出の摩周 b 火山灰と竪穴の貼床を切り込んで構築されたピット27・28・33・33a・49の5基である。ピットは楕円形を呈し、ピット33と33aは僅かに重複する。5基のピットは意図的に楕円状に配置される。時期は藤本編年 h 期、宇田川編年後期である。

5. 擦文期の遺物

上器・紡錘車以外の製品は金属器では4号竪穴埋土(カマドをもたない)から刀子片2点、釘3点、針1点。2号竪穴埋土・138号竪穴埋土・159号竪穴埋土・159号竪穴埋土・163号竪穴床面・166号竪穴埋土から鉄製刀子(もしくは釘)がそれぞれ1本出土している。90号竪穴床面からは銀を素材とする用途不明の金具がある。

炭化木製品は9号竪穴埋土から先端部が二方向から切り出された2本の刺突具。1号竪穴埋土からは樹皮を楕円状に丸めた樹皮製品がある。

籾の羽口は73号竪穴・139号竪穴埋土から出土している。

第3節 トビニタイ文化

1. トビニタイ土器群

本時期の唯一の竪穴は137号竪穴である。床面から擦文期の杯とグリッドからトビニタイⅡ群が出土している。杯にみられる刻線の菱形文をもつ資料は岐阜第二遺跡1号竪穴B号床面の鉢形土器、斜里町ピラガ丘遺跡竪穴外第Ⅴ層の杯、伊茶仁カリカリウス遺跡4号竪穴のミニチュア土器などにあり藤本編年a～c期に比定される。本例は口唇部の立ち上がりなど藤本編年c期、宇山川編年中期と考えられる。大井晴男氏は岐阜第二遺跡1号竪穴B号床面出土土器を「道東部の擦文土器のうちでは異例に属する」とされているが、この様な菱形文はトビニタイⅡ群にみられるソーメン状貼付文のモチーフを転化したものであろう。

擦文期の166号・168号竪穴床面からトビニタイⅠ群が出土している。166号竪穴は小破片であるが、168号からは大型鉢形土器2点、小型鉢形土器1点の出土がある。いずれも藤本編年h期、宇田川編年後期相当である。

藤本編年h期、宇田川編年後期である51号竪穴の埋土層からはトビニタイⅡ群とⅠ群の中間タイプの土器と無文の擦文土器が共存する。かつて報告書の中でソーメン状貼付文もみられる点からトビニタイⅡ群としたが縦網貼付文が多用される点や無文の擦文土器が後期のものであることから中間タイプに位置づけるべきと思われる。この中間タイプのトビニタイ土器は胴下部が膨らむ壺型であり、共存した無文の擦文土器1点も胴下部が膨らむなど類似性をもつ。

オホーツク文化期の藤本編年e群である14号竪穴埋土の摩周b火山灰の上層から擦文後期の土器と中間タイプのトビニタイ土器が共存する。

第4節 オホーツク文化

1. 竪穴住居

本時期の竪穴は14号・15号・16号・23号・45号の5軒である。23号は全掘していないが先端部がこの時期の特徴である鋭角を呈し、周溝が巡ることからオホーツク文化と判断された。規模は15号が最大で長軸約14.3m、短軸約10.6mの六角形を呈する。14号・16号・45号は長軸と短軸が10m前後でありほぼ同じ長さである。所謂、長軸が短い寸詰まりの形態である。23号はやや小型であるがやはり寸詰まりの形態と思われる。竪穴の時期は14号からの出土土器がないため明確な時期は定かでないものの青銅製の鐙が床面から出土している。15号・16号はソーメン文状貼付文期であり、16号と45号出土土器は底部が欠失するものの接合できた。これらは同一時期の可能性があると考えられるが、すでに指摘されているが東京大学文学部常呂研究施設によるトコロチャシオホーツク0地点の10号竪穴の調査ではソーメン文状貼付文期の住居がし

だいに小型化する傾向が確認されておりある程度の時間差も考慮する必要がある。

5軒の竈穴住居の中で質・量ともに豊富な遺物を持ち、オホーツク文化研究の重要な情報をもたらしたのが15号竈穴である。15号竈穴住居は前記したとおり本遺跡の中で最大の規模をもつもので床面積は125㎡におよぶ。床面には厚さ3～4cmにわたって粘土が「コ」字状に貼られ、開口部を北側に向ける。粘土は焼失のため赤変、硬質化している。壁板は内側に倒れ込み、焼け落ちた屋根材がその上に載った状態で出土した。壁板その他の構造材はイタイ、モミ属が多く板状に割り易い材質を選択している。屋根材は白樺樹皮を用い、木釘が並行に密着して出土した。何らかの方法で木釘を用いて白樺樹皮を固定したものと考えられる。

各種遺物のはほとんどが「コ」字状の粘土床と壁の間の砂地から出土した。粘土床の区域を「内区」、砂地の区域を「外区」とし大井晴男氏は構造上意味を異にする空間と指摘している。土器を主体とする遺物は「外区」の中でも、最も「内区」に近い箇所にみられ、遺物はベッド状の一段高い構造をもちその下に収納されていたと思われる。通常、数個体の土器がみられる程度であるが、この竈穴では大型（10個体）・中型（13個体）・小型（15個体）土器が6グループ（群）に分かれてみられ、骨塚側には特大土器（5個体）が伏せた状態で出土した。6群は土器を主体に石器、骨角器、鉄器、炭化木製品などの各種遺物がまとまりをもっており、竈穴内部においてグループ化することができた。このグループ（群）が拡大家族である。6家族、18人～27人の居住空間を想定しているが、オホーツク文化竈穴住居内部の空間利用のあり方が明確になったことは大きな成果のひとつであった。

骨塚は最奥部にある。一部は攪乱を受けているもののクマの頭蓋骨45個体、キツネ13個体などで構成され、近くのピットにはクロテン4個体、タヌキ3個体、シカ4個体があり埋土からはアザラシ、オットセイなど海獣類やサケなど魚類もみられる。骨塚の前面からはクマ彫刻品5点がみられ、指揮棒状の柄部にはクジラが彫刻されている。彫刻品をはじめ豊富な動物相はこの竈穴住居が不意の火災に遭遇するまでしばらくの間は使用されていたことを想起させる。

陸獣で構成される骨塚の反対側の開口部近くには海獣類を意匠した彫刻品がセットで出土している。海獣の頭部を意匠したスプーン内にラッコが載り、近接してオットセイ形のペンダント、鯨頭部を意匠したコルク状製品の先端部はクマの掌が彫刻されている。なお、このコルク状製品は鯨類の歯を素材としている。陸獣・海獣が対極にあり、いずれにも異なるクマとクジラを内包させており、宇田川洋氏の指摘するアイヌの「二分制の神観念」の現われであろう。

炭化木製品は羅臼町松法川北岸遺跡の調査以後、トコロチャシオホーツク0地点7号竈穴など相次いでおり、本遺跡を含め容器類の縁取りなど共通の手法がみられる。15号竈穴の木製品は小型のものが多いと考えていたが最近、長さ約50cm、幅約30cmのまな板状の板材の側面に深い「V」状の加工面が長く伸びた製品が復元されつつある。用途不明であるが機会を得て報告することにしたい。彫刻が施された精細な2枚の小板がはめ込み式になる衣紋掛け状製品、フクロウ意匠の箸状製品、クマ手掌彫刻品などから木工技術の高さが理解され、器種に応じた木

材選択と比較が必要と考えている。

興味深い動物遺存体には羊毛、毛皮などに寄生するカツオブシ虫の幼虫、植物遺体ではマメ科種子と栽培植物であるキビ類が検出された。

住居の大型化は拡大家族の存在を裏付けており、住居の小型化・縮小化は家族組織の変化を現すものであるが、その影響を強く受けているのが骨塚である。先に記載したとおり15号堅穴の骨塚は豊富な動物相で占められているものの、他の堅穴住居から骨塚が確認できたのは14号堅穴だけである。しかもクマが最小個体で2個体、埋土から魚類が少量出土する程度の貧弱さであった。16号・45号に骨塚は認められない。この状況は本遺跡に限られたものではないが、堅穴住居の小型化とそれに伴う骨塚の縮小・消滅は相互に関連するもので、特にクマを頂点とする骨塚の変容からオホーツク文化の社会組織の大きな変化がみてとれる。

15号堅穴住居は大井晴男氏の「最小の社会的単位として世帯」の実像を浮かびあがらせたが「複数の世帯を含む地域集団」との関わりが重要となってくる。特に後背地にあるトコロチャシオホーツク0地点の堅穴群はソーメン状貼付文期を主体としており、土器編年上は15号堅穴と同一時期である。しかし、トコロチャシオホーツク0地点の堅穴群は標高約17～18mの常呂川右岸台地に所在し、本遺跡は標高5mにあり立地が異なる。河口部から15号堅穴住居の方向を望むとほぼ正面に位置しており低地ではあるが生業上も好条件下にあったことがわかる。各集落がそれぞれの集団領域を確保していたとすると15号堅穴住居との距離が約200mであり、極めて近接すること。いずれの遺跡にも大型堅穴住居と大規模な骨塚が形成されておりそれぞれが機能していたことなどから両遺跡の同時併存は薄く、「複数の世帯を含む地域集団」は栄浦第二遺跡など別遺跡に関わりがあると思われる。

2. 被葬墓について

本時期の確実な墓はビット173号墓である。15号堅穴の北側約15mの位置にある。長さ55cm、幅35cmの小楕円形を呈する。西壁側に小型土器が伏せられ、床面から歯骨が検出された。被葬葬法によるもので、刀子が副葬されている。墓の規模、小型土器をもつことから子供の墓と思われる。

ビット245号は15号堅穴の西側約18mに位置する。長さ約1.47cm、幅約73cmの楕円形を呈し、埋土から木文化に特徴的な柳葉形石鏃と上部に大型土器の破片がみられる。成人の墓であろう。時期はいずれも15号堅穴と同じソーメン文状貼付文期である。墓数は多くないが墓域は堅穴の北側に意図されたものと思われる。

第5節 続縄文文化

1. 各期の堅穴と土壌墓

(1) 後北C₁・D式

全道的にみて本時期の堅穴は調査例が乏しくやや実態が不明であったものの、57号・69号の2軒と29号・83a号・100号に生活面を検出した。57号・69号堅穴とも径約5m前後の規模をもち、57号堅穴は不整形、69号は不整形であり北側に張り出し部をもつ。2軒とも続縄文と思われる古手の堅穴住居内部に構築されたもので、相互の距離は約13mを測るが、57号堅穴は69号堅穴に比較してやや新しい。これに対して70号堅穴・149号堅穴は長方形のプランをもつもので、57号堅穴・69号堅穴と比較すると掘り方も浅く、長軸面と平行した骨粉混じりの細長い伊をもつのが特徴である。57号堅穴と69号堅穴は発掘区の東側に位置するのに対し、70号堅穴・149号堅穴は西側に位置するなど立地が異なる。後北C₁式の長方形の堅穴も西側にあるなど、居住する堅穴と別の機能を有するものと考えられる。長方形の堅穴は長軸が7mを越すもので、炉跡にある微細な骨粉から生業活動に伴う施設と思われる。

本時期の墓は105号・253号・590号・595号・596号・598号・599号・700号・704号・709号・738a・772号・781号・808号・900号・901号・902号・908a号・919号・920号・930a号・934号・940c号・954号・971号・972号・975号・983号・984a号・986号・987号・988号・988a号・990号・994号・997号・1074号・1010号(古手)・1024号・1025号(古手)・1067号・1074号・1229号・1233号・1247号・1278号・1461号の45基。ピットは904号・1334号・1335号・955号・987号・1067号の6基。

これらの墓は57号堅穴の周辺、149号堅穴の周辺、57号堅穴と149号堅穴の中間地点の三箇所分布する。この墓は常呂川に沿った東西方向にあり続縄文堅穴群の内側に分布する傾向をもつ。墓の形態は楕円形が多く円形、方形があるが時期差はみられない。頭位は東頭位を基調とするが、この場合頭部に土器を正立の状態に配置する。しかし、破砕された土器が副葬された808号は北頭位。土器が破砕された三体合葬の954号は北頭位である。また、三体合葬の934号は南頭位。二体合葬の700号は南東頭位など通常の頭位と異なるものがあるが、これは特殊な死亡原因によると思われる。副葬品は鉢形土器、注口土器であり石器はほとんどみられない。装身具をもつのは700号がガラス玉7点・緑泥石岩製の平玉5点。709号が5点。934号が練り玉17点、緑色泥岩製の平玉78点。988号がガラス玉1点。994号でガラス玉17点。1074号でガラス玉1点。鉄製品は988a号から柄部に燃紐を巻き付けた鉄製刀子が副葬される。

(2) 後北C₂式

本時期の堅穴は58号・83号・172号である。いずれも掘り方は浅いが、隅丸長方形を呈しが

跡と柱穴から堅穴と判断できる。83号は後北C₁・D式にもみられた骨粉を多量に含む黄褐色粘土から、生採用施設が想定される。後北C₁・D式、同C₁のいずれかと思われるのが144号、148a号・155a号の3軒である。

本時期の墓は20号・22号・25号・37号・38号・46号・130号・157号・300号・327号・610号・665号・890号(古)・899号・1350号・1351号・1353号の17基。

墓の形態は楕円形、円形であり埋葬頭位は東頭位を基調とするが、327号は西頭位である。石鏡の形態から21号・32号・38号・127号・389号も本時期と思われる。副葬品では25号の石製装身具。46号の管玉4点。300号のガラス玉20点、平柄鉄斧1本、刀子1本。890号(古)の琥珀製の平玉30点がある。管玉は宇津内Ⅱ式にもみられるので土器が共存しない限り認定はできないが、両時期に関するものとしてアルミノ珪酸塩岩製の122a号、メノウ製の884a号と琥珀製の管玉をもつ122a号・444a号があげられる。

鉄製品は157号の刀子がある。統縄文、擦文、オホーツク文化出土の鉄製品の分析とともに本書の附編Ⅵにおいて赤沼英男氏によりなされているが300号墓の鉄製品等については貸し出した博物館から資料の返却がなされないため保存処理・分析を行うことができなかった。

後北C₁・D式、同C₁のガラス玉分析は本書の附編Ⅶで小瀬戸恵美氏により報告されている。

(3)宇津内Ⅱb式

本時期の堅穴は17a号・29a号・31号・42a号・47号・47a号・57b号・58a号・61a号・61b号・61g号・65号・70a号・76号・83c号・99号・100号・109号・117号・114a号・126号・127号・128号・129号・148c号・149a号・155b号・155d号・166a号・172a号・172c号・173号の32軒。115号に生活面を検出した。基本的な平面形態は円形もしくは楕円形であり、僅かに長方形もみられる。張り出しをもつのは31号である。

22a号・24号・104号・132号・133号・143号・363b号・370号・371a号・372号・373号。391号・404号・405号・459号・482号・484号・494号・601号・636号・642号・649号・705号・722号・737号・766号・866号・925・1012号・1219号・1282a号・1332号・1403号・1407号・1408号の35基。墓以外の用途不明のピットが689b号・459号・701号・769号の4基がある。

本時期の墓の形態は楕円形であり、西頭位を基調とする。副葬品は土器・石器のほかには宇津内Ⅱa式ほどではないが装飾品として琥珀玉がみられる。22a号から碧玉製の管玉1点と琥珀玉115点が連結して出土。24号は蛇紋岩製の管玉6点。1012号では管玉と琥珀玉が連結して出土している。副葬品の変化を宇津内Ⅱa式に比較すると琥珀玉が減少し管玉が新たに加わっているが、これは後北C₁の影響によるものと思われる。石器も大型ナイフを中心に減少する傾向がある。

(4)宇津内Ⅱa式

12a号・18号・18a号・21号・25号・49号・49a号・53号・74号・74a号・76a号・79号・80号・86号・91号・92号・94号・95号・96号・96a号・106号・107号・108号・109a号・109b号・114b号・115号・117a号・126a号・128a号・129a号・129c号・130号・132号・133号・133a(古)・135号・172e号の38軒。平面形態は円形・楕円形を基調として舌状の張り出しをもつものがある。

墓は119号・208号・246a号・252号・254号(各種の琥珀玉198点)・254a号・260号・261号・262a号・262b号・263a号・267号・272号・301号・303号・305a号・329a号・342号・343号・370a号・409a号・411号・426号?・470号・541b号・542d号・545号・545a号・634号・651号はピット。444a号・608号・609号・649号・676号・705号・719号・795号・818号・829号・850号・895号・926号・1006b号・1012号・1013号・1016号・1046a号・1206号・1276号・1313号・1324a号・1332号・1405号・1406号?・1410号・1431号・393号・465号・467号・500号・608号・609号柱穴の62基。

本時期の墓は楕円形であり、西頭位を基調とするが、409a号など東頭位もみられる。床面に柱穴をもつものが31基。各種の石器、琥珀製装飾品などが多量に副葬される。琥珀玉をもつ墓は254号が198点。263a号が1,300点。272号が22点。301号が450点。305a号が7点。370a号が427点。411号が358点。545号が800粒。545a号が270粒。444a号が7粒。608号が113粒。795号が14粒。1046a号が148粒。1276号が7粒。1313号が261粒。琥珀玉の形状は平玉が最も多く、丸玉・管玉が僅かに加わる。他の副葬品では260号から貝製、545号が頁岩製、795号から泥岩製、1006b号から硬質頁岩製の装身具がある。

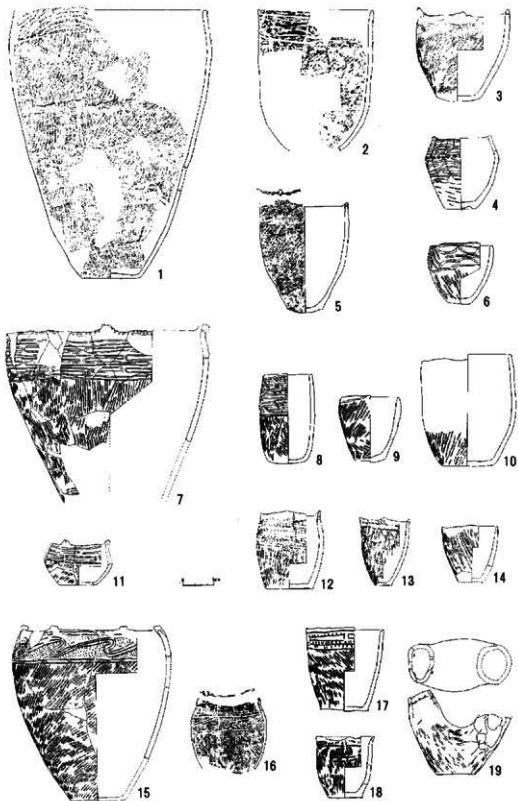
特筆されるのは470号墓である。遺存体の上部から異形を含む大小2,500粒の琥珀製平玉が連結しておかれ、近接して粘板岩製のタマ意匠ペンダント、タマもしくは人を意匠した石偶が出土した。琥珀玉は威信材としての側面をもち本遺跡ではフシココタンド層式相当の段階からみられ、興津式相当を経て宇津内Ⅱa式で最盛となる。宇津内Ⅱb式では減少し、新たに管玉がみられる。

(5)後北B式

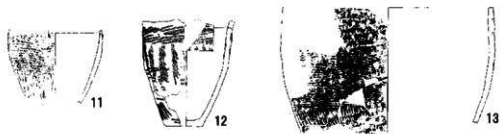
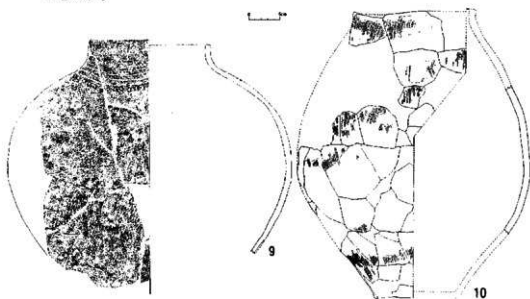
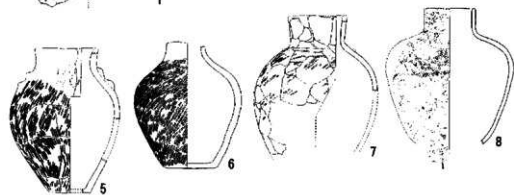
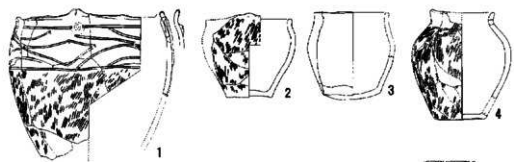
本時期の墓は23号・306号がある。いずれも円形を呈し、南頭位である。23号は二体合葬。306号は床面に柱穴をもつ。石蔵のタイプから35号もこの時期の可能性がある。

(6)興津式相当の堅穴

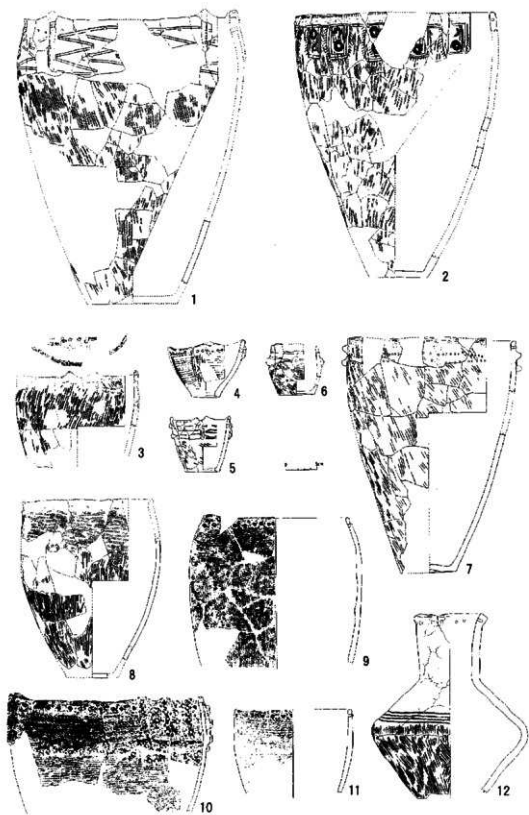
242号・110号・172e号の3軒。墓は95号・121号・328号・328a号・328b号・338号・379b号・404a号・635号・641号・667号・702号?(大型の琥珀玉)・788b号・854a号・872号(琥珀玉大小)・878号(琥珀玉大小)・940b号・941号・1006号・1013号(各種琥珀玉)・1023



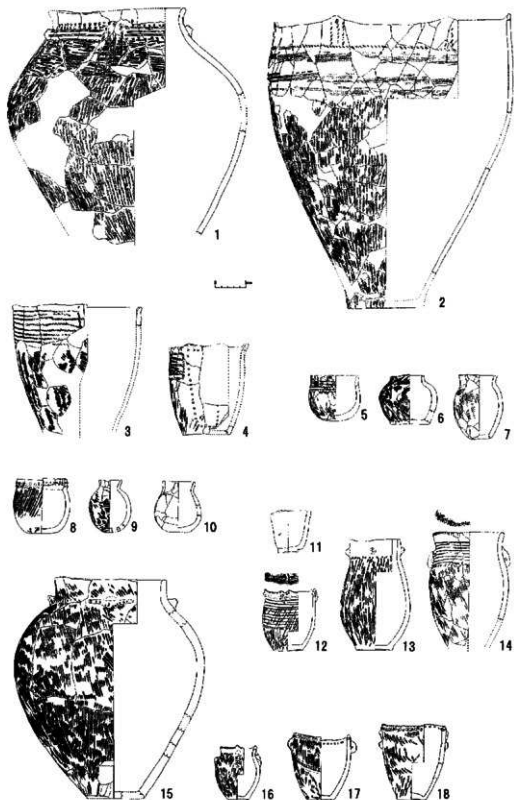
第166図 フシコタン下層式相当の土器群



第167圖 興津式相当の土器群



第168图 沈線文系突瘤文・帯網文系突瘤文の土器群



第169図 美津式相当、宇津内Ⅱa式の上器群

号・1996a号・1272号・1281号・1333号・1419号・1428号の27基。

このうち琥珀玉が副葬されるのは95号879粒。702号1点。872号11点。878号5点。941号が40粒。1272号が14粒。121号に硬質頁岩製の装身具がある。

この時期は平玉も認められるが原石を加工した大形タイプが577a号・681c号・711号、718号・1019号・1270号などにみられ、小型のものでは漏斗状、楕円状、リング形など各種の形態がある。本時期の琥珀玉は大形化と異形化に特徴がある。

宇津内Ⅱa式・興津式など縄文初頭と思われるのが1210号・1232号・1233a号・1249号・1251号・1270号・1272号・1281号・1333号・1402号・1404号・1405号・1406号・1409号の14基である。

(7)フシココタン下層式相当

172f号竪穴はフシココタン下層式もしくは興津式に相当する。墓は329b号・541a号・646号・654b号・661a号・1209号・1328号・1418号・1001号である。

6. 縄文土器

北海道東部における縄文初頭の土器編年について、釧路地方では晩期終末の縁々式の影響をうけて成立したフシココタン下層式と後続する興津式、下田ノ沢Ⅰ式がある。網走地方では下田ノ沢Ⅰ式に併行して宇津内Ⅱa式があるもののそれ以前の上器群については散発的に出土する程度であり実態は明確でなかったが、熊本俊朗氏は宇津内Ⅱa式より古手に位置づける上器群として美幌町元町遺跡出土土器を指標に元町2式の形式設定をおこなっている。

このような中で本遺跡の縄文土器をみるとすでに報告してきたとおり実に多種多様である。宇津内Ⅱa式はもとより釧路地方のフシココタン下層式、興津式相当の土器や道南の恵山式の影響を受けたものなどが遺構に伴っている。328b号は宇津内Ⅱa式である328号はフシココタン下層式相当に切られており、前後関係は明らかである。

(1)フシココタン下層式相当

澤二郎氏は文様について縄文、総縄文、沈線文、刺突文で構成され、器形的には大・中・小の深鉢を主体に大型甕が加わるとされる。本遺跡からは墓・竪穴埋土・包含層から出土する。口縁部に曲線状、波状の沈線文(第166図-1~6)、沈線文による工字文・変形工字文(7・8・11・12・17)が施され、縄文(14)、縄線文(13・18)、沈線文(9)、無文(10)、双口(19)などの土器が伴う。器形は胴下部からはほぼ垂直に立ち上がるもの、口縁部が内湾、外反するものがある。流水状の沈線文(15・16)は最も特長的である。底部は平底気味であり、口唇部に刻みをもった小突起がみられる。

第166図-12~14出土の墓は床面に小柱穴をもつもので271点の平玉の琥珀製装身具が出土し

ている。本遺跡の琥珀製装身具の出土時期としては最も古い。

第167図-2は半載状施文具による沈線文が施され、小突起下部のボタン状貼付文など次の興津式に繋がる特徴をもつ。

(2)興津式相当

文様は縄線文が多用され、小突起から垂下した巖位の隆帯、ボタン状貼付文が施される。フシココタン下層式にみられた沈線文、突瘤文は稀にみられる程度とされる。器形は胴部が僅かに張り出し、口縁部が括れる深鉢、壺が特徴である。第167図に本遺跡の代表的なものを図示した。深鉢には縄線文、縄端瓦真文(9・13)の他に、無文(3)がある。壺には広口壺(2~5・10)、頸部が縮約した壺(6~8、9)があり、やや特殊な例として横位の隆帯、沈線文が施された(7)、蛙文が貼付された(5)がある。また、帯縄文(第167図-11~13、第169図-1・2)も興津式の特徴である。

網走・釧路地方の縄文初期の上器群の共通した文様要素が突瘤文土器である。突瘤文出現の明確な時期、系統は不明であるが、普遍的にみられるのは釧路地方の下田ノ沢Ⅰ式、網走・北見地方の宇津内Ⅱa式になってからであり、前代のフシココタン下層式と興津式にはないものである。ところが本遺跡にはフシココタン下層式の特徴のひとつである沈線文と興津式にみられる帯縄文のいずれにも突瘤文が施された土器群がある(第168図)。突瘤文に沈線文をもつ例は熊木俊朗氏により元町2式が提唱され、宇津内Ⅱa式の直前に位置づけられている。しかし、これらの土器は沈線文と口縁部の突起から垂下する貼付文を特徴とするものであるが、ここに示す土器群とは口縁部に地文をもたない点が相違する。口縁下部の地文の欠如、無文部の形成は土器製作段階からかなり意識したもので、製作者の意図が明確にあらわしたものと考えられる。

無文地の口縁部にみられる半載状施文具による沈線文(第168図-1・3~5、本書第97図)はフシココタン下層式の影響とみられ、山形小突起から垂下した巖位の隆帯に施された縄線隆帯を想起させる刻み、ボタン状貼付文は興津式にみられるものである。幾何学的沈線文(第168図-2)など多種多様な沈線文は元町2式と異なった様相をみせる。連続しない突瘤文や半弧線文(第168図-3)など過渡期的のものかもしれない。その点からこれらの土器群はフシココタン下層式と興津式の特徴を合わせもったものと理解できるもので、元町2式よりやや古手に位置づけられる可能性がある。

元町2式に後続すると考えられるのが第169図-4~5、同8~10、同11~14に示した墓出土の一括資料である。いずれも小型土器であるが突瘤文をもつ宇津内Ⅱa式と興津式に特徴的な小型壺が共存する。副葬品という特殊性はあるものの元町2式にみられる沈線文が消失し、470号墓などにみられる琥珀玉の大量受容など宇津内Ⅱa式にみられるものである。宇津内Ⅱa式の470号墓出土土器(第169図-15~18)の中にみられる大型土器(15)は興津式の広口壺(第

169図-1)と器形・ボタン状貼付文など類似性がある。

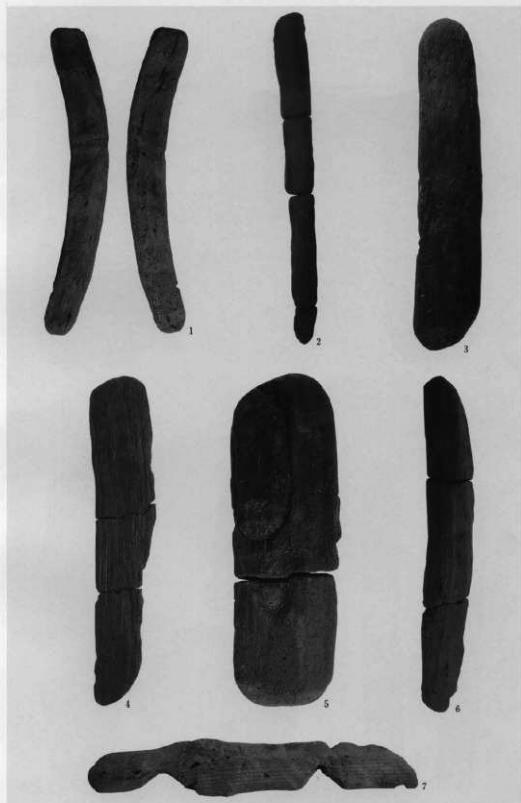
一方、帯縄文に突縮文をもつ土器がある。(第168図-8~11)。帯縄文は興津式にもみられ、下田ノ沢Ⅰ式では帯縄文と突縮文をもつ土器がある。3~4段の帯縄文(第168図-7~9)、幅広く施した(第168図-8・10・11)ものがあり、小突起から垂下した隆帯、ボタン状貼付文、縄線文(第168図-12)など興津式の影響をとどめている。熊木俊朗氏は道東部の帯縄文は道央部との型式交渉によるものと指摘している。

興津式の前後に沈線文系突縮文と帯縄文系突縮文とでもいうべき二つの土器群が存在することになる。両方は同一時期のものか、別系統のそれぞれ地方差をもつ土器か現段階では不明であり、今後の検証課題としたい。

常呂川河口遺跡は縄文前期からアイヌ期におよぶ多層遺跡であった。これらについてはこれまでの八巻の報告書に網羅してきたが各時期における竪穴住居の形態と変遷、集落や墓域の関係、副葬品のあり方など今後の課題として残されており、機会を得て考察することとしたい。

最後に調査期間中から現在まで東京大学名誉教授藤本強、宇田川洋先生をはじめ多くの方々にご指導ご協力を賜りました。調査を開始してから本年で20年を迎え、本巻が最終報告となるにあたり改めてお礼申し上げるしだいです。

圖 版



1~6. 第7層出土物
7. 第7層出土吊り手



1. 第7層出土籠



2. 第7層出土木製品



3. 第7層出土模狀製品



4~6. 第7層出土有孔加工材



1~7. 第7層出土有孔加工材



1. 第7層出土有孔加工材



2. 第7層出土有孔製品



3. 低湿地発掘状況



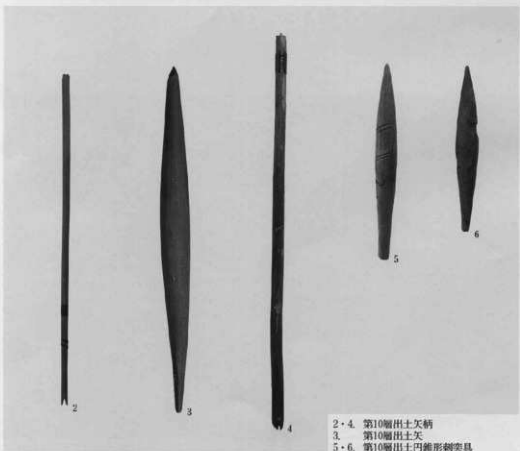
1. 第10層木杖等出土狀況



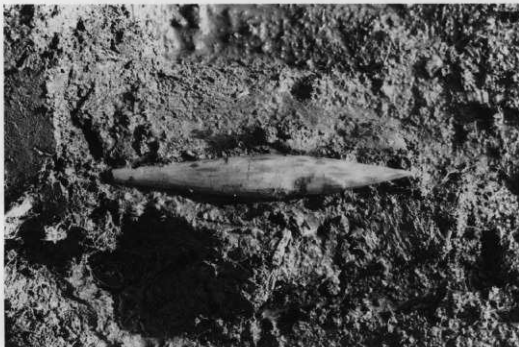
2. 第10層矢・矢柄出土狀況



1. 第10層矢柄出土狀況



2·4. 第10層出土矢柄
3. 第10層出土矢
5·6. 第10層出土円錐形刺突具



1. 第10層円錐形刺突具出土状況



2. 第10層ヤス出土状況



1. 第10層出土円錐形刺突具



2. 第10層出土ヤス



3. 第10層出土魚叩き棒



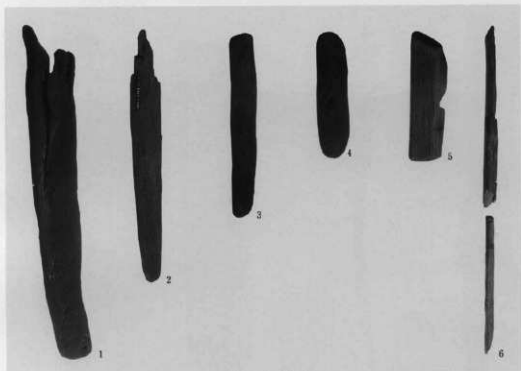
4. 第10層出土平櫛



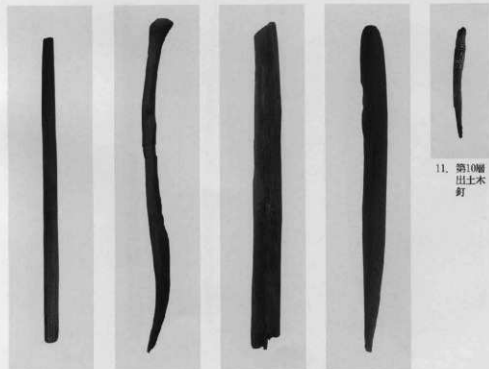
5・6. 第10層出土弓



7. 第10層弓出土状況



1~3. 第10層出土棒酒箸
 4・5. 第10層出土匙
 6. 第10層出土箸



7. 第10層出土
刺突具

8. 第10層出土
食用具

9. 第10層出土
丸状加工材

10. 第10層出土
ピン状製品

11. 第10層
出土木
釘



1. 第10層出土燈火用杖のみ木



2. 第10層出土雪上歩行杖「かんじき」



3



4



5



6



7



8



9

3~5. 第10層出土加工材
6・7. 第10層出土刺突具

8. 第10層出土かんじきの横軸
9. 第10層出土ホノ付軸状製品



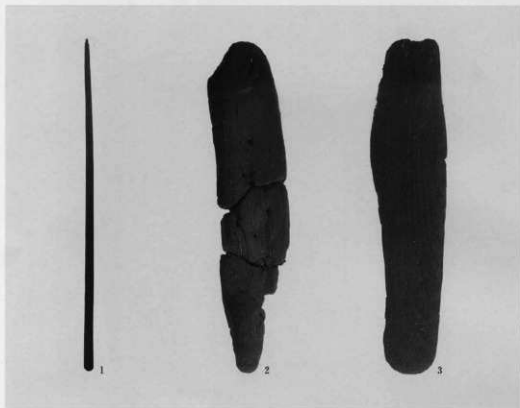
1. 第10層出土加工材



2・3. 第10層出土挿入丸木材



4. 第10層挿入丸木材出土状況



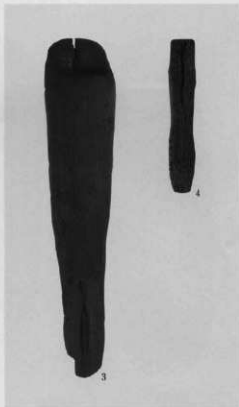
1. 第12層出土尖頭棒
2·3. 第12層出土簪



1. 第12a層出土燈火用
扶み木



2. 第12a層出土木錘



3・4. 第12a層出土木製品



5. 第12a層木錘出土状況



1. 第12a層出土木槌



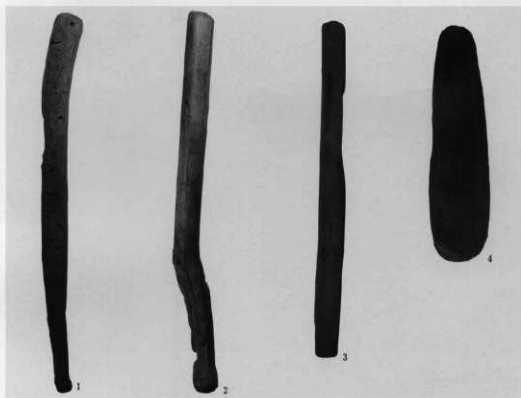
2. 第12a層出土加工材



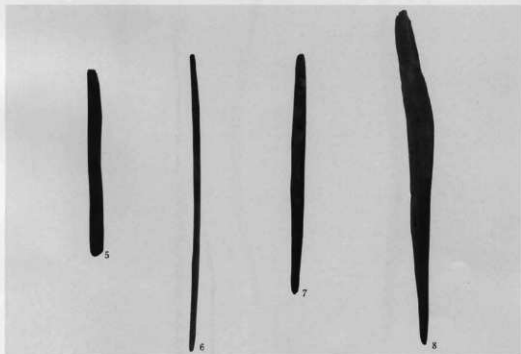
3. 第12a層出土加工材



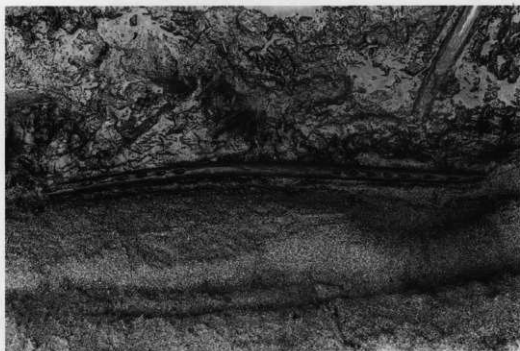
4. 第12a層魚叩き棒出土状況



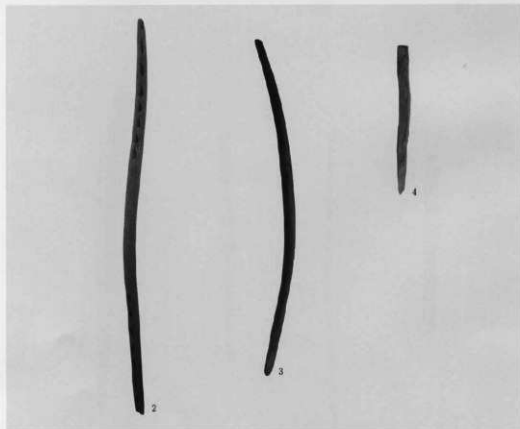
1・2 第12a層出土魚叩き棒
 3 第12a層出土押酒箸
 4・5・8 第12a層出土筥



6 第12a層出土箸・串
 7 第12a層出土かんじきの横軸



1. 第13a層かんじき出土状況



2. 第13a層出土重上歩行具「かんじき」
3. 第13a層出土かんじきの横軸

4. 第13a層出土木釘



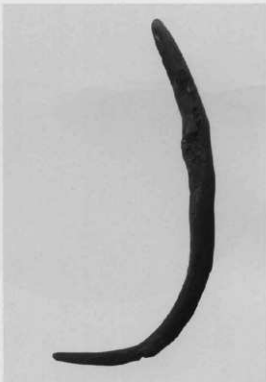
1. 第13e層出土蓋



2. 第13a層板縱舟紋板出土狀況



1. 第13a層出土板縱舟棹倒板



2. 第13a層出土木製品



3. 第13a層出土小匙



4. 第13a層短弓出土狀況



1. 第13a 層有孔木製品出土狀況



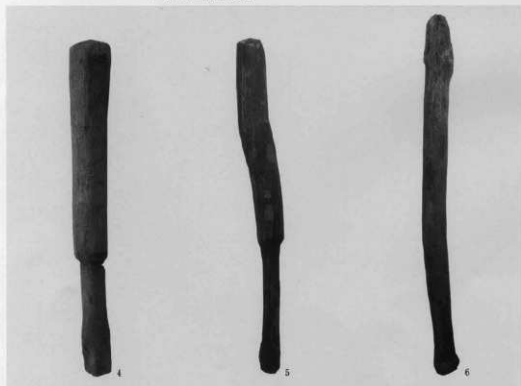
1. 第13b 層出土曲物容器



2. 第13b 層出土木製品



3. 第13b 層出土木製品



4~6. 第13b 層出土魚叩き棒



1. 第13b層出土刀子の柄部



2. 第13b層出土抉入部材



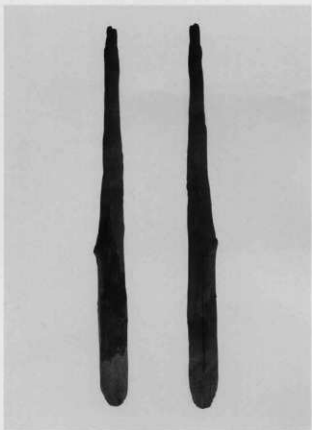
3. 第13c層出土抉入部材



4. 第13c層出土
紡織編具



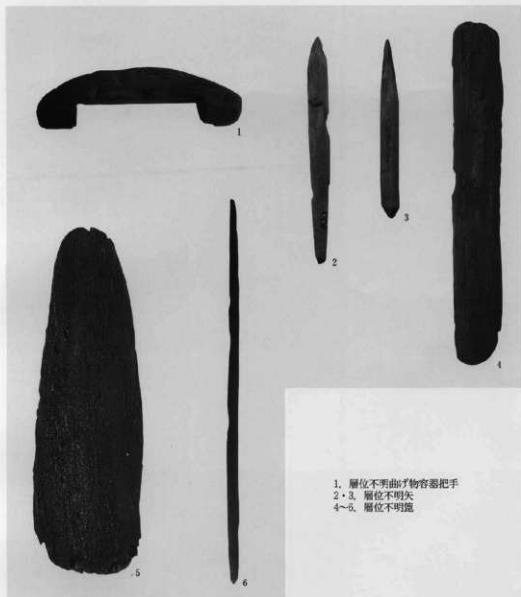
5. 第13c層出土
中空材



1. 第14b 層出土土掘具



2. 第14b 層土掘具出土狀況



1. 層位不明曲了物容器把手
 2·3. 層位不明矢
 4~5. 層位不明筒



1. 低湿地(小沼跡)完掘状況



2. 第6層標文土器出土状況



1. D'94グリッド



2. F80グリッド



3. D75グリッド



4. W'99グリッド



5. I77グリッド



6. N76グリッド



1. B'88グリッド



2. N96グリッド



3. Q72グリッド



4. D76グリッド



5. U'98グリッド



6. L'71グリッド



7. J'95



1. A78グリッド



2. Z103グリッド



3. B70グリッド



4. N89グリッド



5. K86グリッド



1. C84グリッド



2. 表面採集



3. N80グリッド



4. D'84グリッド



5. D85グリッド



6. B89グリッド



1. A88グリッド



2. F88グリッド



3. B79グリッド



4. K85グリッド



5. A83グリッド



6. K85



1. G93グリッド



2. 表面採集



3. L93グリッド



4. D'84グリッド



5. H'87グリッド



6. A77グリッド



1. C80グリッド



2. F84グリッド



3. C84グリッド



4. H93グリッド



5. B89グリッド



6. C90グリッド



7. F88グリッド



8. F87グリッド



1. D'84グリッド



2. G89グリッド



3. A76グリッド



4. C84グリッド



5. 表面採集



6. H85グリッド



7. A78グリッド



8. A77グリッド



1. E'78グリッド



2. G83グリッド



3. K'90グリッド



4. N'77グリッド



5. B'88グリッド



6. K85グリッド



1. HF82グリッド



2. D'84グリッド



3. A91グリッド



4. M'99グリッド



5. L90グリッド



6. L91グリッド



1. F'64グリッド



2. E80グリッド



3. C'87グリッド



4. G'94グリッド



5. M'91グリッド



6. E90グリッド



1. E'84グリッド



2. H'80グリッド



3. H'85グリッド



4. C81グリッド



5. I'89グリッド



6. B85グリッド



1. B92グリッド



2. Q'99グリッド



3. C79グリッド



4. J78グリッド



5. C'80グリッド



6. B'78グリッド



1. I'89グリッド



2. H'92グリッド



3. D'36グリッド



4. J'89グリッド



5. M'86グリッド



6. A'83グリッド



1. L82グリッド



2. B94グリッド



3. B94グリッド



4. C94グリッド



5. D87グリッド



6. C87グリッド



1. C'94グリッド



2. F'93グリッド



3. P'90グリッド



4. Q'91グリッド



5. B94グリッド



図6. H81グリッド



1. C89グリッド



2. D79グリッド



3. F93グリッド



4. L77グリッド



5. J781グリッド



6. C90グリッド



1. M⁸⁶グリッド



2. B⁸⁶グリッド



3. F⁹²グリッド



4. C⁹⁴グリッド



5. F⁹¹グリッド



6. D⁹¹グリッド



1. L'97グリッド



2. G'88グリッド



3. A93グリッド



4. B'94グリッド



1. H82グリッド



2. A'93グリッド



3. R'92グリッド



4. C'93グリッド



5. B'88グリッド



6. 表面採集



1. D'77グリッド



2. A'103グリッド



3. S'96グリッド



4. X'101グリッド



5. U'100グリッド



6. N'101グリッド



7. Z'103グリッド



1. D'66グリッド



2. B'93グリッド



3. O'87グリッド



4. A'92グリッド



6. H'71グリッド



5. I'71グリッド



7. H'71グリッド



1. Y'103グリッド



2. H'81グリッド



3. P88グリッド



4. Y'101グリッド



5. D86グリッド



1. F78グリッド



2. G72グリッド



3. T91グリッド



4. C104グリッド



5. R90グリッド



6. Y102グリッド



1. A¹⁰²グリッド



2. M⁹⁷グリッド



3. J⁸⁸グリッド



4. V⁹⁸グリッド



5. N⁸⁰グリッド



1. 第Ⅳ層E'86グリッド出土土器



2. 第Ⅳ層F'90グリッド出土土器



3. 第Ⅲ層F'87グリッド出土土器



4. 第Ⅲ層J'82グリッド出土土器



5. 第Ⅲ層H'84グリッド出土土器



6. 第Ⅲ層I'82グリッド出土土器



1. 第Ⅶ層J'71グリッド出土土器



2. 第ⅩⅤ層N'82グリッド出土土器



3. 第ⅩⅦc層N'86グリッド出土土器



4. 第ⅩⅧ層P'84グリッド出土土器



5. 第ⅩⅧ層P'84グリッド出土土器



1. 明治初期のアイヌ集落風景



2. テシ設置風景

報告書抄録

ふりがな	ところがわかくし 1483				
書名	常呂川河口遺跡(8)				
副書名	常呂川河口右岸掘削護岸工事に係る発掘調査報告書				
シリーズ名					
シリーズ番号					
編著者名	武田 修				
編集機関	北海道北見市教育委員会(ところ埋蔵文化財センター)				
所在地	〒093-0216 北海道北見市常呂町字栄浦376				
発行年月日	西暦2008年3月25日				
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "
ところがわかくし 常呂川河口遺跡	ところがわかくし 北海道北見市常呂町 あびらこま 字常呂	12084	I-16-128	44° 06' 58"	144° 04' 42"
調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因	所収遺跡名	種別	主な時代
平成4年～平成19年	2,200	河川改修	常呂川河口遺跡	集落 包蔵地	アイヌ 擦文 縄文 縄文
主な遺構		主な遺物		特記事項	
		アイヌ文化期木製品		樽前 a 火山灰の下層にある低 湿地からアイヌ文化期の木杭、 建築部材を主体に魚叩き棒、 笥、矢など自製品が出土。	

2008年3月20日 印刷
2008年3月25日 発行

常呂川河口遺跡 (8)

—常呂川河口右岸掘削護岸
工事に伴う発掘調査報告書—

発行者 北海道北見市教育委員会
印刷所 株式会社 小林印刷
北海道北見市本町5丁目